



# ベター・ハーフ・メモリーズ

前橋梨乃

公開版

*for Smart Phone*

## Contents

### 《プロローグ》

- 1 ある名前
- 2 気まずい再会

#### memory 1

- 3 父子家庭ふたつ
- 4 はしかのようなもの

#### memory 2

- 5 微熱の朝
- 6 小さな見栄

#### memory 3

- 7 似たものの親子
- 8 異界のパ・ド・ドウ

#### memory 4

- 9 ビデオ・リプレイ
- 10 積み木の家族

#### memory 5

- 11 不定型な悪意
- 12 色ざめる街
- 13 オーバーラップ

### 《エピローグ》

★タップすれば各章へジャンプします

《プロローグ》 — シナリオ —

○夕暮れの公園

樹々も遊具もすべてがあかね色に染まる  
中、きらめく噴水。

その手前に、向かい合って立つ啓太と亜希穂。

啓太 「また、会えるんだろ？」

亜希穂 「……………」

目を伏せる亜希穂。

啓太 「そうだ。来週の日曜も、僕はここで待ってるよ」

亜希穂 「でも……………」

---

啓太 「……なに？」

亜希穂 「あたし、たぶん……来られない」

啓太 「どうして？」

亜希穂 「……」

亜希穂、さらにうつむく。

啓太 「いいさ。それでも僕は待ってる。もし、

君が来なかったら、次の週も、その次の週

も……」

亜希穂、うつむいたまま首を振る。

亜希穂 「……ごめんなさい」

啓太 「……ん？」

亜希穂 「そういうことじゃ……ないの」

啓太 「……？」

亜希穂 「戻れば、今のあたしは、いなくなつて

しまふのよ」

啓太 「……えっ？」

亜希穂 「今の記憶は、すべて消えてしまうの」

啓太 「じゃ……じゃあ、君は、今日のことも

……？」

亜希穂 「……………」

啓太 「僕の、ことも……………」

亜希穂 「……………」

さらに、うなだれる亜希穂。

啓太 「……………」

---

亜希穂を見つめている啓太。

やがて、なにかを決意するように――

啓太 「いや、そんなこと、ないさ」

亜希穂 「……えっ？」

その言葉に顔を上げる亜希穂。

啓太 「君はけっして忘れはしない」

啓太を見つめる亜希穂。

啓太 「二人だけでこんな時間を過ごしたんだ。

---



いつか君は、かならず今日のことを思い出す。僕はそれを信じて、ずっと待ってる。

来週も再来週も、来年も、十年後も……」

見つめ合う二人。

亜希穂の瞳に涙が溜まり、頬を伝う。

啓太 「亜希穂……」

亜希穂の肩に手をかける啓太。

亜希穂、つらそうに首を振る。

抱き寄せようとする啓太。

亜希穂、思いを断ち切るようにそれを振り切り、駆け去る。

一瞬追いかけるが、立ち止まり、次第に小さくなるその後ろ姿を見つめる啓太。

啓太 「亜希穂、君は、かならず……」

1 ある名前

「麻由ーっ、そろそろ出かけないと遅刻しちゃうぞ」  
キルティングでできた「お着替えバッグ」に、大人  
の半分ほどのサイズしかないTシャツと半ズボンを詰

めたところで、藤沢昭雄は娘の麻由を呼んだ。

しかし、麻由は出てくる気配がない。

家を出るタイムリミットが迫っていることに多少いらだち、それ以上に麻由のことが心配にもなあって、昭雄は子ども部屋のドアを開けた。

と、麻由は、棚の写真に向かって手を合わせていた。

その小さな背中を見たとき、昭雄の胸にまた、娘への不憫ふびんさと自らのやるせなさ、同時にこみ上げて

きた。

妻、友紀枝の四十九日がすんで数日がたつというのに、この空漠感はどうだろう。薄れるどころか、日々募っていくばかりだ。たぶん、今後何十年も、昭雄自身と、そしてこの幼い娘の心にぽっかりと空いてしまった穴は、埋まることがないのだ。

そう思いながら、昭雄は娘の後ろに立ち、自らも手を合わせた。

これからの人生、こんな悲しみを抱えたまま、ほんとうに生きていけるのだろうか？

またそんな考えにとられそうになったところで、昭雄はふたたび娘の後ろ姿を見下ろし、かぶりを振った。

いや、まだ四年しか生きていないこの子には未来がある。友紀枝と過ごした時間よりずっと長い未来が。この子のためにも、僕がしつかりしなくてどうする。

早く「ふたりだけの生活」に慣れなければいけないのだ。

「さあ、行こ」

昭雄が言うと、麻由は、振り向きながら昭雄の顔を見上げ「うん」とうなずいた。

母の死という理不尽な運命を、たった四歳で受け入れたその眼差しに、またちくちくするような痛みを感じながらも、昭雄は、できるかぎりの優しさで微笑み

返した。

以前はマンションのすぐ近くからバスに乗り、駅まで行っていたのだが、今は、ふたつ先のバス停まで歩かなければならない。麻由の保育園が、その途中にあるからだ。

麻由の手を引き、その歩幅に合わせて歩きながら、昭雄はこの二カ月ほどの日々を思い返していた。



ふた月前、突然職場にかかってきた電話で、昭雄が病院に駆けつけると、すでに妻の友紀枝は息を引き取ったあとだった。

「外傷性くも膜下出血です。運ばれてきた時には心停止していました。手はつくしたのですが……」

友紀枝の亡骸なきからを茫然と見つめている昭雄に、医者はそう説明したが、そんな言葉は何の意味も持たなかった。死因がどののという以前に、昭雄の思考は、目の

前に横たわる現実を拒否していた。

それを受け入れられないまま、漂っているような状態がまる一日以上つづき、その間、知らせを聞いて駆けつけた職場の仲間や大学時代の友人たちが、通夜や葬儀の段取りをすませてくれた。青森からは、友紀枝の両親や親戚たちもやって来た。

昭雄はそれらの人々にあいさつし、礼を言い、あるいは事情を聞きに来た警官や保険会社の人間にも、そ

れなりの受け答えをしたのだと思う。でも、その間の記憶はほとんどない。

昭雄にやっと多少の現実感が戻ったのは、通夜の席で隣にちんまりと座った麻由の姿に気づいた時だった。

もちろん麻由に対しても、病院で会った時から、いろいろ気づかっていた気はする。でもそれは、いわばいつもの習慣として四歳の娘の行動に目配せしていた

というに過ぎない。その間、昭雄には、麻由の心の中まで想像してみるゆとりはなかったのだ。

友紀枝が、買い物先のスーパーの前で、暴走してきたバイクにはねられた時、麻由はいっしょにいたのだという。というより、友紀枝は麻由をかばうような形ではねとばされたらしい。麻由自身にけがはなかったものの、その心理的ショックは大きかったはずだ。さらにそのあと、救急車の中や病院のICUで、母が心

臓マツサージや電気ショックを受けるのを、ずっと見てもいたのだ。

四歳の少女にとって、それがどれほど過酷なことだったか。

昭雄は通夜の席でやっとそのことに思い至り、愕然とした。

そんなことにさえ気がまわらなかつた自分の、父親としてのふがいなさに気づいたことで、ようやく現実

の世界に引き戻されたのだった。

そして、そこで初めて涙があふれ出した。

思わず麻由を抱き寄せ泣いていた。麻由もまた、初めて声を出して泣きじゃくった。昭雄は、その小さな体を抱きしめ、「ごめんね、ごめんね」とだけ繰り返していた。

昭雄が、なによりこの娘のために生きていかなければならないと誓ったのもまた、この時だった。

葬儀がすみ、その後もしばらく残ってくれた友紀枝の母は、「私がこのまま、東京に住もうか」と言ってくれた。しかし昭雄は、それを遠慮した。青森の友紀枝の実家は農家だし、友紀枝の弟たちもいる。義母には青森にやらなければいけないことがあるのだ。

「それなら、麻由ちゃんをうちで引き取ろうか」  
義母はそうも言った。

一昨年、昭雄の両親が相次いで他界し、身近には預

けられる親戚もいないことをよく知っているからだ。

しかし昭雄は、それもことわった。この上、自分が天涯孤独になつてしまふのは耐えられない：：という気持ちも多少はあつたが、それ以上に、麻由にそんな思いを味わわせてはいけないと思つたのだ。

「ありがとうございます。でも、僕だけでなんとかやってみます」

そして昭雄は、義母がいてくれるうちに区の社会福



社事務所などをまわり、事情を訴えて、麻由の保育園への入所措置を取りつけたというわけだ。

しかし、もちろんそれですべてが解決したわけではない。

出産以来、友紀枝は専業主婦だったから、麻由は、四六時中、母親とともに過ごしていた。日中どこかに預けられたという経験はない。いきなり始まる保育園での集団生活になじめるかどうか心配だった。

実際、十日ほど前、初登園した時、麻由は家を出る前から不安な顔をし、保育園に着いて昭雄と別れる段になると、泣きべそをかいた。

ただ、麻由は麻由なりに自分の境遇を理解しているのだらう。そんな時でも、駄々をこねて困らせるようなことは一度もなかった。昭雄には、その聞き分けのよさがまた、不憫なことに思えた。

：：この子は、こんな小さいうちから、なんでこんなにつらい目にあわなければいけないのだろうか？

そんなことを考えながら歩いていると、麻由がつかないだ手をぐいと前に引いた。

小さな歩幅でまるで小走りでもするように、昭雄より先を歩いて行く。

：：ん？

昭雄は、ちよつと驚いて麻由を見やった。

これは、二・三日前まではなかったことだ。これまでは、どこか気のすすまなそうな麻由を、昭雄の方が促すように登園していた。

昭雄は、驚きながらも、どうやら早く保育園に行きたがっているらしい麻由に声をかけた。

「麻由、もしかして、保育園で仲好しのお友だちでもできたのか？」

すると麻由は、うれしそうな顔を昭雄に向け「う

ん！」とうなずいた。

ふふ……、大人があれこれ心配してみても、けつきよく、子どももって自分で立ち直っていくものなんだな。もしかすると、この子の方が、僕より早く、今の生活に慣れるのかもしれない。

昭雄は、安堵あんどと、多少の自嘲が混じった顔で笑い返したあと、ふたたびきいた。

「なんていう子？」

「……アキオちゃん」

——昭雄には、麻由の返事がそう聞こえた。それで、ちよつと驚いて……というより、麻由を喜ばせようと、オーバーに驚いてみせ、言った。

「へえ！ きりん組さんには、パパとおんなじ名前の男の子がいるんだあ」

と、それに対し、麻由は怪訝けげんな顔をした。

「男の子じゃないよ。女の子だよ」

「え？　だって今、アキオちゃんって……」

「ちがうよお。アキオちゃんじゃなくて、アキホちゃん。ア・キ・ホ！」

父のまちがいを訂正するというように大きな口を開けて繰り返した麻由に、昭雄は一瞬言葉を失い、ちよつと間があいたあと、どこか取り繕つくろうように言った。

「……へえ、そうなんだ。アキホちゃんかあ」

昭雄が一瞬絶句したのは、「アキホ」という名を聞

いたとたん、なぜか心が騒いだからだ。それは、動揺とも言えない、かすかな情動だった。昭雄自身にも、わけのわからない心の動きだった。

でも、記憶の底辺で、たしかに、なにかがざわざわとうごめいたのだ。

昭雄は——理由がわからないだけ、よけいに——その胸騒ぎにとらわれ、それ以上の会話もせず、麻由に引っ張られるように歩いていた。



そして、前方に保育園の門が見える頃になってやつと、こんなふうを考え、心を落ち着かせることができた。

……まあ、最近は、女の子に「○○子ちゃん」という名をつける方が少数派なのだ。「明穂ちゃん」や「秋帆ちゃん」は、「明菜ちゃん」や「秋奈ちゃん」と同じくらいにはいるのだろう。

「麻由ちゃん、おはよ」

昭雄と麻由がきりん組の部屋に入っていくと、さゆり先生といういつもの保育士が、明るい声をかけてきた。

「おはようございます」

昭雄が会釈を返していると、部屋のすみでブロック遊びをしていた女の子がひとり、こちらを向いた。

「あ、麻由ちゃん」

その子は、あわてて立ち上がると、まるで飛びつくように麻由に駆け寄った。

：：そうか、この子が「アキホちゃん」なんだな。

さっそく麻由の手を取り遊びに誘う、その、ちよつとくせつ毛で元気のよさそうな女の子を見ながら、昭雄は思った。

と、やはり二人を見ていたさゆり先生が言った。

「麻由ちゃん、アキホちゃんとすっかり仲好しになっ

ちやつて。アキホちゃんのところもお父さんだけだから、どこか通じるところがあるのかもしれないね」

「へえ、あの子の家も父子家庭なんですか？」

昭雄が聞き返すと、さゆり先生は、にっこりとうなずいた。

「ええ、藤沢さんと同じで、やさしくていいお父さんですよ。なにか困ったことがあったら、お父さん同士、相談してみるのもいいと思います。いろいろ親切に教

えてくださるはずですよ」

ほとんどの子どもが共働きであるこの保育園も、朝晩の送り迎えは母親が来ることが多い。そのせいで、どこか肩身の狭い思いをしているこちらの様子を気づかって、提案してくれたのだろう。昭雄は、さゆり先生の言葉をそう理解した。

たしかに、「父子家庭の先輩」の話は、参考になることも多いにちがいない。子ども同士も仲がよさそう

だし、顔を合わせたら、一度じっくり話してみようかな。

昭雄はそう思いながら、腕時計を見た。と、いつも乗るバスの時間が迫っていた。

急いで、お着替えバッグを棚の麻由専用のスペースに置き、そのあと、さゆり先生との間で毎日やりとりしている「連絡ノート」を所定の場所に置こうとした。

その時だった。

プラスチック製のカゴの中に積み重ねられた他の園児たちの連絡ノートに目がとまった。そのいちばん上の一冊には、フェルトペンでこう書かれていた。

「きりん組 谷原亜希穂」

昭雄は、麻由の連絡ノートを持った手を宙に浮かせ  
たまま、その文字を見つめた。

「亜希穂」：：その漢字に、先刻いったんはおさま  
った心のざわめきが、また大きくなってくるのを感じ

た。「アキホちゃん」は、「明穂」や「秋帆」ではなく、「亜希穂」だった。

それは、なんだか、悪い予感が当たってしまったというような感覚だった。

：：い、いや、それがどうしたというんだ。

昭雄は、その動揺を無意識のうちに押さえ込もうと  
していた。

それでも気持ち<sup>しず</sup>が鎮まらず、けっきよく、まるでそ



の名を視界から隠すとしてもいうように、麻由の連絡ノートを上重ね、急いで部屋を出た。

「行ってらっしゃい」

さゆり先生がそう言ったのにも応えず、また、いつものように麻由にひと言声かけるのさえ忘れて。

もつとも、麻由の方は、すでに亜希穂と遊ぶのに夢中になっていたのだが。

## 2 気まずい再会

「今週こそ藤沢さんの歓迎会をやろうと思ってるんですけど、何曜日が都合いいですか？」

パソコンに向かい、株主総会の案内状送付リストを

整理していると、同僚の高橋智美が声をかけてきた。

「あ、ごめん。この前も言ったように、夜はちよつと……」

キーボードから顔を上げ、昭雄は遠慮気味に答えた。

「そんなこと言わずに、どこかで時間とってくださいよ。藤沢さんが異動してからもう三週間目になるわけですし」

「うん。そう言ってくれるのはありがたいんだけどさ、

ウィークデイは、どうしても保育園に子どもを迎えに行かなきゃいけないんだ。悪い」

妻が急死したという事情をいちおうは知っているからだろう。智美はけっきょく、「そうですか：：」と引き下がった。しかし、あのどこか不満そうな顔は、「子どもくらい、誰かに頼んで預かってもらえばいいのに」とでも思っているにちがいない。

この部署は女性が多いとはいえ、ほとんどが独身だ

から、昭雄が抱えている状況を正確に理解してもらおうのは、やはりむずかしい。

一カ月前、久しぶりに出社した昭雄が、内勤部門への異動願いを出すと、営業部長をはじめ、多くの上司や同僚がそれをとめた。トップを争う営業成績をあげていた昭雄が、他の部署に行くのはもったいないというのだ。

もちろん、入社以来、地道に取引先とのコネクションをつくってきた昭雄にしても、これまでの仕事に未練がなかったわけではない。しかし、残業や接待も多く、休日さえ接待ゴルフでつぶれたりする営業職と、四歳児の子育ては、どう考えても両立しそうになかった。

そんな昭雄の事情を考慮し、数年間は勤務時間などで特別待遇するという話まで出たのだが、それではま

ともな営業などできないことを、昭雄自身がよくわかっていた。

あれこれもめはしたものの、けつきよく希望が通り、総務への異動という辞令が出て、昭雄は、わがままを聞いてくれた会社に感謝した。

しかし、それで万事うまくいくというものでもなかった。

考え方もスキルも異なる仕事は、ストレスも多かつ

たし、何をやるにも人にきかなければならないのは、他の社員の足手まといにしかなくていけない気がした。

それはまあ、慣れるより他ないのだが、それ以上に問題なのは、やはり昭雄の勤務条件だ。男子社員のくせに定時勤務しかできないという昭雄の立場は、新たな職場でも軋轢あつれきを生んでいた。

株主総会を前にした今のような時期には、総務でもみんな、けっこう残業している。しかもそれが、給料



に反映されない「サービス残業」だったりする。

朝は九時半ぎりぎりに出社して、五時半になるとそそくさと席を立つ昭雄を、職場の仲間が面白く思っていないことはまちがいがなかった。私生活で不幸に見舞われた昭雄に遠慮して、みんな口には出さないが、昭雄自身がそんな雰囲気を感じるのである。それに、先刻のような「職場のつき合い」という問題も起こる。

さらに、その向こうには、もっと大きな問題も横た

わっていた。

会社の業績はここ数年じり貧状態で、そのうち大規模なリストラが行われるだろうという噂は以前からあった。現に総務部の中には、そのマスタープランをつくっているらしい作業グループもある。今は昭雄への同情からわがままを許してくれているが、会社が決意すれば、昭雄は、真っ先に肩をたたかされる対象だろう。そういう意味でも、昭雄は針のむしろに置かれてい

ると言ってよかった。

そんな居心地悪さの中で仕事をこなしながらも、今日一日、昭雄の気持ちをとらえつづけていたのは、そのことではなかった。

午前中、パソコンに向かっている時も、今朝感じた心のざわめきがずつとつづいていた。

∴∴僕は、「亜希穂」という名になぜあんな反応を

したのか？　それがわからないだけに、よけいに気味が悪い。

昭雄は、そう思った。

いや、思おうとした。

本当のことを言えば、昭雄は、とうの昔にその理由に気づいていた。にもかかわらず、「そんなことは、わけがわからないことだ」と自分に言い聞かそうとしていた。

最初に麻由の口から「アキホ」という名が出た時こそ、前後不覚に狼狽ろうばいしたのだが、あの「亜希穂」という文字を見た時には、その名が、自分にとってどんな意味を持つのか、じゅうぶんにはわかっていなかった。いや、それ以前、「アキホ」の音に、無理にも「明穂」や「秋帆」の字をあてようとした時点で、「亜希穂」という名にまつわる記憶がよみがえるのを避けようとしていたのだ。

：：ふ、それにしても、僕はなんてくだらないことを気にしてるんだ。

けつきよく、自分をごまかしきれないと悟った昭雄は、次に、そんな思考全体を頭の中から排除しようとしてみた。

：：今の僕には、もっと大事なことがあるだろう。  
さあ、仕事仕事。

そして、パソコンの画面に集中しようとした。

その作業は、五十音順に並んだ株主リストの住所と郵便番号のミスをチェックするという単純なものだった。作業は半分近くが終わり、リストは「夕行」に入っていた。パソコンの画面には、「谷口」とか「谷田」とか「谷」のつく名前が並んでいる。

それを見て、昭雄はふいに、また手を止めた。

あの連絡ノートに書かれていた「亜希穂」の姓が、「谷原」だったことを思い出したのだ。

：：えっ!?

また、例の胸騒ぎがぶり返した。というより、シヨツクにも似た驚きが体中に走った。

朝は気づかなかったのだが、「亜希穂」という名と「谷原」という姓の組み合わせは、昭雄の中で、明確なつながりを持つものだった。「谷原」は、「亜希穂」にまつわる記憶の封印を、いやが上にも解いてしまう力を持っていた。



：：いや、単なる偶然に過ぎないだろう。

昭雄はまた、それを否定しようとした。

：：だいいち、あの記憶の中で、「谷原」と「亜希穂」は、けっして一人の人間を表す姓名ではなかったはずだ。それに：：、そう。「使われるレベル」だったちがったのだ。「谷原」は現実だが、「亜希穂」の方はいわば幻。実在すらしなかったのだから。

それが、今朝、「谷原亜希穂」という姓名を目にし

てもすぐにはピンとこなかつた理由でもあつたのだが、昭雄は、その「姓と名のちぐはぐさ」にすぎるように、この胸騒ぎが杞憂きゆうであることを祈つた。

午後からは、配送業者にチェックしたりリストを渡して、料金の打合せなどをした。しかしその間も、昭雄は、朝からの胸騒ぎを引きずり、そんな思考をくり返していた。

そのせいで、いつも感じる職場の居心地の悪さも忘

れ、さらには、この間、昭雄をとらえつづけていた妻の死という悲しみさえ忘れていたのだから、皮肉ではあった。

いや、昭雄が、「亜希穂」という名前に取り憑かれたようになっていたのは、その記憶が、今、彼をとりまいている現実にくらべ、ずっと甘美なものだったからなのかもしれぬ。

保育園に着いた時、秋の初めの空はすでに暗くなっていた。

この保育園は、通常保育のあと、午後七時までの延長保育をやってくれている。だからこそ、この園を選んだのだが、勤務先が近くはない昭雄は、せいっぱい急いでも、「お迎え」がこの時間になっってしまうのだ。

昭雄は、麻由に悲しい思いをさせたくないと感じ、

走るように門を入った。

延長保育の間、父母たちが次々にお迎えに来て、子どもの数は徐々に減っていく。外が暗くなることもあって、保育室の雰囲気はだんだん沈んだものになる。

他の子どもたちが親とともに帰っていくのを見送りながら、あとに残された子は、いつも、さみしそうな表情をしていた。麻由には、できるだけそんな思いを味わわせたくない。昭雄はそう思っているのだ。

ところが、きりん組に入っていくと、いつもなら真っ先にしがみついてくるはずの麻由が、今日はやっこない。

意外な思いで部屋の中を見渡すと、麻由は、隅に置かれた背の低いテーブルに向かい、クレヨンを握って「お絵かき」をしていた。

麻由の隣には、小さな肩をぴったりと寄せ合い女の子がひとり座っている。ふたりともこちらに背を向け

ていて顔は見えないのだが、毛先がくるんとカールしたそのくせつ毛で、それが例の「亜希穂ちゃん」であることは、すぐわかった。

「お帰りなさい」

声に振り向くと、さゆり先生だった。

「あつ、ただいま。：：今日は、夜もさゆり先生なんですわね」

通常、延長保育は他の保育士が交代して見ているよ

うだったもので、ちよつと疑問に思つて昭雄はきいた。

「ええ、他の先生たちの勤務シフトがどうしても都合つかなくて」

さゆり先生は、屈託ない笑顔でそう答えた。

「いつも、ありがとうございます」

十人におよぶやんちゃざかりの四歳児の面倒を十時間以上も見ていたことになる彼女に、ある意味、畏敬いけいの念すら感じて、昭雄は頭を下げた。



と、そんな昭雄の気持ちが出来たならしく、さゆり先生はちよつと照れたように目をそらし、麻由たちの方を見た。

「ずっと、ふたりで遊んでるんですよ。ほんとに馬が合うみたい」

その言葉にうなずき、昭雄は麻由に声をかけた。

「麻由、ただいま」

と、麻由は初めてこちらを向き、うれしそうな顔で

「お帰りなさい」と言った。しかし、昭雄の予想に反して、こちらに駆け寄ることはなかった。すぐにまた向き直り、亜希穂と楽しそうにおしゃべりしながら、お絵かきのつづきをはじめたのだ。

∴∴へえ。

昭雄は驚き、それに、ちよつと肩すかしを食らったようなさみしさも感じながら、汚れ物の入ったお着替えバッグを取り、その中に連絡ノートもしまった。

「さあ、帰ろ」

昭雄がふたたび声をかけると、麻由は、今度は不満  
そうな顔をこちらに向けた。

「亜希穂ちゃんと、もつと遊ぶ」

テーブルの前から立ち上がる様子も見せない。

「でも……」

昭雄が困った顔をしていると、そこでまた、さゆり

先生が言った。

「亜希穂ちゃんのお父さんもすぐに来られると思いま  
すから、それまでいらしてもいいですよ」

その言葉に、昭雄は、なぜかどぎまぎした。

亜希穂の父親が迎えにくるのを待つ間——途中、他  
の園児をお迎えに来た親への対応で中断はしたが——  
「さゆり先生は、日中の麻由の様子を話してくれた。

「麻由ちゃんは、ものごとがよくわかってる聞き分け

のいい子だから、心配いりませんよ。最初は、そのいい子過ぎるところが、ちよつと気になったんですけどね」

「いい子過ぎる……？」

「ええ、慣れないこともあるんでしょうけど、どうしても他の子に遠慮しちゃう。お気に入りのおもちやとかも、強引な子が来ると、すぐにとられちゃうんです。そのことに抗議しないし、泣いちゃいけないと思ってるらしくて、ひとりでぐつと我慢しちゃう」

ここ二カ月、前以上に麻由を見てきて思い当たるふしもあり、昭雄はうなずいた。いや、その言葉には、もっと深いところで納得できる気もした。自分自身も、子ども時代、そんな性格だったと思ったのだ。

「でも、たぶん、もうだいじょぶですよ。亜希穂ちゃんが、そんな麻由ちゃんのことよくわかってて、しっかりカバーしてくれるし、麻由ちゃん自身も、活発な亜希穂ちゃんにつられて、少しずつ主張もするようになり

なつてきたし」

さゆり先生の言葉に、昭雄は、ふたたび麻由と亜希穂の後ろ姿を見やった。二人は、小さな頭を寄せ合い、絵を描きながらくすくすと笑っていた。

：：どうやら麻由は、保育園でもう、親友と出合えたみたいだな。

昭雄は、なんだか、ひとつ肩の荷が下りた気がした。と、そこで、園庭の方に目をやったさゆり先生が亜

希穂に声をかけた。

「亜希穂ちゃん、パパ、来たみたいよ」

その言葉に、やはりどこかぎくりとして見やると、門の向こうの道に一台の乗用車が降り、ライトが消えるところだった。そして、すぐに、一人の男が降り立った。

昭雄は、目を凝らして園庭に入ってくるその男の顔を見ようとしたが、暗いこともあり、はっきりとはわ



からなかった。

男の姿がいったん見えなくなつたあと、今度は廊下を歩く足音が近づいた。

そして、保育室の引き戸が開いた。

「お帰りなさい」

さゆり先生は、その男に声をかけたあと、昭雄に向き直って言った。

「亜希穂ちゃんのお父さん、谷原さん」

その声を聞きながら、昭雄は、男の顔を呆然と見つめていた。

あの頃よりずっと大人の男という感じになっているが、その涼しげな顔立ちと、耳の上あたりのくせっ毛には、まちがいをなく見覚えがあつた。

そんなことにはあるわけがないと思つた「悪い予感」は、まさに的中していた。男は、今日の昼間から、昭雄の思考の中に何度も登場した人物に他ならなかつた

のだ。

言葉も出ずに立ちつくす昭雄の横で、さゆり先生が紹介の言葉をつづけた。

「最近入園して、亜希穂ちゃんと大の仲好しになった麻由ちゃんのお父さん、藤沢さん」

その言葉にこちらを向いた男——谷原啓介は、一瞬見つめたあと、ちよつと首を傾げるようにした。

見覚えある顔であることにはすぐ気づいたようだ

が、昭雄のように予測していなかった分、記憶をたぐるのに多少時間がかかったのだろう。

しかし一瞬後には、その目が驚きに見開かれた。

「……えーっ!? 藤沢あ?」

大きな声で言った啓介に、今度はさゆり先生がぽかんとした顔になり、啓介と昭雄の顔を見くらべた。

「……えっ? もしかして、お知り合い?」

「……え、ええ。高校時代の同級生です」

やっと最初の動揺を抑えた昭雄が答えた。

「うそーっ。こんなことって、あるのかよ」

啓介の方は、まだ、驚きからさめないうりだった。

「さよなら」

「ありがとうございました」

「亜希穂ちゃん、麻由ちゃん、またあしたね」

さゆり先生に送られ、ふた組の父娘は、そろって園

を出た。

啓介の車のところまで来て、昭雄がなんと行って別れたものかと迷っていると、啓介の方が先にきいてきた。

「家、どっちだ？」

「え？ ああ、桜丘」

「じゃあ、途中じゃん。うち、大蔵だから」

そして、リモコンキーでドアを解錠しながら、こう

つづけた。

「送ってくよ」

「えっ、でも……」

「乗ってけよ。歩きなんだろ？」

「う、うん、そうだけど……」

昭雄が煮え切らない顔でいると、啓介は、今度は麻由に声をかけた。

「麻由ちゃん、亜希穂といっしょに、車で帰るかい？」

「うん！」

まだ亜希穂と手をつないだままの麻由は、昭雄が驚くほど大きな声で答えた。

亜希穂の方も、「うわーい」と声をあげた。

「さあ、どうぞ」

啓介は、そう言いながら、後部席のドアを開けた。

と、すかさず亜希穂が乗り込み、手をつないだままの麻由も乗ってしまった。



もうことわりきれなくなり、昭雄も、助手席のドアを開けた。

昭雄がシートベルトをとめていると、運転席に乗り込んできた啓介は、エンジンをかけながら、あらためて感慨深げに言った。

「しかし、驚いたよな」

高グレードの車らしい軽快な発進に、ほんの少しだけ背中をシートに押しつけられながら、昭雄はうなず

いた。

「あ、ああ」

「俺が転校したのは高二……つうことは十七だから、……十三年ぶりってことになるわけか」

「う、うん、そうだね」

「それにしても、こんなところで、またお前と同じクラスになるとはな」

その啓介の表現に、昭雄は思わず笑っていた。

と、啓介は、幹線道路へとハンドルを切りながら、どこか遠い目をした。

「日本で最後の学生生活だったこともあるけど、あの高二のクラスの話は、今でもよく思い出すよ」

その言葉に、昭雄はちよっとうろたえた。話題がそちらに向いてほしくはなかったのだ。

それで、今度は自分の方から口を開いた。

「あんまり、変わってないな。とても三十には見えな

いよ」

「そんなことないさ。この頃、鏡見るたびに、自分がおじさんぽくなつてくのを感ずるよ。変わつてないのは、お前の方だろう。そんな背広着てなきや、まだ学生に見える」

「ふふ。僕はまだ、二十代だからな」

運転しながらちらりとこちらを見た啓介の視線が気になり、昭雄は、自分がまだ三十歳の誕生日を迎えて

いないことをネタに、冗談めかした。

「そうか。たしか、早生まれだったな」

啓介がそう言ったところで、車が赤信号で停まった。すると啓介は、ハンドルに手をかけたまま、こちらに顔を向けた。

「いや、ほんとに変わってない。あの頃の雰囲気はまだ」

昭雄はその視線におろおろし、目を泳がせながら、

さらに話を変えた。

「まだアメリカにいるんだと思ってたよ。前に同窓会に出た時、あっちで大学卒業して、そのまま向こうの企業に就職したって噂、聞いたから」

「ああ。会社は今もかわってないんだ。五年前、ちょうど結婚する時に、会社が日本支社を出すことになってさ」

「はーん、それで、転勤してきたわけだ？」

「うん、結婚相手が日本人だったこともあって、ちよ  
うどいいだろうってな。まあ、あいつは、アメリカで  
暮らすつもりだったらしいから、残念がってたけど」

「あれ？　奥さんはこっちに住んでたんだ。じゃあ、  
どこで知り合ったんだ？」

「大学の卒業旅行でロスに来てたあいつに、たまたま、  
道きかれたんだ。こっちもちょうど休みだったし、そ  
のまま市内をガイドした」

「へえ、なかなかロマンチックな出逢いじゃないか」

「始まりはな。最後は、とんだ喜劇だったが」

ふたたび車を発進させながら、啓介は、どこか吐き捨てるような口調で言った。

「……？」

昭雄は、思わず啓介の方を見て聞き返そうとしたが、啓介は、ハンドルを握って前を見つめたまま、ちよつと口をとがらすような顔をしていた。



なんだか、それ以上きいてはいけないような気がして、昭雄も黙り込んだ。

そのせいで、会話が途切れた。

途中、マンションまでの道筋を伝えた以外は、そのあとしばらく、二人は黙っていた。車内には、後部座席でじゃれ合っている亜希穂と麻由の声だけが響いていた。

お互い、どこか気まずさがあるのは確かだった。

昭雄の方は理由がはっきりしていたが、啓介の方も、さっきの——おそらくは離婚の——話のせいばかりでもないようだった。

高校時代の思い出なら、話すことはいろいろあるのだが、それを始めれば、どうしても「あのこと」にふれざるを得ない。

啓介の方もそれは避けたいのだろうと、昭雄は思った。

車が幹線道路を折れ小径に入ったところで、麻由の家が近づいていることを察したらしい亜希穂が、後部座席から身を乗り出すようにして声をかけてきた。

「パパ、麻由ちゃんにおうちまで来てもらおう。……だめ？」

「えー？　それは無理だよ。麻由ちゃんそこだって、これからご飯なんだし」

啓介はそう諭さとしたが、亜希穂は口をとがらせ「だっ

てえ〜」と言った。

「麻由ちゃんとは、あしたもあさっても、これから毎日会えるんだから、いいだろ。な、亜希穂」

啓介がそう言うと、亜希穂はふくれたままの顔で後部座席にボタンと身を預けた。しぶしぶながら納得はしたようだ。

しかし、今の啓介の言葉に――ことに、最後に啓介が呼びかけた「亜希穂」という言葉に――どぎまぎし

たのは、昭雄の方だった。

そのせいで、昭雄の心の中に、ある衝動が湧き起こった。

今日一日、心をかき乱しつづけたことに、とりあえずの決着をつけたくなつたのだ。

一方で、それを言つてはいけないという理性は働いていたが、マンションが近づくにつれ、その思いは募つていった。

それで、ついに我慢できなくなり、昭雄は口走って  
いた。

「亜希穂って……いうんだね」

その言葉に、啓介は一瞬びくりとしたように見えた。  
しかし、マンション前で車を停めたところで、なにごと  
でもないという感じでこう答えた。

「ああ、俺がつけたんだ。凝りすぎだって、女房には  
反対されたんだけどな」

そして、そこで思いついたように、後部座席を振り返った。

「亜希穂、あしたから、麻由ちゃん、お迎えに来ようか。朝も帰りも、この車でいっしょに保育園に通えばいいだろ」

亜希穂が——そして麻由も——歓声を上げるのを笑って見ていた啓介は、助手席の昭雄に目を移し、同じことをきいた。

「……いいだろ？」

昭雄は、その視線を避けるようにしながら、うなずいていいものかどうか、迷った。



*memory 1*

「君たち、まさか、これ、どっかのベランダから盗んできたんじゃないでしょうね」

理科準備室の机に林田が並べた女性下着をあきれたように見ながら、恭子先生が言った。

「やだなあ、そんなこと、するわけないじゃないですか。ちゃんと、姉貴に頼んで、お古をもらったんですよ。『スケベっ！』って言われましたけどね」

林田祥一は頭をかきながらそう弁解したあと、今度は、学生服の胸を張るようにしてつづけた。

「まあ、僕は、一生を映画に捧げる覚悟ですから、映

画のためだったら、どんなことだってするつもりですけど」

そんな林田をさらにあきれ顔で見たあと、恭子先生は、もう一度机の上のブラジャーとパンティに目をやった。

「……で、これを、藤沢君に？」

そう言いながら、次には、その視線を、林田や飯田の横で小さくなっている昭雄へと移した。

昭雄たちのクラスの副担任で、全校生徒のあこがれの的である恭子先生に視線を向けられ、昭雄は顔を赤らめた。恭子先生は、今日も、白衣がよく似合っていた。

「ええ、うちのクラスでいちばん背が低くてやせてるし、みんな、ヒロインを演るなら、こいつしかいないだろうって」

林田は、平然とそう言った。「みんな」というより、

林田自身が強引に「うん」と言わせたくせに。

「それに、よく見ると、こいつ、かわいい顔してるでしょ」

林田がつけ加えた言葉に、恭子先生はさらに昭雄の顔を見つめ、「うん、それは、そうだけど……」とつぶやいた。

その言葉に、昭雄は、さつきとはまた別の意味で頬が火照るのを感じた。

太多恭子先生。

中高一貫の男子校という、右を向いても左を見ても黒い学生服ばかりの環境の中で、この春大学を出て赴任してきた女性教師が気にならないわけがない。しかも、街でもあまり見ないほどの美人。その上、性格も気さくでさばけている。生徒たちと友達のように接し、他の教師のようにうるさいことも言わないのだから、人気がないわけがなかった。昭雄も当然、あこがれて

いた。というより、昭雄が毎日学校に来るのは、恭子先生の顔が見たいからだとさえ言えた。

そんな恭子先生に、「かわいい」という視点で見られるのは、男としては、やはり傷つく。

「で、私は、藤沢君に女装させてあげればいいわけ？」  
昭雄の気持ちをやそこに、恭子先生は、単刀直入にきいた。

「はい。それだけじゃなく、化粧とかも含めて、藤沢

に女装のしかたを教えてやってほしいんです。今度の作品、ほとんど、校外ロケで撮るつもりだから、現場ではこいつが自分で衣裳とかメイクとかしなきゃいけないんで」

：：えっ、そんな話、聞いてない！

昭雄は、驚いて林田を見やった。

クラスのみんなの前で女装させられるだけでも恥ずかしいのに：：校外で撮る？ 女の子の服着て、街に



出ろっっていうのか？

昭雄があわてて反論しようとする、それより先に、恭子先生が話を進めてしまった。

「でもさあ、これは、いらなんじゃない？」

そう言って、机の上のパンティをつまんでみせた。

それに動揺した昭雄は、思わず出かかった言葉を呑み込んだ。

「いえ、ほとんどのシーンの衣裳がミニスカートなん

です。スカートの裾からトランクスが見えたりしたら、興ざめでしょ」

林田はまた、平然とそう答えた。

と、恭子先生は、今持った疑問を忘れたように、興味津々という顔で次の質問を繰り出した。

「ふーん、どんな衣裳なの？」

林田が、さつき下着を出した紙袋から取り出したのは、白いセーターと、チエツクのプリーツスカートだ

った。

恭子先生は、それを受け取ると、上下そろえて机の上に広げた。そして、昭雄とその「衣装」を見くらべた。

「うん、確かに似合うかもしれない」

「でしょ。こいつに合わせて、姉貴のダンスから選んできたんです。他にも、姉貴と母親だまくらかして、ウイッグや化粧品も調達してきました」

林田はそう言いながら、結局は、紙袋全体を恭子先生の前に押し出した。

「もうすぐ、最初のスタッフミーティングと衣裳合わせを始めることになってますから……」

言いかけた林田は、そこで、助監督役を押しつけた飯田に「予定は何時からだった？」ときいた。その予定は、ついさつき林田自身が決めてメンバーに言い渡したのだから、知らないわけではないのだが、監督の威

厳を示したいと思ったのだろう。それに対して飯田は、すでにちよつとうんざりしたような顔で「四時半」と答えた。

「うむ。とりあえず、それまでに、こいつを女の子にしてやってく下さい」

林田の言葉に、恭子先生はまたあきれ顔で笑ったあと、腕を組むようにして、なにか考えた。

そして、少ししてから「じゃあさ……」と口を開い

た。

「君たち二人で、理科室の前、見張っててくれる？」

さすがに、生徒相手にそんなことしてるとこ、他の先生に見られたくないからさ」

その言葉に、林田は、一瞬にしてうれしそうな顔になり、「はいッ！」と返事をした。そして、さっそく飯田を連れて出て行った。

じつは、恭子先生が林田の申し出をことわるだろう

と思っていた昭雄は、そのなりゆきに、あっけにとられた。

驚いたままの顔で見やると、恭子先生は、最前までとはまたちよつとちがう、どこか深刻さを含んだ表情で、昭雄にきいてきた。

「あのさ、これって、イジメ……じゃないよね？」

協力する前に昭雄の真意を確かめようと思ったらしい。林田たちを出て行かせたのも、昭雄が正直に言え

るようにという配慮にちがいなかった。

昭雄にもそれがわかって、ちよつと救われた思いを感じながら、答えた。

「はい。そういうことじゃ、ないです。もちろん、喜んでやるわけでもないけど……」

昭雄の通う樟葉学院高校では、毎年、十一月の初めに中学部と合同で「学院祭」を催していた。しかし、



近隣一ともいわれる受験校。以前ならともかく、最近では、学校行事などに興味を示す生徒は少ない。普通の高校ならこんな催しの中心となるはずのクラブ活動も、活発ではない。学是である「自主性の尊重」を貫いていたのでは、どうしても盛り上がり欠けた。

そこで学校側は、開学以来の「学院祭」の伝統を守ろうと、「1クラス1イベント」を義務づけていた。音楽や演劇などの「出し物」でも、あるいは展示や模

擬店でもいいから、クラス単位で何かを企画しろということだ。

しかし、それでも、たいていの生徒は積極的に動くとしなない。「ふだんは受験受験ってうるさいくせに、なんでそんななかったるいこと、やらせるんだよ」と思っているわけだ。

男ばかりという環境が、さらにやる気を削いでもいた。たとえば食べ物屋の模擬店をやったとしても、ろ

くなものは作れないし、ウエイトレス役の女の子がいないのでは楽しくもないのだ。それで、たいていは、なにかテーマを決めて地味な研究発表の展示とかでお茶をにごすことになる。

ところが、中には、自分の興味や趣味に燃えて、ここぞとばかり思いを実現しようとする生徒がいた。そんなやつがいるクラスは、そいつを中心に——というか、そいつがクラスの何人かを巻き込んで——やたら

と張り切る。

昭雄のクラスも、まさにそんなひとつだった。言うまでもなく、中心となつて燃えているのは林田だ。

かねてから「未来の巨匠」を自称していた林田は、学院祭のイベントを決めるように言われたホームルームで、「自主映画を作つて上映しよう」と言い出し「監督」を買つて出た。

それ以外に特に提案も出ず、全員がそれに賛成した。

要するに、「林田がやると言うんだからやらせておけ」と考えたわけだ。林田はその場で、スタッフやキャストの希望者を募ったのだが、そんなふうだから、積極的に加わろうとする者はいない。みんな、「上映当日の客引きくらいはやるよ」という態度だった。

そこで林田は、「来週までにストーリーとスタッフ・キャストの案を作ってくるから、それを見て考えてくれ」と言った。

翌週のホームルームで、林田は、ストーリーのプロットを配り、スタッフ・キャスト候補を提案した。

ストーリーは、単純な話の中に、アクションシーンやSFがかった設定までむりやりつめこんだラブロマンスだった。映画などあまり見ない昭雄の目にも、どこか陳腐なものに思えた。少なくとも「未来の巨匠」の作品とは、とても思えなかった。

昭雄がちよつと驚いたのは、林田が発表していくス

タッフ・キャスト案に異議を唱えるやつがいなかったことだ。指名された当人も——進んで引き受けるという感じではないにしろ——、一人も文句を言わなかった。どうやら、この一週間、林田は、案を練るだけでなく、目星をつけた人間に着々と根まわししていたようだ。ストーリー作家としての才能はともかく、そういう点では周到で押し強いやつなのだ。

ただ、林田は、主人公二人のうち、ヒロインの方の

提案だけ後まわしにした。

六人の出演者で女性はそのヒロインだけだったの  
で、昭雄は、もしかしたら林田が、どこか校外から知  
り合いでも連れてくるつもりなのかもしれないと思っ  
た。

ところが、それ以外のすべてのキャストが決まった  
ところで、林田はこう言った。

「この作品が成功するかどうかは、すべてヒロインの



イメージにかかっていると聞いていい。美しくもはかない少女。このクラスの中で、そんな役を演れる人間は、ひとりしかいないと思う」

そして、昭雄の方を指さしたのだ。

「藤沢に頼もうと思うんだが、みんな、どうだろうか？」

「……えっ!？」

昭雄が驚きの声をあげるより早く、クラスの全員が、

冷やかすような歓声とともに拍手していた。

「ちよ、ちよつと……」

反論しかけたところで、昭雄は、このやり方もまた、林田が周到に考えた上での作戦だったことに気がついた。

女役については、直接説得しても誰も「うん」とは言わないだろう。そこで林田は、他のことをすべて固め、逃げ道をふさいだ上で、全員の総意として指名す

るという形をとったのだ。

もちろんそこで、そんな林田の狡猾こうかつさを指摘して、「いやだ」と言い張ることはできた。でも、昭雄はそれをためらった。そんなことをしても、後味の悪い結果しか残らないだろう。たとえば、その結果がどちらに転んだとしてもだ。

もし、さんざんゴネたあげく、けつきよくは昭雄がやらなければならなくなったら、自分はもちろ

ん、押しつけた方も気分が悪い中でことが進む。たとえば、その映画とやらが完成したとしても、誰ひとりとしていい思いなどしない。

もし、昭雄が拒否することに成功したとしたら、今度は、クラスの中でその役の押し付け合いが始まり、それが延々とつづく。映画ができないばかりか、クラス全体の雰囲気は最悪になる。そして、その原因を作ったのは昭雄だということになるのだ。

ここで、自分さえ我慢してその役を引き受ければ、すべては丸くおさまる。

そう考えた昭雄は——おそらく林田は、そんな昭雄の性格まで周到に計算した上で指名したにちがいないと思いつつも、ちよつとふてくされたように言つた。

「わかつたよ。やるよ。やりやあいんだろ」

胸と腋のあたりをとりまいた弾力ある生地が、きゅつと引っ張られる感じがあり、背中ですれが固定された。

「……うーん、やっぱり、普通のパッドだけじゃ、ボリューム足りないなあ」

昭雄の後ろに立ってブラジャーのホックをとめた恭子先生は、肩口からのぞきこむようにして言った。

「そうだ。ちよつと待っててね」

背後から離れていった恭子先生を、昭雄は、どこか不安な思いで振り返った。

下はまだ学生服の黒いズボンのままだが、上半身は裸にブラジャー。そんな格好で立っていると――恥ずかしいのはもちろんだが――、妙に心細い感じがする。両肩に掛かった細いストラップのせいかもしれない。

見ていると、恭子先生は、薬品瓶が並んだスチール戸棚の引き出しを開け、そこからなにかを取り出した。

白いビニールに包まれたかたまりは、どうやら、実験に使う脱脂綿のようだ。

それを持ってふたたび近づいてきた恭子先生は、昭雄の前に立つと、包みの中からひとかたまりをつかんで取り出した。さらにそれをふたつに分け、ひとつずつ手の中で軽く丸めると、昭雄のブラの両方のカップに押し込んだ。

ひんやりと細い恭子先生の指が裸の胸に触れ、昭雄



はちよつと体を震わせた。そして、そのことを恭子先生に気づかれるのではないかとさらにびくびくした。

実験器具や人体模型が並ぶ理科準備室は——先刻、恭子先生が校庭に面した窓の遮光ブラインドを閉じたこともあり——、いつも以上に薄暗い感じがした。

そんな「閉ざされた空間」に、恭子先生と二人。しかも、こんな「秘めごと」をしているのだ。たとえばんなに奇妙な格好をしていようが——いや、初めて着

けたブラジャーの不思議な感触も手伝って——、昭雄の若い肉体は敏感に反応していた。意思に反して、先刻からズボンの前が張りつめていたりもする。

昭雄は、恭子先生の目から隠すように、それとなく体の前で両手を交差させた。

ところが、そんな昭雄の思いに反し、恭子先生は「ちよつと腕を後ろにまわして、胸を張ってみて」と言った。

昭雄がしぶしぶ言われたようにすると、昭雄の胸を見た恭子先生は、いきなり両手でふたつのふくらみをつかんだ。

「……っ！」

昭雄は思わず声を出しそうになり、齒を食いしばってそれをこらえた。白衣姿の美人教師に「乳房」を握られているというシチュエーションは——自分にはおかしな性向などないと思っっている昭雄にも——、さら

に尋常でない興奮をもたらした。

恭子先生の方は、そんな昭雄にはおかまいなしに、ブラジャー——と、その中のふくらみ——の位置をちよつとずらし、ひとりうなずいた。

「……うん、こんなもんかな」

そして、今度は机の上から、先刻広げて置いたままになっていた白いセーターを取った。

「じゃ、これ着てみて」

それを受け取った昭雄は、あわてて頭からかぶった。もちろん、ブラジャー姿を早く隠したかったからだ。

途中、慣れないふくらみにひっかけながらも、ニツト生地を前に引っ張るようにして、裾を下までおろした。

そのセーターはタートルネックだったが——オフタートルというのだろうか——、襟の部分が大きくてゆったりしたつくりで、首には密着せず前に垂れていた。

反対に、胴体を包んでいる部分は、男物とくらべるとずっと細身で、体に張りついた。そのせいで、「ふたつのふくらみ」の存在がはっきりとわかった。

恭子先生は、両手を昭雄の首にまわすようにして襟の形を整えてから、両肩の生地をつまんで、ちよつと横に引っ張った。昭雄の鎖骨のあたりを襟口からのぞかせたようだ。

「うん、いいわね」

そのあと、今度は、机の上からパンティとスカートを取り、昭雄に手渡した。

「まさか、下まで手伝ってあげるわけにはいかないでしょ。私、教室の方に出てるから、両方履いたら呼んで。スカートは、こっちが前ね」

そう言い残して実験机が並ぶ理科室に出て行ってしまった。

それを見送り、ドアが閉まったところで、昭雄は手

にしたパンティとスカートをあらためて見やった。

こんなの……履けってか。

パンティは白地の綿製だったがピンクの小さな花柄が散り、生地も男物のブリーフなどよりずっと小さい。スカートの方は、赤のウール地に大きめのプリーツがほどこされ、そこに黒と白のチェックが入っていた。

昭雄は、しばらく戸惑ったようにそれを見ていたが、やがて、ひとつため息をつくとき、ズボンのベルトをゆ



るめた。

恭子先生が外で待っているのだ。ここで一人、いつまでもためらっているのは、かえって変だろう。

誰もいない部屋とはいえ、学校の一室。トランクスを脱ぎ、パンティに履き替える時には、思わず机の陰に隠れるようにしていた。

しかし、それ以上に困ったのは、先刻からずっといきり立っている前のものだった。パンティに足を通す

とさらに勢いを増したように見えるそれは、小さな生地では包みきれないほどの長さで太さになり、しかも、前の部分の生地を大きく持ち上げた。

困惑した昭雄は、パンティをいったん太腿のあたりまで下ろし、気持ちを落ち着かせるように深呼吸した。それがちよつと萎えたのを見はからい、片手を添えて股下に向かってぐいっと折り曲げた。そこで、両膝を重ねるように脚をぎゅっと閉じ、それを内腿で挟みこ

んだ。その上で、股が開かないように気をつけながら、そろそろとパンティを引き上げた。

それでなんとか問題は「おさめる」ことができたが、昭雄は、そんなことをしている自分が情けなかった。

そして、それ以上に、現実の心地悪さをも感じていた。むりやり折り曲げているのが苦しいし、その「抑圧」に反発したそれが、ふたたび「蜂起」する機会をうかがっている。股の間に異物感を感じながらも、へたに

そこを開けない感じなのだ。

昭雄は、なるべく脚が開かないように注意しつつ、次にスカートを履いてみた。

脇にあるホックをとめ、ファスナーをあげるのはわかったが、それをしてみると、違和感は、下腹部だけでなくさらに他のところにも広がった。

男としてはかなり細めの昭雄にも、そのウエストはきつく、お腹のまわりが絞めつけられた。

ひざ上十五センチくらいしかない裾は、ふだんのズボンとはちがい、なにかを履いているという感覚がまるでない。問題の股下が、外の空間とつながっているから、まるでパンティ姿をそのままさらしている感じなのだ。

見下ろすと、赤いチェックのスカートから、白いソックスと生徒用のスリッパを履いただけの裸の脚が、どこか頼りなげに伸びていた。

そんなあれこれの違和感にたじろぎながらも、昭雄はドアに近づき、そこを薄目を開けた。

「あの……、できましたけど……」

昭雄がつぶやくように言うと、すぐそばの教壇のところにいたらしい恭子先生が入ってきた。

「……へえ、すね毛のこと、心配してたんだけど、わりと薄いのね」

スカートから出た昭雄の脚を見て言った恭子先生の

言葉に、昭雄はまた傷ついた。

「でも、近くで見るとわかるから、本番前に剃った方がいいかもね」

そんな言葉にどう答えたものか困っていると、恭子先生は、机の下からキャスターのついた教師用の椅子を引きだした。

「ここ、座って。メイクするから」

言われたとおり腰掛けたのだが、その座り方は、両

膝をぎゅっと閉じるようなものになった。べつに女の子ふうに振る舞おうとしたわけではない。股を開けば、パンティの中のものが出ち上がりそうな気がしたただけだ。

おまけにそこで、短いスカートがずり上がったのが気になり、太腿のあたりの裾を引き下ろすような仕草もしていた。

昭雄は、そんな、自然と女の子っぽくなっている自



分の仕草が、恭子先生からおかしなものに見られたのではないかと、今度はそれを心配した。

ところが、びくびくしながらうかがい見ると、恭子先生はすでに、林田が持ってきた紙袋の中を物色していた。

「へえ、たいていのは揃ってるじゃない」

そう言いながら、化粧品らしきものをあれこれ取り出して机に並べ、そこでやつと、昭雄の方を見た。

「そうか、教えてあげながら進めなきやいけないのよね」

ちよつと考えてから、なにか思いついたように実験器具の棚のところまで行った恭子先生は、そこから、実験スタンドに取りつけられた鏡を持ってきた。たぶん、「光の実験」とかに使うものだろう。

それを机の上に据えると、昭雄の椅子をまわし、そちらに向かせた。

「よく見ててね。まず最初は、メイクベースを顔全体に伸ばすのね」

恭子先生は、そう言いながらさっそく机の小瓶をひとつ取り、そのふたを開けた。そして、そこから白いクリームのようなものを指先にとると、昭雄の顔に塗っていた。

「次はファンデーションね」

今度はべつの瓶から、肌色のどろんとした液体を出

し、それを塗る。

「このおでこのラインと鼻筋とをTゾーンって言うのね。まずここにのせて、そこから伸ばしていくといいわ」

恭子先生は、説明しながらその作業を進めた。

「藤沢君、ニキビもなくてきれいな肌してるから、あんまり厚くしない方が自然な感じになるわね」

その声は、なんだか妙に弾んでいる。

「次はアイシャドーね。ヒロインは、清楚な女の子な  
んでしょ。じゃ、これもあんまりやりすぎない方がいい  
と思うわ。まぶたに薄くピンクを入れて、目じりの  
ところにちよつとだけグリーンを入れるとか：：」

昭雄は鏡の中の恭子先生の手つきを目で追いなが  
ら、彼女が楽しそうにしているのを不思議に思い、ち  
らりとその顔を見た。

と、恭子先生もその視線に気づいたようで、照れた

ように言った。

「ふふ：：、私、ほんとに共学校に就職したかったのね。でも、ここに採用されて、男の子ばかりに囲まれてるでしょ。だから、こんなふうになんか女の子の相手ができるのが、ちよつとうれしかったりして」

恭子先生が、自分のことを「女の子」と感じていることに、昭雄は驚き、それ以上に、また深く傷ついた。

そのあと、恭子先生は、アイブローとかマスカラと

かチークとかの作業をレクチャーしながら進めた。そして、最後の口紅を塗りながらきいた。

「だいたい、わかった？」

「は、はい、順番は。でも、自分でできるかどうか：」

「そうよね、一回じゃ無理ね。これからも、都合がつくかぎりつき合ってあげるわ」

恭子先生と過ごせる時間ができるのはうれしいこと

にちがいないが、それを素直に喜ぶ気にはとてもなれない。

昭雄がそう思っていると、恭子先生はもう次の作業に取りかかり、例の紙袋から髪の毛の固まりを取り出してブラシをかけていた。

そして、そのストレートロングのウィッグを持って昭雄の後ろにまわると、片手で昭雄の髪をなでつけるようにしながら、その上にかぶせた。



鏡を見ていた昭雄は、ちよつと驚いた。

先刻から、自分の顔の印象がずいぶん変わったとは思っていた。特に口紅を塗ってからは、まるで別人のように見えていた。でも、短い髪にそんな顔は、どこかちぐはぐで、気味悪いものに感じていたのだ。

ところが、眉あたりまで下りた前髪と、サイドに流れるストレートの髪で縁取られたとたん、その顔がまったく違和感のないものになっていた。というか、い

きなり、印象的な「女の子」の顔になったのだ。

「立ってみて」

恭子先生に言われ、昭雄は、呆然としたまま、立ち上がった。

と、恭子先生は、昭雄の頭のとっぺんから足の先までもう一度目を走らせてから、にっこりと笑った。

「ふふ。これだけかわいい子って、そうはいないわよ」  
その言葉に、昭雄は照れながらも、反論はしなかつ

た。

美人の恭子先生が言うのだから、それはまちがいな  
いだろう。

そう思っていた。

今、鏡の中に見た顔に、昭雄自身がそう感じていた  
からだ。

「林田君たちも、きつと驚くわ」

満足そうにうなずいたあと、恭子先生はまた、理科

室の方に出て行った。廊下で「見張って」いるはずの林田と飯田を呼びに言ったにちがいない。

昭雄はそこで、もう一度鏡をのぞき込んだ。

そこにいるのは、確かに、ひとりの魅力的な「女の子」だった。しかし、この鏡では顔しか映らない。

昭雄は、もっと全体が見たくなって、部屋の中を見まわしたが、姿見のようなものはなかった。それで、薬品戸棚の前まで行って、ガラス戸に映してみた。

何本もの薬品瓶に重なって、その「女の子」が立っていた。

鏡でないぶん、細部まではよくわからなかったが、腿あたりから上が映ったその姿に不自然なところはひとつもない。先刻まで違和感を感じていた胸のふくらみやスカートも、パツチリした目元やピンクの唇、長い髪と合わさり、なんだか、それがあたりまえのように思えた。

と、そこでドアが開き、林田たちが飛び込んできた。

「えっ!? ……」

こちらを見た林田と飯田は、ぽかんと口を開けたまま、絶句した。

理科室から教室までの廊下を歩く間、昭雄は、生きた心地がしなかった。

最後の授業が終わって一時間半。校舎内にあまり人

は残っていないなかったが、それでも、文化系クラブの間や、やはりどこかのクラスで学院祭の準備をしているらしい生徒はいる。そんな生徒たちと、途中、何度かすれ違ったのだ。

そのたびに、相手は驚いたように立ち止まり、呆然とこちらを見てきた。

男子校の廊下を、女の子が歩いているというだけで珍しい。

そういうことなのだろうと昭雄は思った。たぶん、すぐこちらの正体に気づき、はやし立ててくるのだろうとも。

ところが、昭雄たちが近づいていっても、相手はぽかんとした顔で突っ立ったまま、こちらを見ていた。気になった昭雄がちらりと目をやると、あわてたように、おろおろと視線をそらしさえした。

……え？　僕のこと、本物の女の子だと思ってるの



か？

すれ違った中には昭雄がよく知っている生徒もいたのだが、そんな連中も、みんな同じ反応をした。こちらに冷やかしの声をかけないだけでなく、いつしよに歩く林田や飯田にさえ声をかけられないという感じで固まっていた。

それは、奇異なものを見て立ちすくんでいるという感じではない。どう見ても、美人の女の子の前で緊張

しているという様相なのだ。

それに気づき、昭雄の方も緊張した。

はやされたり冷やかされたりするのもいやだが、そんな目で見られるのはもっと居心地が悪い。時折、彼らの視線が、セーターのふくらみやミニスカートから出た腿に秘かに流れるのにも気づいて、昭雄もまた体を固くしていた。

その緊張のせいで、最前までパンティの中でいきり

立っていたものが大人しくなったのだけは助かったが、そんなふうには胸や脚を気にすることで、昭雄の仕事はいよいよ女の子っぽくなってもいた。

ふと気がつくとき、林田と飯田からも、どこか緊張した空気が伝わってきた。

まるで、昭雄のことを守ることが使命だともいうように、両脇をガードして歩いているのだ。

小柄で性格も目立たないことから、ふだんクラスの

中で疎んじられることの多い昭雄は、そんなふう<sup>うと</sup>に自分  
が「大事にされている」ことに、よけいに居心地悪  
さが募った。

教室に入っていくと、そこに残っていた七・八人の  
級友たちも、理科準備室での林田たちや、廊下ですれ  
違った生徒たちと同じような反応をした。

机を寄せてなにか作業をしていたらしい場所で、全

員が立ち上がり、ぽかんとした顔でこちらを見てきたのだ。

自分に集中するそんな視線に、昭雄がどぎまぎと目を伏せると、教室に戻ってやっと平静を取り戻したらしい林田が口を開いた。

「どうだ。すごいだろ」

その言葉に、未だ呆然としながらも、一人が言った。

「ほんとに……、藤沢？」

「ああ。役のイメージにぴったりの美人だろ。俺の映像作家としての目の確かさが証明されたってわけだ」  
まるですべてが自分の手柄のように言う林田に、その言葉を吟味してみる余裕すらないらしく、全員がうなずいた。

そのあともしばらく、全員が無言のまま、昭雄の方を見ていた。

昭雄が——そんな視線に耐えようとも思い——落と

していた視線を上げると、そこには、林田に指名されたスタッフとキャストの全員が揃っていた。スタッフは林田、飯田をふくめ四人、キャストの方は昭雄をふくめて六人、総勢十人だ。

キャストとスタッフのちがいは、ひと目でわかった。スタッフはいつもの学生服だったが、キャストの方は、林田が言っていた「衣裳合わせ」のために「衣裳」を着けているからだ。ヒロインの「父」役の荒川は紺の

背広だったし、ヒロインを追う「謎の男A・B」役の立花と福田は、全身黒ずくめにサングラス。「医師」役の井沢は白衣を着ていた。そして、もう一人……。

昭雄がそこまで目を移したところで、林田が彼らに声をかけた。

「……で、シナリオの製本はすんだのか？」

「ああ、紙を折ってページ順にそろえるところまではな。

あとは綴じるだけだ」



昭雄が理科室で着替えている間、他のメンバーは、林田がワープロ打ちしてきたシナリオを人数分コピーし、製本するように言われていたらしい。教室の机を寄せていたのは、その作業のためだろう。

「じゃあ、それぞれ一部ずつ取って、自分で綴じよう」  
林田がそう言うと、さつきから動きを止めていた全員がやっと移動し、机の上に縦横たがいちがいに積まれた二つ折りの紙の束を取っていった。

昭雄も、その最後の一部を手を取った。

といつても、ホチキスがひとつしか用意してなかったらしく、結局はその順番を待つことになった。

こんなことなら、それぞれでやるより、一気に綴じた方が楽なのに。

一人ずつガチャンガチャンやっているのを見て、昭雄がそう思っていると、撮影を担当することになって  
いる倉木が、昭雄の持つ紙束に手を伸ばした。

「いいよ、僕がやるから」

どこか照れたようにそう言ったクラスメイトの顔を見返すと、倉木は昭雄の分をとりあげ、代わりに、すでにホチキスどめした自分の分を渡してくれた。

「あ……ありがとう」

昭雄がちよつと面食らいながら礼を言うと、倉木は、なぜか顔を赤らめた。

「さて、じゃあ、さっそく衣裳を検討しようか」

林田が言った。

「まず、主役の二人からだな。ちよつと二人で黒板のところと並んでくれ」

それで、昭雄がおずおずと教室の前に出て行こうとすると、その前に立っていたメンバーたちが、まるで道を空けるとでもいうようにさつと左右に分かれた。音声担当の山波などは、途中にあった椅子に気づいて、わざわざそれをどけてくれたりした。

なんだか、全員が——まあ、林田はちよつとちがう  
かもしれないが——昭雄の一挙手一投足に注目し、そ  
れに反応している感じだった。

これまで一度もそんな経験をしたことのない昭雄  
は、先刻から感じている居心地の悪さとともに、どこ  
かくすぐつたいような、それでいて心弾むような感じ  
も抱いた。

昭雄が教壇のところまで出ると、ちよつと離れた位

置に、ジーパンにジージャン姿のクラスメイトが立つた。

昭雄の相手役、「少年」を演ることになっているもう一人のキヤスト、谷原啓介だった。

啓介は、中学部からエスカレーター式に上がってきた昭雄や林田とちがいで、高校から入学してきた生徒だ。しかも、一年の時は同じクラスではなかった。二年で同級になって、もう半年たつものだから、会話を交わし

たことくらいはあるが、そんなに親しいわけではない。どんな性格なのか、昭雄にはまだよくわからなかった。男を相手にこんな役を演らされるなんて、こいつも、いやだろうな。

昭雄がそう思いながら見やると、啓介は、それまでこちらに向けていた視線をそらせた。耳の上のくせっ毛がゆれたことで、ちよつとあせつたらしいことが伝わってきた。

「その衣装は、二人のデートシーンのものなんだから、もうちよつと近寄ってくれないと、わかんないだろ」

林田の言葉に、昭雄と啓介は、それぞれ一歩ずつ横にずれた。

「もつと寄れよ。じゃないと、色がマツチしてるかどうかとか、確かめられない」

林田にさらにそう言われ、二人はもう数歩ずつ近寄って、腕どうしが触れあうくらいの位置に並んだ。



と、林田は、顔の前に掲げた両手の指で四角いフレームをつくり、そこからのぞくようにした。

「うむ。ちよつと身長差がありすぎるかな」

その言葉に、昭雄は、思わず啓介の顔を見上げていた。クラスでいちばん背の低い昭雄と、高い方である啓介。ちよつど頭ひとつ分くらいのちがいがあある。

昭雄が、それに、日頃忘れようと努めているコンプレックスを呼び覚まされると、林田が「そうか：

。」とつぶやいた。

「外を歩くんだから、スリッパってわけじゃないよな。ヒールのある靴を用意すればいいんだ。その服からいうと、黒のブーツとかだな」

独り言のようにそうつぶけたあと、「藤沢、足のサイズは？」ときいてきた。

「二十四・五」

「うん、それならどうにかなるな」

林田はそう言っつてうなずくと、「飯田！」と呼んだ。

「ちよつと、メモしといてくれ」

飯田はまた、うんざりしたような顔でシナリオに書き込んだ。

それを確かめると、林田は、ふたたび昭雄たちの方に目を戻した。

「うーん、ケイタの方は、やっぱり白のスニーカーか」

「……えっ？ ケイタ？」

啓介が首を傾げ、聞き返した。

「ああ、お前の役名だよ。プロットの段階では、とりあえず『少年』と『少女』としてたけど、それじゃあシナリオは書けないから、主役二人には名前をつけたんだ。二人とも、その方がすんなり役に入れると思つて、本名に近い名前にしといた」

その言葉に、昭雄は、手にした台本を見た。

あかね色の記憶

——と題名の入った表紙をめくると、最初のページに  
配役表があつた。

その一行目と二行目は、こうなっていた——

啓太

谷原啓介

亞希穂

藤沢昭雄

3 父子家庭ふたつ

ベッドから片手を伸ばし、鏡台の上の目覚まし時計をとめた昭雄は、部屋の中が暗いことに一瞬戸惑った。いつもなら窓のカーテンのすき間から朝の光が漏れ

てくるはずだ。もちろん、まだ、日の出時刻が極端に遅い季節でもない。

しかし、すぐに、その理由に思い当たった。今日はいつもより早い時間にアラームをセットしていたのだ。それで、あわててベッドを降りた。

寢室を出た昭雄は、顔を洗いに行く前に子ども部屋をのぞいた。まだ麻由を起こす時間ではないが、寝顔を見に行ったのだ。



友紀枝は麻由を必要以上に甘やかすことなく、三歳くらいからは自分の部屋で一人で寝るようにしつけていた。風呂に入れたあと、パジャマに着替えたりするのもこちらの手を煩わせず、そのあと「おやすみなさい」と自分で部屋に行って眠りにつく。それは、今となつてはありがたいことだったが、昭雄は、麻由のそんなところが、またよけいに不憫にも感じた。

ベッドで寝息を立てる麻由の掛け布団を直してや

り、子どもも部屋を出ようとした時、麻由がちよつと咳き込んだ。それが気になり、振り返ったが、またゆつたりした寢息に戻っていたので、昭雄はそのまま洗面所に向かった。

顔を洗って着替えたあと、昭雄はキッチンに立った。

ブロッコリーを湯がいたり、小さく切った鶏肉を唐揚げしたり、それから、切れ込みを入れたウインナーを「タコさん」の形に揚げたり、リングを切って「ウ

サギさん」の形にむいたり、……最後に、小さなのり巻きおにぎりをふたつにぎった。

今日は、保育園の秋の遠足だという。いつも昼は給食が出るのだが、今日はお弁当がいるのだ。それで、早起きして作ったというわけだった。

これだけお弁当らしいお弁当が作れるのを見てもわかるように、昭雄は、けっして料理が苦手ではない。友紀枝も料理上手だったから、結婚してからはあまり

手を出さなかつたが、独身時代は自炊していた。それ以前、親元で暮らしていた大学生の頃も、病弱だった母の代わりに夕飯を作るようなことがけっこうあった。だから、たいていのことは手際よくできた。

今も、他の父子家庭にくらべればずっと、麻由の栄養を考えた夕食を作っているという自信がある。いや、そんな自信があつたからこそ、義母の申し出をことわって麻由との二人暮らしを決意できたのかもしれないか

った。

作ったものを、かわいいキャラクターのついたお弁当箱に並べ、時計を見ると、予想していた時間よりずっと早く終わっていた。まだ麻由を起こす時刻でもない。

それで昭雄は、たまにはゆっくりと朝刊でも読もうかと思った。

ところが、玄関のドアポストに朝刊が入っていないか

った。

「……まただ」

昭雄はため息をつき、部屋を出て、一階のエントランスまで新聞を取りに行った。

このマンションは、地域の各新聞販売店との申し合わせで、早朝五時半から六時半までの間、エントランスのオートロックが解除されることになっている。新聞配達が朝刊を各部屋まで届けるためだ。ところが、

配達がその時間より遅れることがままある。そんな時、配達員は一階のメールボックスに入れていく。昭雄の  
とっている新聞は、特にこれが多かった。

ともかくも、新聞を持って戻った昭雄は、コーヒー  
を飲みながらそれを読み、時間が来たところで麻由を  
起こして着替えさせ、パンと牛乳と目玉焼きの朝食を  
食べさせた。

そのあと、朝食のかたづけも終え、麻由にはお弁当

を入れた小さなリュックを背負わせ、自らもネクタイと背広を着て部屋を出た。

そして、麻由の手を引いてマンション前まで出たところ、ちょうど、啓介の車がやって来た。

「弁当、どうした？」

昭雄が乗り込むとすぐに、啓介がきいてきた。

「作ったよ」



「お前が？」

「ああ」

「いいな。俺なんて、スーパーで買ってきた冷凍食品とか詰めたただけだ。朝から、亜希穂にさんざん文句言われたよ」

啓介は、そう言いながら、後部座席にちらりと目をやった。

遠足ということ、子どもたちはいつも以上にはし

やいでいる。

と、はしやぎすぎたのか、麻由が何度か咳をした。

「……ん？　風邪か？」

「いや、熱とかはないみたいだから……」

「ここんところ、急に涼しくなってきたから、気をつけ  
た方がいいぞ」

「ああ、病気にでもなられたら、お互い、大変だもん  
な」

昭雄はそう答えながら、弁当のことにしろ、麻由の咳にしろ、今日は話題があつてよかつたなと思つた。

保育園で会つた翌朝から、啓介は昭雄のマンションまで迎えに来るようになった。帰りも、どちらが先に保育園に着いても、待っていて、父娘ふた組で帰ることが習慣になつていた。

歩かなくてもいいのはもちろんありがたかつたが、啓介の方は——多少とはいえ——寄り道になるわけ

で、昭雄は恐縮した。しかし、「せつかく子どもたちが楽しく保育園に行く気になってるんだ。いいじゃないか」と言われ、その好意に甘えている。

ただ、最初の日に感じた気まずさは、いまだにつづいている。車内でどんな会話をしたらいいか困るのだ。

当初は、麻由を入園させて日の浅い昭雄が、保育園のあれこれの「ならわし」を教えてもらうことで会話がつついた。ところが、そんな話題はすぐ底をついて

しまった。

となると、あとは、仕事のことくらいしかなくなる。しかしこれが、かみ合わない。

啓介が勤めるのは、アメリカのIT企業の日本支社。といっても、日本市場に直接製品を出しているわけではなく、日本企業との間のライセンス契約管理が主な業務なのだという。食品関係の商社に勤める昭雄とは、客先も仕事内容——の泥臭さ——も違った。その上、

日本企業にありがちな人間関係にまつわる愚痴をこぼしても、アメリカで就職し、ずっとその会社に勤めて  
いる啓介には、もうひとつ伝わらないところがある。  
お互い、知識や感覚を共有できる要素がないのだ。

困った末に、親の話とかもしてみたが、もともと父  
親の仕事の関係でアメリカに渡り、両親はまだカリフ  
ォルニアに住んでいるという啓介と、ごく普通のサラ  
リーマン家庭に育ち、その上すでに両親と死別してい

る昭雄では、共感できる話題は少ない。

けつきよく、会話は途絶えがちになる。

これまでのお互いの人生の中でのいちばんの接点、高校時代の「あのこと」に触れるのを避けているのだから、しかたないのかもしれない。

今は共学校になっているらしいが、昭雄たちが通っていた頃まで、樟葉学院は男子校としての伝統を守っていた。その学院祭の企画として、クラスで「映画」

を撮った。そこで、昭雄が女装して啓介の相手役を演じた。

言ってみればそれだけのこと。

誰でもする経験ではないだろうが、女子のいない男子校という環境ならあり得ぬことではない。本来なら笑い話にでもできる思い出だろう。

でも、そうはできない雰囲気があった。暗黙の内に、お互いが、その話題をタブーとしているところがある。



それが、この気まずさのなによりも原因なのだろう。

しかも、そんな気まずい空気は、保育園への行き帰りだけでなく、さらにつづくのだ。

「どうか、よろしくお願いします」

遠足ともなれば、園外での子どもたちの安全のために、保育士たちは通常以上の神経や労力を使うのだろ

う。そんな苦労を思い、昭雄と啓介は、いつにも増して丁重に頭を下げ、保育園を出た。

と、そこで啓介が言った。

「駅まで乗ってけよ」

「でも……」

「どうせ、会社へ行く途中なんだから」

車に乗っている間は自分自身も気まずそうに見えるにもかかわらず、啓介はいつもそう誘ってくる。

それを無碍むげにことわることもできず、けっきよく啓介は、いつも駅まで送ってもらおうことになるのだった。しかし、その間は、車内に子どもたちもおらず二人きり。子どもを会話に巻き込んで場をつなぐことすらできなくなってしまう。

保育園の前から幹線道路に出てしばらく走ったところ、今日もまた不自然な沈黙がつづいていることが気になった昭雄は、先刻のお弁当に関する会話を思い

出し、そのつづきを話題にしようと思いたった。

「いつも、夕飯とか、どうしてるんだ？」

「え？　ああ。休みの日とかは俺が作るけど、普通の日は、帰りにファミレスに寄ったり、出前とることが多いな」

「でも、それじゃあ、亜希穂ちゃんの栄養がかたよるだろう」

「ああ、わかってるよ。偏食気味だって、さゆり先生

にもいつも言われてるし。でも、亜希穂にしても、俺の料理よりピザのデリバリーとかの方が喜ぶんだ」

啓介は、どうやら料理が苦手なようだ。

昭雄がそう思っていると、啓介がちよつとため息をつくようにしてつぶけた。

「ベビーシッターが家で作ってくれた料理は、ちゃんと食べるのにな」

「……ん？ ベビーシッター？」

「ああ、うちのマンションにひとり暮らしのおばさんがいてさ、俺のいない時とか、来てもらうんだ。俺は、半年に一度くらいアメリカ本社への出張があって一週間ほど留守にする。それに、ときどき、休みの日に、新技術の展示会とかが重なる時がある。そんな時に亜希穂を見てもらってるんだ。もともとは、離婚前に女房が頼んでたんだけどな」

「……奥さんが？」

昭雄が聞き返すと、啓介は、ちよつと口をとがらすようにして言った。

「あいつも、外に出ることが多かったしな。俺はその頃、亜希穂の面倒なんてあんまりみななかったし」

啓介はそこまで言って口を閉ざした。

やはり、前妻の話はあまりしたくないのだろう。

また、沈黙の時間が始まった。

昭雄には、それが耐えられない気がした。駅までの

道のりはまだある。

かといって、じつは、この間、いちばん気になって  
いる疑問——「どうして娘に亜希穂という名をつけた  
んだ？」ときく覚悟はない。だいいち、唐突すぎるだ  
ろう。

そこで——啓介はいやがるかもしれないが——、今  
の会話につづくもうひとつの疑問を、思い切って突っ  
込んでみた。



「いつ、離婚したんだ？」

「ん？　一年ちよつと前」

「……どうして？」

昭雄が遠慮気味の口調できくと、啓介は、またちよつと口をとがらすようにしてから、こう言った。

「いちばん簡単にひとことで言えば、俺が女房を寝取られた……ってことだ」

「……え？」

「べつの言い方をすれば、あいつが男をつくって逃げた」

その言葉に、昭雄はどう反応したのか困惑した。しかし、ひとつ気になることがあり、それをきいた。

「つまり……、亜希穂ちゃんを、おいて？」

一年以上前ということは、啓介の妻は、三歳の亜希穂をも捨てたことになるわけだ。

「ああ、亜希穂をおいて出て行った」

啓介は、できるだけ普通に話そうと努力しているようだったが、その言い方には、やはり吐き捨てるような口調が混じっていた。

それで、昭雄も返す言葉がなくなり、車内はまた沈黙に包まれた。

そんな状態がしばらくつづいたあと、駅に着く間際になって、啓介が突然、「ただな……」と言った。

「お前も結婚してたんだからわかると思うけど、夫婦

っていうのはそんな単純なものじゃない。あいつが、すべて悪いってわけでもないんだ。……いや、むしろ、悪いのは俺の方だったのかもしれない」

啓介はそう言いながら、昭雄の方をちらりと見た。

しかし、啓介がなにを言いたいのか、けっきよくはわからないうちに車は駅に着いた。

いつものように、どこか居心地悪い空気の中で黙々

と仕事をこなし、時計が午後三時をまわった頃だった。昭雄のデスクの電話が鳴った。

「はい、光洋商事総務部です」

「あの、さくら保育園の竹内と申しますけど、藤沢さん：：：」

「あつ、さゆり先生。僕です。麻由になにか？」

電話の音がちよつと切迫した感じだったので、昭雄はすぐにそうきいた。

「ええ、遠足から帰ったらぐったりして、お熱を計ったら三十九度を超してるもんですから……」

「えっ？ ……わかりました。すぐ迎えに行きます」

電話を切って一瞬考えたが、昭雄はすぐに席を立ち、課長のところに向かった。

「あの、課長、じつは娘が……」

昭雄が事情を説明すると、口をへの字にして聞いていた課長は、上目づかいに昭雄の顔を見上げ、「まあ、

しようがないわな」と言った。

昭雄は、ちらちらとこちらを見ている他の課員たちの目を気にしながら、自分のデスクに戻り、やりかけの仕事が表示されたパソコンのウィンドウを閉じた。

保育園に着くと、麻由は、他の子たちと離され、職員室脇の和室に寝かされていた。

「今はぐっすり寝てますけど、お熱はそうとう高いで

すから、このまま病院に行かれた方がいいと思いますよ」

ずっとそばについてくれたらしい園長先生が言った。

布団の中の麻由は、赤い顔をして、少し荒い寝息を立てていた。おでこに手を当てると、それだけではつきりとわかるほど熱い。

「ありがとうございます。タクシーを待たせてあります



すので、すぐに」

「今度返してくださればいいですから、毛布、使ってください」

「すみません」

そう言いながら、毛布ごと、ぐったりした麻由の体を抱き上げると、そこへ心配顔のさゆり先生が入ってきた。

「あっ、ご迷惑をおかけしました」

「いえ、それはいいんですけど……」

そう言ったあと、さゆり先生は、さらに心配顔で  
いた。

「麻由ちゃんは、はしかの予防接種は受けてますか？」

「あっ……いえ、……さあ？」

「母子手帳にチェックしてあると思いますから、一度  
確認しておいてください。じつは、うさぎ組さんに、  
はしかの子が出たもんですから」

「……はい」

昭雄はどこか煮え切らない感じであらなずいた。

母子手帳が、家のどこにしまっているか、思い出せなかつたからだ。

「おそらくふつうの風邪でしょう。これだけ熱があると食欲はないかもしれませんが、水分だけはしっかりと摂らせてください。脱水症がいちばん心配ですから」

そのままタクシーで寄った近所の医院で、医者にその診察を受けた後、マンションに帰った昭雄は、子ども部屋のベッドに麻由を寝かせた。

時刻はもう夕方になっていたので、昭雄は、すぐに麻由のためにおかゆを作った。

医者のおかゆをほとんど口にできなかった。ただ、いっしょに出したジュースだけはちゃんと飲んでくれたので、昭雄はすこし安心した。

そのあと、飲ませた薬のせいもあるのか、麻由はすぐに寝ついた。

そこで昭雄は、さゆり先生に言われたことを思いだし、母子手帳をさがしてみた。預金通帳など貴重品が入れてある場所から、筆筒や戸棚の引きだし、それに、友紀枝の死後、まだそのままにしてある鏡台やクローゼット内の引き出しなどもさがしたが、どこにも見あたらなかった。

けつきよくさがすのをあきらめた昭雄は、最後にさがした寢室のベッドに座ってため息をついた。

そこで、目覚まし時計のデジタル表示が目にとまっていた。

時刻は、七時ちよつと前。

：：そうか。今ごろ、谷原は、亜希穂ちゃんを迎えに行ってるんだな。今日はもう、あの気づまりな時間を過ぎさなくてもいいわけだ。

昭雄は、そう思っただけでちよつとホツとし、一方で、なにか物足りないような気もした。

そこでまた、時計の時刻表示の横の「F R I」の文字に気がついた。

：：そうだ。今日は金曜日なんだ。

昭雄は、それにもまた、胸をなで下ろした。

麻由はあれだけ熱があるのだ。順調に回復に向かうとしても、通常のウィークデイなら明日は会社を休ま

なければならぬだろう。でも、週末ならその心配もない。

そう考えてから、昭雄はまた、麻由の様子を見に行った。

その後も、食器洗いや洗濯などの家事をかたづけながら、昭雄は子ども部屋をのぞいた。

熱のせいで赤い顔をしているし、ときどき咳き込んだりもするが、麻由は、さほど苦しそうな様子もなく



寝ていた。何度か、おでこに貼った熱冷まし用のシートを取り替えてやりながら、昭雄は、このまま病気が治ってくれることを祈った。

土曜日、麻由の発熱は三十八度台を推移したが、その夜から次第に下がってきた。日曜になると、三十七度くらいになり、食欲も戻った。まだ咳はしていたが、午後にはベッドから出てきて、リビングのテレビでア

ニメなどを見始めた。

この調子なら、明日は会社に行けるかもしれないぞ。  
昭雄はそう思って、またひとつ、安心した。

しかし、ひとつだけ、困ったこともあった。この二日間、外に出ていなかったので、冷蔵庫の中の食材が底をついてきていた。

麻由に留守番させておいて、近くのスーパーにでも行ってこようか？

そう考えていた夕方近く、インターホンのチャイムが鳴った。

出てみると、この間、聞きなじんだ声でした。

「俺、谷原だ。買い物にも行けないんじゃないかと思つて、あれこれ買ってきた」

ドアを開けると、野菜や肉、それに飲料のペットボトルなどが入ったスーパーの袋を両手にぶら下げた谷

原と、亜希穂が入ってきた。

「麻由ちゃん」

リビングにいた麻由を見つけると、亜希穂がすかさず駆け寄った。

パジャマ姿の麻由の方も、うれしそうに立ち上がり、いきなり、じゃれ合いが始まった。

「ありがとう」

啓介がキッチンカウンターの上に置いたスーパーの

袋を見て、昭雄が礼を言うのと、啓介の方はちよつと照れたような顔をしたあと、さらにそれを隠すともいふように、麻由に近寄った。

「どれどれ、麻由ちゃん、元気になったか？」

啓介はそう言つて、麻由の額に手を当てた。

麻由もそれに、うれしそうに笑い返した。

と、そこで、啓介が怪訝けげんな表情になった。

「麻由ちゃん、ちよつとお口あけてごらん」

そして、麻由の口の中をのぞき込んだ啓介は、すぐに昭雄の方を振り返り、強い口調で言った。

「おい、すぐに病院に連れてった方がいいぞ」

「えっ？　でも、熱は下がってきたし……」

「ばか、なんにも知らないんだな。はしかっていうのは、三日目にいったん熱が下がるんだ。で、口の中に白い発疹が出る。見てみろよ」

その言葉に、昭雄も麻由に近寄り、口の中をのぞい

た。

頬の内側といわず舌といわず、そこには、たしかに白い小さな点が散らばっていた。

「うちも去年やったから、たぶん、まちがいないよ。

俺の車ですぐに行こう」

そう言いながら、啓介の方が、麻由を抱き上げていた。

ちよつとおろおろしている昭雄を急かせるようにして車に乗り込んだ啓介は、そこでやつと、助手席の昭雄に麻由を渡した。

いきなり大人たちがバタバタしだしたことで、むしろ、昭雄の腕の中の麻由の方が驚いているようだった。

後部座席に乗り込んだ亜希穂は、麻由のことを心配そうにのぞき込んでいる。

しばらく走ったところでそれに気づいた昭雄は、心



配になってきいた。

「亜希穂ちゃんに、うつらないかな？」

「なに言ってるんだ。うちは去年やったって言っただろ」

それを聞いて、はしかの免疫のことさえ頭がまわらない自分を、昭雄は情けないと思った。

料理の腕はこっちが上だとしても、父子家庭の親として、やはり啓介の方が年季が入っている。

4 はしかのようなもの

「今週いっぱいって……。君なあ、週末に株主総会があるんだぞ。総会屋対策とか、会場設営とか、いろんな手配で少しでも手がほしい時期なんだから」

「ええ、わかってます。でも、熱が下がるだけでも五日はかかるだろうということなんで……」

「誰かに頼むとか、できないのか？」

「は、はい。母親が死んだばかりで不安だろうし、僕がいつしよにいてやりたいんです」

昭雄がそう言うと、相手の声だけでなく、受話器から聞こえていた職場の喧噪までが遠のいた。課長が、送話口を押さえたにちがいない。

しかし、その無音の中で、かすかに、「……ったく！」と吐き捨てる課長の声が漏れ聞こえた。

いや、もしかすると課長は、わざわざ送話口をおさえた上で、昭雄にそれを聞かせたのかもしれない。

昭雄がそう思っていると、ふたたび音が戻り、課長は、感情を感じさせない——つまりは冷たい——声音で言った。

「わかった。いちおう、連絡だけは何度かしろ」

「はい、すみません」

昭雄の詫びに返事することもなく、電話はブツツと切れた。

昭雄は、受話器を持ったまま、やりきれない思いで、しばらく立ちつくしていた。

なんだか、ゆうべから、謝ってばかりいる。

昨夜、病院に着くと、啓介は「ちよつと車で待って

いろ」と言い、その間に受付などをすませて戻ってきた。院内に入ると、そこで啓介は、「あっちの隔離室に入ってきてくれということだ」と告げた。待合室にいる他の子どもたちに感染しないよう、先に病状を伝え、病院の判断を仰いだということらしかった。

麻由を抱きかかえた昭雄は、どうやらそれと気づいて警戒の目を向ける母親たちの前を、詫びるように頭を下げ、足早に通った。

隔離室でしばらく待っていると、診察室に呼ばれた。

医者は、「保育園ではしかが流行ってるのを知ってたなら、なぜ、この前、そう言ってくれなかったんですか。あの時点でガンマグロブリンを注射しておけば、もっと軽くすんだのに」と、親としての無知を責める口調で言った。「小児科医なら、なぜそちらからきいてくれなかったんだ」とも思ったが、昭雄は「すみません」と謝るほかなかった。

ふたたび待合室の母親たちの前を小さくなつて通り過ぎ、車の中で待っていると、啓介が会計を済ませ、薬も受け取つてきてくれた。

啓介はまた、昭雄たちをマンションまで送つてくれ、そこでこう言った。

「買い物とか困るだろうから、明日からまた、保育園の帰りに届けてやるよ」

「ほんとに、すまない」



昭雄は、啓介に何度目かの札を言い、頭を下げた。

電話を終え子ども部屋に戻ると、ベッドの麻由がすがるような眼差しでこちらを見上げてきた。目覚めて、昭雄がいなかったのが不安だったのだらう。

昭雄は、ゆうべからずっとそうしているように、子供用ベッドの脇に座り込み、麻由の顔を見やった。

「……苦しいか？」

昭雄がきくと、麻由は、かすかにうなずいた。

「ちよつと我慢してればすぐよくなるって、先生は言  
つてたから、がんばろうな。治ったらまた、亜希穂ち  
やんといっしよに保育園に行けるから」

昭雄の言葉に、麻由は、力なく笑い返した。

医者が——それに啓介も——予測していたとおり、  
昨夜家に帰った頃から、麻由はまた熱が上がりはじめ、  
今朝方には四十度近い高熱になった。

体中が発疹で赤くなり、いかにも苦しそうに肩で息をして、目覚めている時もその目はうつろだ。

この子は、こんな小さな体で、母親の死に耐え、今また、肉体の苦しみに耐えているんだ。

そんなわが子を見ていると、文字通り自分の身内が痛む気がする。

その「痛み」に、昭雄は、先刻からのやりきれなさと同時に、ある種の「反省」もしていた。

もし友紀枝が生きていたなら、おそらく僕は、こんなふうには感じていないだろう……。

この役割を友紀枝に押しつけ、まるで他人事のように、「なんで予防接種くらい受けさせておかなかつたんだ」と文句のひとつも言っていたにちがいない。

今は、麻由と二人きりだと思うから、その痛みを共有できるのだ。

言葉を替えれば、これまでの自分は、男という立場

にあぐらをかいて、そんな、人の親としてあたりまえの感受性すら放棄してきたわけだ。

そんなふうだから、麻由のちよつとした変化も見逃すし、医者に伝えるべきことも満足に伝えられないのだ。

昭雄は、麻由に対して——それに、死んだ友紀枝に對しても——詫びるような気持ちで、麻由の頭を撫でた。

麻由はそれに安心したように、また浅い眠りに入つたが、昭雄はそのまま、麻由の頭に手を添えつづけた。

昨夜も昭雄は、自らの寝室にも行かずこの部屋で過ごしていた。その前の土日も、掃除や洗濯をする以外の時間は、ほとんどこうしていた。睡眠も、ときどき、麻由のベッドにもたれてうたた寝するくらいだ。麻由が目覚めた時、昭雄がいないと——さっきのように——不安を感じるだろうと思うからだった。

とはいえ、ここにいても、おでこの冷却シートをと  
きどき替えるくらいしかやることはない。

それで、あれこれ考えてしまうことにもなる。

：：：そういえば、こんなふうに神経が敏感になつて  
いた時期が、前にもあつたな。そう、あの時：：。

昭雄は、十三年前、高校二年の秋のことを思い出し  
ていた。

自から忘れようと思ひ、実際、大学を出て、友紀枝

と恋愛し結婚する頃にはすっかり忘れ去っていた記憶だった。が、啓介との再会で、このところ、いやが上にも意識にのぼってくる。

：：あの時、僕は、まわりのあらゆることに敏感になっっていた。

それはもちろん、あの「映画」の撮影期間中、女装などということさせられたせいだ。短いスカートから出た脚や、胸のふくらみは、ふだんとはまるでちが



う緊張を昭雄に強いた。そんな格好で、当然ながらまわりの目が気になった。

：：でも、あれは、なにも僕だけじゃなかったな。

昭雄は、あの撮影期間中、自分の周囲をとりまいていた雰囲気を思い起こしてそう感じた。

：：みんながみんな、やたらと感受性が高まっていた気がする。：：そう、僕を中心にして。

あの「映画」のスタッフやキャストを務めていた同

級生たちは、昭雄に対して、なんだか妙に敏感になっていた。つねに昭雄に気を使い、昭雄が何を思っているかに気をまわし、自分が昭雄の目にどう映っているのかを気にしている：：「監督」の林田はさほどでもなかったが、他の全員がそんな感じだった。言葉は適当でないかもしれないが、なんだか「腫れ物にさわるとでもいう接し方だった。要するに、昭雄は、みんなから異常なくらい「やさしく」されたのだ。

：：あれは、なんだったんだろう？

昭雄は、あの時のことを、初めて客観的に考えてみようとした。

：：けつきよく、みんな、「女の子」に慣れてなかったということかな。

伝統ある男子校。しかも受験校だから、世間ずれした不良というような存在もほとんどいなかった。高校から入ってきた啓介などは多少ちがうとしても、他の

連中は、中学から……つまり思春期のほとんどをそんな環境で過ごしてきたのだ。共学校なら普通にある、同じ年頃の女の子とのふれあいもあまりなかった。いわば、免疫のない状態だった。

そこに、「女の子」が現れた。

……自分で言うのは照れるけど、たしかにあの時の僕は、平均的な女の子より、ずっときれいでかわいかったと思う。

そんな昭雄の女装姿に、みんなが、疑似恋愛といった感情を抱いた。つまりは、そういうことなのだろう。

そして、やはり恋愛というようにすることに免疫のなかった昭雄自身も、そんな雰囲気を感じて、いよいよふつうの感覚ではいられなくなった。

：：けつきよくみんな、それこそ、はしかにかかったみたいなものだったのかもしれないな。

昭雄は、今になって、それがわかった気がした。

現に、あの撮影期間中、昭雄をそんなふう扱った同級生たちも、それが終わると、まるで熱が冷めたようにもとの接し方に戻った。いや、それどころか、これまで以上に冷淡にさえなったのだ。

そこまで考えた昭雄は、苦笑とも嘆息ともつかない息を吐いた。

と、その時、ベッドの麻由が、なんだか身もだえるようにした。さらに、痙攣けいれんでもするようにつづけざま

に肩を揺すった。

熱のせいでひきつけでも起こしたのかと、昭雄は一瞬心配したが、見ると、どうやらそうではないようだった。

閉じたままの両方の目から涙がにじんでいた。

「麻由、苦しいのか？」

昭雄がきくと、麻由はかすかに泣き声を上げた。

昭雄には、それが何か意味のある言葉のような気が

して、麻由に顔を近づけた。

「ん？　何か言いたいのか？」

と、麻由は、泣き声の中でこう繰り返していた。

「……ママ、ママ……」

熱でもうろうとしながら、友紀枝の夢を見ているにちがいがなかった。もしかしたら、あの事故の瞬間を思い出したのかもしれない。

昭雄は、今しがた自分が考えていたことも忘れ、麻



由の小さな手を握った。

「麻由、だいじょうぶ。パパがずっとそばにいるよ」  
それでも麻由は、「ママ、ママ」と泣きつづけた。

昭雄は、また自らの身を切られるような痛みを感じながら、今、麻由が求めているものがけっして自分ではないことに、さらにせつない思いがした。

月曜の午後、麻由の熱はさらに上がり、四十度を超

した。

そこで昭雄は、医者から「発熱で、どうしても苦しがる時だけ入れてください」と渡された座薬を使った。

そのおかげで、熱は多少下がり、麻由はぐったりした様子で眠りに落ちた。

午後七時をまわった頃、前日と同じように、啓介と亜希穂がやってきて食料品を届けてくれた。

「亜希穂ちゃん、ごめんね。麻由はまだお熱が高くて、

眠ってるんだ」

昭雄の言葉に、亜希穂は残念そうに小さな肩を落とした。

夜半になり、座薬の効き目が切れたのか、麻由の熱がまた上昇しはじめた。

そして、ときどき、苦しそうに「ママ、ママ」とつぶやきながら泣いた。

昭雄は、この夜もずっと、子どもも部屋で過ごした。

翌火曜日も、同じように一日が過ぎた。

固形物をほとんど口にしない麻由の肩や腕が、目に見えてやせ細っていく気がして、昭雄はいよいよ祈るような気持ちになった。ただ、ジュースなど水分だけは欲しかったので、その点だけは、いくらか安心できた。

夜、また、スーパーの袋をさげて啓介が訪ねてくれ

た。

「麻由ちゃんは、ふだん聞き分けのいい子なんだし、  
こういう時くらい、なんでもわがままをきいてやれよ」  
啓介はそう言って、つまらなそうにしている亜希穂  
とともに帰って行った。

その夜も麻由の熱は下がる様子を見せず、まだ苦し  
がるので——そして、そのたびに「ママ」の名を呼ぶ  
ことに、昭雄自身が耐えられない気もして——、また

座薬を入れた。

そのおかげで麻由は眠りについたが、ここ数日ろくに睡眠をとっていないこともあり、その頃には昭雄自身がぐったりと疲れていた。

そこで思いつき、寝ている麻由を抱きかかえると、自らの寢室に運んでダブルベッドに寝かせた。添い寝する形なら、自分も多少ゆっくり寝られると思ったのだ。

そして、パジャマに着替え、麻由の隣に身を横たえた。

何時間かは熟睡しただろうか。

深夜、昭雄は、パジャマがぐっしより濡れているのに気づき、目を覚ました。

薬の効果が切れ、また熱が上がりはじめた麻由を抱くように寝ていたせいで、汗をかいたらしい。

そのまま寝ているのは気持ち悪かったし、だいいち、麻由にもよくないだろうと思い、昭雄はベッドを出た。

熱は高かったが、麻由はよく寝ているようだった。

そこで昭雄は、汗を流しにバスルームへ行った。日曜の午後、麻由がいったん元気になった時、急いでシャワーを使って以来、体も洗っていなかった。

とはいえ、この夜も、長く入浴できたわけではない。

麻由が目を覚ますのではないかと心配になり、簡単に



シャワーを浴びただけだった。ただ、バスルームの鏡に映った顔に、あまり濃くはないヒゲがちよろちよろと生えていたので、手早く剃った。

それに、バスローブを着たところでどうしても飲みたくなり、冷蔵庫からビールを一缶出した。もともとそんなに飲める質たちではないのだが、営業マン時代の接待でほとんど毎晩飲んでいたこともあり、ときどき欲しくなる。特に、妻が死んだ当初は寝酒が増えた。

ビールを持って寝室に戻ると、スモールランプの明かりの中で、麻由はまだぐっすりと寝ていた。

それで昭雄は、鏡台の下からスツールを引っ張り出し、麻由の寝顔を見ながらビールを飲んだ。未だ寝不足の体に、アルコールが、いつも以上にまわるのがわかった。

中缶一個を空け、それを鏡台の上に置いたところで、鏡に映った自分の顔が目に入った。

その時、なぜそんな発想が出てきたのか、自分でもよくわからない。

基本的には看病疲れのせいだろうし、そこに酒が重なったせいだろう。もしかしたら、麻由の熱にあてられたということかもしれない。

鏡の中の顔に、昭雄は、こんなことを思った。

：：今でも、化粧したら、あの頃と同じようになるんだらうか？

この二・三日、暇をもてあまし、何度も高校時代のことを思い出した影響も、まちがいなくあった。

もう一度鏡に見入ったところで、昭雄はいったん、そんな自分に苦笑した。

：：なにを馬鹿なこと、考えてるんだ。

しかし、そう思いながらも、鏡台の上についた灯りのスイッチを入れていた。

明るくなった鏡の中で、ヒゲを剃ったばかりの肌が

つるんとした感じに見えた。同年代の男にくらべ、その肌は、ずっと白くてキメ細かい気がする。酒のせい  
で、目のまわりが多少ピンク色になってもいた。

目を落とすと、白いバスローブの肩がすんと落ちて、襟の間からのぞく首から鎖骨あたりにも贅肉は——いや、筋肉すらも——ついていない。

その姿は、どこか中性的に見えた。少なくとも、三十歳寸前の男には見えなかった。

そこで昭雄は、もう一度ベッドの麻由を見やった。

鏡台の照明のせいでさつきよりはつきりと見える麻由の顔には、まだ一面、赤い発疹が広がっているが、息づかいはさほど苦しそうでもない。いよいよ回復期に入ったということだろうか、この二日間で最も落ち着いて眠っているように見えた。

どうやらしばらくは、起きそうもないな。

そう思った昭雄は、体ごと鏡台の方に向きを変え、

その引き出しをあけた。

友紀枝はメイクにやたら時間をかけるようなタイプではなかったが、買い物に出る時なども化粧していた。だから、必要なものはひととおり揃っているようだった。

高校時代のあの時使ったものとは容器もブランドも違っていたが、表示を見れば、なにに使うものなのか、だいたいの見当はついた。脇の引き出しには――あの

時、恭子先生が自分のものを貸してくれた——ビューラーや、大小のブラシの類も入っていた。

昭雄は鏡越しに、もう一度麻由の様子を確かめた。

麻由は深い寝息を立てている。

その手前、鏡台の上の目覚まし時計は、午前四時半過ぎを示していた。

今、寝てしまったら、午前中いっぱい寝ていそうだし……。



昭雄は、誰に言うのでもないそんな言い訳を心の中  
でつぶやきながら、メイクベースらしいチューブを手  
にとっていた。

ふたを開け、指の上に出してみる。

どのくらいの量を出したらいいのか見当がつかなか  
ったのだが、それにもかかわらず、その指先を顔の近  
くまで持っていくと、手がごく自然に動き、おでこや  
鼻など数カ所につけ、そのあと、顔全体にのばしてい

た。

頭では忘れているのに手が覚えている。そんな感じだ。

あの撮影期間中、恭子先生に何度か手ほどきを受けた時の印象が強く、その記憶が感覚の深いところに刻みつけられているのかもしれない。

次に昭雄は、ファンデーションの容器をとった。

同じように顔につけると、あの頃ほどには薄くのび

ない気がしたが、心持ち多めに塗ることでトーンの揃ったのっぺりしたベースができあがった。

それから、アイシャドーのパレットを開き、スポンジのついた小筆で、あの時と同じピンクとグリーンを入れてみた。

やっているうちに、あの時の恭子先生の言葉がよみがえってきた。

……次はマスカラね。まずは、ビューラーでまつげ

をカーンするの。

：：根元の方から先に向かって、何回かに分けてプレスすれば、くるりと上向きになるでしょ。藤沢君、まつげ長いから、それだけでもずいぶんかわいくなるわね。

恭子先生の含み笑うような声音までふくめて、昭雄は、その内容をかなり明確に思い出していた。

：：せつかくシャドーを入れたまぶたを汚さないよ

うに、マスカラは慎重にね。手首を回すようにすると  
うまくいくわ。

昭雄は、そんな言葉に導かれるように作業をつづけ  
た。

アイメイクはそれなりにうまくいった気がしたが、  
眉だけはちよつと困った。高校時代にくらべ、明らか  
に濃く、かつ太くなっていたのだ。恭子先生に教えら  
れたようにブロウペンシルで輪郭をとつても、その印

象を変えることは無理なようだった。

そのあと、チークを入れ、軽くぼかした。

最後に口紅を塗ると、あの頃同様、顔がいつぺんに華やいだ印象になった。

もちろん、あの頃のような「可憐な少女」という感じではなかったが、鏡の中にあるのは明らかに「女顔」だ。しかも、あの「少女」が、女として成長した顔なのだ。

昭雄はそれに驚き、一方でどこか納得もし、さらに鏡に見入った。

しかし、このままではやはり、ヘアスタイルが不釣り合いだ。あの頃よりさらにサイドなどを刈り上げたサラリーマンふうの髪は、そのメイクを奇妙なものに見せていた。

そこで昭雄は、ちよつと考えてからスツールを立った。

友紀枝は、ずっとミドルショートの髪型だったが、友人の結婚披露宴などに出掛ける時、よくロングヘアのウィッグを使っていた。それを思い出したのだ。

クローゼットを開けると、服の掛かった上の棚に円筒形のケースが見えた。ベッドの上に下ろし、筒状のふたを取ると、思ったとおり、中の台にウィッグがかぶされていた。

それを取り上げて鏡台のところまで戻った昭雄は、



内側を片手で支えるようにしながら、軽くブラシをか  
けた。ちようど、最初に女装させられた時、恭子先生  
がやっていたように。

ブラシを置くと、両手で持って頭の後ろにまわし、  
かぶってみた。

そのウィッグは、高校時代の黒のストレートボブと  
はちがい、多少茶髪で全体にゆるいウェーブがかかっ  
ていたが、長さは背中の中程までである。

鏡を見ながら位置を決め、もう一度ブラッシングすると、その動きとともにバスローブの肩で、ツヤのある栗毛色がバウンドした。

そのヘアスタイルのせいもあり、鏡の中の顔は、やはりあの時の「少女」よりずっと大人びた印象だった。とはいえ、メイクともなじみ、実年齢にくらべれば五歳くらいは若く見える。二十代中盤の女性という感じだ。

ところが今度は、その髪型やメイクとバスローブがちぐはぐな気がした。

どうせここまでやったんだから、最後までやってみようか……？

昭雄はそう思っていた。

それで、もう一度、麻由がすっかり寝入っているのを確認した上で、またクローゼットの前に立ち、中に造りつけられたチェストの引き出しを開けた。友紀枝

とは同じ寝室、同じクローゼットを使っていたのだし、  
つい先日、母子手帳を探した時の記憶もあり、どこに  
ながあるかはだいたいわかっていた。

昭雄は、バスローブを脱ぎ、引き出しから取り出し  
たブラジャーに腕を通した。

ちよつと苦勞しながら——でもやはり、あの頃の感  
覚を手が覚えていたようで、さほど手間どらずに——  
背中のホックをとめた。

と、カップの位置がちよつと上過ぎる気がした。友紀枝とは五センチほど身長差があつたし、スリムとはいえ、さすがに高校時代より肩や胸板が厚くなつてい  
るのだろう。それで、ストラップの前についたプラス  
チックの留め具を動かし、長さを調節した。

カップの中になにを詰めようか迷つたが、同じ引き出しに使い古しのパンストが入っていたので、二足ずつ丸めて、中に押し込んだ。

引き出しには、ブラとそろいのショーツもあった。

昭雄は、ちよつと迷って、また麻由の方を気にしながらも、トランクスを脱ぎそれに履き替えた。

その上からふたたびバスローブを羽織り、上に着るものを物色した。

あの時のことを思い出すせいか、どうしてもセータ―類を探していた。

しかし、友紀枝が亡くなったのが夏だったこともあ

り、ハンガーかけや引き出しの中は夏物がほとんどだ。ふとクローゼットの隅に目をやると、そこに置かれたプラスチック行李の中にニットの衣類が見えた。昭雄はそれを引きだし、その中から、あの時と同じような——色は白でなくグレーだったが——オフタートルのニットを探し当てた。

ところが、それを両手で持って吊してみると、昭雄が予想していたよりずっと裾が長い。どうやら、セー

ターでなくワンピースのようだ。

：：：そういえば、こんなのを友紀枝が着てたのを見たことがあるな。

そう思いながらちよつと迷ったが、昭雄はそのワンピースを頭からかぶった。

腕を通すと、肩まわりが多少きつい気がした。しかし、ニット生地がのび、着心地が悪いというほどではない。あの時と同じように「胸」に引つかかった生地



をつかんで、あの時よりずっと長い裾をのばした。

裾の長さはひざ上十五センチくらいだろうか。友紀  
枝が着ていた時は膝小僧が出るくらいだったから、や  
はり、その分、昭雄の方が体が大きいのだろう。それ  
に、濃くはないものの、スカートから伸びた脚に多少  
すね毛があるのも気になった。

クローゼットの中の姿見を見ながら、まだ襟の中に  
入ったままのウィッグの髪を両手でまとめ、後ろに跳

ね上げる。茶色の髪の毛で包まれた首が、オフタートルの襟のせいもあり、実際より細く見えた。

ただ、そんな体の線が出る服では、どうしてもずんどう気味に見える。

：：そうか。友紀枝がこの服を着ていた時は、たしか茶色のベルトをしてたよな。

そう思い、ベルトの入っている引き出しを探すと、それらしい太めの革ベルトがあつた。それを巻いて、

ちよつときつめに絞めてみた。

と、鏡の中のシルエットにウエストのくびれができ  
た。そこからヒップへとつづくカーブは、女としては  
ポリュームに欠けるのかもしれないが、それが逆に、  
若いスリムさにも見えた。

そこで昭雄は、その姿をもつとはつきり見たいと思  
った。

天井のスモールランプと反対側の壁際に置かれた鏡

台の照明では――逆光になることもあり――、クロージェットのの中の鏡に映る姿は、デイトールがよくわからない。

昭雄は、またちらりと麻由の寝顔を確かめてから、ドア脇のスイッチをオンした。

部屋の灯りがつき、ふたたび姿見の前に立つと、そこには、ちよつと不安そうな、でも、魅力的な「女性」が映っていた。

小作りな顔を際立たせるようにゆったりと波打つ栗毛色の髪。ぱっちりした目をさらに大きく見せているカールしたまつげ。もともと童顔ぽい頬からあごの線を、さらにキュートなものに変えているチークや口紅。胸のふたつのふくらみを実際よりやわらかく見せるグレーのニット。髪の色ともマッチした茶色で、ウエストの細さを強調する革ベルト。そして、そのワンピースの裾からのびた細身の脚。

太すぎる眉や、ちよろちよろ生えたすね毛は気になつたが、全体としては、先刻鏡台の鏡で見たのと同様、二十代中盤の女性に見えた。しかも、美人の……。

昭雄はいつしかそれに夢中になり、体を左右にまわすようにして、さまざまな角度から、姿見の中の自分の姿態を確かめていた。

と、その時だった。

背後に気配を感じた。

昭雄は、反射的に振り向いていた。

：：あ！

麻由だった。ベッドの上で半身を起こした麻由が、ぽかんとした顔をこちらに向けている。

その視線にうろたえ、昭雄は目を泳がせた。

一瞬、このまま、部屋から逃げ出したいと思った。

しかし、こんな経緯で置き去りにされれば、病気の麻由はさらに不安になるだろう。

そう思った昭雄は、幼い娘の視線の前で立ちすくむとでもいう状態になっていた。

と、まだ熱っぽい声で、麻由が言った。

「……ママ」

「……えっ？」

昭雄が見返すと、麻由はさらに首を傾げるような顔でこちらを見つづけた。

それに対して、昭雄はおろおろしながらも、頭の中



で言い訳を考えていた。

「あ、あのさあ……」

ところが、昭雄がそう言いかけたところで、麻由が激しく咳き込んだ。久しぶりに上体を起こしたのがしんどかったにちがいない。

その姿を見て、昭雄は反射的にベッドの脇に駆け寄っていた。

そこにひざまずき、麻由の背中をさすってやると、

ずくに咳はおさまった。

「ねんね、してなさい」

昭雄はそう言いながら、もう一方の手を肩に添えて、麻由の体をそつと寝かせた。

と、そこで、その手を、麻由の小さな手が握ってき  
た。

横になった麻由は、昭雄の顔を間近から見上げてい  
た。

その見つめてくる視線に、昭雄はまたうろたえた。

今、麻由の目には、ウエーブのかかった栗毛色の髪と、メイクした顔が見えているのだ。

そこでまた、麻由が言った。

「……ママ？」

その問いかけるような語尾に、昭雄は頭をめぐらせた。

もしかしたら、熱に朦朧もうろうとした幼い娘は、なにか勘

違いしているのかもしれない。

そう思った昭雄は、麻由の視線にゆっくりとうなずいていた。

おそらく麻由は、これを、夢の中の出来事だとも思っているのだろう。

死んだ母親を思い出させてしまうのは忍びない気もしたが、一方で、そう思わせておいた方がいいだろうとも、昭雄は感じた。

すると麻由は、昭雄の手をさらに強く握り、ベッドの上で体をずらして、その顔を昭雄の方に寄せてきた。ニットの「胸のふくらみ」あたりが、ちようどその位置にあった。麻由は、そこに甘えるように鼻先をこすりつけ、目を閉じた。

そして、そのまま静かな寝息を立て始めた。

やっぱり麻由は、夢だと思ったのだろう。

昭雄は、「乳房」の間に麻由の息づかいを感じなが

ら、そう納得した。

麻由が確実に寝ついたのを確かめたところで、昭雄は、着ているものをすべて脱ぎ、ふたたびシャワーを浴びた。石けんで顔を洗っただけでは Mascara がとれず——順番は逆になったが——、鏡台の中からクレンジングオイルを探し、それも落としました。

ふだんの男物に着替えたところで、昭雄は、ぐっす

り寝入っている麻由を抱きかかえ、子ども部屋のベッドに移した。

さっきのことを「夢の中の出来事」だと思わせておくためにも、その方がいいと考えたのだ。

その頃には、窓の外が明るくなりかけていた。

もう一度寝ようかとも思ったが、昭雄は、この間溜まっていた洗濯や掃除をし、そのあと、新聞——今朝はちゃんとドアポストに入っていた——を読んで、そ

の朝を過ごした。

その間、麻由は、ずっと寝入ったままだった。

時計が八時をまわり、昭雄は、いつものように麻由のためのおかゆを作った。毎食、けっきよくは食べられずに捨ててしまうのだが、ずっと作りつづけているのだ。

そのおかゆをトレイにのせて子ども部屋に入っている



くと、麻由はまだ眠っていた。

おでこに手を当ててみると、若干熱が下がっているような気がした。

と、そのせいか、麻由が目を覚ました。

「あ、おはよ」

多少びくびくしながら、でも、何でもないふうを装い昭雄が言うと、麻由はぼかんとした顔で昭雄を見上げてきた。

「朝ご飯、食べるか？」

その言葉に、麻由は、ちよつと考えるようにした。

「……うん、お腹、すいた」

「そうか」

麻由の返事に、昭雄は思わず笑い返した。日曜の夜以来、麻由が空腹を口にするのは初めてだったからだ。

昭雄は麻由を抱くようにして上体を起こし、ベッドのヘッドボードにもたれさせた。

そして、トレイの上のおかゆをスプーンですくい、熱くないようにそれを吹いて冷ましてから麻由の口元に運んだ。

と、そんな昭雄を見ていた麻由が、首を振った。

「麻由、やっぱり、食べない」

「ん？　こんな赤ちゃんみたいな食べ方、いやか？」

麻由が幼いなりにプライドを傷つけられたのかと思  
い、昭雄はきいた。

と、麻由は、また強く首を振った。

「どうして？ お腹減ったんだろ？」

いつも見せたことのない駄々をこねるようなその表情に首を傾げながら、昭雄は聞き返した。

「麻由、ママに食べさせて欲しい」

「……えっ？」

昭雄は、スプーンを持った手を宙に浮かせたまま、麻由の顔を見つめた。

今朝方……というか、昨夜のことを、麻由は覚えて  
いるのだ。おそらくは、勘違いしたままで。

昭雄は、いろいろな意味で心の痛みを感じながらも、  
なるべくそんな動揺を顔に出さないように気をつけな  
がら、言った。

「麻由、ママがもういないのはわかってるだろ」  
と、麻由は悲しそうな顔でひとつうなずいた。しか  
し、すぐに「でも……」とつぶけた。

昭雄は、麻由が昨夜のことを言い出すにちがいない  
と思い、びくびくした。

と、麻由はこう言った。

「麻由ね、一生懸命、神様にお願いしたの」

「え？ なにを？」

「もう一度、ママに会わせてくださいって」

それはおそらく、熱にうなされて「ママ」と口走っ  
ていた時のことなのだろう。

昭雄は、その言葉をそう理解した。

「そしたら……」

やはり……。

「神様」にお願いしたおかげで友紀枝が生き返った。

麻由は、そう思っているにちがいがなかった。

昭雄は、昨夜の自分のうかつな行為を悔やんでいた。

ところが、麻由がつづけた言葉は、そんな昭雄の想像を超えるものだった。

「そしたら、パパがママになってくれたの」

「えっ……！」

昭雄は、驚きの表情で麻由を見た。

それに対し、麻由は、確認するともいっようなように「ねっ」という感じであらずいてみせた。

昭雄は愕然とした。

麻由は、昨夜の出来事を正確に理解していたのだ。どうやら、四歳児の思考を侮りすぎていたようだ。



たとえ寝起きだったとはいえ、たとえ熱を出していたとはいえ、麻由は死者がよみがえったなどとは思って  
いなかった。

そして……

「また、ママになって食べさせて。じやなきや、麻由、  
食べないもん」

昨夜見た「ママ」が、じつは「パパ」であることを  
わかった上で、その「ママ」に甘えたがっているのだ。

それは一方で、常識にとらわれない四歳児の発想ではあった。

「そ、そんなこと……」

昭雄がうろたえながら「そんなことできない」と言おうとすると、まるで先回りするように麻由が言った。

「だって、ゆうべは、ママになってくれたよ」

「……」

むろん、自分のあんな行為を、四歳の娘に……いや、

誰に対してだって合理的な説明などできるわけがない。

昭雄は、その場に立ちつくした。

と、麻由は口をとがらすような顔で、もう一度主張を繰り返した。

「麻由、ママじやなきや食べないもん」

ふだん駄々をこねたりしない麻由がそんなふうになっていることに、昭雄はさらに動揺した。

「……そ、そんなわがまま言わないで」

「いやっ！ ママになって！」

麻由は、昭雄を見つめ、さらに繰り返した。その眼差しにはこの間の苦しきから救って欲しいという切望が込められている。その口調には、この間の心細さから逃れたいという願いが込められている。

昭雄はまだしばらく立ちつくしていたが、そこで、昨夕、啓介に言われたことを思いだした。

「こういう時くらい、なんでもわがままをきいてやれよ」

昭雄は、まだ多少目を泳がせつつ、麻由に向かってうなずいた。

「わ、わかった。ちよつと、待ってて」  
そして、寢室へと向かった。

*memory 2*

「シーン26、病室、亜希穂の回想……」

林田の声とともに、飯田が手製のカチンコを掲げた。

その後ろでは、倉木が8ミリビデオカメラを構えている。

そうなのだ。林田につられ、みんな、「映画」「映画」と言っているが、実際には「ビデオドラマ」、それも、どこにでもある家庭用カメラで撮っているに過ぎない。フィルムで撮る資金も技術もないのだから、まあ、当然といえば当然だろう。ちなみに、学院祭では視聴覚教室を借り、プロジェクターで上映して映画

館のようにするのだという。

「用ゝ意：：」

林田がさらに声を張り上げた。

：：ふ、けつきよくのところ、林田の「映画ごっこ」  
ってことだよな。

ピンクのパジャマ——これも林田が姉から借りてきたらしい——を着て、ベッドの上に半身を起こした昭雄はそう思った。



「……アクションっ！」

その声で飯田がカチンコを鳴らすと、ベッド脇に立つ「医師」役の井沢と「父」役の荒川が芝居を始めた。

「本当に、そんな手術をしてもいいのですか？」

「ええ、父親の私がお願いしているんです」

「し、しかし……」

「それにこれは、国家の存亡に関わる問題なのです」

「は、はい。大臣からも、内々にそんなお話はありましたが……。それにしても、この手術は、いわば人工的に記憶喪失をつくり出すもの。そんな手術をすれば、お嬢さんの人格そのものが消滅することにもなるのですよ」

「わかっていきます。しかし、この子は、見てはいけな  
いものを見てしまったのです。情報当局には、機密を  
守るために、この子の存在自体を消してしまふべきだ

という者さえいる。記憶が失われるのは、親としてはもちろん忍びない。でも、この子を守るためには、それしか方法がないのです」

荒川がそこまで言ったところで、腕組みして見ていた林田が舌打ちし、「ストップ！」とカメラをとめさせた。

「なんか、感情こもってないんだよなあ。いいか、政府高官である父は、国家権力と家族への愛情との間で

板挟みになった末、苦渋の選択をするんだ。そのリアリティが、まるで出てないじゃないか」

林田の言葉に、荒川は口をとがらせた。

「リアリティだったって、そもそもリアルな話じゃないだろうが。手術で記憶をリセットするなんて、ゲーム機のメモリーでもあるまいし。どうやってリアリティ持てっっていうんだ」

すると、井沢も口をそろえた。

「だいたい、見ただけで命をねらわれるような国家機密ってなんなんだ？ それに、そんなマル秘書類を家に持ち帰って、娘の目に触れるようなところに置いとく政府高官がどこにいるっていうんだ？」

二人がかりで問いつめられ、林田はちよつとたじろぎながらも反論した。

「い、いいか、この映画はラブファンタジーなんだ。

主題は、あくまで啓太と亜希穂のつかの間の恋にある。

この回想シーンは、その悲恋性を際立たせる背景に過ぎない。そういうディテールのリアリティにこだわってたら、とても三十分じゃ収まらないだろう」

「あれ？　今、リアリティって言い出したのは、お前の方だろうか」

荒川に言われ、林田はさらにたじろいだようだったが、けつきよくは強引に——「リアリティ」については棚上げしたまま——先に進めた。

「ま、ともかく、もっと感情を入れて演ってくれよ。  
じゃあ、テーク2、いくぞ……」

林田祥一脚本監督の「映画」、『あかね色の記憶』  
のあらすじは、おおよそこんなふうだ。

「高校生の啓太は、ある日、街で怪しげな男たちに拉  
致されそうになっている少女を助ける。

亜希穂と名のるその少女は、なにかの組織から追わ

れているようだ。

啓太がきいても亜希穂はその秘密を明かさないが、一方で、啓太に『今日一日だけ、恋人としてデートしてほしい』と言いだす。

そんな謎めいた亜希穂に惹かれるところもあり、啓太もそれを承諾する。

二人はその日一日をともに過ごすのが、その行く先々で、謎の男たちが現れ、亜希穂をつけねらう。



男たちから亜希穂を守って街じゆうを逃げるようなおかしなデートをするうち、啓太は本気で亜希穂を好きになっていく。深窓の令嬢として育ったらしい亜希穂もまた、啓太に心惹かれていようだ。

ところが、日が暮れる頃になって、亜希穂は悲しげに、自分はやはり戻らなければいけないと言い出す。

事情を説明しろと迫る啓太に、亜希穂はその秘密を明かす。

亜希穂の父は政府の高官で、国が秘密裏に進めているある計画に関わっている。ひよんなことから、亜希穂はその国家機密を知ってしまう。そのため、病院に監禁され、手術ですべての記憶を消すことを迫られている（ここに、今撮っている回想シーンが挿入されるわけだ）。その恐怖に耐えきれず、亜希穂は病院を抜け出した。

しかし、もしこのまま身を隠していれば、父が窮地

に立たされることになる。それを案じた亜希穂は、自らその手術に臨もうと決意したのだった。

事情を知ってとめる啓太を振り切るように、けっきよく亜希穂は去っていく。

こうして、二人のつかの間の恋は終わりを告げる。

それから数カ月後のある日。

啓太は、街で亜希穂らしい少女を見かける。

しかし、亜希穂は、啓太に気づかず通り過ぎる。

その後ろ姿に、亜希穂の記憶が失われたことを知った啓太は、心の中で誓う。

『君が僕のことを思い出す日まで、僕は君を待ち続けているよ』と。

他愛ないと言えば他愛ない、それこそリアリティに欠けるストーリーだが、林田にしてみれば、精一杯ドラマチツクな設定を考えたのだろう。

昭雄はそう思い——まあ、受験受験で代わり映えし

ない毎日の気晴らしにはなるだろうし——、自分ので  
きる範囲でこの「映画ごっこ」につき合おうという気  
になっていた。

スタッフ・キャストに選ばれた他のクラスメートた  
ちも、同じようなものだろう。

いや、他のメンバーが文句を言いつつもつき合っ  
ているのは、もしかしたら、別の動機もあるのかもしれ  
なかった。

「亜希穂、わかってくれるね。これは、なにより、お前のためなんだから」

荒川が、ベッドに座った昭雄の顔を見つめながら言った。井沢を相手に芝居していた時よりは、ずっと感情がこもっている気がする。

昭雄はそう感じながら、頭の中でシナリオを繰り、自分のセリフをたどった。

「……で、でも、パパ、その手術をすれば、あたしにとって大切な人たち、パパやママのことも、それにお友だちのことも、みんな忘れてしまおうでしょ？」

照れている上に、慣れない言葉づかいで、口がもつれそうだ。

「ああ。でも、お前がすべてを忘れ去れば、今のよう  
に監視されることもなくなる。また自由に暮らせるん  
だよ」

「だけど、すべての思い出が消えてしまったら、亜希穂はもう、亜希穂じゃなくなってしまうわ」

「いや、たとえば、そうなったとしても、お前が私の娘であることに変わりはない。私はいつでも、お前のことを愛しているよ」

シナリオはそこで――

亜希穂

「……」



——となっていたはずだ。それで昭雄は口をつぐみ、ベッドの上に目を伏せた。ウィツグの髪が首筋を滑ってくすぐったい。そして、それ以上に、この馬鹿馬鹿しさに笑い出しそうになるのだが、それをこらえて、深刻な表情をつくる。

「亜希穂、たしかに私はひどい父親だと思う。私のことをいくら責めてもかまわない。しかし、お前のため

にはこうするしかないのだよ。頼む。わかってくれ」  
荒川のそのセリフのあと、昭雄は間をとってから顔を上げた。

「せめて……。せめて、今の亜希穂のまま、もう一度、外の世界に出させて。これまでの記憶がなくなるのは、今のあたしにとって死ぬのとおんなじよ。その前に、もう一度だけ、街を歩いてみたいの」

「いや、それはできない。記憶を消すまで、お前を外

部の人間と接触させないというのが、お前を助けるための条件なのだから」

「今の亜希穂として、思い出をつくっておきたいの」  
「し、しかし、それは意味のないことだろう。お前は生まれ変わるのだから」

「お願い。この世界に、亜希穂が……あたしという女の子が、生きた証しを残したいの」

そのセリフに、昭雄はまた、背筋をくすぐられるよ

うなむずがゆさを感じた。

「……だめだ。許してくれ」

昭雄から目をそらした荒川が、いかにも苦しげにつぶやいた。

そこで――

「カーツト！」

林田の声が飛んだ。その声音は、けっして納得してはいない感じだ。

「うーん、医者と父親はだいたいぶよくなつた気がするが、  
亜希穂のセリフがなあ……。女言葉がわざとらしいと  
いうか……」

「……しようがないだろうが。男なんだから」

白いパイプベッドの上で、昭雄はぶつぶつ反論した。  
しかし、林田はそれを無視し、白い布が張られた医  
務用ついたての向こうの人物を振り返った。

「恭子先生、どう思いますか？」

恭子先生は、そこにある教師用のスチールデスクにもたれ、面白そうに見ていた。その隣には、この部屋の主である養護教諭の小塚美智子先生もいる。この病院のシーンは、保健室を借りて撮影されているのだ。

林田にきかれた恭子先生は、ちよつと考えるようにしてから、林田にでなく、昭雄の方を向いて答えた。

「藤沢君、無理して裏声出そうとしてるでしょ。だから、よけいに不自然になるのよ。地声でもいいから、

ちよつと高めの声で、あとはしゃべり方や表情を女の子っぽくすれば、藤沢君なら、ちゃんと女の子に見えると思うけどな」

林田もそれにうなずき、昭雄の方に向き直った。

「……ってことだな。これから先、藤沢には何シーンも亜希穂を演ってもらわなきゃならないんだ。このシーンには、亜希穂のセリフ回しが固まるまでやっところ」

その言葉に、昭雄をはじめ全員がちよつとうんざり

した顔をした。そこで、恭子先生がつけ加えた。

「妙に演技しようとするんじゃないやなくて、まず、自分は女の子なんだって感情移入することが大切なんじゃないかな」

昭雄は、さつきからの恭子先生の言葉にすでにかなり傷ついていたのだが、この状況では、とりあえず照れ笑いするしかなかった。

「よし、じゃあ、もう一度最初からいってみよう。：



：シーン26、テーク4。用ゝ意……アクションっ！」  
カチンコの音とともに、井沢が、また最初のセリフ  
からはじめた。

「本当に、そんな手術をしてしまってもいいのです  
か？」

……。

けつきよくそのあとも、林田はなかなか「オーケー」

を出さず、撮影はすでに10テークを越えていた。

その間、林田の「ダメだし」は、次第に昭雄ひとりに集中するようになっていった。

そしてその頃には、他のメンバーたちが、いらついた様子を見せ始めた。

最初のころには多少なりともあつた面白がっているような雰囲気も消え、粘る林田に対して、言葉や動きがぞんざいになってきている。同じことを何度もやら

され、飽きてきているのはたしかだった。

どういうわけか、みんな、昭雄に対してはそんな表情を隠そうとするのだが、だからこそよけいに、昭雄は責任のようなものを感じはじめていた。

僕さえうまくやれば、すぐ終われるんだよな。

12 テーク目の「NG」を出す時、林田までがどこか投げやりな感じになったのを見て、昭雄は考え込んだ。

これ以上、照れてても長引くばかりだし……。

そこで、さつき恭子先生に言われたことを思い出した。

感情移入……か。

一度、それを、本気で考えてみようかと思った。

でも、どうしたら……？

頭をめぐらせた末、昭雄はまず、今、自分の体が感じている感覚を手がかりにしようとした。

うつむくと、ストレートロングのウィッグの髪が頬

を撫でた。

その髪が滑り落ちるピンクのパジャマには、胸の上あたりには切替えがあり、そこにレースの飾りがあしらってある。その下では、ふたつの丸いふくらみがパジャマの生地を持ち上げていた。意識をそこに向けると、パジャマの下で両肩にかかったブラジャーのストラップが、その「胸」の重みで張っているのも感じることもできた。

そう、僕は……あたしは、長い髪と胸のふくらみを  
持つ……女の子。

そして次に、頭の中でそんな自分の「これまで」を  
思い描いてみた。

ぼ……あたしは、パパやママの愛情を一身に受けて  
素直に育った十六歳の……亜希穂。

ミッションスクール系の幼稚園に入り、それからず  
っと女子校に通っている。

お友だちとはアイドルやロックスターの話もするけれど、クラシックも好きで、ピアノかバイオリンを習っている。

毎年、誕生日には、ママに新しいドレスを買ってもらい、お友だちを招いてパーティを開く。……。

昭雄にできる発想はせいぜいその程度だったが、それでも、そんな「楽しかった日々」が頭に浮かんだ。

ちようど思考がそこまでたどり着いた時、13テーク

目の「用意、アクション！」の聲がかかった。

井沢と荒川の芝居が始まり、昭雄は、その二人の会話を、これまでとちがい「亜希穂」として聞こうとした。

：：：そう、：：：あたしは、そんなふうに愛されて育った女の子。

「：：：。この手術は、いわば人工的に記憶喪失をつくり出すもの。そんな手術をすれば、お嬢さんの人格そ



のものが消滅することにもなるのですよ」

：：でも、今、あたしのそんな「楽しかった日々」  
が、奪われようとしているんだ：：わ。

そう思うと、悲しい気分になった。：：とか、  
自分の——「少女」としての——肉体が、得体の知れ  
ない恐怖の前におののくような感覚があつた。

そんな感覚の中で二人の芝居が過ぎ、荒川がこちら  
を向いた。

「亜希穂、わかってくれるね。これは、なにより、お前のためなんだから」

「でも、パパ、その手術をすれば、あたしにとって大切な人たち、パパやママのことも、それにお友だちのことも、みんな忘れてしまおうんでしょ？」

荒川のセリフに反応して、言葉が自然に口をついて出た。

「……。これまでの記憶がなくなるのは、今のあたし

にとって死ぬのとおんなじよ。その前に、もう一度だけ、街を歩いてみたいの」

これまでのようにシナリオの文字面をなぞるのではなく、自分の気持ちとして……いや、自分の「少女」の体から発する声として言っていた。

「……。お願い。この世界に、亜希穂が……あたしという女の子が、生きた証しを残したいの」

そんなセリフも照れずに言えた。それどころか、「女

の子」としての体が震え、涙がこみ上げそうになった。

「……だめだ。許してくれ」

最後の荒川のセリフがあり、そこで、これまでより長い間が置かれた。

そして、林田の高揚した声が響いた。

「カーツト！ オーケー！」

一瞬の間のあと、恭子先生たちをふくめ、そこにいた全員が拍手した。

「それだよ！　それでいいんだ！」

林田が、さらに興奮した声でつぶけた。

「すごい。今、ほんとに女の子だった」

恭子先生もそう言った。

その言葉に、まわりを見まわすと、全員が自分の方に笑顔を向けてうなずいていた。

「うん。今の感じ、忘れないでくれよ」

林田がそうつけ加えるのを、昭雄はまだ茫然と聞い

ていた。今しがた自分の中に生まれた、ある感覚が、まだ抜けきらず、体を支配している感じだった。

いや、昭雄に限らず、その場にいる全員が、今の余韻に浸るとでもいうような高揚した沈黙がしばらくつづいた。

そんな中、いち早く我に返った様子の飯田が時計を見た。

「……予定よりだいぶ時間食っちゃったな。次の撮影

に移らないと」

と、林田もやつと興奮から冷めたように聞き返した。

「あと、校内で撮れるのは、亜希穂が病院を抜け出すシーンだよな」

「ああ」

「もうちよつとあとにしないか。他の生徒が帰って、野次馬がいなくなってからの方がいいだろう」

そのシーンは、校舎の正面玄関を病院のエントラン

スに見立てて撮ることになっていった。今やれば、たしかに、下校する生徒たちが寄ってきそうだ。昭雄にしても、それは避けたい。

そう思っていると、林田がつづけた。

「藤沢がここまで女の子になりきれぬなら、映画の完成まで、亜希穂の正体は秘密にしときたいだろ」

その言葉に、忘れていた照れが戻り、昭雄がそちらを見ると、飯田も「そうだな」とうなずいた。



「じゃあ、その前に、ロケのリハーサルやっとくか？」  
飯田の口調は、なんだか、これまでよりずっと積極的な気がする。いや、飯田だけでなく、先刻までばらばらになりがちだった全員の意思が、今は、同じ方向を向いているという感じがあった。

「それにしても、ここをかたづけなきゃな」

飯田はそう言って、他のスタッフやキャストに声をかけた。

「みんな、頼む」

そのままではいかにも保健室だとわかるということ  
で、撮影は、ベッドの位置を窓際に移動して行われて  
いた。それを元に戻すということだ。

そう気づいた昭雄はあわててベッドを降り、集まっ  
てきたメンバーに加わろうとした。

と、音声担当の山波が「亜希穂はいいよ。僕らでや  
るから」と言った。

「……え？」

そう言われたことにも、そして「亜希穂」と呼ばれたことにも驚いていると、他のメンバーたちもそれが当然という感じで、昭雄を残してベッドをとりまいた。

「……せーのッ！」

それを見ながら、昭雄はなんだか手持ちぶさたで——それに、ベッドを移動する邪魔にもなるようだったので——、なんとなく恭子先生たちの方に近づいた。

と、恭子先生がいたずらっぽいな笑顔で声をかけてきた。

「力仕事は、男の子たちに任せておけばいいのよ」  
そして、隣の小塚先生の方を向いて言った。

「ね、ほんとにかわいいでしょ」

中年男性がほとんどの教師陣の中で若い女性教師は二人だけなので、恭子先生と小塚先生はふだんから仲がよい。そんな気安さもあつてのことだろう。小塚先

生も、ピンクのパジャマ姿で立つ昭雄をながめて、ため息まじりにこう言った。

「ほんと。私たち、いくら若いつもりでも、やっぱり十代の子にはかなわないわね。ジェラシー感じちゃうわ」

それは、昭雄をもふくめた女どうしの気安さともとれた。

パジャマのレース飾りが、妙に恥ずかしかった。

「ふーん、藤沢君、器用ね。マスカラって、女の子でも初めの頃はうまくできないものなのよ」

また理科準備室でセーターとミニスカートに着替え  
たあと、鏡に向かってみると、恭子先生が感心したよ  
うに言った。

前のシーンは「病室」だったこともあり、アイメイ  
クなどは控えめにしていた。あとで撮るシーンは、街

のシーンとつながるわけだから、もう少し手を入れなければならぬ。恭子先生から「ちょうどいい機会だから、自分でやってみて」と言われ、昭雄自身がメイク直ししていたのだ。

「うん、これなら、校外でロケする時も、一人でできるわね」

「：：：」

マスカラを塗り終えた顔を鏡で確かめていた昭雄

は、弾んだ感じのその言葉に口をとがらせた。

べつに、やりたくてやってるわけじゃないのに……。  
と、恭子先生は、またいたずらっぽい顔で、そんな  
昭雄の思いとは正反対のことを言った。

「……ふふ、もしかして藤沢君、じつはこういうこと、  
好きだったりして」

「そ、そんなあ……。変なこと、言わないでください  
よ」



「だけど、上達早いし、ずいぶん真剣な顔してやっつたから」

「そ、そりや……。林田のやつ、本気で街なかで撮るつもりらしいし……。人から変な目で見られたくないし……。まあ、無理だと思うけど、できるだけ男だつてバレない方がいいかと思つて……」

ぶつぶつ言い訳を連ねる昭雄にっこり微笑んだ恭子先生は、うなずきながら視線を下に向けた。

「なるほどね。それで、すね毛も剃っちゃったわけね」  
その視線に、昭雄は思わず、ミニスカートから出た  
腿のあたりを手で覆っていた。

「脚がこの前以上にきれいになってたから、藤沢君つ  
てもしかしたら、本心では女の子になりたいとか思っ  
てる子なのかなって……」

「えっ!? 冗談はやめてください。だって、この前、  
そうした方がいって言ったのは、先生じゃないです

か」

「うん、それはそうだけど、まさか、ほんとにやるとは思わなかったし」

「そ、そんな……」

昭雄は、なかば拍子抜けし、なかば腹を立てて、さらに口をとがらせた。

昨夜、入浴した時、父や母に気づかれるのではないかとびくびくしながら脚にシェーバーを走らせた、あ

のみじめな気持ちはいったいなんだったんだ。太腿の裏側には、ちよつとした切り傷だつてあるのだ。

と、恭子先生は、そんな昭雄をなだめるとでもいうように言った。

「ごめん。そんな怒らないで。藤沢君があんまりかわいいから、ついからかいたくなつちやうのよ」

その言葉に昭雄がさらに不機嫌な顔をする、と、恭子先生は、「どつちにしても、安心していいわよ」とつ

づけた。

「そこまでやれば、街なかに出ても、藤沢君のこと、男だなんて疑う人、たぶん一人もいないと思うわ。特に、さつきみたいなのの子っぽさが加われば、もう完璧よ」

それはたぶん、先刻の「演技」のことを言っているのだろう。

そんなふうにはめられたって、うれしくない。

昭雄が思っていると、恭子先生は、さらに話を発展させた。

「あれなら、疑われるどころか、きっと、男の子が、次から次へと声かけてくるわね」

「また、そんな：：、そんなこと、あるわけないじゃないですか」

「そう？　現に、撮影に関わってる他の子たち、みんな、藤沢君にまいっちゃってるみたいよ。ここへ来る

までの間だって、みんなして、藤沢君のこと、ぐるつととりまいて」

「そ、それは、林田が、他の生徒から僕の姿を隠せつて言ったからで……」

「そうかしら？ どう見ても、それだけじゃないみた  
いだったわよ。みんな、まるで、大切なお姫様を守つ  
てるって感じだったもん」

「やめてくださいよ。また、そんな変なこと……」

昭雄が言いかけたところで、ドアをノックする音がした。

「……準備、できましたか？」

飯田の声だ。どうやら、他にも数人いるようだ。

「ほら、ナイトたちのお出迎えよ、お姫様」

恭子先生は、さらに、そうからかってきた。

迎えに来た五人のクラスメイトたちに、また取り囲



まれるようにして教室に入りかけた時、いきなり、「くそっ！」という大声が響いた。

驚いてのぞき込むと、机や椅子が後ろに寄せられてできた空間で、なんと、啓介と立花が殴り合っていた。

立花のパンチを左腕でガードした啓介が、右ストリートを繰り出す。それが、みごとに決まったらしく、立花は弾かれたようにのけぞって倒れた。

今度はすかさず、福田が啓介に襲いかかった。啓介

は危うく身をかまし、福田のボディに一発食らわした。それで福田も、腹を押さえてしりもちをついた。

と、そこで、腕組みして見ていた林田が言った。

「……うむ、段取りとしては、まあ、そんな感じだな。

現場では、もっとテンポをあげなきゃいけないだろうが」

どうやら、啓介と「謎の男A・B」役二人で、アクションシーンをリハーサルしていたらしい。

昭雄がそう納得していると、床から立ち上がった立花が不服そうな顔で言った。

「なあ、俺たち、いちおうプロの情報部員かなんかなんだろ。いくら主役だからって、高校生相手に、なんでこんな簡単にやられちゃうんだ？」

「そ、それは……、啓太は、ボクシング部のキャプテンという設定だから……」

「えっ、そうなのか？」

林田の言葉に、むしろ啓介の方が驚いた顔をした。それに目を泳がせた林田は、そこで、昭雄たちが入ってきたのに気づいたようだ。

「あつ、準備できたか？　じゃあ、亜希穂もふくめて、トップシーンからやろうか」

今の——たぶん新たにつけ加えた——人物設定の問題は曖昧にしたまま、林田がそう言った。

すると啓介たちも、その問題にはそれ以上深入りせ

ず、昭雄たちに——というより“昭雄に”——目を向けてきた。

昭雄のそばにいる荒川と井沢は、先刻の撮影で出演分をすべて撮り終えたわけだから、すでに背広や白衣を脱いで着替えている。啓介と立花、福田も、今日のところはリハーサルだけで衣裳は着けていない。

つまり、黒い学生服の集団の中で、役の扮装をしているのは、まだ撮影の残る昭雄だけだった。それも、

白いセーターに赤いチェックのミニスカートなのだ。自然に、全員の視線が昭雄に集中していた。

昭雄は、なんだかそれに耐えきれず、目を伏せた。

それは——この前、初めてこの姿を見られた時のように——、単に女装姿が恥ずかしいというだけの感覚ではなかった。

昭雄に向けられる視線にも、また、昭雄自身の中にも、先刻の撮影の時の雰囲気が残っているせいだろう

か。黒い学生服と白いセーターのちがいを、見かけ以上のものに感じてしまう。なんだか、自分は今、自分より強い、別の生き物たちの集団に囲まれているとでもいうような、妙な緊張感があるのだ。

ことに、ミニスカートから出た腿のあたりにヒリヒリするような感覚を覚え、昭雄は、思わずそこを、ぎゅっと閉じていた。

「よし、じゃあ最初の、歩道橋のシーンからいくぞ」

林田の言葉に、そんな雰囲気が緩み、昭雄はちよつと救われた思いがした。メンバーの多くが、どこかに置いた自分のシナリオを探して、昭雄から視線をそらしたからだった。

それで、昭雄もまた、自分のシナリオを探して目を走らせた。と——

「これだろ」

倉木が、裏表紙に昭雄自身が名前を書いたシナリオ



を差し出した。先刻、入ってきた時に、教卓の上に置いたのを見ていたらしい。

「あ……ありがとう」

受け取りながら礼を言うと、倉木は照れたように顔を赤らめた。

それは、この前、シナリオを綴じていた時とよく似た光景だった。しかし、そこには、微妙なちがいもあった。

礼を言った昭雄の方は、ちよつと首を傾げ、倉木のことを心持ち上目づかいで見るとような仕草をしていた。声も、この前よりどこか細かい感じになった。

倉木の方も、その照れに、この前よりドキリとしたような、それでいてどこかうれしそうな表情が混じつた。

先刻の撮影の時に生まれた感覚が、昭雄と他のメンバーとの関係性を、また少しシフトさせたような気が

した。

全員がシナリオを開くのを待って、前に立った林田が身振りをまじえて話し始めた。

「映画がはじまると、黒の画面に赤文字でメインタイトルが浮かび出す。『あかね色の記憶』。その文字が消え、喧噪とともに画面がフェードインすると、街の俯瞰ふかんだ。そこからカメラがゆっくりとパンしていくと、歩道橋があり、その階段を啓太が登っていく。啓太、

そつちに立ってくれ」

林田はそう言つて、教室の隅の方を指し示した。

その言葉に従つて啓介がそこに立つと、林田がつづけた。

「歩道橋を登りきつたところで、カメラは啓太の視点になる。と、歩道橋の中ほどで、謎の男AとBが、亜希穂の腕をつかんでいる。三人はここ」

林田の示した場所に、昭雄と、そして立花、福田が

立った。

「二人は、両側から亜希穂の腕を抱え込むようにしてくれ」

立花と福田は、どこかおずおずと、昭雄の二の腕あたりに手をかけてきた。

二人の手が触れた瞬間、昭雄の方も、思わず体を固くした。細身のセーターがぴったりと張りついて、体の線を浮き立たせていることもあり、その手の位置が

腋の下や「胸」に近いことが、妙に気になった。

「亜希穂は、それに抵抗して、逃げようとする」

林田に言われ、昭雄は体を左右にねじって、二人の手を振り切ろうとした。それに連れ、立花たちの手の力が強まった。

「そこで、亜希穂のセリフ——」

昭雄は首をひねり、立花に捕まれている右手に持ったシナリオをちらりと見て言った。

「やめてっ！ はなしてっ！」

「次、二人のセリフ——」

「お嬢さん、おとなしく言うことをきいた方が身のた  
めだぜ」

「そうでないと、もっと手荒なことをしなきゃいけな  
くなる」

そう言いながら、福田の方が、さらにがっちりと腕  
を抱え込んできた。なんだか、自分の言った言葉に、

気分を煽られている感じだ。セーターの生地を通して伝わってきたそんな気配に、昭雄は、恐怖感のようなものさえ抱いた。それで、これまで以上に体を揺すつて抵抗していた。

「いやっ！」

それを見て、林田が言った。

「うん、いい感じだ。そこへ啓太が駆けつける——」  
「あんたたち、なにしてる。いやがってるじゃないか」



走り寄った啓介が言った。

「うるせい、坊やには関係ないことだ」

もう林田の指示なしで、芝居が進み始めていた。

「はなしてやれよ」

啓介はそう言うと、立花の腕をとり、ねじ上げた。

立花の手が昭雄の腕から離れると、啓介は、その体を突き飛ばすようにしたあと、すぐさま福田に殴りかかった。

福田の方も、それにひるんだように昭雄の腕から手を離す。

拘束を解かれ、昭雄がちよつと戸惑っていると、また林田の指示が飛んだ。

「そこで亜希穂は、啓太の背後に隠れる——」  
それで、昭雄は、啓介の後ろ側にまわった。

「もつと、すがりつくように——」

さらにそう言われ、昭雄は、啓介の背中に手をかけ、

体を寄せた。背が高い分、その背中は、自分よりずっと大きなものに感じた。

「体勢を立て直した謎の男AとBが迫ってきて、啓太は後ずさる——」

その言葉に後退してきた啓介の背中が、一瞬びくりと震えた。昭雄の「胸」が押しつけられる格好になったからかもしれない。

「そこで、Aの方が殴りかかる。啓太は、すかさずそ

れをガードして、パンチを浴びせる——」

そこから先は、先刻、入ってきた時にやっていたアクションシーンが展開し、啓介が、あつという間に二人を倒した。先刻とちがったのは、その間ずっと昭雄が啓介の背中に寄り添っていたことと、啓介が、そんな昭雄を守るといふように行動したことだ。

「よし。二人が倒れているすきに、啓太は亜希穂の手を引いて逃げる——」

振り返った啓介が、昭雄の手を握り、数歩走った。

そこで、林田が言った。

「オーケー。初めてやったにしては上出来だ。ロケの日までに、もう少し動きを固めよう。実際の歩道橋は横長なんだから、その分、アクションでの前後移動がもっと大きくなる気がするけどな」

林田が話し終わったところで、啓介と昭雄は確認するように一瞬視線を交わした。そしてそこで、手を握

りあったまま聞いていたことに同時に気づき、あわて離した。

思わず、頬がほてった。

その最初のシーンを数回繰り返したあと、リハーサルは次のシーンに移った。

近くの公園に逃げ込んだ啓太と亜希穂は、物陰に隠れて、追っ手をやり過ごす。そこでの会話だ。

すでにロケハンをすませ、場所を決めているという林田によれば、実際には、公園にあるオブジェかなにかを使うらしいが、ここでは、机を積んで、そんな雰囲気を作った。

「シナリオを見ながらでいいから、一度、通して演ってみてくれ」

林田にそう言われ、啓介が、物陰からのぞき込むような格好をした。

「……どうやら、やつら、行ったみたいだ」

啓介が向き直ったところで、昭雄は頭を下げた。

「どうも、ありがとうございます」

先刻の保健室でのシーンとちがいで、その言葉にはまた多少の照れが混じったが、このシーンでは、それがちょうど少女の恥じらいという感じにもなった。

「それにしても、あいつら、何者なんだ？」

「……」



シナリオに書いてあるとおり、昭雄はうなだれたまま、口を閉ざした。

と、ちよつと間をとつた後、啓介がふたたびきいた。

「なんで追われてる？」

「……」

「どこから逃げてきたの？」

「……病院」

「……え？　君、病気なのか？」

それに対して、昭雄は強く首を振った。

「ううん、そういうことじゃあ……」

「じゃあ、なぜ？」

「……」

「いったい、やつらは、君をどうしようっていうんだ？」

「……」

そこで、啓介はため息をついた。

「ふー、大事なことはなんにも教えてくれないんだね」

「……ごめんなさい。話せないの」

「じゃあ、せめて名前くらいはいいだろ。僕は啓太。

君は？」

「亜希穂」

シナリオには、そこで――

お互いの顔を、ふと、見つめ合う二人。

——というト書きがあつた。

それで昭雄は視線を上げ、啓介の顔を見た。

身長之差もあつて、どうしても見上げる感じになる。

それに、ふだん、さほど親しいわけでもない。だから、啓介と真正面から目を合わせたのは、もしかしたらこれが初めてだったかもしれない。

その顔立ちに、昭雄はちよつと驚いていた。

きつと結んだ薄めの唇や整った鼻筋は涼しげだし、ニキビのないきれいな肌は、他のクラスメートのように脂ぎった感じがまったくない。その中にも意志の強さを感じるのは、くつきりした目や眉のせいだろうか。耳のあたりのくせっ毛が、そんな強さに甘さのようなものをつけ加えてもいる。

林田が、主人公に啓介を選んだ理由がよくわかる気がした。

それだけでなく……。

さっきのシーンで、その背中にすがっていた気分が微妙に影響しているのかもしれない。それとも、保健室での撮影の時から自分の中に生まれた、これまでにない奇妙な感覚に左右されているのかもしれない。

至近距離から見つめてくるその啓介の眼差しに、昭雄は、なぜか動悸が速まるのを感じていた。

と、そこで、シナリオどおり——しかし、やはりど

こか驚いたような声をまじえ——啓介が繰り返した。

「……亜希穂」

5  
微熱の朝

「まだお熱あるんだから、起きて来ちゃダメでしょ」  
麻由がリビングに出てきたのに気づき、キッチンに  
立っていた昭雄は振り返った。



「お腹、へったもん」

こちらを見返して言うその口調には、昨日まで残っていたどこかぼんやりした様子はない。どうやら自分で気づいて着てきたらしいピンクのガウン姿にも安心して、昭雄は、やりかけの作業を先にかたづけすることにした。

「今、おやつ作ってるから、もうちよつと待ってなさい」

言いながら、マフィンの生地を並べたプレートをおオーブンに入れる。

キッチンの棚に――友紀枝が買ったらしい――『手作りおやつ』のレシピ本を見つけ、その中に載っていたのを試しているのだ。

おオーブンのタイマーをセットし、粉のついた手を洗ってから、昭雄はキッチンカウンターをまわってリビングに出た。

麻由はまだそこに立ったまま、そんな昭雄をうれしそうに見上げていた。その顔には、未だ発疹が残っているが、数日前のように赤くはなく、かさぶたになりかけている。

麻由の前まで来たところで、昭雄は——この間、それが習慣になっていることもあり——おでこに手を当てた。

……また、ちよつと下がったかな？

そう思いながら、麻由の目線に合わせ絨毯の上に腰を落とした。

その座り方は、どうしても横座りふうになる。エプロンの下にはいたミディ丈のスカートが、タイト気味だからだ。

と、昭雄の顔を見つめ、麻由が言った。

「その口紅、よく似合うよ、ママ」

おしやまな口振りに、ピンクの口紅を塗った昭雄の

口元が、思わず緩んだ。

この三日間、昭雄は日中、ほとんどの時間を女装して過ごしていた。

水曜の朝、せがまれるままふたび女装した昭雄を見て、麻由は、想像した以上にうれしそうな顔をした。

前日までの苦しげな様子とは打って変わって、あれこれおしゃべりしながら、昭雄の差し出すスプーンか

らおかゆを食べた。この間、固形物を食べておらず空腹だったのもたしかなのだろう。けっきよく麻由は、昭雄の作った分を全部平らげてしまった。

食べ終わったあとも、おかゆの器をかたづけようとする昭雄を行かせまいとでもいうように、麻由は話しつづけた。

「亜希穂ちゃんはね、きりん組さんでいちばん強いんだよ。男の子たちもやつつけちゃうの」

「亜希穂ちゃんって、ぞう組さんみたいなのに、鉄棒できるんだよ」

「麻由ね、亜希穂ちゃんに、バレリーナのドレスの描き方、教えてあげたの」

話の中身は、保育園での出来事、特に「亜希穂ちゃん」に関することがほとんどだったが、昭雄は、ベツドに腰掛け、ずっとそれを聞いていた。この間、昭雄には話してくれていないことばかりだったのだ。

それだけでなく、麻由は、時に昭雄の膝に頭を預け、甘えるような口調で話した。それも、ふだん、昭雄には見せたことのない表情だ。

その姿はまるで、ずっと話したかったのに話せなかったことを、死んだ友紀枝に報告しているともいえるように見えた。

：：もしかしたら、僕が会社に行っている間、麻由は友紀枝に、こんなふうに接していたのかもしれない



な。

やわらかな眼差しで笑い返し、麻由の頭を撫でながら、昭雄はそう感じた。

友紀枝は——少なくとも昭雄の前では——、子どもを甘やかしたりしない母親だったし、そんなふうにしつけられたおかげで、麻由も、この年頃にしては出来すぎだと思うほど自立して世話のかからない子だ。

しかし、そんな厳しいと言ってもいいしつけが成り

立っていたのは、昭雄の知らないところで、友紀枝と麻由の間に、こんな濃密な時間があつたからなのかもしれない。

そう思うと、昭雄は、どこかで死んだ友紀枝に嫉妬する気持ちにもなつた。

結局、水曜日の午前中をずっと、子ども部屋でそんなふうにごろごし、昼近くになってやっと昭雄は立ち上がった。

「そろそろ、お昼ご飯の支度しなきゃね」

と、麻由は、昭雄を見上げてこう言った。

「まだ、ママでいてね」

昭雄は迷ったが、それにうなずいていた。

「そう：：ね、麻由のお熱が下がるまではね」

友紀枝に対して感じた嫉妬が、そう言わせたのだ。

「お熱が下がるまで」

根拠がないといえれば根拠がないそんな約束を、昭雄は守っていた。水曜日も、昨日の木曜も、そして今日も、日中、麻由の前で、友紀枝の服を着、メイクしているのだ。

自分でも馬鹿げたことをしているとは思うのだが、なんだかそんな姿を見せることが、麻由の元気を回復させていくような気がした。実際、あの水曜の朝から、麻由の熱は次第に下降し、食欲も見る見る増し

ている。

「おいしい？」

「うん、すつごくおいしい。もう一個、いい？」

かわいらしいピンクのガウン姿でダイニングチェアに腰掛けた麻由は、焼き上がったばかりのマフィンを、幸せそうに頬張っている。

この間、インターネットなどで調べたはしかの一般的兆候から言えば、要するにこれは、回復期に入った

ということなのかもしれない。だが、昭雄には、麻由が病気に打ち勝つ力を取り戻したのは、「ママ」に会えたおかげだと思えた。

「ママ、お料理、上手だね」

「ふふ、なに、いきなり。いつも食べてるじゃない」

昭雄の女装姿に、麻由は、なんのためらいもなく「ママ」と呼びかけた。昭雄の方も——最初こそ照れたが——次第に慣れ、それに応じるように、言葉づかいや

眼差しがいつもよりやさしい感じになっていった。いや、昭雄自身が、自ら積極的にそうしているという面もあった。

「今度、麻由にも教えてね」

「えっ、なにを？」

「こんな、おいしいお菓子の作り方」

「そうね、病気が治ったら、いっしょに作ろうね」

「うん」

麻由は、発疹の残る顔を大きくほころばせ、まったく無防備な笑顔でうなずいた。

こんな姿で接することで、麻由が元気になるというだけでなく、麻由との距離が格段に縮まった気がする。

今になって気づくのだが、これまでは、どちらにもかすかに、異性としての遠慮のようなものが働いていた。この三日間でそれが取り払われ、二人の間に揺るぎない基盤ができた。そう思えるのだ。



そんな思いが、昭雄に——まだ多少の照れは残しながらも——「ママ」を演じさせていた。

ただ、昭雄の行為すべてを、麻由との関係だけで語るのには、ちよつと無理があるかもしれない。

「……あれ？」

昭雄の顔を見て、なにか気づいたように麻由が言った。

「なに？」

「ママ、昨日よりやさしいお顔してる」

「えっ？　そ、そう……？」

昭雄は、どこか取り繕うようにそう返事した。

じつは、ゆうべ、麻由の体調が安定したこともあり、久しぶりにゆっくり入浴した。昭雄はそこで——高校時代のあの時のように——すね毛を剃ってしまった。おまけに、入浴後、鏡台の前に座り、眉のカットまでしたのだ。

すね毛はともかく、眉は、来週入社した時、誰かに気づかれるリスクもある。自ら「お熱が下がるまで」と“期間限定”もしたのだから、本来なら、そこまでする必要はないはずだ。

しかし昭雄は、すね毛や眉が気になったのだ。

そして今朝、鏡の前で、スカートから出たすべすべの脚にひとりうなずいた。細い弓形の眉がメイクになじみ、顔つきが——麻由の言うように——やさしくな

ったことに満足した。

それはもう、「麻由のため」という言い訳の範疇はんちゆうを超えることだろう。昭雄自身がそれを望んだ……というか、少なくとも「あの時の自分」に近づけたことに喜びを感じているのは確かだった。

とはいえ昭雄は、この三日間、四六時中女装していたというわけでもない。

「これかたづけたら、そろそろ、また、パパに戻らな

くちやね」

食べ終わったマフインの皿をキッチンカウンターの上へのせながら昭雄が言うと、麻由は不服そうな顔をした。

「……どうして？　麻由、まだお熱あるよ」

「だって、もうじき、また、亜希穂ちゃんと亜希穂ちゃんのパパが来るんだよ。こんな格好見られるの、恥ずかしいもん」

一昨日も昨日も、啓介は、保育園帰りに食料品を持って訪ねてくれた。それに応対する必要もあり、昭雄は、夕刻から夜の間は男姿に戻っているのだ。麻由には「恥ずかしいから」という言い方で納得させたが、もちろん、こんな姿は、啓介であろうと誰であろうと、他人に見せるわけにはいかないだろう。

麻由はまだ口をとがらせていたが、そこで、なにか思いついたように言った。

「今日は、もう、亜希穂ちゃんと遊んでもいい？」

「うーん、亜希穂ちゃんも夕ご飯食べなきゃいけないから、長い時間はだめだけど、ちよつとだけならね」

昭雄の言葉に、麻由はうれしそうな顔をした。昭雄が「パパに戻る」ことに対する不満は、とりあえず忘れたようだ。

キッチンに入り皿を洗いながら、そんな麻由を見た昭雄は、今度はちよつと不安になった。

「恥ずかしいから」という理由だけで、四歳児に秘密を守らせることができるだろうか？

そう思ったのだ。

「あのさ、麻由。パパがママになってるってこと、亜希穂ちゃんや亜希穂ちゃんのパパには、絶対がないしよね。それから、病気が治って保育園に行った時も、さゆり先生や他の子にしゃべっちゃだめだよ。これは、麻由とパパと、それから、麻由のお願いを聞いてくれ



た神様との秘密なんだからね」

言葉を選びながら昭雄が言うと、麻由は、ちよつと大人びた顔つきで昭雄を見つめ、うなずいた。

「うん、わかってるよ」

もしかしたら、やはり四歳児の思考は、こちらが想像するよりずっと「わかってる」のかもしれない。

まだ多少の不安を残しながらも昭雄がそう思っていると、突然、電話が鳴った。

「……ん？　誰だろ？」

会社には今朝も電話しておいたから、おそらく仕事関係ではないだろう。

そう思いながら、昭雄は濡れた手を拭いて、カウンターの上的子機を取り上げた。

「はい、藤沢です」

「あつ、俺」

啓介だった。

「じつは、悪いけど、今夜は行けそうもないんだ。食料品、足りてるか？」

「……え、ええ……ああ。毎日届けてくれるから、冷蔵庫の中はふだんよりいっぱい入ってるくらい……」

こんな格好をしていることもあり、それに、この間の麻由との会話の癖もあって、つい、おかしな言葉づかいが出てしまいそうだった。昭雄は、いつもの啓介

との会話での口調を思い出すようにして言った。

「そんならいいが……、悪いな」

「い、いや、いいよ。それより、どうしたんだ？　仕

事か？　もし、亜希穂ちゃんをお迎えに行けないんな

ら、麻由の調子もよくなってきたし、僕が代わりに行

って、うちで預かっててもいいぞ」

「いや、そうじゃないんだ。亜希穂の用事さ。亜希穂

のやつ、バレエ習いたいとか言い出して……」

「バレエ？」

「ああ、バレリーナになりたいんだとさ。明日の土曜からバレエ教室に通うことになったんだが、その前に、衣裳とか靴とか揃えとく必要があるんだそうだ。それで、今夜のうちに、亜希穂を連れて専門店まで買いに行こうと思ってな」

「そういうことか。こっちは心配することないよ。麻由はもう平熱に近いし、月曜からは保育園にも行けそ

うだ」

「そうか。だけど、約束しておきながら、悪いな。すまん」

また「悪いな」を繰り返し、啓介からの電話は切れ  
た。

「麻由、今日は、亜希穂ちゃん、来られないんだって」  
電話を切って昭雄が言うと、麻由はまた不満そうに  
口をとがらせた。しかし、すぐにまた、顔を輝かせて

言った。

「じゃあ、夜もずっとママでいられるね」

結局、昭雄は、この夜、麻由が言ったように寝るままで女装していた。いや、正確に言えば、寝てからもだ。

昨夜に次いでゆっくりと入浴をすませたあと、昭雄は、思いついて友紀枝のネグリジェを着た。そして、子ども部屋に入って、こう言った。

「麻由、今夜は、ママのお部屋で、ママといっしょに寝ようか」

昭雄は、あえて、自分のことを「ママ」と表現した。おそらく麻由は、明日には平熱に戻るだろう。

ということとは、「お熱が下がるまで」という約束は今夜までだということだ。

昭雄は、なんだかそれが残念なような気がしていた。この間、麻由との間にできた濃厚な関係が、「パパ」



に戻ったとたん、失われるような気もした。

だから、昭雄自身、今夜くらいは、ずっと「ママ」  
でいてもいいと思った。「ママ」として、麻由に添い  
寝してやろうと考えたのだ。

昭雄の申し出に、もちろん、麻由はよろこんだ。

風呂上がりでメイクも落としてしまったし、ウイツ  
グも脱いでいた。それにもかかわらず、麻由は、寝室  
のダブルベッドで、うれしそうに昭雄に抱かれて横に

なった。

整えた眉やネグリジエの肌触りがそれを補ったのかもしれない。それ以上に、ネグリジエの下に着けたブラのおかげかもしれない。麻由は、「ママ」として昭和の「胸」に甘えてきた。

「そういえば麻由、さつき、亜希穂ちゃんのパパが言  
ってたけど、亜希穂ちゃん、バレエ習いに行くんだっ  
て」

「え？ バレエ？ 麻由も習いた〜い」

「病気が治ったら、亜希穂ちゃんのパパに頼んで、麻由もいっしょに通う？」

「うん、麻由も、バレリーナになる。ぜったい頼んでね、ママ：：」

そんな会話を交わしながら、麻由は眠りについた。

麻由といっしょに早くから寝てしまったせいで、土

曜日、昭雄は早朝に目覚めた。

腕の中で落ち着いた寝息を立てる麻由におでこを合  
わせると、その体温は、自分とほとんど変わらない。

それでも、正確に計った方がいいと思い、昭雄はベ  
ッドを出て、昨夜から鏡台の上に置いておいた耳式体  
温計をとった。

麻由を起こさないように気をつけながら、計測部分  
の出っ張りを耳の中に挿入する。

ボタンを押すと「ピッ」と音がして、すぐに液晶窓に数字が表示された。

「36・9℃」

三十七度は切っているが、麻由の平熱より高い。

「微妙だな……」

そう独り言を言ったあと、昭雄は顔を洗いに行った。

そして、戻ってきた時には、鏡台の前に座り、メイクベースを手にとっていた。

まだ、たしかに微熱はあるんだし……。

ファンデーションを塗り、アイメイクもした。

麻由が目を覚ました時、がっかりした顔を見るのは  
いやだし……。

口紅を塗り、ウィッグをかぶる手つきも、もうすっかり慣れたものだ。

どのみち、あさってには、否応なくもとの生活に戻らなければいけないわけだし……。

服は、最初の夜に着たグレーのニットワンピースと茶のベルトを選んだ。

それまでには、明日の日曜だってあるわけだし……。心の中でそんな言い訳を重ねながら姿見に映したその姿は、最初の夜より、ずっと「女」が板について見えた。

昭雄は、今朝もまた、それに満足したようにうなずいていた。

そのあと昭雄は、洗濯などを早々にすませた。

それでも麻由はまだ起きそうになかったので、コーヒーをいれ、朝刊を読もうと思った。

「あれ？　：　：　まただ」

玄関のドアポケットに朝刊が入っていなかった。

いつものように下のメールボックスまで取りに行こうと鍵を解き、ドアを開けたところで気がついた。



：：あつ、こんな格好、他人に見られちゃ、まずいんだ。

昭雄は、ドアを薄めを開けたまま、しばらく考えていた。

：：だけど、新聞を取りに行くためだけに、わざわざ着替えて、メイクを落とすなんて面倒だしな。

このマンションはもともと戸数も少ないし、住人はみんな、若い勤め人だ。休日の朝八時前に起き出して、

外に出ている人間はまずいないだろう。

それに、もし誰かにちらりと見られたとしても、これなら、簡単には見破られない気もする……。

先刻、鏡の中に見た姿を思い起こしてそう考え、昭雄は結局、そのニットのワンピース姿のまま、廊下に出ていた。

びくびくはしたが、思ったとおり、廊下でも、またエレベーターの中でも、誰にも出会わなかった。

一階にも人はいなかった。オートロックの中扉の向こう、エントランスにも人影はなさそうだ。

それに安心し、昭雄は、ガラスドアをくぐりメールボックスのところまで出た。

そして、ポストの口にねじこまれた新聞を引っ張り出した時だった――

外部につながる入口を、誰かが入ってくる気配を感じた。

昭雄は、背後の人物に顔を見られたくないと思い、その格好のまま固まった。

と、入ってきた人物が、オートロックのインターホンに近づいた。

ん：：？

エントランスに響いた足音は、二人分：：大人の足音と子どもの足音だ。

：：えっ？

昭雄は、その想像に、思わず振り返っていた。

顔を隠そうとうつむき気味に振り向いたので、まず、子どもの方の横顔が目にとまった。想像どおり、それは、亜希穂だった。

そして、その手を引く男の、もう片方の手には、食料品がどっさり入ったスーパーの袋がぶら下げられていた。視線を上げ、特徴あるくせつ毛を確かめるまでもなかった。

昭雄は、その場に立ったまま、おろおろと目を泳がせた。ニットのスカートの下で、膝どうしが小刻みにぶつかっていた。

よりにもよって、一番まずい人間に……。

と、そんな気配に気づいたのだろう。啓介の方も振り返った。

すぐに息を呑む感じが伝わった。

緊張した沈黙の時間が、しばらくつづいた。

それに耐えられず、昭雄はおずおずと視線を上げた。啓介は、茫然とこちらを見ていた。

そして、昭雄と目があつた瞬間、その口が、こう動いた。

「……亜希穂」

その言葉に、亜希穂がぽかんと父を見上げた。いきなり自分の名を呼ばれ、しかも、その語調がいつもとちがったからだろう。

「あ、あの……」

ともかく、今のこの格好を釈明しなければなら  
ないと思ひ、昭雄は言いかけた。

しかし、なにをどう説明すればいいの  
だろう？

昭雄は、ふたたび啓介から目をそらし、  
その視線をエントランスの床に泳がせた。

「……」

……いっそのこと、説明なんてやめて、  
このまま部



屋に逃げ帰ってしまおうか？　　：：いや、そんな若い

娘のようなことをすれば、いよいよ誤解をまねくだけ  
だ。　　：：でも、説明するにしても、こんなところで

話し込んでいては、他の人間に見られる危険もある。

まず二人を部屋に上げるべきじゃないのか？　　：：し

かし、そうすれば、すぐ帰すわけにもいかなくなる。

こんな姿をさらに長い時間、さらすことになる：：。

そんなさまざまな思いが、一瞬のうちに頭を駆けめ

ぐり、自分でも収集がつかなくなっていた。

と、そこで、啓介の方が、スーパーの袋を差し出しながら言い訳じみた言葉を口にした。

「これ、ゆうべ来られなかったから……。朝早くから申し訳ないと思ったけど、バレエ教室が九時始まりだっというんで……」

その前に届けてくれたということだろう。

「……う、うん。ありがとう」

昭雄はそう言つて、スーパーの袋を受け取つた。

しかし、そのあとも、啓介はそこに立つたまま、昭雄の顔を見つづけていた。亜希穂も、不思議そうにこちらを見上げている。

やはり説明しなければならぬだろう。

昭雄は、へたな言い訳はやめ——そもそもそんな言い訳など思いつかなかつたが——、正直に言うしかないと思つた。それで、できるだけ簡潔な言葉を選んで

口を開いた。

「あの……、麻由が、熱に浮かされて、ママになってくれなんて言うもんだから……」

「あ、ああ……」

どこまで理解したのかわからなかったが、啓介は、その言葉にうなずいた。

「……」

「……」

またしばらく、沈黙の時間がつづいた。

その間、啓介はずっと昭雄の顔を見つづけていた。

しかし、昭雄がこの場に居づらそうにしているのに気づいたらしく、もう一度うなずくようにして言った。

「あんまり時間もないから、今日はこれで……」

「……う、うん」

「じゃあ、月曜の朝、また迎えに来るよ」

その言葉に昭雄がうなずき返すと、啓介は、亜希穂

の手を引き外に出て行った。

ちよつとの間、昭雄は、金縛りにあつたようにその後ろ姿を見送っていた。

こんな姿を見て、谷原はいったいどう思ったのだらう？

それが、気になった。

そして、そんな思いに重なって、目が合った瞬間、啓介が口走った言葉が、頭の中で残響した。

「  
∴  
∴  
∴  
亞希穗  
」

6 小さな見栄

「藤沢さん、株主アンケートのまとめ、まだですか  
あ？」

はす向かいの席から、高橋智美が頬杖をつくように



してきいてきた。その語尾には、こちらの仕事の遅さを小馬鹿にするとでもいうような響きが混じっている。

それに気づいていながら、昭雄の答えは言い訳めいたものになった。

「悪い。集計はすんだんだけど、感想の部分、ちゃんと読み込まないと言葉が拾えなくってさ」

「とにかく早くしてくださいね。月曜の朝には、I R

誌の原稿、一括して広報に渡す約束なんですから」

「あ、ああ、わかってる。もし今日できなかつたら、土日に家でやってくるよ」

昭雄の言葉に、智美は露骨なため息をつき、自分の仕事に戻った。

いくら総務では向こうが先輩だといえ、五歳も若い智美にそんな態度をされ、いい気はしない。

しかし昭雄は、それを気にしないことにして仕事に

集中した。定時まであと一時間。今週末こそ仕事を持ち帰りたくはなかった。

ところがそこで、今度は課長が「藤沢君、ちよつと」と呼んだ。

「:::はい」

作業を中断し、立って行くと、課長はデスクの上になにかの冊子を放り出すように置いた。見ると『環境報告書ガイドライン』とある。その下に環境省の名が

あるから、そんな関係の公的な手引き書なのだろう。

「うちが今年、ISO14001の認証を受けたのは知ってるよな」

「は、はい」

それが、今日日本の企業がこぞって取得しようとしている環境マネジメント推進企業の国際認証であることは、昭雄も知っていた。春先、昭雄自身も、認証取得のための社員講習会に何度も出席させられ、コピー用

紙のリサイクルだとか、営業車の省エネ運転だとかに  
関するレクチャーを受け、レポートも書かされた。

「認定企業は、できるだけ毎年、環境施策の内容をデ  
ィスクロージャーしろというお達しだ。それでうちも、  
今年度から環境報告書とやらを発行することになっ  
た」

どうやら課長は、それに関する仕事を押しつけよう  
としているようだ。

そう察しながらも、昭雄はうなずいた。

と、課長は、今度はデスクの脇に置かれた段ボール箱を指さした。

「で、参考のために、大手企業の出してる環境報告書を集めさせた。君、悪いが、内容を読み込んで、業種や企業規模ごとに各社の報告書の特徴を整理してくれんか」

その段ボール箱には、「2000X年環境レポート」

などと題されたパンフレットがはみ出さんばかりに詰め込まれていた。ざっと見、百冊くらいはあるだろうか。中にはかなり分厚いものもある。

「来週火曜に、また環境マネジメント推進会議がある。

その時までには資料として提出しろということだ」

「火曜……まで、ですか？」

「なに、たいしたことないさ。このガイドラインの項目に沿って、各社の特徴を抽出すればいい。優秀な君

なら、たやすいだろう」

そう言う課長の目には、言葉以上に嫌味な眼差しが  
：：いや、昭雄をいたぶって楽しんでいるとでもいう  
ようなサデイスティックな陰がかいま見えた。

麻由のはしかが治り、以前のような生活に戻ってす  
でに一カ月が経過していた。

麻由自身は、また元気に：：というより、活発な亜



希穂の影響を受け、前以上に元気に保育園に通っていたが、昭雄の方はそうはいかなかった。

株主総会前の大事な時期にまるまる一週間休んでしまったことは、職場での昭雄の立場を決定的にまずくしたようだ。

以前は異質な存在として奇異の目を向けられる程度だったのが、今ではそれが、明らかかな白眼視という感じになっていく。表立った非難や批判こそしてこない

ものの、その分、仕事配分などで、あからさまな悪意が示されるのだ。

課長にしても、同僚にしても、定時でしか働けない昭雄を困らせるとでもいうように、ルーチン外の面倒な仕事を押しつけてくるのである。

休んだと言っても有休の枠内でのこと。どうしてそんなイジメじみたことをするのか。昭雄にはそれが疑問だった。

しかし、その理由がもっと根本的なところにあつたのだということ、つい最近、昭雄は知った。

数日前、湯沸室で智美たち女子社員がこんな会話をかわしているのを耳にしたのだ。

「奥さん亡くしたかなんだか知らないけど、あの人、総務の仕事を甘く見てたのよ」

「ほんと。その配転願いにしたって、営業より総務の方が楽だって言ってるようなもんだもん」

「そうよね。課長も、最初からそれが気に入らなかつたのよ」

どうやら昭雄は、もともと、部署全体から敵意を持つて迎え入れられたようだ。しかも、その敵意を助長するかのようになり、配転間もなく一週間も休んでしまつたわけである。

昭雄は、やっとそのことに気づき、愕然とした。

しかし、それは、今さらどうすることもできない。

休んだのは事実だし、その失点を取り戻すべく残業に精を出すわけにもいかないのだから。

結局、この最悪の人間関係を修復し好転させるためには、言われた仕事を唯々いいだくだく諾々だくだくとこなしてみせるしかないだろう。

そう考え、昭雄は、毎日のように仕事を家に持ち帰り、麻由が寝たあと、深夜までかかってかたづけしていた。

今日は金曜で、サラリーマンやOLの帰宅が多少遅いようだ。帰りの電車はいつもよりすいていた。大きな手提げ袋を二つも持って乗っている昭雄にとって、それはありがたいことだった。

ドア横のスペースにその紙袋を置いてドアにもたれた昭雄は、ため息をついた。

今日も、残ってしまった株主アンケートの束と、そ

して、数十冊ものパンフレットを持って退社することになった。例の段ボール箱の中にはまだ三分の一ほどの「環境報告書」が残ったが、それは、月曜——とその夜、持ち帰って——やろうと決めた。

それでも紙袋いっぱいに入ったパンフレットは、とんでもなく重い。電車が駅に着き、ホームから階段を昇って改札口を出る頃には、昭雄はすでにぐったり疲れていた。提げひもを持つ両手の指はちぎれそうだし、

腕や肩も筋肉が伸びきり痛くなっている。

とてもそのままバスに乗る気にはならず、昭雄は、紙袋を引きずるようにしてタクシー乗り場に並んだ。

とりあえず、保育園まではタクシーで行こう。そこから先は、谷原が車で送ってくれるのだし……。

そう考えたところで、昭雄はまた、さらに憂鬱な気分になった。



あの女装姿を目撃された翌々日の月曜日、啓介は約束どおり車で迎えに来た。

まだ発疹ほっしんのかさぶたが残る顔で久しぶりに登園する麻由を気づかいないながらも、昭雄は、啓介と顔を合わせることにはびくびくしていた。当然、何か言われるにちがいないと思ったのだ。

ところが啓介は、そのことをいっさい口にしなかった。二日前の出来事にはひと言も触れず、以前と同じ

ように亜希穂と麻由を保育園に送り、そのあと、昭雄を駅まで送ってくれた。

その日の帰りも、そして翌日以降も同様だった。まるで、あの土曜の朝のことを忘れ去ったように……と  
いうか、あんな出来事はなかったとでもいうように振る舞うのである。

昭雄は、一方でそれに安堵あんどしたが、もう一方で、車中の雰囲気はますます気まずいものになっていった。

なにしろ、高校時代のことだけでなく、さらにもうひとつ、触れてはならない話題ができてしまったのだ。麻由のはしかに関することさえ、話がそっちに行きそうで、うかつに口にできない感じだった。

朝夕の車中は——ことに、保育園から駅までの二人だけの時間は——前にも増してぎくしゃくしたものになった。

どうやら昭雄だけでなく、啓介もその話題を避けよ

うとしていることが、今度は逆に、昭雄の気持ちを重くした。

おそらく谷原は、僕があんな格好をしていたことを嫌悪しているにちがいない。じつは、心の底で僕のことを軽蔑しているのだ。

そんなふうを感じ、それがさらなる気づまりを招いているのだった。

「ここ、載せろよ」

重い紙袋を両手にぶら下げ、さらに片手には「お着替えバッグ」を持って保育園の門を出ると、先に出ていた啓介が、車のトランクを開けてくれた。

「あつ、すまない」

昭雄は礼を言い、そこに荷物を積み込んだ。

トランクを閉めた時には、亜希穂や麻由はすでに後部座席に乗り込んでいて、昭雄が最後に助手席に着い

た。

と、イグニッションを始動しながら、運転席の啓介が言った。

「なんだか今日も、見るからに仕事をいっぱいお持ち帰りって感じだな」

「ああ」

昭雄は、それに苦笑しながら答えた。

「毎日、陰湿にいびられてるよ。外資系の人間にや信

じられない話だらうけど」

他に話題がなかったこともあり——本当はそんな泣き言めいたことは言いたくなかったのだが——、今、会社で置かれている立場について、話したことがある。だから、啓介はおおよその事情を知っているのだ。

「しかし、そのぶんじゃ、どうやら明日もバレエ教室には行けそうもないな」

車を発進させながら、啓介が言った。

「いや、行くよ。親なんだから、一度くらいは顔出して先生にあいさつしとかなきやまずいだろ。麻由が通い出して、もう三週目になるわけだし」

麻由は、二週前から亜希穂と同じバレエ教室に通っている。受講の手つづきから衣裳のことまで、すべて啓介が手配してくれ、教室への送り迎えもしてくれていた。

「まあ、仕事は日曜にでもやればいいことだから……」



「無理するな。バレエ教室くらい俺が見とくから、その間に仕事をかたづけ、麻由ちゃんと二人だけの時にしつかり相手してやれよ」

そんなふうにするに言う啓介に、昭雄は負い目のようなものを感じた。

「でも、いつも甘えてばかりじゃあ悪いし」

「そんな心配はするな。俺は、どうせ亜希穂を連れて行くんだ。一人も二人もいっしょだよ。それに、麻由

ちゃんは、亜希穂よりずっと手のかからないいい子だしな」

啓介がルームミラーに目をやりながら言うと、後ろの席で覚えたばかりのバレエの振りをしなごらはしゃいでいた亜希穂が、それを耳に挟んだようだ。

「あーっ、パパ。亜希穂だっていい子だよ」  
身を乗り出して、啓介に抗議してきた。

「ふーん。じゃあ、バレエ教室で、麻由ちゃんみたい

にちゃんと自分で着替えるよ。パパは、着替え室とか入りにくいんだから」

啓介が苦笑しながらそう言うと、亜希穂はちよつとふくれてみせた。しかし、どうやら痛いところをつかれたらしく、そのまま麻由とのじゃれ合いに戻った。

それとはべつに、今の啓介の言葉に、昭雄はさらに負い目を感じていた。

麻由たちが通う土曜の朝は幼児向けクラスだけだそ

うだから、若い女性の生徒はいないにしても、バレエ教室の更衣室ともなると、たしかに男は立ち入りにくいだろう。そんな無理も、啓介に押しつけているわけだ。

「ほんとに、そっちにばっかりあれこれ負担をかけて、申し訳ない」

「だから、心配するなって。こっちこそ、亜希穂がむりやり誘って、余分な負担をかけてるんじゃないかつ

て気にしてるんだから」

「いや、もともと麻由も行きたがってたんだし、亜希穂ちゃんに誘ってもらえて、喜んでるよ」

昭雄は、楽しそうに笑っている麻由の方をちらりと見ながらそう言ったが、内心は複雑だった。

麻由と亜希穂は、今や姉妹と言ってもいいほど仲がいい。亜希穂のおかげで、母親を亡くした麻由の心の傷はすっかり癒えた気がする。

そのことはなにより喜ばしいことだったが、麻由と亜希穂が親しくなればなるほど、昭雄と啓介の関わりも深くならざるをえない。そこには、やはり気の重いものがある。

ことに、あんな姿を見られ、前以上の気まずさがあるのだから、なおさらだった。

昭雄が一人そんなことを考え、浮かかない顔をしていると、啓介が言った。

「でも、来週の発表会だけは、なんとかして都合つけてやれよ」

「あ、ああ」

麻由と亜希穂の通うバレエ教室では、来週、半年に一度の発表会が予定されているらしい。もちろん、昭雄もそこには出向くつもりでいた。

「入っていきなり発表会とやらで、だいじよぶかと思つたが、麻由ちゃんは覚えが速いって先生も感心して

たから」

啓介は、そうつけ加えたあと、麻由に呼びかけた。

「な、麻由ちゃん。先生、上手だってほめてくれたもんな」

「うん」

麻由は、それにうれしそうにうなずいた。

と、亜希穂がまた、啓介に抗議した。

「亜希穂だって、上手だって言われたよ」



父が麻由ばかりほめることに、ちよつと妬けたのか  
もしれない。

その夜、麻由を寝かしつけたあと、昭雄は持ち帰つ  
た仕事を明け方近くまでやった。それでも、株主アン  
ケートの方をかたづけるのがやつとで、環境報告書の  
方には手さえ着かなかつた。

土曜日の朝になり、ほんの二・三時間寝ただけの昭

雄は迷ったが、結局、バレエ教室に行くのはあきらめ、レオタードやバレエシューズをつめたバッグを持たせた麻由を、迎えに来た啓介に預けた。

午前中、眠さをこらえて残りの仕事に取りかかった。

それは思った以上に大変そうだった。

昼近くに啓介から電話があり、バレエ教室のあと、麻由もいっしょに昼食を食べ、そのあと、どこかに遊びに連れて行くと言ってきた。仕事を抱える昭雄を気

づかっただけのことにはちがいがなかった。

昭雄はそれに、さらに負い目のようなものを感じたが、目の前の仕事の大変さに負け、結局、その好意に甘えることになってしまった。

土曜の日中いっぱい在家のパソコンの前で費やし、夕方、啓介が麻由を送り届けてくれたあとも、夕食の支度と麻由を風呂に入れる時間以外はずっと仕事していた。しかし、持って帰った「環境報告書」十数冊分

の特徴的な部分を抜き書きするのが精いっぱい、それをまとめることさえできなかつた。

土曜の夜は徹夜をし、翌日曜も、家事をかたづけるとき以外は、ほとんどパソコンに向かつていた。

そんなことに追われていたせいもあり、また、睡眠不足でぼーっとしていたせいもあって、昭雄は、バレエ教室から帰ったあと、麻由がずっと浮かぬ顔をしているのに気がつかなかつた。

月曜の朝も、ほとんど寝ていない状態で朝食の支度や登園準備などに追われ、麻由の変化に気をとめるゆとりはなかった。疲労感の中で、啓介と過ごす車中の時間を、いつも以上にうつとうしいものに感じたただだ。

そして、その夜もまた、残りのパンフレットを持ち帰り、徹夜で仕事した。

課長から言われた期限の火曜日の朝、なんとか会議

資料のレジユメを仕上げたことで、すこし心の余裕を取り戻した。

そこでやっと、昭雄は、麻由がいつもより沈んだ表情をしているのに気がついた。

また病気にでもなったのかと心配になり、熱を計ったりしたが、体調に特に異常がある感じはなかった。

その火曜も、また持ち帰りの仕事があつたが、それはたいして時間をとるようなものではなかったので、

夕食のあと、やっと麻由とゆっくり話す時間がとれた。

「麻由、お腹痛いとか、体がだるいとか、するんじやないのか？」

口数の少ない麻由を気にしてきくと、麻由は首を振った。しかし、やはり、どこか元気がない。保育園や亜希穂のことに話題を向けても、「うん」とか「ううん」とかの返事をするばかりだった。

昭雄自身も体調が万全でなかったこともあり、その

夜も結局、それ以上の会話もなく終わってしまった。

昭雄がやっと人心地つけたのは、久しぶりに睡眠がとれた水曜の朝になってからだ。

やはり元気のない様子の麻由に、朝食の席で、あれこれさぐりを入れてみた。しかし麻由は、ただ無口にならずくばかり。時たまこちらに投げかける視線になにか言いたげな感じはあるのだが、昭雄が問いかける



と、その目をうつむき気味にそらしてしまふのだ。

いつものように迎えに来てくれた啓介の車に乗った  
あとも、亜希穂が話しかけても、どこか気乗りしない  
様子だった。というか、なにか、別のことを気にして  
いる感じなのだ。

「あの、麻由ちゃん、おうちでなにかあったんです  
か？」

麻由と亜希穂を預け、啓介とともに園舎を出ようとした時、保育室から追ってきたさゆり先生が声をかけてきた。

「あ、いえ……。でも、どうして？」

さゆり先生もそう感じているんだと思いながら、昭雄はきいてみた。

「なんだか今週になってずっと、元気ないもんですか  
ら……」

「え、ええ。でも、べつに思い当たることはないんです……」

昭雄がうなずきながらも首を傾げると、さゆり先生も腑に落ちないという顔をした。

朝のことでもあり、話し込むゆとりもなく、昭雄は「よろしくお願いします」とだけ言って、園を出た。

駅まで向かう啓介の車の中は、やはりいつものように気まずい雰囲気だった。しかし、今日の昭雄は、そ

れ以上に麻由のことが気がかりだった。

親の自分より先にさゆり先生が気づいていたらしいことにもまた、じくじ忸怩たる思いがあった。

と、黙って運転していた啓介が、唐突に言った。

「この前のバレエ教室が終わってから、ずっとなんだ」

「……え？」

昭雄が聞き返すと、啓介もまた浮かかない表情でつぶ  
けた。

「麻由ちゃん、急に元気がなくなつて、気になつてたんだ。でも、お前、仕事大変そうだったし、あんまり差し出がましいこと言うのもなんだと思つてな」

啓介も、昭雄が気づくより先に麻由の変化に気づいていたらしい。でも、こちらが余裕がなさそうなのを気づかつて、言わなかつたということだ。おそらく、自分のことばかりに追われ、わが子にも気がまわらない昭雄のことを、内心はらはらしながら見ていたにち

がない。

昭雄は、また、自分の父親としてのふがいなさに情けない思いがし、同時に啓介に対してさらに負い目のようなものを感じた。

と、啓介がこうつぶけた。

「でな、ゆうべ、亜希穂にきいてみたんだ。そしたら、  
おおよその理由がわかった」

「……え？」

昭雄は、思わず啓介の横顔を見つめていた。

すると啓介は、「亜希穂も要領を得た話をしてくれたわけじゃないが、言ってることを総合すると、どうも、こういうことらしい」と前置きしてからつづけた。

「この前のバレエ教室で、いっしょに習ってる子から『麻由ちゃん、ママいないの？』って言われたようなんだ」

昭雄が驚いてさらに見つめると、啓介は、前を向い

たままちよつと首を振った。

「いや、いじめだとか、そういう話じゃないようだ。

その子は、単純に、麻由ちゃんが一人で来てることが不思議だったからきいただけだと思う。まあ、うち以外はみんな、母親といっしょに来てるわけだしな」

しかし、バレエ教室の友達にそんなことを言われ、麻由は傷ついたのだらう。他の子には親がついてきているのに、自分だけ一人であることにコンプレックス



を抱いたにちがいない。

昭雄はそう思い、啓介に任せきりで、自分がまだ一度もいっしょに行っていないことを悔やんだ。

と、そんな昭雄の思いが伝わったように、啓介がふたたび首を振った。

「いや、それだけだったら、まだよかったんだ。同じ境遇の亜希穂もいるんだし、麻由ちゃんもそんなに傷ついたわけじゃないだろう。ところが、麻由ちゃんは、

その子に『麻由、ママ、いるもん』って言っちゃったらしい」

「……えっ！」

昭雄は、思わず大きな声をあげていた。

「たぶん、その子が母親といっしょだったことがちよつと悔しくて、はずみで口走ってしまったということだろう。ところが、まずいことにそこで、他の子が『じや、今度の発表会には来るの？』ってきいてきた。引

つ込みがつかなくなつた麻由ちゃんは『うん、来るよ』  
つてうなずいてしまったというんだ。そばにいた亜希  
穂も驚いたらしい」

「……！」

昭雄は、今度は声も出ず、愕然としていた。

「おそらく麻由ちゃんは今、自分がそんなウソをつい  
てしまったことを気に病んでいるんだと思う。発表会  
が近づけば、他の子に対して、いよいよ引っ込みがっ

かなくなってくるわけだしな……」

あの麻由の表情から考えて、おそらく啓介の推測はまちがいではないのだろうと昭雄は思った。

ただ、啓介の言葉には、一点だけ正確でないところがある。

麻由は、けっしてウソをついたわけではない。麻由にしてみれば、ママはいるのだ。あのはしかの時に現れた「ママ」が。

昭雄はそう思い、そんなことになってしまった原因は、やはり自分の軽はずみな行動にあるのだと自責の念に駆られた。

と、啓介がまた口を開いた。

「その時、俺がそばにいてやれば、そんなことにはさせなかつたんだが、なにしろ、更衣室で着替え中のことらしいから……。すまん」

そんなふうに詫びてくる啓介にいよいよ負い目を感じ

じ、昭雄はあわてて「い、いや……」と言った。しかし、それ以上言葉がっづかなかった。

結果としてウソをつくことになってしまったことに、麻由は今、小さな胸を痛めているにちがいない。

そんな麻由に、僕は、どう手を差しのべたらいいのだろう……？

車内は、いつものように——でも、いつもとは少しちがう——沈黙が支配していた。

と、車が駅に近づいたところで、啓介が言った。

「いっそのこと……」

「……ん？」

昭雄が見返すと、啓介はちよつと戸惑ったように目を泳がせた。そして、「単なる俺の思いつきだから、気を悪くしないで欲しいんだが」と、また前置きしてつづけた。

「いっそのこと、お前、この前みたいな格好で発表会

に行ったらどうだろう？」

「……えっ!？」

「お前は、バレエの先生にも他の親にも一度も顔を見られてないんだ。あれなら、バレられないと思う。たぶん……みんな、母親だと思うよ。俺もフオローするから」

驚いて見やった視線の先で、啓介は、けっしてからかっているのではない真剣な顔をしていた。



*memory 3*

「なるほど。こういうところ使えば、着替えとかメイクとか出来るわけね」

ソファで、昭雄がウィッグを整えていると、林田に案内されて恭子先生が入ってきた。

「だけど、高校生だけで来るのって、校則違反なんじゃない？」

「そんな、恭子先生らしくもないカタいこと言わないでくださいよ」

「いちおう教師だし、言っというた方がいいかなと思つて。まあ、カラオケボックスくらい、私はいいと思つ

てるけどね」

恭子先生は、そう言つて舌を出した。

学院祭まであと一週間と迫つた土日の連休。例の「映画」の校外ロケが行われた。

というより、この前、校内で撮つた分を除き、全体の九割近くをこの二日間で撮りきらなければいけないということだった。

当日の朝、林田はもちろん、他のキャストやスタッフたちも、どこか高揚した様子でこのカラオケボックスに集まった。

天気予報では、幸い——気のすすまない昭雄にとって、「幸い」とは言えないのかもしれないが——、二日間ともまずまずの好天のようだ。

出番のあるキャストはここで衣裳に着替え、スタッフとともに最初の撮影場所に移動した。時間のかかる

昭雄だけは、そのあと一人で――他のメンバーの前でそんなことをするのが恥ずかしかったこともあって――女装し、メイクした。

そこへ、恭子先生と落ち合った林田が戻ってきたというわけだ。

「どうですか？」

不安そうにきいた昭雄に、向かいのソファに腰掛け

た恭子先生はにっこりとうなずいた。

「うん、上出来よ。でも、チークはもう少しぼかした方がいいわね」

そう言いながら、大きめのフェイスブラシをとると、昭雄の頬のあたりを撫で、手早く修正してくれた。

昭雄がそれにくすぐったそうな顔をしていると、ブラシを置いた恭子先生は、脇にあった手提げの紙袋を引き寄せた。

「言われたもの、持ってきたわよ」

「わざわざすみません」

昭雄の隣に座った林田が頭を下げた。

「二十四・五センチの人って、他にいなかったもんですから。姉貴ので間に合うと思ってたんだけど、よくきいたら二十四だって言うし」

恭子先生が袋から取り出したのは、黒のロングブーツだった。

「せつかくの休みだっていうのに、急に電話したりして……」

「いいわよ、どうせ出かけるついでだったんだから」  
「ん？ デートですか？」

「ま、そんなとこ」

にっこり笑って答える恭子先生に、昭雄だけでなく、きいた林田本人もちよつと傷ついた顔をした。

恭子先生の方は、そんな少年たちのナイーブさには



おかまいなしに、昭雄の方を向いて「履いてみて」と言った。

昭雄がおずおずとブーツの片方を手に取ると、恭子先生は「そのジッパーを下まで下ろすのね」と説明し、さらに、昭雄の脚のあたりに目をやって、つけ加えた。

「電話で言ったとおり、パンストもちゃんと買ったのね」

「ええ、飯田に近くのコンビニまで走らせました。ぶ

つぶつ文句言ってたけど」

林田からそんな用件を押しつけられた飯田も恥ずかしがってたけど、こんなものを初めて履いたこっちは、もっと恥ずかしいんだから……。

昭雄はそう思いながら、光沢ある薄布で包まれた足先をブーツの中に通した。と、生地がこすれる微妙な感触を肌に伝えながら、足はするりと靴の部分に入った。パンストのおかげで滑りがいいのは確かだった。

しかし、内腿側のジツパーを上げるのに思った以上に苦労した。両脚を大きく開いてしまえば簡単なのだろうが、そうするとミニスカートの前も開いて、目の前の恭子先生にみっともない格好を見られそうな気がしたのだ。

昭雄は、ブーツを履いた方を上にして脚を組み、ジツパーを上げ、つづけてもう一方も、同じようにして履いた。

その履き心地も、これまでに経験のない奇妙なものだ。脚をすっぽり包んだブーツの丈は、膝小僧くらいまでであった。そのせいで膝が曲げにくい。低いソファに座っていることもあり、なんだか脚を前に投げ出しているような形になった。

さらに……。

「立ってみて」

恭子先生に言われ、立とうとしたが、これも簡単に

はいかなかつた。

結局、前のテーブルに両手をつき、お尻を後ろに突き出すようなおかしな格好で立ち上がっていた。それは、七センチはありそうなヒールのせいでもあった。

立ったあとも、まるで平均台の上にいるようで、昭雄は上半身であぶなつかしくバランスをとった。

「……ふふ」

恭子先生は、それを見てちよつと笑ったあと、「歩

ける？」ときいてきた。

それで昭雄は、恐る恐る足を出し、カラオケルームの中を行ったり来たりした。やはり、平均台の上を往復しているような気分だ。

「女の子がどれくらい大変か、わかったでしょ」

おかしそうに言う恭子先生を、昭雄は、口をとがらすようにして見やった。

「ま、すぐ慣れるわよ」

恭子先生は、なだめるように言ったあと、さらにフオローするとでもいうように、こうつぶけた。

「だいじょうぶ。よく似合ってるわ。すごくかわいい」  
その言葉に昭雄は目をそらし、さらに不機嫌な顔をしたのだが、そこで恭子先生はなにかを思い出したらしく、また紙袋の中に手を入れた。

「そうそう、これも持ってきたわよ。すっかり忘れてたでしょ」

林田にそう言いながら、テーブルの上に取り出したのは、焦げ茶色のシヨルダーバッグだった。

「あつ、そうか」

頭をかく林田に、恭子先生は「やっぱり男の子ってダメね。これがなきや、この前のシーンとつながらないでしょ」と言った。

先日、「亜希穂が病院を抜け出す」シーンを校内で撮影した時は、ブーツがまだ調達できていなかったの



で、足もとが映らないアングルで撮った。しかし、見ていた恭子先生が「いくら逃げるにしたって、女の子がなにも持たずに街に出るのはおかしい」と言いだし、自分のバッグを貸してくれたのだ。

今朝、林田から電話を受けた恭子先生がそれに気づき、ブーツといっしょに持ってきてくれたというわけだった。

「撮影の前にはメイクも直さなきゃいけないでしょう

し、化粧品、ここに入れてとくから、肌身離さず持つてなさい」

今度は昭雄にそう言い、恭子先生は、昭雄がテーブルの上に散らかしたままにしていた化粧品類をバッグの中にしまった。

そして、そのバッグを持って立ち上がると、昭雄の肩に掛けてくれた。

「私、約束午後からだから、もう少しつき合ってあげ

るわね」

そう言いながら、ブーツのせいでふらふらしている昭雄の腕を支えるように持った。

その、どこか面白がっているような視線には抵抗があるものの、昭雄は正直、救われた思いがした。

こんなブーツで満足に歩けるかどうかも不安だが、それ以上に、今からこの格好で街なかに出るのだということに動揺していた。気持ちは、ヒール以上に不安

定なのだ。

恭子先生がそばにいてくれるなら、そんな不安が少しは和らぐ気がした。

カラオケ店を出て、人が行き交う歩道を歩いている間、昭雄が怯おびえていたほどには、人々は視線を向けてこなかった。時たま、昭雄がヒールの着地に失敗してよたつくことで、ふっと目を向ける人はいたが、露骨

に——たとえば疑いの眼差しで——じろじろ見てくるような人間はいなかったのだ。

どうやら自分が、「繁華街を歩くふつうの女の子」として認識されているらしいことに、昭雄はちよつと安心し、一方で、複雑な思いがした。

それとはべつに、奇妙な緊張感も募った。

歩を進めるごとに両腿のパンストがこすれ合い、その上をミニスカートのプリーツがなでる。そのくすぐ

ったさが、全身の神経に広がって駆けめぐるといった感じが、全身の神経に広がって駆けめぐるといった感じがある。

それはたぶん、すれちがう男の中に、ときどき、盗み見るような視線を向ける者がいるからだ。男姿の時には感じたことのないそんな視線が、スカートとブーツの間に露出した太腿やセーターのふたつのふくらみを中心にして、全身を緊張させるのだ。

最初、昭雄は、その視線が、昭雄に腕をからめて寄

り添った恭子先生に向けられているのだらうと思っ  
た。

ところが、男たちの視線の揺れを観察していると、  
恭子先生と自分の両方に、ほぼ均等に注がれているの  
に気がついた。

もしかしたら、僕たちは、たとえば……美人姉妹だ  
とでも思われているんだらうか？

昭雄がそんな想像までしたのは、いっしょに歩く林

田が、照れたような、でも、どこか誇らしげな顔をしているのを見たからでもあった。

繁華街を抜けると、そこに幹線道路があり、その道路を挟んで公園らしいこんもりとした樹々が見えた。

土曜の午前でもあり、その幹線道路沿いの歩道には——時折、ジョギングする人が通るくらいで——あまり人影はない。ことに、道路をまたぐ歩道橋を渡る人



は、ほとんどいないようだ。

最初の撮影場所がここだったことに、昭雄はちよつとほつとした。

まず始めに、タイトル後のトップシーン、つまり、「啓太」が歩道橋を昇っていく俯瞰ふかんのカットを撮るところになり、林田と撮影担当の倉木が近くのビルの屋上に昇った。どうやら事前にビルの管理者に話がつけてあったようで、休日のオフィスビルであるにもかかわ

らず、守衛はすぐに二人をビル内に入れてくれた。林田は、こういう交渉ごとに関しては、大人相手でも弁が立つし、用意周到なのだ。

歩道橋を昇る啓介と、トランシーバー——これも遠景撮影用に林田がどこかから調達してきたものだ——を持った飯田を除き、他のメンバーは、カメラのフレームからはずれぬそのビルの前あたりに集まった。

その中には、この前、すでに出演シーンを撮り終え

ている荒川や井沢もいた。この二人は、ふだん、学校の放課時間にも参考書を広げているような「受験命」というタイプだ。当然、今日は来ないものだと思っ  
ていた。

それで、昭雄はきいてみた。

「お前たち、ロケは出るシーンないんだろ。なんで来たんだ？」

と、荒川は急に顔を赤らめ――

「い、いや、野次馬の整理とかも必要だろうしさ」

——と言ひ、やはり昭雄と目が合つて赤い顔をした井沢とうなずき合つた。

昭雄はただ不思議に思つてきいただけなのに、まるであせつて言い訳でもするようなその口調に首を傾げた。すると今度は、隣に立っていた恭子先生が昭雄のそでを引き、耳打ちしてきた。

「カメラがまわつてない時も、女の子らしく振る舞つ

てた方がいいわよ。仲間と話すような時にもね」

今、荒川に話しかけた昭雄の言葉づかいが気になつたらしい。

「今日と明日は、カメラの外でも女優になったつもりでいなさい」

「そんな……」

撮影中は芝居だと思ふからまだ割り切れるが、クラスメイトの前でそんな振る舞いをするなんて恥ずかし

い。そう思い、昭雄はまた口をとがらせた。

と、恭子先生はこうつぶけた。

「ここはまだいいにしても、あとで、人混みの中でも撮るんでしょ。撮影ともなれば、荒川君の言うように野次馬だって集まってくるわ。カットがかかったとたん、主役のかわいい女の子が、急に男の子っぽいしゃべり方したら、かえって目立つんじゃないかな。変な目で見て来る人もいるわよ。そんなの、いやでしょ。

藤沢君だって、この前、バレたくないって言ってたじやない。そんなことにならないためにも、ずっと女の子やってる方が楽なんじゃない？ 藤沢君、そんな格好だと、とても男の子には見えないんだしさ」

恭子先生の言うことは一理ある気もしたが、その最後の言葉が心外で、昭雄はさらにぶすつとした。

「それに、その方が、カメラがまわった時、ヒロインの気持ちに入りやすいでしょ。谷原君だって、藤沢君

のこと、女の子だって感じてた方がやりやすいだろうし」

その恭子先生の言葉になぜかどきまぎした昭雄は、恭子先生から視線を逸らし、演技中の啓介を見やった。

どうやらカメラがパンするのとタイミングが合わないらしく、啓介は、何度も歩道橋の階段を昇らされていった。

それにちよつとふてくされながらも、物陰に隠れた



飯田からキューが出るたび、あわてて真面目な顔をつくって歩道橋を昇り始める。そんな啓介の姿に、昭雄は思わず「くすつ」と笑っていた。

客観的に見れば、それはすでに、かなり女の子っぽい表情だった。

このカットが終わると、いよいよ「亜希穂」は、歩道橋の上でこの少年と出逢うわけだ。

その歩道橋上のシーンは、みんなが懸念していたよりはずっと問題なく撮影が進んだ。懸念のもとになっていたアクションが、最初からうまくいったからだ。

この間、啓介と立花、福田の三人は、放課時間などにひまがあればこのアクションの練習をしていたから、そのおかげだろう。

それにもかかわらず七テークまで撮ることになってしまったのは、主には昭雄のせいだった。問題は、シ

ーンの最後で啓介に手を引かれて逃げ出すところだ。ブーツのヒールのせいで、うまく走れなかったのだ。

啓介に強く手を引かれ、昭雄は何度もつまずいた。

一度など、歩道橋の真ん中でみごとくに転んでしまった。

そんな昭雄を助け起こしてくれたあと、次のテイクで、

啓介は走るスピードを加減してくれたのだが、そうすると今度は、「逃げてる緊迫感がまるでないじゃないか」と林田のダメが出た。

ことに、歩道橋の公園側の階段を駆け下りるところは、結局最後までうまくいかなかった。ヒールをひっかけそうでした。足がすくんだ。昭雄は、つい手すりにつかまってしまうのだ。最終的に林田は、「このシーンは階段を下りかかったところで切って、すぐに公園に駆け込むカットにつなげよう」と決断を下した。

しかし、そのあとも、「男A・Bに追われて公園内を逃げる啓太と亜希穂」のシーンを何カットか撮り、

昭雄は啓介に手を引かれて、樹々の間や遊具の中を走り回ることになった。もつとも、そのおかげで、ブーツとヒールに慣れ、少しはまともに履きこなせるようになった気がした。

撮影の合間ごとに恭子先生が注意してくれたこともあり、ミニスカートの裾のこなし方もそれなりに身についた。

次は、オブジェの陰に隠れた啓太と亜希穂が、初めて会話を交わすシーンだった。

中をくりぬいたように作られた不思議な形のオブジェのそばに、カメラやマイクをセッティングする林田たちを見ながら、昭雄は、あることに気づき、恭子先生を振り返った。

「先生、メイクだいじよぶでしよるか？」

走り回ったことで、メイクが崩れた気がしたのだ。

「そうね。カメラに写るとてかりが出るかもしれないわね」

恭子先生はそう言って、昭雄の持つバッグから、あぶらとり紙とコンパクトを取り出した。

「これでフアンデを押さえて、パウダーをはたいておきなさい」

やはり撮影準備を待つ啓介がときどきこちらを見ているのが気になったが、昭雄は、恭子先生に言われた

とおり、あぶらとり紙でおでこと鼻のあたりを押さえ、パフをはたいた。

昭雄がメイクのことに気がまわったのは、恭子先生  
の言ったカメラ写りを気にしてのことではない。この  
シーンの終わりで、啓介と見つめ合うことになってい  
たのを思い出したのだ。

オブジェのシーンを撮り終えたところで、一行は、



公園内の噴水のところまで移動した。

ここで撮るシーンは、シナリオではこうなっている

## ○公園・噴水前

秋空の下、クラシックな造りの噴水がし  
ぶきを上げている。

やつて来る啓太と亜希穂。

もう男たちの姿が見えないこともあり、  
手はつないでいない。

噴水の前まで来たところで、先を行く啓  
太におずおずと呼びかける亜希穂。

亜希穂 「……あの」

啓太 「……ん？」

振り向く啓太。

亜希穂 「今日は、これから、なにか予定がある  
ん

ですか？」

啓太 「いや、べつに、これとってないけど。

ひま

で、ぶらぶらしてただけだから」

亜希穂 「もしいやじゃなかったら、今日一日、  
あた

しをいろんなところへ連れてってくださいませ

ん

か？」

啓太 「つまり……、デートってこと？」

亜希穂 「ええ。今日、一日だけでいいから」

啓太 「……いいけど、……でも、どうして？」

亜希穂 「思い出をつくりたいんです」

啓太 「……え？」

亜希穂 「あたしの……亜希穂の、思い出を」

啓太 「……？」

啓太、首を傾げるが――

啓太 「ま、いいや。あいつらがまだうるついでる

かもしれないし、どのみち、もうしばらく

は

つき合おうと思ってたんだ。今日一日、僕

は

君の恋人になるよ」

その言葉に、恥ずかしげに、しかし、うれしそうに笑い返す亜希穂。

撮影を始める前に、林田は、啓介と昭雄を呼んでこんなことを言った。

「いいか。この時点では、啓太も、それに観客も、亜希穂が抱える事情はまだわかっていない。でも、亜希穂の言葉の中には、表面的なデートの誘いだけじゃない切実な思いが込められている。啓太の方も、いわば無意識の部分で、それに勘づく。観客には、そんな微妙な雰囲気伝えたいんだ。そのあたりを考えて表現してほしい」

さらに、昭雄にはこうもつけ加えた。

「とはいえ、あんまりオーバーにやりすぎて、ものほしそうな感じにはしないでくれよ。亜希穂は、あくまで清楚な少女なんだから」

そんなむずかしいこと言われても……。

昭雄はそう思いながら、啓介とともに、その噴水の  
ある池のそばにスタンバイした。

……僕はこれまで、女の子をデートに誘った経験す  
らない。そんな時、男と女がどんな気持ちで会話を交



わすのかも、よくわからない。しかも、ここでは女の子の側から、つまり僕の方からそれを切り出すというのだ。そんな気持ちなんて、想像のしようもない。だいいち、僕は少女じゃないし、もちろん清楚と形容されるような存在でもないのだ。その上、内心、記憶を奪われることに怯えてるなんて非現実的な心理、どう表現しろっていうんだ。：：。

昭雄はまだそんな混乱の中にいたが、それにもかか

わらず、林田の声が飛んだ。

「用ゝ意！」

スタッフはもちろん、見守る他のキャスト、それに  
恭子先生までが息をつめ、動きを止めた。

みんな、次の「アクション！」の声がかかるのを待  
っていた。

ところがそこで、カメラの倉木が「あ、ちよつと待  
った」と言った。

「テープがなくなりそうだ。交換するよ」

まるで、コントのオチで全員がコケるとでもいうように、その場の緊張が弛緩した。

倉木に対して「なにやってんだよ」などと擲揄やゆのつぶ中、昭雄はため息をつき、なんとなく噴水の方を見た。

それは、最近よく見かける、噴き出す水が電子制御でさまざまに変化するようなものではなく、シナリオ

に書いてあるとおりの、まさに「クラシックな造りの噴水」だった。

石造りの囲いでとりまかれた円形の池の真ん中に、大理石の台座がある。その上に、表面に蔦草かなにかのレリーフが刻まれた花崗岩の台がのり、さらにそこから、ヨーロッパの古代宮殿のような円柱が四本立ち上がっている。その四本の円柱が大きな円形の受け皿を支え、その中央から、ただ真っ直ぐ上に向かって水

が噴き出す。受け皿に落ちた水があふれて四方八方からこぼれ、それが水のカーテンのようになって円柱やレリーフを洗う——そんな構造だ。

こんなレトロな噴水があるところを見ると、たぶん、この公園の歴史は古いのだろう。第二次大戦以前、もしかすると大正とか明治とかいう時代にできたのかもしれない。大都会の真ん中、周囲には近代的なビルが建ち、園内のさまざまな施設も新しいものに造り替え

られたのに、この品格があつて優美だけれど時代遅れな噴水だけが、ひとり取り残されたにちがいない。

昭雄がそんなことを考えていると、まるでそれが伝わったかのように、隣に立つ啓介が言った。

「こんな場所にこんな噴水があるなんて、知らない人も多いんだろ。なんか、街の中で忘れられた存在って感じだ」

「うん」

啓介が同じことを考えていたことがなんだからうれし  
いような気がして、昭雄はこくんとうなずいた。

「林田が撮影場所にこの公園を選んだのは、たぶん、  
この噴水があつたからだな」

シナリオの記述から考えてもその通りだろうと思  
い、昭雄がふたたびうなずくと、啓介は、ちよつと照  
れたような顔でつづけた。

「俺、好きだな、この噴水」

「……どうして？」

「どっかなつかしいような……、それに、なんだかなげな感じがする」

「けなげ……？」

「ああ、人から忘れられても、一生懸命水を吹き出しつつづけてるって感じだろ。それに、見てるとちよつとした風で微妙に水の形が変わるんだ。最近の噴水みたいに、むりやり形を変えるんじゃないやなくてさ。派手に主



張したりしないけど、なんだか静かに、私はここにいますって言うてるような気がしないか？」

：：へえ、谷原って、こんな感じ方をするやつなんだ。

これまで、啓介とほとんど立ち入った話をしたことがなかった昭雄は、ちよつと感心して啓介の顔を見上げた。

と、啓介は、なにか思いついたように「そうか、も

しかすると逆かもしれないな」と言った。

「逆……って？」

「ああ。林田は、ストーリーに合わせてこの公園を選んだんじゃないかって、この噴水を見て、このストーリーを思いついたのかもしれないって気がしたんだ」

啓介の言いたいのは、この噴水こそが、ストーリー全体のモチーフになっているということだろう。

それはそうなのかもしれないと、昭雄は思った。

亜希穂が啓太にデートを申し込むこのシーンだけでなく、ラスト近く、二人が別れるシーンもここで撮ることになっている。『あかね色の記憶』という題名どおり、別れのシーンは夕焼けなので、撮影スケジュールでは、夕方またここに来ることになっていた。

始まりと終わりの重要なシーンをこの場で撮ろうというのだ。林田が、この噴水をみて話を発想したということもありうるだろう。

でも、それがどんな意味を持つのか？

昭雄には、啓介の言いたいことが、今ひとつわからなかった。

そんなことを考えていると、倉木の準備が整ったらしく、林田が「じゃあ、いこうか」と言った。

「用ゝ意！」

昭雄は、先刻、林田から言われたことを思い出し、「亜希穂」の気持ちをどう表現しようかと手探りした。

しかし、その考えがまとまる前に「アクション！」の声がかかってしまった。

歩き出した啓介につづいて、昭雄もフレームインした。

ちょうどカメラと噴水の間到达了あたりで、最初のセリフを言う。

「……あの」

その言い方は、どうしても言い惑うという口調にな

つたが、この時点では、亜希穂自身もためらっているわけだから、それはそれでいいだろう。

「……ん？」

立ち止まり振り向いた啓介に答えるように、昭雄は言った。

「今日は、これから、なにか予定があるんですか？」  
これもまた、自信のないおずおずとした言い方になった。しかし、亜希穂だってびくびくしながらきいた

にちがいない。ここまでは、まだいい。でも、問題は次からのセリフだった。

「いや、べつに、これといってないけど。ひまで、ぶらぶらしてただけだから」

ここからは、亜希穂の意思を示さなければならぬ。しかも、その裏に、切実な思いを込めて。

「もしいやじゃなかったら……」

昭雄は、そこまでを、目を泳がせながら言った。

と、その時、泳がせた視野の端に、噴水が入ってきた。

さつき啓介が：：啓太が「好きだ」と言った噴水：  
：。

その瞬間、ふいに、昭雄には「亜希穂という女の子」が見えた気がした。「啓太が好きになった亜希穂という女の子」が。

「今日一日、あたしをいろんなところへ連れてってく



れませんか？」

昭雄は、その亜希穂の心の声を聞こうとした。

《たとえ、この記憶が消されたとしても……。たと

え、みんなから忘れ去られる存在だとしても……。》

「つまり……、デートってこと？」

「ええ。今日、一日だけでいいから」

《あたしは今、生きています。》

「……いいけど、……でも、どうして？」

「思い出をつくりたいんです」

《そよ風にさえ揺れる思いを、胸いっぱいにあふれ  
させながら……》

「……え？」

「あたしの……亜希穂の、思い出を」

《今、あたしは……ここにいます。》

「……？」

首を傾げた啓介を、昭雄は強い眼差しで見つめてい

た。

と、その眼差しに、啓介は一瞬、本気でたじろいだ  
ように見えた。

しかし、すぐにその視線を受けとめ、それを大きく  
包み込むように……

「ま、いいや」

にっこりと笑ってみせた。

「あいつらがまだうるついでるかもしれないし、どの

みち、もうしばらくはつき合おうと思ってたんだ。今日一日、僕は君の恋人になるよ」

啓太に：：谷原に：：、あたしの：：僕 생각이伝  
わったんだ。

そう感じた昭雄は、照れながら、笑い返していた。

もはや、芝居をしているという感覚さえなくなっていた。

と、そこで、林田の「カット！」の声がかかり、つ

づけて「オーケー！」の声が大きく響いた。

「すごい！ ワンテークで完璧だった！」

興奮して言う林田の言葉を聞きながら、昭雄は、林田がこの噴水をモチーフにストーリーを考えたのだという啓介の見方は、まちがっていないのだと感じた。

公園でのシーンをすべて——夕景の「別れ」のシーンを除き——撮り終えた一行は、繁華街に戻った。そ

の時点で、時計はすでに午後一時をまわっていて、二時に約束があるという恭子先生と別れた。去りぎわ、恭子先生は、「明日も、時間の都合がつけば見に来るわね」と言い、昭雄には「しっかり女の子やるのよ」と耳打ちしていった。

メインストリートの、でも通行人が多すぎない歩道を選び、まず「街に行く啓太と亜希穂」のカットを撮った。

このシーンは、いわばつなぎのシーンで、さほど演技が必要というわけではない。

歩道をやって来たところで、亜希穂が「どこへ連れてつてくれるの？」ときき、立ち止まった啓太が、ちよつと考えてから一方を指さし、「まず、ここで、腹ごしらえでもしようか？」と言う。そして、二人で脇の店に入る……というだけだ。

じつはそこに、食べ物屋などなかったのだが、二人

がフレームアウトして、次に店内のカットをつなげば、観客には、店に入ったように見えるのだと林田は言った。

人が行き交う中で撮ったというのに、荒川や恭子先生が言ったように——そして、昭雄が心配したように——野次馬が集まるということはなかった。ただ歩くだけのシーンだったこともあるが、そもそもが都会の真ん中の街角。ふだんでも、テレビ局の情報番組など



の撮影は頻繁に行われている。撮影を物珍しがるように人は、今どき、ほとんどいないのだ。ましてや、高校生らしいメンバーが、ホームビデオで撮っているのだから、なおさらだろう。

それでも昭雄は、恭子先生のアドバイスを守って、カメラがまわっていない時も女の子っぽく振る舞っていた。

その方が、問題が起こらないことが実感としてよく

わかったからだ。林田と打ち合わせしている時、つい地が出て、男っぽい言葉づかいをしてしまった。すると、脇に行く通行人が驚いたように振り返ったのだ。

もちろん、メンバーたちに対して女言葉で話すのは恥ずかしかったのだが、彼らにしても、昭雄がこんな格好をしている以上、その方が落ち着くように見えた。というか、むしろ彼らの方から、昭雄を「亜希穂」と呼び、女の子として扱いたがっているような気がした。

そして、昭雄が女の子っぽくしていようと決めたのには、もうひとつ別の理由もあった。先刻の撮影で垣間見えた「亜希穂という女の子」を、見失いたくないと思っっているのだ。

二時をまわり、昭雄たちは、ちよつと離れたところにあるビルの一階の喫茶店に向かった。そこで昼食をとり、そのあと、さっきのシーンにつながる「喫茶店

で話す啓太と亜希穂」のシーンを撮るためだ。

店のマスターには、すでに話がついているようだった。おそらく林田が、十人分のサンドイッチと飲み物を頼むことを条件に、事前に交渉したのだろう。店が混む昼の時間を避けたのも、店側からの条件だったにちがいない。

店の奥の大テーブルを囲んでとった食事の間、昭雄はちよつと落ち着かなかつた。

今の状況は、客観的には、九人の男たちの中に女が一人囲まれているように見えるはずだ。きれいにメイクした顔と白のオフタートルセーターは、どうしても目立ってしまう。他の席にいた三組の客たちの視線も、昭雄を中心に投げかけられてくる。それに気づき、昭雄は、ほとんどしやべらず、小さくなっていた。

ところが逆に、他のメンバーがそんな昭雄の様子を気にして、あれこれ話しかけ、お手ふきやサラダなど

をとってくれたりもした。その結果、見方によっては、まるで男たちをかしずかせているようにも見えてしま  
うのだった。

三組の客のうち、特に、高校生らしい女の子の二人  
連れなどは、そんな昭雄を冷ややかな目で見つづけて  
いた。あまりじろじろ見るので、昭雄は、もしかした  
ら彼女たちに正体を見破られているのではないかと、  
ひやひやした。

もつとも、そうでないのは、やがてわかった。

食事のあと、昭雄は、サンドイッチのせいで口紅がとれてしまったのではないかと心配になり——それに、撮影の前にメイク直しは必要だろうとも考え——、トイレに立った。その時、女の子たちの席の脇を通り過ぎたところで、背後からこんな会話が聞こえたのだ。

「まあ、あれだけかわいいと、男の子たちにちやほやされるのも、しょうがないけどね」

その言葉に自信を持たたおかげか、内心びくついていた女子トイレにも平然と入ることができ、シンクの前で、時間をかけて入念なメイク直しをした。

それがうまく仕上がったことがうれしくて、昭雄は、鏡の中の顔に笑いかけていた。

そしてそこで、ふと我に返り、こんな一人の場所でも女の子になりきっている自分に、ちよつと驚きもし



た。

トイレから戻ってくると、メンバーたちはすでにさ  
つきの席を立っていて、別のテーブルについた倉木が、  
店の外に向けてカメラを構えていた。

そのレンズの先をガラス越しに見やると、前の歩道  
に現れた立花と福田がきよろきよろと周囲を見まわし  
たあと、店の中をのぞき込み、ハツとした顔をした。

そこで、倉木の後ろに立っていた林田が「カット。

オーケー！」と言いながら、外の二人に向かって、両手でマルをつくってみせた。

たぶん、「やってきた男A・Bが、店の中にいる亜希穂を見つける」カットを、先に撮っていたのだ。

昭雄がそう思っていると、飯田がこちらに気づき、「亜希穂、待ってたんだ。さあ、ここに座って」と、倉木が座っている向かいの席を指し示した。

昭雄がその席に着くと、前の席には、倉木に代わっ

て啓介が腰掛けた。つまり、今、倉木が撮っていた映像は「啓太の視点」というわけなのだろう。

そのあと、林田から次のシーンについてあれこれ指示を受け、昭雄と啓介が今一度シナリオを見てセリフをたたき込んでいる間に、倉木がカメラをセットし、そのフレームに入らないぎりぎりの位置に山波がマイクを突き出した。

「用ゝ意」

その声に、昭雄と啓介はあわててシナリオを隠し、テーブル越しに顔を見つめ合った。このシーンは、冒頭から会話が始まるのだ。

「アクション！」

そこで、さっそく啓介が口を開いた。

「亜希穂は……」

いったん言いかけて言葉を切り、うかがうような目を向ける。

「……そう呼んでも、いいよね？」

昭雄がうなずくと、啓介がつづける。

「亜希穂は、どこに行きたい？」

先刻の、歩道での会話とつながっているわけだ。

「啓太さんの、行きたいところ」

「ふふ、僕も、啓太でいいよ」

「啓太……の行きたいところ」

「呼び捨て」に照れて言い淀みながら、昭雄が繰り返す。

返す。

「そう言われてもなあ……」

そこで昭雄は、いたずらっぽい顔で言う。

「じゃあね、啓太が、いつも彼女とデートするところ」

「そんなの、いないよ」

「ウソ！」

昭雄はさらにいたずらっぽい表情で啓介をにらむ。

「ウソじゃないよ」

それにどこかほっとした様子を浮かべながらも、さらには言う。

「じゃあ、前の彼女とよく行ったところ」

「そんなのも……」

「今度は、ぜったいウソ！」

啓介のセリフにかぶせるように言うと、啓介は苦笑し、白状する。

「まあ、前の彼女とはゲーセンばっかり行ってたから

な」

「……ゲームセンター？」

「ああ」

昭雄はそれに一瞬「へえ」という顔をしたあと、言う。  
う。

「じゃあ、そこへ連れてって」

「でも、君には、なんか似合わない気がして……」

「ううん、あたし、啓太の好きなことを、いっしょに



したいの」

その言葉に、啓介はまんざらでもない顔をする。

しかし、昭雄の視線に照れて、ごまかすように店の外に目をやる。

そして、そこで突然、ぎよつとした顔に変わる。

もちろん、実際には、ガラスの向こうに誰かいるわけではないが、ここに、さつき撮った「男A・B」のカットがインサートされるわけだ。

啓介の表情の変化に気づき、昭雄もあわてて表を見  
ると――

「行こう」

啓介がそう言い、席を立つ。

そして、昭雄の手を取って、店の裏口へと向かって  
走る。

「……カーツト！」

二人が、店の――実際にはトイレにつながる――通

路まで走ったところで、林田が言った。

「うーん、啓太が表を見て、男たちに気づくまでのタイミングがなあ……。もう少し間があってもいいというか……。もう一度、やろうか」

林田はそう言ったあと、席に戻る昭雄と啓介に、こうつけ加えた。

「二人の会話は、息が合ってたよ。まるで、ほんとの恋人どうしって感じになってきたな」

その喫茶店での撮影は三テイクで「オーケー」になり、次には、また別のビルの裏手に移動した。そこに、駐車場に面してスチールドアの裏口がある。そのドアから啓太と亜希穂が、さらにそれを追って男A・Bが走り出てくるところを撮影するのだ。

じつは先刻のビルとはけっこう離れたまったく別の場所なのだが、喫茶店の通路に駆け込む場面のとす

ぐにこの場面につなげることで、あたかも喫茶店の裏口を抜けてきたように見せるというわけだ。

林田はこのビルにも根回ししていたようで、守衛から「駐車場の車に傷つけたりしないように」と言われただけで、すぐに撮影許可が出た。

会社が休みだから、駐車場には、たしかに営業車らしい車がずらりと並んでいた。ドアを出てきた啓太と亜希穂は、その車の間を走り抜け、裏の道に出て、そ

こを逃げ去る。シーンとしては、それだけだ。

ところが、そこで困った問題が起こった。駐車場と裏道の間、六十センチほどの段差があったのだ。

ふだんの男姿なら——つまり、スニーカーかなにかを履いているのなら——目をつむっていても飛び降りられる高さだろう。しかし、ヒールが七センチのブーツを履いた昭雄には、その高さが「命がけのダイビング」にも思えた。ヒールの扱いは——歩くだけなら——

—朝より格段に進歩したと思うが、この高さでは、どう考えてもまともに着地できそうになかった。

林田を始めスタッフたちが集まりあれこれ相談したが、結局、啓介が先に飛び降り、昭雄の手を取って支えることで、なんとかやってくれないかということになった。

：：男の子たちって、女の子がどれくらい大変なのか、わかってないんだ。

昭雄は、今朝、初めてこのブーツを履いた時、恭子先生に言われたことを、逆の立場から思っていた。

まず、その飛び降りるシーンだけを何度か練習した。啓介に手を取ってもらい、最初は、慎重に足を下ろしてゆっくりと降り、それを徐々に速めていく。啓介がしっかり支えてくれていたからまだよかったが、飛び降りるたびに、昭雄は怖い思いをした。

それに、降りたあと、もう一度駐車場側に登るのに



も思わぬ苦勞がいった。ズボンなら足をかけて一気に登れる高さなのだが、ミニスカートでそんなふうにするれば、まちがいなくまくれ上がってしまう。昭雄は、そのコンクリートの段差に後ろ向きに腰掛け、スカートの裾を押さえて、いざるように上に上がった。

飛び降りた時、二度ほど軽く足首をくじいた感じにはなったが、ヒールをふくめた高さの感覚がつかめたことで、なんとかよたつかずに降りられるようになった

た。コツとしては、そもそもかかを頼りにせず、つま先立ちするようなつもりで着地すればいいのだ。

いよいよ撮影が始まった。

カメラは道側にセットされ、林田たちはそちらで待っている。昭雄と啓介、それを追う立花と福田、そして飯田の五人は、ビル内のスチールドアの前にスタンバイした。飯田がトランシーバーで林田と連絡を取り

合い、キューを出すのだ。

そのトランシーバーから「用意：：アクション！」の声が漏れ聞こえ、飯田は二拍ほど間をとってから、合図を送ってきた。

啓介が、握っていたドアノブに力を込め、勢いよく開ける。飛び出していく啓介に手を引かれ、昭雄も走った。

駐車した車の間を抜け、段差の近くまで来たところ

で、啓介はいったん手を離して飛び降りた。そして、すぐこちらを振り向き、手を差しよべてきた。

昭雄がその手をつかもうとした時だった。

一陣の風が吹いた。道側から吹いたその風が、段差に当たって吹き上げるような形になった。

そのせいで、スカートのプリーツがふわっとふくらんだ。

昭雄は、あわてて、そこを両手で押さえていた。目

の前の低い位置に立つ、啓介の視線が気になったからでもあった。

ところが、問題はそれだけではすまなかった。飛び降りようとしていた意思と、そんな動揺がちぐはぐに働き、体の歯車のかみ合わせを狂わせた。

昭雄は、前につんのめるような形でバランスを失った。そのバランスを取り戻そうと一歩前に踏み出した足のヒールが、今度は、段差のへりにあるコンクリー

トブロックに引つかかった。

一瞬後、昭雄の体は、空中に放り出されていた。

あせった昭雄は、目の前の啓介にすがろうとした。

そして、啓介の首に両腕をまわし、そこにしがみついた。

啓介の方も、昭雄の体を下から受けとめようと差し出した両腕で、ウエストあたりを抱きしめていた。

動きが止まった時、二人は、頬ずりし抱擁し合うよ

うな形になっていた。

昭雄のブーツは、伸ばしたつま先さえ地面につかず、まだ宙に浮いたままだった。身長差のせいでもあったが、二人がそれほど強く抱きしめ合っていたからでもあった。

そして、そんな状態がしばらく続いた。

そのなりゆきと、陥った状況に、二人が二人ともうろたえ、金縛りにあったようになっていたのだ。

啓介の首にしがみついた昭雄は、急速に高まる鼓動を感じていた。しかし、その鼓動が、はたして自分のものなのか啓介のものなのか、よくわからなかった。

唐突に、今度は、臭いを感じた。

それは、啓介の首のあたりから漂う啓介の臭いだった。

ちよつと汗くさい……でも、いやな臭いではなかった。



ふだん気にもしない男の臭いを感じるなんて、化粧品  
の匂いに慣れてしまったせいだろうか？

昭雄は、ぼんやりと、そんなことを考えていた。

と、そこで、やはりなりゆきにあっけにとられてい  
たらしい林田が「カット」とつぶやいた。

その声で、昭雄と啓介は、やっと我に返った。

啓介と昭雄は同時に腕の力を緩め、昭雄のブーツは、  
ようやく地面をとらえることができた。

そこで二人は、一瞬顔を見つめ合った。

二人の顔が、またたくまに紅潮した。

そして、次の瞬間には、二人ともおろおろと目を泳がしていた。

「うーむ。ねらっても撮れない、いい絵が撮れたって  
いうのに、惜しいな。逃げてる二人が、抱き合ってち  
やなあ……」

林田が、さも残念そうに言った。

「今日は、どうやら無理だな」

雲の出た西の空を見上げた林田が、また、残念そうに言った。

「明日にしよう」

「しかし、明日、夕焼けになる保証なんて、どこにもないだろ。逆に、天気がもっと崩れることだってあり得るんだぞ。そんな時の予備のためにも、今日撮っと

いた方がいいんじゃないのか」

飯田は、助監督らしく、スケジュールのことがなにより心配らしい。

「いや、こんな薄ぼんやりした夕暮れじゃあ、撮っても意味ない。二人の別れのシーンは、まわりの景色すべてが、あかね色に染まらなきゃいけないんだ」

林田の方も、監督らしく、その点だけは妥協したくないようだ。

ビルの裏のシーンをなんとか撮り終えたあと、「啓太と亜希穂が街を逃げる」シーンを何かットか撮ったところで、一行は、今朝の公園へと舞い戻った。

「啓太と亜希穂の別れ」のシーンを撮影するためだ。五時近くに着き、そこで夕焼けを待ったのだが、自然現象は、そうそう思い通りにいかない。西の空は多少赤くなったが、林田がこだわる「景色全体が染まる」夕焼けには至らなかつた。

もともと、この「別れ」のシーンは、今日と明日の条件のよい方で撮るということで、二日間ともこの間にスケジュールがとってある。だから、予定が大きく狂ったわけではないのだが、ストーリー上欠かすことのできないシーンであるだけに、今日断念すれば、完成へのリスクは大きくなる。

もう暗くなりかけているのに、飯田が林田と論争をつづけているのは、そんな事情からだ。

その二人のやりとりを遠巻きに見ていた昭雄は、ふと気になり、視線を移動させて啓介を探した。

と、やはりみんなから少し離れて一人で立っていた啓介が、あわてて目をそらせた。

今まで、こちらを見ていたのは、まちがいなかった。先刻の思わぬ出来事以来、昭雄の動揺は、まだつづいていた。

それは啓介も同じらしく、あれ以来、まともに目を

合わせてこない。

あのビルの裏で撮り直した2テーク目以降も、そのあと撮ったシーンでも、昭雄と啓介の間には妙な緊張感が募り、林田から「さつきまでにはいい感じだったのに、二人とも動きが固いなあ」と、さんざんダメ出しされた。

今日一日、女の子の立場でいろんな経験をして、いったんは主人公の気持ちが見えた気がしたのだが、今



はそれもよくわからなくなっていた。

こんなことで、明日の撮影はうまくいくんだらうか？

そう思いながら啓介から視線をはずした昭雄は、さらにみんなから離れ、遊具の並ぶエリアへと向かった。

そこにあつたブランコに、ミニスカートの後ろの裾を両手でまとめながら腰掛け、昭雄は、やはり今日は「別れ」のシーンを撮りたくないなと思った。

撮影は一日過ぎたといっても、ストーリーの中の亜希穂と啓太にとっては、まだ半日過ぎたところだ。二人の「デート」は、まだ半日分残っている。明日撮る予定の半日分より先に「別れ」のシーンを撮ってしまつたら、「亜希穂という女の子」は、いよいよ見えなくなる。

そんな気がした。

と、そこへ、背後から誰かが近づいてくる気配があ

った。

振り向くと、啓介だった。

昭雄と目が合った瞬間、啓介はぎくりと立ち止まり、また目をそらせた。

しかし、伏し目がちながら、すぐにまた歩きだし、近づいてきた。

そして、昭雄の隣のブランコに座った。

「……さつきは、ごめん」

昭雄の方には目を向けず、前を見たまま、啓介が言った。

昭雄は、なにを詫びられたのかわからず、頭をめぐらせたが、思い当たることにはあの出来事以外なかった。

それで、こう答えた。

「ううん、啓太はなににも……」

そこまで言ったところで、呼び名が役名とごっちゃになっていることに気づき、言い直した。

「谷原……君は、なにも悪がることなんてないでしょ」  
それでも、今日一日女言葉を使いつづけたせいで、  
いつものような呼び捨てはできなかつた。

「……助けてくれたわけだし」

「そうだけど、亜希穂……いや、お前のこと、なかなか離さなかつたから」

啓介は、あのあと、昭雄の体をずっと抱き続けていたことを気にしているようだ。

「あんなことして、お前が、いやな気分になったんじゃないかと思って」

そのことで、昭雄に嫌われたのではないかと思って  
いるのだ。

あの時は、僕だって、ずっと谷原の首にしがみつ  
いていたのに……。

昭雄は、そう思い、なんだかちよつと、可笑しいよ  
うな気持ちになった。

と、啓介が、恐る恐るなにかを告白するという感じでつぶやいた。

「いい……匂いがしたんだ」

「……え？」

「すごく……いい匂いが。だから……」

だから、昭雄の体を離せなかったと言いたいのだろうか？　なんだか、おかしな言い訳だ。

昭雄はそう思い、啓介の方を見やった。

そしてそこで、あの時の自分のことを思い出し、呆然とした。

あの時、僕も、谷原の臭いを……。

それはなんだか、言葉では言い表せない、おかしな感慨だった。

でも、昭雄の体の奥の方で、パチンとスイッチが切り替わったとでもいうような感じが、確かにあった。

そんな、自分でもよくわからない感慨の中で、さら



に呆然と啓介の横顔を見ていると、遠くの方で、林田の呼ぶ声が聞こえた。

「おーい、今日は、もう撤収だ」

よかった。今日は、「別れ」のシーンは撮らないんだ。

昭雄はそう思った。

啓太と……啓介と、まだ「別れ」たくなかった。

7 似たもの親子

「麻由、明日はパパ、家でするお仕事もないし、約束どおり、ちゃんと発表会に行くからな」

夕食の席で昭雄が言うと、麻由はただ、「うん」と

だけうなずいた。

昭雄は、ちよつとの間、次の言葉を待っていたが、麻由はそれ以上何も言わず、皿の上のきのこハンバーグをフォークの先でもてあそんでいる。

「そうそう。発表会の衣裳、チュチュっていうのか、あのスカートみたいなのやつ。あれも、それから髪飾りやバレエシューズも、明日持っていく鞆の中に入れていたから」

そんな言葉にも、中途半端にうなずくそぶりを見せただけだ。

「……あの髪飾り、猫の耳みたいな形してたけど、麻由たちは、猫ちゃんの踊り、踊るのかな？」

そう問いかけても、まったくのつてこない。いや、逆にちよつと暗い顔にさえなった。

それで昭雄は、これ以上追いつめるのはよくないとも思い、発表会の話題をいったん引っ込めた。

「麻由、さつきから、ぜんぜん食べてないよな」

「お腹、減ってないもん」

「そうかな？ 保育園でいっぱい遊んできたんだろ。

保育園に行くようになって、麻由がたくさん食べてくれるから、パパ、喜んでたのに」

「今日は、あんまり食べたくない」

「どうして？ 今夜は、特に麻由の大好きなものばかり作ったつもりだけどな」

「……」

「明日の発表会で、麻由ががんばれるようにと思って」  
結局、昭雄はまた、自分からその話に戻してしまっ  
ていた。

と、麻由は、沈んだ中にもなにかを考えるような顔  
をした。そして、こう言った。

「麻由、お熱あるのかもしれない。また、はしかか  
な？」

「……え？」

昭雄は、複雑な思いで麻由を見やった。

おそらく麻由は今、食欲がないという話題にかこつけて、仮病を使おうとしたのだ。いつそのこと、それで、明日の発表会を休んでしまえないかと、そう考えたにちがいない。

つまり、そこまで追いつめられているのだ。

……やっぱり僕は、四歳児には酷なことをしている

のだろうか？

昭雄はそう思い、考え込んだ。

この間の麻由の様子を見ていて、啓介の言ったことはほぼまちがいないだろうと、昭雄は思っていた。麻由は、バレエ教室の友達にちよつとした見栄を張ってしまったことで、引っ込みがつかなくなった。それを気に病んでいるのだ。



そんなことに小さな胸を痛めるわが子を、すぐにも救ってやりたいとは思う。

しかし昭雄は、それを麻由本人の口から聞きたいと思っていた。

子どもが何も言わないのに、親が先回りして手をあてすぎるのは、けっしていいことではないだろう。自分の思いを人に伝えようとする力を、削いでしまうことになりかねない。

ことに麻由は、思いを内に秘め、ぐっと我慢してしまうところがあるのだ。そんな性格が、生きていく上で得にならないことは、昭雄自身の経験からもよくわかっていた。

だから昭雄は、麻由に、自分の方から心を開いて話して欲しいと思った。麻由の側から、相談して欲しいと思った。

それで、麻由が、自分で言い出すのを待っているの

だ。

しかし、発表会の日が近づいても、麻由は心の内を見せようとはしなかった。話しやすい雰囲気をつくり、折に触れ、話題をそちらに向けたりもするのだが、それでも口を閉ざしたままなのだ。

逆に、昭雄がそんなふうにすることで、麻由は、どんどん暗く落ち込んでいくようにも見えた。そんな様子に、この年齢の子どもに過大な期待を持ち過ぎなの

だろうかとも感じ、昭雄自身も迷っていた。

「ごちそうさま」

麻由は、おかずの大半を残したまま、テーブルを離れようとした。

「えっ、もう、いらないのか？」

あまり責める口調にならないよう注意しながら、昭雄がきくと、麻由は、椅子から降りたところで立ち止

まっつてうなずいた。

「うん」

「じゃあ、すぐにお風呂入ろうか。今夜は早く寝ないと  
な」

麻由はそれにもうなずいたが、昭雄がその言葉の中に込めた意味もじゆうぶん理解したようで、そのまま、顔を上げずにうなだれてしまった。

「発表会はお昼過ぎからだけど、朝からリハーサルが

あるんだろ？」

昭雄がさらに言うと、麻由はそれには返事せず、背中を向けた。振り向く間際、ちらりと見えたその顔は、泣きべそをかいていた。

その表情から、麻由が思いあまつてなにか言い出すのではないかとも期待したが、麻由はそのまま、とぼとぼとリビングを通り抜け、自分の部屋の方へ行こうとしていた。

その小さな背中を見つめ、昭雄は、やはり自分は親として冷たすぎるのではないかという気がしてきた。

いや、わが子を追いつめ、精神的な虐待を加えているのではないかとさえ思った。

それで、麻由がリビングを出ていく寸前、また呼びかけていた。

「ねえ、麻由」

そして、振り向いた麻由に対し、こう言っていた。

「明日の発表会、パパ、はしかの時みたいに、ママになって行こうか？」

その言葉に、麻由は一瞬虚をつかれたような顔をしたら。いや、麻由ばかりでなく、昭雄自身が、自分の口走ったことに驚いていた。

麻由は、さらに少しの間、昭雄の表情を探るように見返したあと、その顔をいきなりほころばせた。そして、大きくうなずいた。



「うん！」

昭雄の方は、まだ、自分が言ってしまったことに呆然としていた。

すると麻由は、ふたたびリビングを通り、ダイニングテーブルにすたすた近づいてきた。

「麻由、やっぱり、まだお腹減ってる」

そう言って椅子に腰掛けると、大好物のきのこハンバーグをおいしそうに頬張りだした。

昭雄が夕食の片づけをしている間も、風呂に入れて  
いる時も、麻由は、これまでと打って変わった表情で  
はしゃいでいた。風呂の洗い場では、明日の発表会で  
やる「子猫のダンス」を見せてくれたりもした。風呂  
から上がったあとも、リビングでずっと踊っているの  
で、昭雄は「明日、発表会なんだから、早く寝なきや  
だめだろ」と言った。麻由は、夕食の際、同じことを

言われた時とはまるでちがう明るい顔でうなずき、自分の部屋に寝に行った。

そのあと昭雄は、リビングのソファにもたれ、ずっと考えていた。そして、時計が十時をまわった頃、電話の前に立った。

番号登録してある中から探し出したのは、啓介の家の電話だった。

啓介には知らせておいた方がいいだろうと思ったの

だ。

もし、明日の朝、何の前触れもなく女装した昭雄を見れば、啓介は驚くだろう。そこで啓介がどんな反応を示すのかよくわからないが、いずれにしても、昭雄がひどく恥ずかしい思いをすることだけは確かだ。事前に知らせておけば、啓介の驚きが薄らぐ分、その恥ずかしさも少しは和らぐにちがいない。

呼び出し音が四回ほど鳴ったところで、受話器がは

ずれた。

「はい、谷原です」

「あの、藤沢だけど」

「ああ、お前か。何だ？」

「こんなに遅く、申し訳ない」

「いや、まだ寝る時間でもないし、かまわないけど」

「じつは、明日の発表会のことです……」

「えっ、また、仕事かかえて、行けないってか？」

「い、いや、そういうことじゃなくて……」

「……ん？ どうした？」

「麻由のやつ、やっぱり、友達に言ったことを気にしてるみたいなんだ」

「ああ、今日も、保育園の帰り、沈んだ顔してたもんな」

「それで……じつは……、この前、お前が言ってたようにして……行こうか……と……」

「えっ？　つまり……、女装して……ってことか？」

「……あ、ああ」

昭雄は思いきって言った。

と、そこで、少しの間、啓介は黙り込んだ。

その沈黙に、昭雄はびくびくした。啓介がいきなり

「あれは冗談だったのに」と大声で笑い出すのではないかと、あるいは「なにを馬鹿なこと考えてるんだ」と軽蔑を込めて諫めるのではないかと思っただけだ。

しかし、次に聞こえた声は、平生な口調だった。

「……わかった。この前も言ったけど、お前がそのつもりなら、バレないように俺もしっかりフオローするよ。明日、九時に迎えに行くから」

そして、こうつけ加えた。

「マンションの連中には見られたくないだろ。いつもみたい、下で待ってなくていい。そっちに着いたら、携帯入れるから」



啓介が、こちらの状況まであれこれ配慮してくれていることに少し安心し、昭雄は電話を切った。

少なくとも谷原は、そのことをいやがってはいないようだ。

そう思い、自分も寝室に行こうと踏み出したところで、昭雄は足を止めた。

数日前、啓介があんなことを言い出した時から、自分には、こんな結論になることが見えていたような気

がしたのだ。

いや、そこまでは言えないとしても、選択肢のひとつとして、つねに頭の端にあつたことは確かだ。

そして、そう考えたことで、思考はさらに意外な方向へとおよんだ。

もしかして、この間、僕が麻由に対してとつてきた態度は、どうしようもない欺瞞ぎまんだったのではないか？

そんな疑念が、頭に浮かんだ。

麻由が心を開いて正直に言うまで待っていいようななどと、もつともらしいことを考えていたが、僕はいい、なにを待っていたというのか？

そもそも、麻由の口から「ママになって」と言わせなかったのではないのか？

そのために、麻由を追いつめるようなことを言ったり、おだてたりすかしたりして、それでもうまくいかないで、ぎりぎりのところで自分の方から言った。

要するに、そういうことではないのか？

心を閉じて、本心を隠そうとしていたのは、じつは僕自身だったのではないか？

その疑念は、そんなふう発展していった。

しかしそこで、昭雄は、そんな方向への思考をとめた。

そんなことを認めれば、自分が、本当は女装したいのだということになってしまふ。本心では女になりた

いのだということになってしまふ。

：：そんなはずはない。僕はちゃんと、女性と恋愛し、結婚し、子供までつくつたのだ。けっしてそんな人間ではないはずだ。

昭雄はそう考え、自分の中に生じた疑念にふたをした。

しかしそれでも、麻由への贖しよくざい罪感だけは残った。

この間、自分が麻由を苦しめたことに対して、なんと

かそれをあがないたいと思った。

そして、ベッドに入った時には、こう考えていた。

麻由は、僕が「ママ」になって発表会に行くことを、あれだけ喜んでいるのだ。明日は、精一杯、きれいでやさしい母親になってやろう。

九時という時刻は、いつも啓介が迎えに来るのより一時間近く遅い。そういう意味では、時間的にはずい

ぶん余裕があつた。

にもかかわらず、翌朝、昭雄は、いつもよりかなり早く起き出した。

いつもよりずっとたくさん、やらなければならぬことがあつたからだ。

まず、パジャマにナイトガウンを羽織つたままキッチンに立ち、四人分のお弁当を作つた。

麻由がバレエ教室からもらつてきた親向けのプリン

トによれば、今日は午前中に舞台稽古があり、発表会は午後の一時から始まるのだという。その出番がいちばん最初になる幼児クラスは、着替えて外に食事をするに行くゆとりがない。できればお弁当を用意し、会場内で食べて欲しいと書かれていた。それで昭雄は、以前、啓介が遠足のお弁当のことで困っていたのを思い出し、啓介のところの分も作ると申し出たのだ。むしろん、毎日車で送り迎えしてくれることへの感謝の意



味もあつてのことだ。

この前の遠足の時よりずっと手間をかけ、昭雄は、おかずの品数の多いお弁当を作った。

それができあがったところで、昭雄は、浴室へ行ってシャワーを浴びた。そしてそこで、すね毛を剃った。さらに、寝室の鏡台の前で、眉をカットした。

麻由のはしかが治ってから、つまり、この前女装してからすでに一カ月半ほどたっている。すね毛も眉毛

も、すっかり元通りになつていたからだ。

そのあと昭雄は、入念にメイクした。

今日は、この前とはちがいに人前に入るのだ。しかも行き先は、バレエの発表会。いわば「よそいき」のメイクでなければいけないだろう。

そう思い、アイメイクなどに時間をかけ——でも、「母親」の範囲を超えないように注意しながら——、華やかだが上品な顔をつくった。

バスローブを脱ぎ、下着やパンストを身につけ、ウイッグをかぶったところで、クローゼットの前に立った昭雄はちよつと迷った。「幼い娘のバレエの発表会に出かける母親」らしい格好というのが、よくわからなかったのだ。

結局、スーツならまちがないだろうと考え、クローゼットの中を物色した。ところが、この季節に合うスーツの中には、おとなしめの紺や茶系はなかった。

あつたのは、黒とピンクだけだ。

それで最初、黒を着てみたのだが、鏡に映した姿は、フォーマルすぎて、なんだか「おくやみ」にでも行くような感じだった。しかたなく——ちよつと派手すぎる気はしたが——、ピンクの方を手を取った。

デザインはシンプルだが、なにしろピンク。下に着るブラウスがふつうすぎてはバランスが悪そうな気がして、白だが、丸襟が大きく開き胸元にラッフルの飾

りがほどこされたものに着替えた。

その上からスーツを着てみると、襟元に着けられた共布のバラのコサージュとも合っていた。

その姿を姿見に映し、昭雄はちよつと首を傾げた。

これでいいとは思えるのだが、なにかが足りない気がした。

しばらく考えたところで思い当たり、鏡台のところに戻った昭雄は、そこにあつたアクセサリケースの

ふたを開けた。

その中から、パールのネックレスとそろいのイヤリングを出してつけてみた。

ふたたび姿見の前に立つと、その姿は、まさに「発表会に行く若い母親」だった。

これに合わせるには、明るい色のハンドバッグがい  
いのだろう。

そうは思ったが、今日は、お弁当や衣裳などを入れ

た大きめの鞆を持っていかなければいけない。それと、ハンドバッグの両方を持つのはおかしいだろう。

そう考え、このスーツにも合い、その鞆の中にも入りそうなベージュのセカンドバッグを、クローゼットから取りだした。

その中に、ハンカチやメイク直し用の化粧品を入れようとしたところで、昭雄は思わず声をあげていた。

「……あっ、こんなところにあったのかあ！」

バッグの中に、以前、家中を探し回った母子手帳が入っていたのだ。

たぶん、友紀枝が麻由を健診かなにかに連れていく時、このバッグに入れ、そのままにしていたのだろう。

母子手帳の表紙には、友紀枝の名と麻由の名が、友紀枝本人の筆跡で記されていた。

それを見たことで、昭雄は、今着ている服の本当の持ち主のことを思い出していた。



僕がこんな格好をしているのを、天国の友紀枝が見たら、なんと思うだろう……。。

罪の意識に似たものを感じた。

そんなふうには、昭雄が部屋の真ん中に立ちつくしている時だった。

かちやりと音がしてドアが開いた。

パジャマ姿の麻由だった。

起き出し、昭雄を探しに来たのだろう。

麻由は、驚いたように昭雄を見たあと、目を輝かせて言った。

「ママ、かわいい！」

その本当にしあわせそうな表情に、昭雄は、麻由に對しても、そして、友紀枝に對しても、罪の意識など忘れていいのかもしれないと思った。

8 異界のパ・ド・ドウ

ほぼ九時ぴったりに、啓介からの電話が入った。

昭雄は、友紀枝がこのスーツに合わせて買ったらしいピンクのパンプスを履き、麻由の手を引いて部屋を

出た。

マンシヨンの住人に見られるのではないかとびくびくしながら——実際には、やはり誰とも出会わなかったが——階下に下り、前の道まで出ると、啓介は車外に立ち、助手席のドアを開けて待っていた。昭雄ができるだけ人目に触れないようにという配慮だろう。

それに感謝しつつも、啓介がこちらを見つめてきたことに恥ずかしさが募り、会釈したままうつむいて車

に乗ろうとした。すると、その手がすっと伸びてきた。昭雄が持った大きめの鞆を受け取ろうということらしい。

啓介にそれを渡し、席に着くと、ドアも啓介が閉めてくれた。

麻由も、やはり啓介が開けてくれた後部ドアから乗り込んだ。

トランクに鞆をしまった啓介が、運転席に着き、車

を発進させた。

しばらく走ったところで、やっと、昭雄はきいた。

「変じゃ……ない？」

「ああ、俺が保証するよ。それなら、ぜったいにバレない」

どこか気負いのようなものさえ感じる口調で言った啓介の目に、軽蔑や嘲笑の色がないことを見てとり、昭雄は少しだけ安心した。

しかし、啓介だけでなく、亜希穂の目も気になった。この前一度、女装姿を見られているとはいえ、友達のパパがいきなり「ママ」になって現れれば、やはり、奇妙な思いを抱くだろう。

そう思い、後部座席に目をやると、亜希穂は最初、ちよつと驚いた顔で見返してきたが、すぐにつこりと笑った。もしかすると来るまでに、啓介が、それなりの説明をしたのかもしれない。

それでもやはり、亜希穂は昭雄のことが気になるよ  
うで、会場に向かう車中の会話にもどこかぎこちなさ  
が残った。しかし、麻由が何度も、昭雄に向かって「マ  
マ」と呼びかけるのを見て、会場に着く頃には、今日  
は昭雄のことを「麻由ちゃんママ」と思えばいいの  
だと、了解したようだ。

そんな亜希穂の変化と同調するように、じつは昭雄  
の側にもあったぎこちなさが消え、麻由だけでなく亜



希穂に対しても——あのはしかの時の麻由との会話の  
ように——やさしい女言葉で話すようになっていた。

発表会の会場は、区民会館のホールだった。

出演者が多人数だからだろう。麻由たちのバレエ教  
室は、ホールだけでなく、他にもいくつかの部屋を今  
日一日借り切っているようだった。ホールの楽屋に入  
りきれない出演者たちは、そんな会議室仕様の部屋に

割り振られていた。幼児クラスも、当然、楽屋からははみ出す口である。

そんな大部屋のひとつに入ったところで、啓介が、黒のレオタードの腰にセーターを巻いた若い女性と引きあわせてくれた。麻由たち幼児クラスを担当する先生だという。

「藤沢麻由の母でございます。いつもお世話になって  
います」

昭雄は、高校時代のあの「映画」撮影の事を思い出  
し、ひっくり返らない程度の高い声で、かつ、あまり  
大きな声にならないように——大きくなると、どうし  
ても低い音が混じるのだ——緊張しながら、あいさつ  
した。

先生は少しも疑う様子を見せず、「麻由ちゃんは、  
バレエの勘のようなものを持っていると思います。お  
母様も応援して、ぜひつづけさせてあげてくださいね」

と言った。教室の営業も兼ねたお世辞だったのかもしれないが、昭雄はなんだかうれしかった。麻由だけでなく、自分自身も認められたような気がしたのだ。

僕は：：あたしは、「お母様」。

しかし、そのあとも、次々に同じクラスの母親たちと引きあわされ、昭雄は、同世代の「同性」の前で女を演じつづけることに、冷や汗のかきどおしだった。

とはいえ、最初のあいさつ以外の会話は啓介が引き

受けてくれたので、昭雄は、脇で微笑んでいればよかった。

もつともそのせいで、母親たちにあらぬ誤解を与えてしまったようだ。昭雄に話しかけたことにさえ啓介が答えるのを見て、母親たちは、二人の関係にあれこれ想像をめぐらせ始めたらしい。ことに、「麻由ちゃんママ」がいつも来られない理由をきかれ、啓介が「彼女のところは母子家庭で、いろいろ事情もあつて

：：」などと説明するものだから、母親たちは、上品  
そんな微笑の中にも興味津々という眼差しを向けてき  
た。「子持ちの独り者どうしが、その境遇に同情し合  
ううち、デキてしまった」というストーリーが、彼女  
たちの頭の中で組み立てられたのは、まちがいなかつ  
た。

そしてもうひとつ、困ったことが起きた。

親たちがあいさつを交わし合う中、発表会に興奮気

味の子どもたちが、退屈してやんちゃしだしたのだ。

その先頭に立っているのは、亜希穂だった。

部屋の隅にあったホワイトボードを見つけて落書きし、やはり壁際に寄せられた演壇によじ登り、ついには、部屋全体を使って追っかけっこを始めてしまった。

部屋の中には、今日のために持ち込まれたらしい、バレエの練習用の大きな鏡が置かれていた。ふつうの姿見などより横幅がずっと広く、大人の全身を何人分

も映せそうだ。キャスター付きのスタンドに固定されてはいるが、大きいだけに、そんなに安定したものではないだろう。幼児とはいえ、勢いよく突進すれば、倒して割りかねない。そんなことになれば、大けがをする。

亜希穂が、他の子たちを先導してそのまわりを走りまわっているのを見て、昭雄ははらはらした。

脇を見ると、啓介は、他の母親たちへの対応に手一



杯で、そんな亜希穂に気づいていないようだ。

鏡のすぐ前で、他の子と、まるで取っ組み合いと言つてもいいようなじゃれ合いを始めた亜希穂に、昭雄は思わず声をかけていた。

「亜希穂ちゃん、だめよ。こっちいらっしやい」  
言葉づかいには注意を払ったつもりだったが、どうしても大きな声になり、地声が混じった。

言ってから、ひやりとし、他の母親を見やった。

しかし、母親の中に不審の目を向けてくる者はいなかった。

母親たちは、昭雄の今のなりを見て、同性だと信じ切っているようだ。多少、声が低くても、その先入観は壊れないらしい。

麻由が亜希穂の手を引き連れ帰ってくれたこともあって、昭雄はまた少し安心した。

ちようどそこで、さっきの先生が「幼児クラスさく

ん、お母さんといっしょに集まってくださ〜い」と言い、幼児クラスの親と子とその前に集合した。

先生が今日のスケジュールを説明している間、昭雄は――例のプリントを読んで、すでにそれを把握していたこともあり――ちよつと脇を見ていた。

昭雄の斜め前にさっきの大鏡があり、そこに、自分たち四人が映っていたからだ。

グレーのパンツに紺のブレザーを着た啓介は、この

部屋の中でただ一人の男性として——もちろん、本当はそうではないのだが——、ひとときわ背が高く見える。その傍らに寄り添うように、ピンクのスーツ姿の昭雄が立っている。昭雄の右手は麻由の手につながれ、左手は——いつの間にか——亜希穂の手が握っている。昭雄の腕をかかえこむようにした麻由と亜希穂の二人は、そのピンクのスカートに甘えるように身を預けていた。

そんな四人の図は——先刻の母親たちの邪推を超えて——、幸せを絵に描いたようなファミリーに見える。仲のよい若夫婦と二人の幼い娘たち……事情をまつたく知らない人が見たら、おそらくそう思うにちがいがなかった。

そんなことを考え一人照れたところで、昭雄は、さ  
らにおかしなことを想像していた。

もし、あの「映画」の中の「啓太」と「亜希穂」が、

パラレルワールドで生きていて、結婚して子供をつくったとしたら、こんな感じになっているにちがいない。

目の前に見えるそのイメージがあまりにも鮮明なので、昭雄には、ガラス板一枚向こうに、本当にそんな異界が存在しているようにさえ思えた。

「……じゃあ、みんな、リハーサルを始めますから、着替えてください」

説明の最後にそう呼びかけた先生の言葉で、昭雄は

やっと、そんな幻想から醒めた。

「ごめん、一人にして悪いけど、やっぱり俺は出てった方がよさそうだ」

「うん」

申し訳なさそうに言った啓介に、昭雄はうなずいた。この部屋には、幼児クラスだけでなく、その上の小学生のクラスも入っている。そしてその中には、すで

に高学年に達している女の子たちもいた。べつに誰かから出て行けと言われたわけではないのだが、着替えがはじまると、啓介はいたたまれなくなったようだ。

本来は昭雄だって同じ立場なのだが、こんな格好をしている以上、逆に、幼児二人をほったらかして出て行く方がおかしいだろう。

そそくさとドアを出ていく啓介を見送りながら、昭雄は一瞬、もしかしたら啓介は――麻由のことを気づ



かったのではなく――、こんな場面を想定して、昭雄に女装して来ることをすすめたのではないかと思つた。しかし、今朝からの啓介の態度を思い出し、それこそ邪推だろうと思ひ直した。

麻由は、自分ひとりで着ている服を脱ぎ、レオタードも器用に身につけ、しかも脱いだ服をたたんだりもしたが、亜希穂の方は、レオタードをひとりで着られず、昭雄が手を貸さなければならなかつた。それを手

伝っている時も、そのあと、チュチュを着けさせ形を整えてやった時も、亜希穂は、昭雄の顔をうれしそうに見つめてきた。

そして、そのくせっ毛にブラシをかけて整え、猫の耳の髪飾りをつけてやった時には、昭雄の耳もとに口を寄せ、こう言った。

「あのね、亜希穂も、ママって呼んでいい？」

昭雄は驚いてその顔を見やったが、至近距離から訴

えるつぶらな眼差しに、とてもだめとは言えなかった。  
この子もまた、母を失くした子なのだ。

午前中のリハーサルは、関係者以外立ち入り禁止と  
いうことだったが、幼児クラスの親だけはホールに入  
れてもらえた。子どもがぐずりだしたような場合の対  
策だろう。

麻由と亜希穂は二人とも——それぞれべつの意味で

——ぐずり出すようなタイプではないが、啓介も昭雄も、客席からそれを見物した。

隣の席に座った啓介が、その手にビデオカメラを持っているのを見て、昭雄は「しまった！」と思った。

女装やあれこれに頭がいっぱいで、持ってくるのをすっかり忘れていたのだ。

と、啓介は、そんな昭雄の表情に気づいたらしい。

「だいじょうぶ。麻由ちゃんの分も、しっかり撮るか

ら」

——と言った。

そして、幼児クラスのリハーサルが始まるやいなや、座席を立ち、舞台のかぶりつきまで行ってカメラをまわしつづけた。隣どうしに並んで踊る亜希穂と麻由だけをアップで追っているらしく、踊りのフォーメーションが変わったり、先生が前に立ったりすると、なりふりかまわず舞台前を走りまわった。

その意外な親バカぶりがおかしくて、昭雄の方は、わが子よりも、啓介ばかりを目で追っていた。

他のクラスのリハーサルはまだつづいていたが、一時過ぎには、幼児クラスはもとの「臨時の楽屋」に戻った。そこで、発表会が始まる三十分前までに昼食をすませてくれと言われた。

昭雄は、先刻、この区民会館に入ってくる時、中庭

に木のベンチとテーブルが見えたのを思い出し、そこで食べようと提案した。

「でも、子どもたちは衣裳のままなんだろう。寒くないか？」

啓介がそう言うのを聞いて、昭雄はにっこりと微笑んだ。

「だいじょうぶ」

そして、持ってきた鞆の中から、麻由のブルゾンと

コートを取り出した。

「チュチュだけとって、これを上から着ればいいですよ。子どもたちが食べ物をごぼして、衣裳を汚しちゃいけないと思って持ってきたの。そっちはたぶん、そこまで気がまわらないと思って、二着分ね」

と、啓介は頭をかきながら、こう言った。

「さつき撮ったビデオは、かならず、DVDに焼いて、さしあげますから」



「取り引き成立ね」

昭雄はそう言って笑い返した。

なんだか、いつもより、啓介と話しやすい気がした。

中庭で食べたおかげで、昼食は、ちよつとしたピクニツク気分になった。

子どもたちも、発表会の高揚感とも相まって、楽しそうだ。

昭雄の作ったお弁当が、一人分ずつ分けたものでなく、おにぎりやサンドイッチ、それに十品近いおかずをそれぞれタツパなどに詰め、みんなでつまむ形だったことも、アットホームな雰囲気かもを醸し出していた。

啓介と亜希穂は、どのおかずにも、いちいち「おいしい！」と言って食べてくれた。

昭雄は、そのひとことひとことに心が弾むような感じを抱いていた。

じつはこの場で、こんなことがあった。

昭雄は、子どもたちに生野菜をとらせようと、サラダも用意したのだが、ドレッシングに浸した状態では青菜類がしなびてしまおうと思い、ドレッシングは別にして小瓶に入れてきた。ところが、衣裳も入れた鞆の中でこぼれないようにと、きつく絞めすぎたせいか、そのふたが開かない。

昭雄が、瓶を持って必死に開けようとしていると、

それを見ていた麻由がこう言った。

「パパに、頼めば」

昭雄は、その言葉に何の疑問も持たずに、啓介に渡していた。

啓介の方も、何のためらいもなくそれを受け取った。

そして、啓介の手の中でふたが開いたところで、啓介と昭雄はやっと今のやりとりの奇妙さに気づき、ぎよつと顔を見合わせた。

しかし、子どもたち二人が平然とした顔で食事をつづけているので、大人二人は、肩をすくめ合うしかなかった。

亜希穂が昭雄のことを「ママ」と呼び始めただけでなく、麻由までが啓介のことを「パパ」と呼ぶようになっていた。

昭雄は、もしかしたら自分は、さつき垣間見たパラレルワールドの中に迷い込んでしまったのではないか

と感じた。

「お化粧、亜希穂ちゃんの方もお願いできますか？」

部屋に戻るといきなり、バレエ教室の先生が昭雄に言った。

一瞬、何のことだかわからず、部屋を見まわすと、母親たちが、子どもに口紅などを塗ってやっていた。

「……あ、は、はい」

昭雄はあわててうなずき、麻由と亜希穂を椅子に座らせた。

どうやら、こんな発表会では、幼児でもメイクするのが普通らしい。

この子たちの肌ならそんな必要はないと思ったが、いちおう、ファンデーションを薄くのぼし、あとは、チークを刷<sup>は</sup>き、口紅を塗った。

子どもたちにそんなことをしてやっていると、昭雄

は、自分が、いつかの恭子先生になったような気がした。

そのメイクのせいで、麻由と亜希穂の顔は、なんだか大人びた感じになった。

二人は、例の鏡の前まで行き、メイクした自分の顔をずっと見つづけていた。

「女の子って、あんなふうにして、できていくんだ：

：



昭雄が独り言のようにつぶやくと、隣に立って見ていた啓介も、なんだか感慨深げに言った。

「ああ。やんちゃな亜希穂まで、仕草が、なんだか女っぽくなってる」

昭雄は、「メイクの魔力」というようなものを感じていた。

：：そう。あの時の僕も、そうだったな。

昭雄はいったんそんなふうにしてから、気がつい

た。

……いや、今もか。

その「メイクの魔力」のおかげもあったのだろう。

発表会が始まり、最初の演目だった幼児クラスの「子猫のダンス」の舞台上、麻由と亜希穂は、いかにも誇らしげに踊り通した。

まあ、バレエといっても、幼児クラスのそれは、「お

遊戯」に毛の生えたようなものでしかなかったのだが、二人とも、いっぱしのバレリーナになったつもりだったようだ。

その四分ほどの演技中、啓介はまた——今度はさすがに、かぶりつきまでは行かなかったが——ビデオを撮りつづけていた。

朝からいろいろ大変だったが、今日は、この四分のために来たわけだ。

昭雄は、ふつとため息をついた。

舞台からさっきの部屋に戻った麻由と亜希穂を、朝  
着てきた服に着替えさせ——二人とも「お化粧はとら  
ないで」と言ったので、メイクはそのまま——、あ  
とは、四人で客席に並んで発表会のつづきを見た。  
もつとも啓介は、いつの間にか、座席に座ったまま  
舟を漕ぎだしていた。

昭雄にしても、バレエの知識があるわけではないので、退屈なことにかわりはない。特に、二部構成の第一部は、バレエ教室の生徒たちの群舞を中心とした小品が連続するだけで——年齢が上になるに従って、徐々にテクニクが高度になるのはわかるが——あまり変わり映えがしないのだ。

わが子が出ていないと、とたんに興味を失う親たちとちがい、麻由と亜希穂は、そんな「おねえさんたち

の舞台」を、ずっとあこがれの眼差しで見っていた。この年齢でこれだけ集中できているところを見ると、二人とも、本当にバレエが好きなのだろう。

一部が終わり、十分の休憩を挟んで、第二部が始まった。

こちらは、バレエ教室の母体になっているバレエ団の、プロの踊り手たちを中心とした舞台で、チャイコ

フスキー作『眠れる森の美女・第三幕』ということだった。

たしかに、そのテクニクには、第一部と格段の差がある。それは、昭雄の素人目にもよくわかった。

ただ、その内容は、昭雄には、第一部とあまり変わらないように思えた。

舞台構成は、いちおう、第一部のような「ぶつ切れ」ではなく、宮殿の大広間といった感じの装置の前で連

続して進行する。しかし、そこになんらかのドラマがあるかというと、必ずしもそうは見えない。さまざまな扮装で着飾った踊り手たちが次々に——いわば脈絡なく——登場し、少しずつ目先の変わった踊りを踊るだけ。お話の内容が、まるで見えてこないのだ。

デイズニーのアニメとかで、「眠れる森の美女」という童話のだいたいのストーリーは知っているつもりだ。ところが、いくら見ても、今舞台上で演じら



れているバレエが、ストーリーのどの部分に当たるのかわからない。主人公のお姫様——たしかオーロラという名だった——が、十六歳の誕生日に魔女の呪いのかかった糸車の針で永い眠りに落ちるシーンもなければ、百年後、やって来た王子様が魔女と闘う場面もない。ヤマ場のはずの、王子のキスでオーロラ姫が眠りから目覚めるシーンすら出てこないのだ。

これはいったい、どういうことなのだろう？

昭雄は首を傾げた。

そして、入口で配られたパンフレットの解説を読んで、やっとその謎が解けた。

そもそも、この「第三幕」は、「眠れる森の美女」の本筋とはまったく関係ないらしい。「第二幕」のラストでオーロラが王子のキスで目覚めたあとの、二人の結婚式のシーンなのだという。そこに、さまざまなたくまの登場人物たちがお祝いに駆けつけ、踊りを披露

する。それだけの構成だ（そのくせ、全編の中でいちばん長いらしいが）。

道理で、「長靴を履いた猫」だとか、「赤頭巾ちやん」だとか、関係ないキャラクターが登場したはずだ。

要するにこれは、チャイコフスキーが、バレエファンのためにつけ加えた、バレエテクニクの見せ場集なのだ。だからこそ、「多くのバレエの発表会で上演される」と、解説にはあった。第一部とあまり変わら

ないという昭雄の感想は、いわば正しかったわけである。

そう納得し、バンフレットから目を上げると、舞台では、王子様とお姫様の踊りが始まった。今読んだ解説によれば、ファイナーレに当たる「グラン・パ・ド・ドウ」だろう。バレエでは、男女のデュエットのことを「パ・ド・ドウ」というらしい。主人公のオーロラ姫とデジレ王子による喜びの舞だ。

これもまあ、これ見よがしにテクニックを並べ立てたものなのだろうと思いつながら、舞台上のそのバレエを見ているうちに、昭雄は、今までになく引き込まれていくのを感じた。

昭雄の目を釘付けにしているのは、バレエ団のプリマが演じるオーロラだった。

王子の差し出す手に、おずおすと差しのべるその指先には、十六歳の王女の初々しさが匂っていた。王子

の力強いリフトに差し上げられ、体全体を反り返らせるそのフォルムには、百年の暗い眠りから解き放たれた悦びがほとぼし迸っていた。王子の腕の中でともに踊るその肢体には、ついに愛する人に出会えた幸せが満ち溢れていた。

たとえストーリーがなくなるとも、そのオーロラの体が、動きが、すべてのことを物語っている気がした。これが、バレエというものなのだろう。

昭雄は、ふと、その十六歳のオーロラに、十六歳の時の自分を重ね合わせて見ていることに気がついた。

あの時、僕は、魔法の力で目覚めたのかもしれない。そう、「メイクの魔力」……そんな魔法で、永い眠りから目を覚ましたにちがいない。

でも……。

僕はオーロラではなかった。

いったんは目覚めたのに、結局また、すぐ眠りにつ

いたのだ。

：：いや、そうでもないのかもしれない。

さつき見た、鏡の向こうの世界。あのパラレルワールドで、十六歳の時の僕は、ずっと生きつづけ、成長していたにちがいない。こっちの世界で、僕が眠っている間に：：。

そして今、たぶん、あのパラレルワールドはガラス一枚ほどの近さにある。たぶん：：そんなに苦もなく



行けるのだ。

もうひとつの魔法さえあれば。

たとえば、王子様の……。

あの時のように……。

ふと横を見ると、真剣に舞台を見つめる麻由と亜希穂をはさんだ席で、啓介はまた寝息を立てていた。

*memory 4*

「ラスト一周だ。ぶっちぎれーっ！」

「このお、ジャマだ。どけ！」

「そうはいくか！」

「……げっ！ クラツシユかよーっ！」

「ゴ~~~~ル！」

「くっそー！」

「……おいっ！ お前ら、なにやってんだ！ 打ち合

わせ始めるって言うてるだろうが！」

レーシングゲームのブースで盛り上がっていた福

田、山波、井沢の三人に向かい、林田が怒声を上げた。

「まったたく！　遊びでやってんじやないんだからな」  
：：いや、高校生の自主映画撮影なんて、大人から  
見れば、しよせん遊びでしかないだろう。

ちよつと離れた場所からその様子を見ていた昭雄  
は、そう思った。

昨日と同じようにメイクし衣裳を着けているが、一  
晩おいたせいで、冷静な目が戻っていた。いや、そう  
ではない。より正確に言えば、冷静な目を取り戻した

いと思っていた。

：：そう、これは、遊びのようなもの。それ以上の意味なんてないんだ。

昭雄は自分自身にそう言い聞かせながら、日曜で、すでに午前中から客が増え始めているゲームセンターのホールを見渡した。

と、そこで、やはり何か考えるようにホール内を見ていた啓介と目が合った。

昭雄はどこかおろおろと視線をそらし、ミニスカートのプリーツの乱れを直すふりをした。

ロケ二日目。

昨日同様、カラオケボックスに集合したメンバーは、それぞれに着替えや機材の準備を終え、今日最初の撮影場所であるこのゲームセンターへと移動した。

林田や飯田、それに啓介など数人は、扮装に時間の

かかる昭雄をカラオケ店のロビーで待っていてくれ、その分、遅くなったのだが、来てみると、先に着いていた福田たちは、さっそくゲームを始めていた。それで、林田の怒りが爆発したというわけだ。

「いちおう、店に交渉して撮影の了解はとってある」  
福田たちがしぶしぶゲーム機を離れたところで、やっと打合せが始まった。

「ただ、くれぐれも他の客のじやまにならないようにやってくれという話だ。だから、ここでは、いちいち切らずに全体を通してやって、それを、隠し撮りする」

「隠し撮り？」

「ああ。ここだけでなく、今日の午前中については、啓太と亜希穂のデートシーンの点描が中心になる。だから、基本的にその手法でいくつもりだ。カメラは、できるだけまわりの人間に気づかれないように陰に隠



れて二人をねらう。二人は、あまりそれを気にせず、普通の恋人どうしのように振る舞ってくれればいい」

林田の言葉に、昭雄と啓介は思わず顔を見合わせ、そしてすぐ、あせったように目を泳がせた。

「いいカットを編集でつなぎ合わせて、そこに音楽をのせるつもりだ。絵だけで音は録らないから何を話しててもいいが、恋人どうしの楽しそうな会話に見えるようにはしてほしい」

そんなこと言われたって、何をどう話せばいいって  
いうんだ……。

昭雄が冷静でいようと思っっている矢先から、林田は  
動揺させるような要求ばかりしてくる。

「ただ、シナリオにもあるように、この店の中では、  
多少、段取り芝居をしなきゃいけない」

林田のその言葉に、今日も「野次馬整理」に来てい  
る——本人たちが野次馬でもあるわけだが——荒川と

井沢もふくめ、全員が、手にしたシナリオをぱらぱらとめくった。

○ゲームセンター・店内

入ってくる啓太と亜希穂。

\*

\*

雰囲気に気後れしつつ、物珍しげにきよ

ろきよろする亜希穂。

そんな亜希穂をおかしそうに見やる啓太。

やがてゲームをはじめる二人。

\*

\*

真剣な表情で格闘技ゲームをする啓太。

見ていた亜希穂、画面のキャラクターが  
KOを決めると、拍手。

---

\*

二人並んで、対戦型テトリスをする啓太と亜希穂。

アイテムを器用に落としていく、余裕の

啓太。

あせっている亜希穂。

ゲームオーバー。

啓太が得意げな顔を向けるので、亜希穂

\*

は悔しそうにふくれる。

しかし、すぐに顔を見合わせて、吹き出す。

\*

\*

パンチングポールをたたく啓太。

今度は、タイミングを外し、たいした点が出ない。

それに、にんまりする亜希穂。

照れ笑いで頭をかく啓太。

\*

\*

シューティングゲームのピストルをかまえ、画面のエイリアンをねらう亜希穂。

当たらない。

と、背後から近寄り、手を添えて撃ち方を教える啓太。

今度はみごとに命中する。

亜希穂、うれしそうに笑うが、頬ずりするほど近くにあった啓太の顔に気づき、どきまぎと目を泳がせる。

\*

\*

UFOキャッチャーの透明ケースに顔を寄せ、中のぬいぐるみを指さす亜希穂。

「まかせとけ！」という表情でうなずき、レバーを握る啓太。



ケースの中でクレインが動き出す。

と、その時、入口を入ってくる謎の男 A  
・ B。

ホール全体に目を走らせるが、男 A が亜  
希穂に気づき、B に耳打ち。

左右に分かれ、背後から亜希穂に近づい  
てくる男 A ・ B。

マシンの操作に夢中で、それに気づかな

い啓太。

そんな啓太を、見つめている亜希穂。

じりじりと近づく男A・B。

その手が、両側から亜希穂の体に届こう

とした瞬間――

ふっと振り向く啓太、気づき――

啓太 「あっ、亜希穂、あぶない！」

一瞬早く、亜希穂の手をとって、引き寄

---

せる。

そのまま、走って逃げ出す二人。

追おうとした男A・B、ちようどやって

来た人垣に行く手を阻まれる。

「前半の、二人がゲームで遊ぶところは、必ずしもこのとおりでなくていい。だいたいこの線に沿って楽し

そうにやってくれれば、さつきも言ったように、それを隠し撮りして編集する。ただ、UFOキャッチャーのところは、男A・Bとのからみがあるし、ひとことだけだがセリフもある。その声も録らなきゃいけない。

二人がUFOキャッチャーの前まで行ったところで、全員が綿密な段取りどおり動く必要がある」

「ちよつと待った。この最後の、男A・Bの行く手を阻む人垣っていうのは、どうするんだ？」

飯田がきいた。

「それは、俺とお前でやればいい」

「えっ、ふたりで『人垣』か？」

「じゃあ、荒川と井沢も」

「だけど、僕ら、他のシーンにちがう役で出てるぜ」

荒川が投げかけた疑問に、林田は――

「あの時とは衣裳もちがうし、たぶん、わからんだろ。

ま、気にするな」

——と、けっこういいかげんなことを言い、それから、その「綿密な段取り」とやらの説明に入った。

打合せを終え、いったん店外でスタンバイした啓介と昭雄は、トランシーバーを持った飯田のキューで、ふたたびホールに入ってきた。撮影が始まったのだ。

ホール内を歩きながら、昭雄がまわりを見まわしているのと、啓介がなんだか無理に話題をつくるという感

じで言った。

「お前、あんまり、こういうところ、来たことないんだろ？」

今は音声を録っていないから、昭雄自身のことをきいたのだろう。言葉づかいからいっても「亜希穂」に對するものではなかった。

「たまには来るよ」

実際、啓介の言うとおりののだが、「昭雄自身」と

しては、素直に認めたくないような気がした。

「でも、なんか、珍しそうに見てるから」

「そりゃ、シナリオにそう書いてあるからだろ。きよろきよろしろって」

昭雄の方も、「亜希穂」の言葉づかいではなくなっている。

「そうか。そうだったな」

なんだかぎくしゃくして、しらけた会話だ。



これではとても、林田の言う「楽しそうな会話」には見えないだろう。ましてや「恋人どうし」には。

「それにしても、林田のやつ、好きなこと言ってくれよな」

啓介がそう言うのを聞きながら、昭雄は「きよろきよろする」ふりをして林田の姿を探した。と、柱の陰からカメラを向ける倉木の隣で、林田はやはり渋い顔をしていた。

これではまずい。最初からこれでは、このあとのシーンのはりきれないだろう。林田は、いいカットだけ編集すると言っていたが、このままでは、そんなカットはひとつもなかったということになりかねない。

どうにかしなければいけない。

昭雄はそう思いながら、啓介の顔をちらりと見た。

その顔はどこかこわばっていた。いや、撮影で緊張しているというのとはちがう。無理に冷静さを装って

いるという感じなのだ。

たぶん、僕も今、同じような顔をしているんだろうな。

昭雄はそう感じた。

昨日あんなことがあって以来、啓介といると、どこか動揺してしまふ。啓介も、きつとそうなのだろう。

それで、二人とも、一生懸命自分を抑え、冷静になろうとしている。たぶん、そういうことなのだろう。

でも……。

そこで昭雄は、先刻、「冷静に」考えたことを思い出した。

：：そう、これはしよせん遊びなのだ。それ以上の意味なんてない：：けっして本気の話ではないのだ。

それなのに、変に意識して、冷静になろうなんて思っている方が、よほどおかしいだろう。

遊びなら、もっと遊んでしまえばいい。何も気にせ

ず、思いっきりやってしまえばいい。

そう思っていると、ちやうど啓介が「まず、どれからやればいいんだっけ？」ときいてきた。

それで昭雄は、ちよつと小首を傾げるようなそぶり  
で、思いっきり女の子っぽく、思いっきりかわいらし  
く、笑いかけた。

「……んふ、最初は、格闘技マシンでしょ。がんばつ  
てね」

啓介はそれに一瞬たじろいだ顔をしたが、そんな昭雄の表情と「格闘技マシン」という言葉のギャップが可笑しくもあったのだらう。「なに、それ」と、吹き出すように笑い返してきた。

遠くで、林田がうなずくのが見えた。

そんなふうに見悟を決めた——べつの言い方をすれば「開き直った」——昭雄が、女の子っぽくリードし

たおかげで、「ゲームで遊ぶ二人」のシーンは、思った以上に快調に進んだ。

ちよつと驚いたのは——さほど作為したつもりもないのに——、ものごとがほぼシナリオどおりに進んだことだ。もしかしたら林田は予言者なのではないかと思えるほどだった。

格闘技ゲームでは、啓介の操るキャラクターが、追いつめられた末、得意技らしい「昇竜三段蹴り」でみ

ごとに強敵を倒し逆転勝利した。見ていた昭雄は、思わず拍手していた。

テトリスのブースに並んだ啓介と昭雄は、ゲームが始まると撮影も気にせずブロック落としに夢中になり、その結果、昭雄が大負けした。啓介が「ま。実力差だな」などとうれしそうに言うものだから、昭雄はぷつとふくれてそれをにらみつけ、そしてそこで――あまりにシナリオどおりであることに気づき――二人



とも吹き出していた。

パンチングマシンでは、最初こそ啓介はみごとなパンチを入れ高得点をマークしたが、調子にのってやっただ二回目の挑戦で——これも、べつの意味でみごとに——ねらいをはずした。ただ、シナリオとちがったのは、その拳をマシンの角にぶつけてしまい、ひどく痛がったことだ。心配になった昭雄は、思わず駆け寄り、「だいじょうぶ？」とその手を取って、赤くなつた甲

を撫でていた。

シューティングゲームでは、実際ヘタクソで、画面のエイリアンにあざ笑われてばかりいる昭雄を、見るに見かねた啓介が自然に手を取ってサポートしてくれた。そして昭雄は、やはりシナリオどおり、それにどぎまぎした。ただし、どぎまぎした理由は、必ずしもシナリオどおりではなかった。ピストルを突き出す昭雄の背中にぴったりと寄り添った啓介の体に、昨日、

抱きついた時に感じたのと同じ「啓介の臭い」を意識したからだ。

林田と倉木は、客たちに目立たないように壁際を移動しつつ、さまざまなアングルからそんな二人を撮っていたようだ。しかし、その時点で、昭雄はもう、それさえ忘れていた。

「そろそろ、UFOキャッチャーに移動しないと、立

花たち、しびれを切らしてるな」

ピストルを握る手を背後から支えてくれながら、耳もとに口を寄せて言った啓介の言葉に——いったん、くすぐったそうに肩をすくめたあと——、昭雄はやつと我に返った。

「……あつ、……う、うん。そうね」

ゲームセンターの外では、立花、福田、そして飯田の三人が、トランシーバーからの「きっかけ」を待つ

て、ずっとスタンバイしているはずだ。もう三十分近く二人でこうして遊んでいるから、福田あたりは、飯田にさんざん文句を言っているにちがいない。

ちようどそこでゲームオーバーになったこともあり、昭雄は、持っていたピストルをホルダースタンドに戻し、啓介のあとに従った。

UFOキャッチャーの前まで来たところで、シナリオの記述を頭の中でたどり、昭雄は、その透明プラス

チツクのケースに顔を寄せた。

中に折り重なったおもちゃ類の中から、ピンクの力バのぬいぐるみ——なぜカバか？ときかれても困るが——を見つけ指さす。

「あれ、かわいい」

シナリオにはなかった言葉だが——それに、このあたりまでは編集時に音楽が被さって意味がないのかも  
しれないが——、言ってみた。

じつは、カメラからは映らないマシンの陰で、山波がうずくまるようにしてマイクを突き出していたからだ。

と、啓介も「まかせろ！」と言いながらうなずき、ポケットからコインを出して投入口に入れた。

ちらりと見やると、荒川と井沢が、ちようどカメラのフレームからはずれぬあたりに立っていた。あとで「男A・Bの行く手を阻む人垣」役をやるために待機

しているのだ。

啓介がレバーを握り、ケースの中のクレーンがかすかなモーター音とともに移動を始めた。

気がつくのと、物陰からカメラを構える倉木のそばにいた林田も、大まわりしながら近づき、荒川、井沢と合流しようとしていた。

ということは一昭雄からは背後になって見えないが——「男A・B」役の立花と福田も、すでに入口を



入って、じりじりこちらに近づいているはずだ。

このあと、飯田も目立たないようにゲームセンターの中に入り、荒川たちのところまで来る。飯田がそこに到着した時点で、林田がキューを出す。そこで、立花と福田は昭雄に襲いかかろうとし、啓介が振り向く。「人垣」役たちも、立花と福田のじやまをするために動き出す。それが、先刻、林田が決めた「段取り」だった。

UFOキャッチャーを操る啓介に目を向けながらも、昭雄は、その視野の端で林田の姿をとらえていた。立花たちの動きを見ずにタイミングよく振り返らなければならぬ啓介も、マシンに集中するふりをしながら、実際は林田からのキューに神経を集めているにちがいない。

気がつくのと、林田たちの方に近づいてくる飯田の姿もちらりと見えた。

もうすぐだ。

昭雄がそう思った瞬間だった。

二の腕あたりを、背後から誰かがつかんできた。

：：えっ？ まだキューは出てないのに。

昭雄は、立花か福田がタイミングを間違えたのだと思った。

と、次には、昭雄の耳のそばで、押し殺した、それなのにどこか凄みのある感じの声でした。

「なんかさつきから、見せつけてくれるじゃねえか」

：：えっ？ そんなセリフ、あったっけ？

昭雄はまだ、そんなふうに考えていた。

しかし、なんだか違和感がある。

今のは、どう考えても立花や福田の声じゃなかった気がする。

昭雄は不安を感じ、振り返って確かめたかったが、カメラがまわっていることもあり、しばらくその体勢

のまま、表情を取り繕っていた。

と、ふたたび、今の声がした。

「なんだ、シカトかよ」

目を泳がせると、やって来た飯田が、あ然とした顔を向けて立ち止まった。そのそばで林田や荒川、井沢もあんぐりと口をあけている。自分のすぐ後ろで想定外の事態が進行していることは、たしかだった。

UFOキャッチャーのレバーを握った啓介は——そ

んな林田たちの様子にちよつと不審そうにしているが——、まだ、何が起こっているかわかっていないようだ。きっかけを待ちながら、すでに目標物まで到達しているクレーンをもてあましている。

「かわいいと思つて、スカしてんじやねえぞ、このスケ！」

耳もとの声がそう言った。と同時に、腕をつかんだ手に力がこもり、むりやり後ろを向かされていた。

「……ふッ、やっぱり、このあたりじゃ見かけねえ、ハクいねえちゃんだ」

昭雄に異様に顔を近づけ言ったのは、ポマーードか何かで頭をオールバックふうになでつけ、眉毛を剃り、金糸の刺繍の入った派手なジャンパーを着た男だった。

年齢は、昭雄たちとあまり変わらない、たぶん十代なのだろう。でも、ふだん昭雄の周囲にいる十代には

まずいないタイプの、異様な迫力があつた。

「そんな、なまっちよろい男なんかやめて、俺とつきあわねえか」

男が言った。

その息が顔にかかり、昭雄は自然に体がぶるぶると震えるのを感じた。

反射的に顔を逸らし、この場から逃げようとしたが、男は、昭雄の腕を握る手にさらに力を込めてきた。二



の腕の筋肉がきりきり痛み、昭雄は、動きを止めざるを得なかった。

ふと気づくと、立花と福田が、男のすぐ後ろまで来ている。

それで昭雄は、救いを求めるように二人に視線を走らせた。と、それまで驚いたようにこちらを見ていた二人は、なんと、その視線から目をそらせてしまったのだ。

ふだんあれこれ小生意気なことを言っている、受験校の生徒は、この手の「本物の不良」にはからきし弱い。それは、昭雄自身よくわかっていたが……。

……にしても、そりやないだろう！

恐怖の中にも昭雄がそう思っていると、その時、昭雄と男の間に割り込むというように、誰かが体を入れてきた。

「やめろよ。その手を離せ」

啓介だった。

この状況にやっと気づいて、とっさに動いたらしい。

啓介の言葉に、男は昭雄の腕を放したが、それは必ずしも啓介の言うことをきいたというわけではなさそうだ。

次の瞬間には、代わりに啓介の胸ぐらをつかみ、絞めあげるようにしていた。

「はあくん、ひ弱な坊やだと思ったが、少しは骨があ

りそうじゃねえか。自分の女は、体を張って守るってか」

男はやはり、声を張り上げることなく言った。

人が混み始めているゲームセンターの中で、大きな騒ぎを起こすつもりはないということかもしれないが、押し殺した声であることが、逆に恐怖感を募らせる。啓介に顔を寄せ、下からねめるように見てくる一重まぶたの三白眼は、次の瞬間何をするかわからない

不気味さを漂わせていた。

しかし啓介は、そんな男の視線にもたじろがず、真っ直ぐにらみ返しているようだ。背中にすがりつくような形になっている昭雄からはその顔が見えないのだが、ぴんと張った背筋で、それを感じ取れた。

ただ、啓介が自信を持ってそうしているかといえは、必ずしもそうではないようだった。昭雄が目を落とすと、真っ直ぐ下に垂らした啓介の腕の先で、小指と薬

指がかすかに震えていた。

大声で言い争ったりしないぶん、ゲームセンターにいる客の大半は、このいさかいに気づいていないが、それでも、すぐ近くにいる客たちは、緊迫した空気の中、男と啓介を見つめていた。

と、男が、まるで自分の額で啓介の額を押し上げるだけでもいうように、さらに顔を近づけた。

「おめえが勝負をつけたっていうんなら、俺はやっ

てもいいんだぜ」

まさに一触即発の雰囲気だった。

そして、いったんその「勝負」が始まれば、たぶん啓介は、一撃でやられるだろう。これはもう、「遊び」などではなかった。

恐怖感と、啓介に対する心配を胸にかかえ、昭雄は、ふたたび救いを求めるように、まわりにいるメンバーたちに目を走らせた。

立花と福田は、今は体ごと横を向いて、あたかも他人のような顔をしていた。

男のすぐ足もと、マシンの陰にマイクを持ってうずくまっている山波も、男に気づかれまいとでもいうように、さらに小さくなって顔をそらしていた。

少し離れた物陰でカメラを向けている倉木は、それが自分の仕事とばかり、ファインダーから目を離そうとしない。



林田や飯田、それに荒川と井沢は、四人でかたまっている分、さすがに目をそらしたりはしなかったが、その場を一步も動けない感じだ。

相手はたった一人。男が八人もまわりを取り囲んでいるというのに、誰一人として啓介に手を貸そうとは思わないのか。

昭雄は、仲間に対して、情けなく、また恨めしくも思った。

もつとも、その「男」の中から自分を除外していることには、不思議と矛盾を感じていなかった。

さらにしばらくにらみ合いがつづいたところで、啓介は、まるで基本的なことを確認するともいいうように、はつきりと落ち着いた口調でこう言った。

「彼女は、僕の恋人だ。筋の通らないことは、やめてほしい」

と、男は、さらにしばらくにらみ返したあと、いき

なり、ふっと笑った。

「おめえ、いい度胸してっじやねえか」

そして、ちよつとあきれたという表情で、いきなり、啓介の襟もとをつかんでいた手を放した。

「ま、いいや。なかなか似合いのカップルだぜ」

そう言う男にもう一瞥くれたあと、啓介は昭雄の方を振り向いた。

「亜希穂、行こう」

やはり毅然とした口調でそう言い、昭雄の肩を包むように抱いてきた。

そのまま、ゆっくりとした歩調で——本当はすぐにも走り出したい気分なのだろうが——出口に向かつて歩く啓介の腕の中で、昭雄は、啓介のことを誇らしく思っていた。

そして、それはまた、自分自身の誇りのようにも感じていた。

「彼女は、僕の恋人だ」……そんな勇気ある啓介から、「彼女」と言われ、「恋人」と言われ、守られたということに、「亜希穂」の心はふるえていた。

昭雄は、かろうじてそれを、「亜希穂の気持ち」としてとらえていたが、その心のふるえは、やはり「遊び」の範疇はんちゆうを越えていた。

ゲームセンターを出て一ブロックほど行ったところ

で待っていると、メンバーたちが、三々五々、追いかけてきた。

最後に、ビデオカメラの三脚をかついだ倉木が来たところで、全員が揃った。

しばらくは、誰も口を開こうとしなかった。

みんな、今しがた直面した「勇気のない自分」と折り合いをつけるために、多少の時間があるようだった。

昭雄は、さっきのメンバーたちの態度に嫌味のひと

つも言っつてやろうと思つていたのだが、そんな、それ  
それに落ち込む様子を見て、許す気になつていた。と  
いうか、そんな「男の子たち」のことを「かわいい」  
とさえ思つていた。

そう思えたのは、やはり啓介がみんなを責めようと  
はしなかつたから——そして、そんな啓介の態度を、  
また自分自身の誇りのように感じる「亜希穂の気持ち」  
になれたから——だった。

自己嫌悪の淵から最初にはい上がってきたのは、やはり林田だった。

「倉木、今の、撮ってたか？」

「あ、ああ」

倉木が答えると、林田はつづけた。

「ゲームセンターのシーンは、男A・Bはやめて、今のでいこう。やっぱり、本物の迫力にかなうものはない」



「し、しかし、亜希穂は国家機密を知ってるからこそ、追われてるわけで、チンピラにからまれるっていうのは、ちよつとちがうんじゃないのか？」

飯田がおずおずと反論すると、林田はさらにこう強弁した。

「亜希穂をつけねらっているのは、なにも情報機関の人間に限らない。国家機密をねらって、外国のスパイやマフィアだって暗躍してるんだ」

あの男はとてもマフィアには見えないと思いつつも、誰ひとりとして、もう一度ゲームセンターに戻つて撮り直そうとは言わなかった。

それにしても、監督というのは、やはり、精神的にタフでないとできないものらしい。次の撮影現場に着く頃には、林田はすっかり落ち込みから立ち直り、先刻の出来事を利用しようとさえ考えたようだ。

「さつき、啓太は亜希穂の肩を抱いて出て行ったんだ。ここからのデートシーンで、二人が手もつないでないというのはおかしいだろ。さつきみたいなのに、肩を抱くなり、せめて腕をからめるなりしてくれ」

そんなことを言い出した林田に、啓介と昭雄は照れしたが、じつは昭雄はそんなにいやだとは思っていないなかつた。

むしろそうしてくれる方が、自分はどんどん役に入

り込める気がした。先刻から感じている「亜希穂の気持ち」を持ちつづけたいと思っていた。

だからそのあと、若者向けのシヨップが並ぶモールや、街角のパブリックスペースや、大学のそばの並木道などで撮った「デートする啓太と亜希穂」のシーンでは、肩を抱いてくる啓介に身を預けるようにして歩いた。啓介の手が離れると、その腕を抱くように自分の方から腕をからめさえした。

朝方、こんなシーンでどんなことを話したらいいの  
か思い煩ったのがうそのように、会話も弾んだ。

「ふだん、どんな音楽きいてるの?」「小さい頃、ど  
んなアニメが好きだった?」「中学は共学だったの?」  
「血液型は?」「兄弟はいるの?」「お父さんは、ど  
んなお仕事してるの?」……。

その結果、これまでほとんど知らなかった啓介のこ  
とがよくわかった。

昭雄と同じひとりっ子であること。四月生まれの牡羊座で、三月生まれ（の水瓶座）の昭雄より年上（？）であること。じつはアメリカで生まれて、小学校の途中まで向こうの学校に通っていたこと。にもかかわらず、受験英語の成績はあまりよくないこと。イギリスのグラムロックが好きで、そんなバンドが来るとかならずコンサートに出かけること。ルーカスとスピルバーグの映画は、初期のものも含めてすべて見ているこ

と。野球は西武ライオンズのファンだということ……。同じように、啓介の方も昭雄のことを知りたがり、昭雄もそれに答えていた。ただ、会話の最中、昭雄はずっと「亜希穂」の女言葉を使っていたので、それと矛盾するようなこと——たとえば、小学生時代、地域のリトルリーグでライトを守っていた……。とか——には、言葉が鈍った。

昼をまわった一時近くまで、街のあちこちでそんなシーンを撮り、そのあと、全員で昼食をとった。今日は、ハンバーガーシヨップだった。

その食事中も、昭雄と啓介は、テーブルに並んで話していた。

ふと気がつくとき、そのテーブルにいたはずの他のメンバーたちがいなくなっていた。

あわてて見まわすと、ちよつと離れたテーブルから、



倉木がカメラを向けていた。

「えーっ？」

啓介と昭雄が同時に声をあげると、倉木のそばに立っていた林田が言った。

「あんまりいい雰囲気だったから、デートのシーンにワンカット使おうと思ってさ」

二人とも話に夢中になっていて、林田の目配せでメンバーたちがテーブルを離れたのに気づかなかつたの

だ。

「今日はほんとに楽しかったわ。ありがとう。そろそろ、あたし、帰らなくちゃいけない」

「いや、まだ、いいだろ」

「ううん。あんまり遅くなると、パパが……」

「お父さん……怖い人なの？」

「ううん、そういうことじゃなくて……。私が帰らな

いと、たぶん、パパがつらい目にあうことになる……」

「……えっ？」

「もう、戻るね」

「どうして……」

「思い出が、できたから。あたしが……亜希穂が生き  
た思い出が」

「なんの……こと？ 今朝もそんなこと、言ってたけ

ど……」

「……………」

「そういう話になると、黙り込むんだね」

「……………」

「ねえ、今日一日、いっしょに過ごしたんだ。もう、  
教えてくれたっていいだろ」

「……………」

「頼むよ。話してほしい」

「……………」

「一人で苦しんでないで……」

「苦しんでなんて……」

「いや、苦しんでるよ。見てればわかる」

「……」

「君のことが……、好きだから」

「……え？」

「君のことが好きだから、君のことをもっと知りたいんだ」

「  
：  
：  
：  
：  
：  
：  
」

「君のすべてを」

「  
：  
：  
：  
：  
：  
」

「  
：  
：  
：  
：  
：  
」

「  
：  
：  
：  
：  
：  
：  
わかったわ」

「話してくれるんだね」

「ええ。  
：  
：  
：  
でも、誰にも話したりしないって約束し

て」

「……あ、ああ」

「じつは……、あたしのパパは、政府のお仕事をしていて……」

「カーツト！ オーケー！」

林田が、声を張り上げた。

「亜希穂が事情を告白する」シーンの撮影だ。

林田が中途半端なところで「カーツト」をかけたのは、このあと、「映画」の流れとしては「亜希穂の回想」

シーンが挿入されるからだ。要するに、この前、学校の保健室で撮ったシーンである。

「じゃあ、この調子で、回想あけのシーン、つづけていこうか」

林田がそう言ったところで、ローアングルから撮っていたカメラの向こうで、「ちよつと待って」と倉木が立ち上がった。

「バッテリーがあぶない。交換するよ」



ビルのパブリックスペースにあるベンチに啓介と並んで腰掛けた昭雄は、倉木がウエストバッグから新しいバッテリーパックを出すのをぼんやりと眺めて、かすかなため息をついた。

昼食までの心が弾むような気分とは打って変わった、深刻で悲しげな顔をしている自分が……なんだか、本当に悲しくなっていた。

これから、この同じ場所で、「事情を知った啓介が

亜希穂をとめる」シーンを撮り、そのあとは……。

バッテリー交換する倉木を見ながら、昭雄は、さらにもうひとつ、深いため息をもらした。

昨夜、倉木と林田で手分けして充電してきたという何本かのバッテリーも、もうストックはないようだ。

ということは、今装着されたバッテリーが切れるまでには、「別れ」のシーンまで含めて、すべてのシーンの撮影が終わっているということだった。

街角のベンチでの撮影を終えたあと、一行はいったん、例のカラオケボックスに戻った。次のシーンの準備のためだ。

撮影スケジュールでは、次にはラストシーンを撮ることになっている。「別れて数カ月後、街に行く啓太が亜希穂らしい少女を見かけ、その記憶が失われたことを知る」シーンである。

もちろん、「映画」の中での順番としては「別れ」のシーンのあとに来るわけだが、「別れ」のシーンは夕刻だから、そのあとで撮ったのでは夜になってしまふ。だから、実際の撮影としては、その前にやっておく必要があった。しかし、なにしろ「数カ月後」のこ。啓太と亜希穂が同じ服装ではおかしい。それで、またここで着替えようというわけだった。

「姉貴の高校時代のだ。もう使わないから、汚しても

いいってさ」

そう言って林田が差し出した紙袋には、紺のセーラー服が入っていた。

○街・交差点

やって来る学生服の啓太。

横断歩道を渡ろうとし、赤信号で立ち止まる。

と——

対面の歩道を見てハツとする。

そこで信号待ちをする人の中に、制服の少女がいる。

——亜希穂だ！

驚いた顔で見つめる啓太。

信号が変わるのを待ちきれない啓太。

青信号になると同時に、走り出すような足取りで横断歩道を渡っていく。

ところが――

亜希穂の方は、まったく啓太に目を向けない。

亜希穂に近づき、声をかけようとする啓太。

しかし、亜希穂は真っ直ぐ前を向いたまま歩いていく。

そこで、なにかに気づき、動きを止める啓太。

そのまま、すれ違っていく亜希穂。

その場にたたずんだまま、振り返り、亜希穂の後ろ姿を見つめる啓太。

人々が行き交う中、いつまでも呆然と見



送っている。

啓太の声（ナレーション）「亜希穂、あの時約束し

たとおり、君が僕のことを思い出す日まで、僕は君を待ち続けているよ」

画面、ゆっくりと黒の中にフェイドアウトし――

○エンドマーク

……日曜日なのに、こんな格好で街に立っているなんて、なんだか恥ずかしいな。

セーラー服姿で通学鞆を持ち、歩道にぽつんと立った昭雄はそう思った。

女装していることそのものを恥ずかしがっているの

でないところが、昭雄の気持ちがつつかり「亜希穂」  
になっている証拠かもしれない。

と、脇にある地下鉄の昇降口に身を潜めた飯田が、  
キューを送ってきた。

道をはさんだ向こう側で、カメラがまわりはじめた  
ということだ。

次に信号が変わったところで横断歩道を歩き出す。  
そして、ただ真っ直ぐ前を向いて歩いていく。

演技としては、それだけのことだった。

でも、なぜか気が滅入った。

対面の歩道で信号を待つ人の中に、学生服の啓介が現れた。そして、こちらを見て驚いた顔をした。

視界の中にそれをとらえながらも、昭雄は別のところに目の焦点を合わせた。そして、なんの感情もない「普通の顔」をつくった。

信号が変わり車道に踏み出すと――

向かい側から歩き出した人の群れの中から、啓介が飛び出してきた。

でも、それを見てはいけないのだ。

その体全体に希望と喜びを表し、啓介が駆け寄ってきた。

でも、それに応えてはいけないのだ。

：：そう、あの人は、まったく知らない人。

昭雄は、ただ前だけを見て歩いた。

啓介の顔を見返せないことが、啓介に笑い返せないことが、つらかった。

つらいという気持ちすら表せないのが、さらにつらかった。

数歩手前まで駆け寄ったところで、なにか言いかけ、そこで啓介はハッと立ち止まった。

それでも昭雄は、ペースを変えずに歩き、そして、その脇を通り過ぎた。

学生服の啓介の横を通る時、昭雄はふと、この撮影が終わった日常のことを考えた。

明日からの学校生活で、僕と谷原の関係は、きっとまた、もとどおり疎遠なものになるのだろう。教室で顔を合わせても、お互い、声も掛け合わないような：。

そう思うと、昭雄は、無性に振り向きたくなった。

今、昭雄の後ろで、啓介は立ちつくし、こちらを見

つめているはずだ。

今なら：：このセーラー服姿なら、まだ啓介に駆け寄ることができる。その胸に飛び込むこともできる。

なんだかわからない、そんな衝動に駆られながらも、結局、昭雄は横断歩道を渡り終えていた。

林田の「オーケー」の声とともに撮影が終わり、次の青信号で、道の向こう側にいた啓介と飯田が戻って



きた。そしてそこで、ちよつとした論争があつた。

飯田が「今のとは別のバージョンも撮っておかないか」と言いだしたのだ。

「別バージョン？」

「ああ。さっきのデートシーンの楽しそうな感じから言っても、このラストは救いがなさ過ぎないか。夕方までには、まだ時間があることだし、もうすこしハッピーエンドのやつも撮っておいて、あとで選ぶってい

うのはどうだろう？」

「……ハッピーエンド？　たとえば？」

林田は、ちよつと不機嫌そうな顔できき返した。

「うん。亜希穂が啓太の脇をいったん通り過ぎたあと、そこで立ち止まって振り向く。つまり、ふつと啓太のことを思い出すわけだ。そして、見つめ合った二人が駆け寄るところでストップモーションがかかって、エンドマーク……とか」

飯田の提案に、まわりを取り囲んでいたメンバーの何人かが大きくうなずいた。その中には、啓介もいた。うなずかなかったメンバーも、別バージョンを撮るところ自体には反対でないという顔をしていた。昭雄もまた、そう思っていた。

しかし、林田は断固としてそれを拒否した。

「甘っちょろいご都合主義のトレンディドラマを撮ってるわけじゃないんだ。つかの間の恋と失われた記憶

というのがこの映画のテーマなのに、それじゃあ、両方とも台無しじゃないか」

結局、監督である林田の意見が通り、そのラストシーンには、それ以上撮り直されることはなかった。

その場を撤収した一行は、途中、例のカラオケ店に寄り、啓介と昭雄がふたたびもとの衣裳に着替えるのを待って、いよいよ「別れ」のシーンを撮る公園へと

向かった。

西の空には、地平線あたりに薄く雲がかかっているだけだった。

その地平線に、刻一刻と近づいている太陽の色が黄色から赤に変わり、空自体も、徐々に赤く染まり始めていた。

「どうやら、今日はなんとかなりそうだな」

「やっぱり、監督の心がけがいいからだろう」

そんな飯田と林田の会話を聞きながら、昭雄がメイクを直していると、林田が「そういえば、あれ、亜希穂に渡したか？」と言った。

自分の名前——ではないのだが、昭雄はもはや、それを自分の名前と感ずるようになっていた——が出たことで、そちらを向くと、飯田が「そうだ。忘れてた」と言って近づいてきた。

「これ、買ったといたから、使ってよ」

飯田が差し出したのは、目薬だった。

「別れ」のシーンで、最後に「亜希穂」は目から涙をあふれさせることになっている。撮影が始まる前に射しておけということだろう。

「うん。ありがとう」

昭雄はいちおう、そう言って受け取ったが、自分はそのを使わないだろうと思った。

「亜希穂」が泣き出すのは、シーンの終わり近く。それまでにセリフのやりとりがあるし、その間、ほとんどうつむいているのだ。シーンが始まる前に射しても、こぼれてしまうだけだろう。

それに、もしかすると、こんなもの使わなくても：  
：。

昭雄がそう思いながら、目薬をシヨルダーバッグの中にしまっていると、誰かが「あっ、恭子先生！」と



言った。

振り向くと、公園の入口あたりから恭子先生がやって来るのが見えた。

「飯田君にもらったスケジュール表だと、ここは昨日撮って、今日はもう終わってるんじゃないかって心配してたんだけど……。よかった。差し入れ、無駄にならなくて」

恭子先生はそう言いながら、たこ焼きの箱がいくつ

も入ったポリ袋を掲げてみせた。

「食べないの？」

噴水の池のまわりを囲んだ石垣に、並んで腰掛けた  
恭子先生が言った。

「今、口紅塗り直したとこだし」

昭雄はそう答えたが、本当のところ、「別れ」のシンを前にそういう気になれなかったのだ。

たこ焼きなんて……。

と、そんな昭雄を微笑むような眼差しで見ている恭子先生が「ふふ」と声に出して笑った。

「藤沢君が昨日よりもっと女の子っぽくなってたから、さつき見た時、ちよつと驚いちゃった」

そんな言われ方をすれば、これまでならふくれたり反論したりしていただろう。でも、今日の昭雄は、ただ恥ずかしそうにうつむいただけだった。

自分でも、そう見えるのはよくわかっていたし、また、「女の子でいたい」とも思っていた。撮影のためにも、それに、それ以外のためにも。だから――

「なんだか、恋する乙女って感じよ」

そんな言葉にも、ちよつと頬を染めたただけだった。

と、その時、すぐそばの地べたに座ってたこ焼きを頬張っていた山波が、突然、なにかに気づいたように「あーっ！」と叫んだ。

「恭子先生、昨日とおんなじ服着てる。もしかして、ゆうべは、彼氏のところにお泊まりですか？」

その言葉に、恭子先生は一瞬たじろいだようだったが、すぐになっこり笑って、平然と「そうよ」と答えた。

それに、メンバー全員がどこか傷ついた顔をした。ただ、昭雄の傷つき方だけは、ちよつと複雑だった。その瞬間、啓介の顔をうかがい、啓介までがそんな

顔をしたことに、なにより傷ついていたのだ。

昭雄は、たしかに今、恋する乙女だった。

「さて、そろそろいいかな」

そう言いながら、林田が立ち上がった。

見まわすと、「別れ」のシーンのシナリオどおり、

「樹々も遊具もすべてがあかね色に」染まっていた。

「あんまりチャンスは長くないと思うから、一回でキ

メようぜ」

○夕暮れの公園

樹々も遊具もすべてがあかね色に染まる  
中、きらめく噴水。

その手前に、向かい合って立つ啓太と亜  
希穂。

啓太 「また、会えるんだろ？」

亜希穂 「……………」

目を伏せる亜希穂。

啓太 「そうだ。来週の日曜も、僕はここで待

ってるよ」

亜希穂 「でも……………」

啓太 「……………なに？」

亜希穂 「あたし、たぶん……………来られない」



啓太 「どうして？」

亜希穂 「……………」

亜希穂、さらにうつむく。

啓太 「いいさ。それでも僕は待ってる。もし、

君が来なかったら、次の週も、その次の週

も……………」

亜希穂、うつむいたまま首を振る。

亜希穂 「……………」  
「めんなさい」

---

啓太 「……ん？」

亜希穂 「そういうことじゃ……ないの」

啓太 「……？」

亜希穂 「戻れば、今のあたしは、いなくなつて

しまふのよ」

啓太 「……えっ？」

亜希穂 「今の記憶は、すべて消えてしまふの」

啓太 「じゃ……じゃあ、君は、今日のことも

---

……？」

亜希穂 「……………」

啓太 「僕の、ことも……………」

亜希穂 「……………」

さらに、うなだれる亜希穂。

啓太 「……………」

亜希穂を見つめている啓太。

やがて、なにかを決意するように――

啓太 「いや、そんなこと、ないさ」

亜希穂 「……えっ？」

その言葉に顔を上げる亜希穂。

啓太 「君はけっして忘れはしない」

啓太を見つめる亜希穂。

啓太 「二人だけでこんな時間を過ごしたんだ。

いつか君は、かならず今日のことを思い出す。僕はそれを信じて、ずっと待ってる。

---

来週も再来週も、来年も、十年後も……」

見つめ合う二人。

亜希穂の瞳に涙が溜まり、頬を伝う。

啓太 「亜希穂……」

亜希穂の肩に手をかける啓太。

亜希穂、つらそうに首を振る。

抱き寄せようとする啓太。

亜希穂、思いを断ち切るようにそれを振

り切り、駆け去る。

一瞬追いかけるが、立ち止まり、次第に小さくなるその後ろ姿を見つめる啓太。

啓太 「亜希穂、君は、かならず……」

「用意……アクション！」

林田の声が響いた。

最初は啓介のセリフだが、啓介は、しゃべり出すまでじゆうぶんな間をとっていた。このシーンは、噴水のアップから始まり、カメラが引いていくと、そこに二人が向き合って立っているという入り方をするからだ。

噴水は、あいかかわらず真上に向かって水を吹きだし、受け皿に落ちたその水がこぼれて、四本の円柱のまわ

りに水のカーテンをつくっていた。

「また、会えるんだろ？」

啓介が言った。

「……」

昭雄は、その言葉に、ただ目を伏せた。

《会えるものなら、また会いたい。そんな思いは、あたしだって、おなじ。》

「そうだ。来週の日曜も、僕はここで待ってるよ」



「でも……」

《でも……》

「……なに？」

「あたし、たぶん……来られない」

《たぶん、こんな気持ちでは会えない》

「どうして？」

「……」

昭雄はさらにうつむいた。本当に悲しかった。

《いくら、毎日、学校で顔を合わせるのだとしても  
…：…》

「いいさ。それでも僕は待ってる。もし、君が来なかつたら、次の週も、その次の週も…：…」

「…：…ごめんなさい」

《いくら、あなたがそれを期待したとしても…：…》

「…：…ん？」

「そういうことじゃ…：…ないの」

《今と同じあたしではいられないの》

「……？」

「戻れば、今のあたしは、いなくなってしまうのよ」

《だって、明日から、今のあたしは、いなくなつて

しまうのだから》

「……えっ？」

「今の記憶は、すべて消えてしまうの」

《今のままの姿を、あなたに見てもらおうことは、も

う二度とできないのだから》

「じゃ……じゃあ、君は、今日のこと……？」

「……」

《……》

「僕の、ことも……」

「……」

《……》

「……」

啓介が自分のことを見つめているのが、うつむいたままでも昭雄にはわかった。

「いや、そんなこと、ないさ」

「……えっ？」

昭雄は、その言葉に顔を上げた。

「君はけっして忘れはしない」

そして、啓介をじっと見つめた。

「二人だけでこんな時間を過ごしたんだ。いつか君は、

かならず今日のことを思い出す。僕はそれを信じて、  
ずっと待ってる。来週も再来週も、来年も、十年後も  
：：：」

そのセリフ以上に何かを訴えるように響く啓介の言  
葉に、昭雄は、自分の瞳に涙が溜まってくるのを感じ  
ていた。

「ううん。それは無理なこと。いくらあなたが待つ  
ていてくれても、あたしは：：：本当の女の子じゃない

のだから……

それが悲しかった。

やはり、目薬は必要なかった。大粒の涙が、その瞳からこぼれ落ちていた。

「亜希穂……」

啓介が昭雄の肩に手をかけてきた。

《そんなに見つめないで……》

昭雄は、大きく首を振っていた。

しかし、啓介は、そんな昭雄を引き寄せようとした。

《だめ。行かなきゃいけない》

昭雄は、それを振り切ろうとした。

《だめ……》

ところが――

啓介は、放してくれなかった。

……えっ？

昭雄は、一瞬、その二重の感情移入から我に返った。



シナリオでは、ここで、僕が走り去ることになって  
いるのに……。

次の瞬間、昭雄の肩を握った啓介の手にさらに力が  
こもった。

そして、啓介のもう一方の手が背中にまわり、強い  
力で抱きしめてきた。

何か言わなければと思つて開きかけた昭雄の口を、  
啓介の口がふさいだ。

……え？

《……えっ？》

一瞬にして、昭雄はまた、「亜希穂」の感情の中に没入していた。

ストーリーの中の亜希穂に。そして、昭雄自身の内なる亜希穂に。

《啓太……啓介……、……好き》

目を閉じた昭雄は、やはり啓介の背中に両腕をまわ

し、そのキスに応えていた。

噴水の水の音だけが聞こえていた。

まわりの世界すべてが消え、まるで、二人で、その水のカーテンの中に入り込んでしまったようだった。

そんな時間が長くつづいた。

二人の体が離れた時、昭雄の耳にはこんな会話が届いていた。

「カーツト！ オーケー！」

「えっ!? オーケーなのか？」

「ああ」

「だって、これじゃあ、さっきのラストと矛盾するだろう」

「いや、こんな感情のこもったいいカットを使わないやつがいたとしたら、そいつは、監督失格だね」

9 ビデオ・リプレイ

「今日撮ったビデオ、いつそのこと、これから、うちで見ないか？」

食後のコーヒーを飲みながら、啓介が言った。

「えっ、これから？」

亜希穂がテーブルにこぼしたデザートのアイスクリームを拭いてやりながら、昭雄は聞き返した。

バレエの発表会の帰りに寄ったこのファミリールストランでも、昭雄は、幼い娘たちの面倒をかいがいしくみていた。そのピンクのスーツ姿は、どう見ても「母親」だ。他の客たちは、まちがいなく、四人をひとつの家族だと思っているだろう。

「どうせ明日は日曜なんだし、多少遅くなってもかまわないだろ」

「でも……、この格好のまま？」

啓介に誘われ夕食はともにしたものの、女装姿で人の家に上がり込むことには、さすがにためらいがあった。

「いや、べつに問題ないだろ。うちのマンションに、ふだんの君のこと、知ってる人間がいるわけじゃない

んだし」

「それは、そうだけど……」

昭雄がまだ迷った顔をしていると、その会話を聞いていたらしい麻由が言った。

「麻由、亜希穂ちゃんのおうちで、いっしょに遊びたい」

「うん、そうしような」

すかさず啓介が言い、亜希穂も「わーい」と歓声を



上げた。

昭雄がそれ以上言う前に、次の行動は決まっていた。

啓介のマンションは、立地から言っても、外観から言っても、昭雄のところよりグレードが高そうだった。

やはり賃貸だという話だから、飛び抜けてリッチというわけでないにしろ、啓介が、昭雄の何割増しかの給料を取っていることはまちがいない。

そんなことを思いながら一階の駐車場で車を降り、麻由の手を引いてついていくと、エントランスに入ったところで、亜希穂が「あっ、おばちゃん！」と言った。

見ると、五十年配の女性がひとりエレベーターを降りてきた。

「あ、どうも」

啓介はどこか昭雄を隠すだけでもいうように前に立

ち、あいさつした。昭雄の正体がどうのというより、自分が「女連れ」で帰宅したところを見られたくなかったのだらう。

「お帰りなさい」

しかし、そんな啓介の意に反し、その女性は昭雄の方をのぞき込むようにしてきた。いかにも「どちら様？」ときく感じだった。

「あ、あの、保育園で亜希穂と同じ組の、麻由ちゃん

の：：お母さんです」

啓介は、あせった感じで紹介した。

そこまで説明するところを見ると、それなりに親しいのだろうか？

そう思いながら、昭雄もその女性に会釈し、エレベーターに乗り込んだ。

「じゃ、また」

啓介の言葉にうなずいたあとも、その女性はずっと

見送っていた。

誰だろう……？

昇り始めたエレベーターの中で昭雄がきこうとする  
と、それより先に、啓介が口を開いた。

「まずいところ見られちゃったかな。前に話しただろ。

俺が留守する時、亜希穂のめんどうを見てもらってる

……」

「……ああ」

「一階下の横山さん」

以前、啓介が「ベビースITTER」とか言っていたのを思いだし、昭雄は納得した。

ただ、閉まる寸前、ドアの間から見えた、その横山というおばさんの探るような視線——けっして性別を疑っている感じではなかったけれど——が気になった。

啓介の部屋は、マンションの中ほどの階にあつた。

室内もやはり、昭雄の部屋より高グレードに見えた。

居室の数はたぶん変わらないのだろうが、昭雄のとこのようにオープンキッチンではなく、リビングが別になつていて、しかも広い。感心したのは、その広いリビングが意外に小ざつぱりと整頓されていたことだ。四歳の子どものいる家で、これだけきれいにしているには、それなりの努力がいる。

四人でソファに腰を下ろし一息ついたところで、さつそく啓介が、鞆の中からビデオカメラを取り出した。

「さて……と」

「あつ、ちよつとその前に……」

麻由と亜希穂の方を見ていた昭雄は、そこで気づいて言った。

「この子たちのメイク、落とした方がいいんじゃないかな。あんまり長い間してるの、子どもの肌にはよく



ないと思うから」

今日の昼、本番前につけてから、そのままにしている。途中、食事をしたことで、口紅などは落ちていたが、ファンデーションはまだ残っているようだ。

すると、その言葉を聞いていたらしい亜希穂が抗議した。

「いやっ！　亜希穂、まだ、お化粧してたい」

「麻由も！」

麻由の方も、それに同調してきた。

昭雄が肩をすくめて啓介を見やると、啓介はそこでちよつと考えるようにしたあと、こう言った。

「そうだ。麻由ちゃん、亜希穂といっしょにお風呂入ろうか」

「……えっ？」

昭雄が驚いて聞き返すと、啓介は、「いいだろ。着替えは、亜希穂のを使えばいいんだし」と言った。

麻由と亜希穂は、「お化粧」より「いっしょにお風呂」の方が魅力的だったようで、「わーい」と、すでにその気になっていた。

バスルームではしやぐ麻由と亜希穂の声が、キッチンにも漏れ聞こえてきた。昭雄は、それに微笑みながら戸棚を開けた。

啓介から「俺が二人を風呂に入れてる間に、お茶で

も煎れといてよ」と言われたからだ。

そのダイニングキッチンも、リビング同様、いちおう小ぎれいに整頓されていた。ただ、調理台周辺にある道具などがけっして使いやすく整理されてはいなかったし、シンクの排水口や三角コーナーなどには、普通に洗っただけでは落ちない水あかがこびりついていた。

……きれいにしてるように見えても、やっぱり男所

帯ね。

昭雄は——自分も同じ立場であることを忘れ——そう思った。

ティーバッグとティーポットやカップを探し、子どもたちのためには冷蔵庫の中にあつたジュースを用意し、来る途中で買ったシュークリームを器に並べ：：そこままでしてもまだ、三人が風呂から出てくる気配はなかつたので、昭雄は、先刻気になったシンクをきれ

いにしようと思った。

スーツのジャケットを脱ぎ、ブラウスの上から、壁のフックにかかっていたベージュのエプロンをし、クレンザーとスポンジを手にそんなことをしていると、なんだか自分が、この家の主婦になったような気がした。

昭雄は、心のどこかで、それにくくわくしていた。

今日の昼間想像した、あのパラレルワールドの中に、

また迷い込んでしまったような錯覚に陥ったのだ。

バスルームを出てきた子どもたちの声が聞こえたので、昭雄は、沸かしたお湯をティーポットに注ぎ、トレイを持ってリビングに出た。

見ると、亜希穂はパジャマの上にナイトガウンを着、麻由は、亜希穂のものらしいジャージのスポーツウェアを着せられていた。

「わあ、ママとおそろい」

そのピンクのスポーツウエアが、昭雄のスカートと同じ色だったことを目ざとく見つけ、麻由がうれしそうに言った。

二人のあとから、タオルで頭を拭きながら出てきた啓介は、綿のパンツにモスグリーンの長袖トレーナーを着ていた。

ふだんの整髪してある頭とちがいで、そのくせつ毛が



目立つことに、昭雄は思わず「くすっ」と笑っていた。

昭雄が飲み物やシュークリームをリビングテーブルに並べている間に、啓介は、ビデオカメラを壁際のテレビにつないだ。

「さあ、麻由ちゃんと亜希穂の初めての発表会の記録、はじまりはじまり」

全員が席に着くと、啓介はちよっとおどけた感じで  
そう言い、カメラのボタンを押した。

なにせ本番は四分しかなかったのだし、すぐに終わるのだろう。

昭雄はそう思っていたのだが、それは意外と長かった。

今日の発表会だけでなく、それ以前の——つまり、昭雄が見に行っていないなかった——バレエ教室の映像から始まっていたからだ。どうやら啓介は、バレエ教室のたびにビデオカメラを持ち込んでいたらしい。そん

な親バカぶりがまたちよつとおかしかったが、そのおかげで、昭雄にも、麻由と亜希穂が上達していく様子がよくわかった。

今日撮った映像にしても、リハーサルや本番だけでなく、それ以外の場面も入っていた。そしてそこには、麻由と亜希穂にメイクしたりする昭雄の姿も映っていた。

「こんなの、いつの間に撮ったの？」

昭雄が驚いてきくと、啓介は「気づいてなかった？ やっぱり君も、子どもたち以上に緊張してたんだろ うな」と言った。

たしかにそうだったかもしれないと思いながらも、昭雄はその映像を見て、またちよつと安心した。その姿が、母親に——つまりちゃんと女に——見えたからだ。

麻由と亜希穂は、自分たちが画面に出てくるたびに

キヤツキヤと騒ぎながら見ていたが、最後の本番の舞台のところでは、そのデキを確かめるとでもいうように、真剣な顔で画面を見つめた。

その大人びた表情に、親として感銘のようなものを覚えたこともあり、映像がすべて終わったところで、昭雄は大きな拍手をした。

「亜希穂ちゃんも麻由も、ほんとに上手だったね」  
すると、二人とも、ちよつと照れたような、でも誇

らしげな顔で笑い返してきた。

そのあと、しばらくの間、今のビデオをめぐってあれこれの話がつづき、亜希穂と麻由がもう一度見たいと言った本番の部分をつたたび再生したりした。

そんな盛り上がりが一段落したところで、昭雄は、そろそろ帰り支度を始めた方がいいかなと思った。麻由の目のあたりがほんのりと赤らみ、ときどきこちらに甘えてくる手が温かくなっている。入浴もすませて、

眠たくなり始めていることはたしかだった。

と、そこで、先刻からなにか考えているようにみえた啓介が、ふっと席を立ち、おそらくは書斎だろうと思われるドアに消えた。

どうしたんだろうかと思っていると、ちよつとしてから、片手に何か持って出てきた。

「さあ、みなさん、本日のビデオ上映会、第二部の開幕といきますか」

「えっ？ 第二部？」

昭雄が聞き返すと、啓介はそれには答えず、手に持った平べったい箱から中身を引き出した。VHSのテープのようだ。

……ん？

テープを取りだしたあとテーブルに置いたそのケース——それは、今はほとんど見ない紙製で、角の部分がすり切れていた——に、どこか見覚えがある気がし



て、昭雄が首を傾げていると、啓介はテープをデッキに挿入し、リモコンでテレビの映像を切り替えた。

「……えっ!？」

昭雄がそのテープの中身に思い当たり、驚きの声をあげた時には、テレビ画面が黒く変わり、そこに、予感どおりの赤文字が浮かび上がった。

……「あかね色の記憶」

「なに、これ？」

画面をぽかんと見ていた亜希穂が、首を傾げながら  
きいた。

「ふふ、見ててごらん」

啓介がそう答えるのを、昭雄は呆然と見やった。

いったい、どういうつもりでこんなものを……。

タイトルとともに黒い画面が消えると、先刻の発表  
会のビデオとは比べものにならない不鮮明な映像が映  
し出された。画面全体が暗いし、遠景で撮っているシ

ーンでは、人物の輪郭さえにじんではつきりしない。かろうじて、誰かが歩道橋を昇っていくのがわかるだけだ。

それでも、アップになると人物の顔くらいはわかる。歩道橋上のシーンや公園を逃げ回るシーンでは、まだ首を傾げていた亜希穂と麻由も、アブストラクトの陰で主人公二人が話すシーンになると、なにかに気づいたようだ。

「これ……、パパとママ？」

麻由が、まだ確信を持ってないような顔できいてきた。映像のせいばかりでなく、二人が若いからでもあるのだろう。いずれにしても、麻由も亜希穂も、今日は昼間から啓介のことを「パパ」、昭雄のことを「ママ」と呼んでいたから、啓介と昭雄を指していることだけはまちがいでなかった。

と、啓介が「うん、そうだよ」とうなずいた。

「ずーっと昔。麻由ちゃんや亜紀穂が生まれるよりずつと前のパパとママだよ」

啓介もまた、自分たちのことを「パパとママ」として答えていた。

すると、今度は亜希穂がさらに不思議そうな顔できいた。

「ママ、亜希穂とおんなじ名前だったの？」

今、画面では、「啓太」に名前をきかれた「亜希穂」

が名のるシーンが映し出されていた。それを見たから  
だろう。

それに対して、啓介はこう答えた。

「そうだよ。亜希穂は、このママから名前をもらった  
んだよ」

啓介の言った意味が必ずしも理解できたわけではな  
いようだったが、亜希穂はその言葉にどこかうれしそ  
うな顔をして、ふたたび画面に目をやった。

昭雄は、目の前の映像にも、そして、今、啓介が答えたことにも、ただおろおろとしていた。

いったい、啓介は、なんのつもりで、こんな古いビデオを子どもたちに見せているのか？

それがわからなかった。それに混乱した。

一方では、自分の若い頃のそんな姿をわが子に見られるのが恥ずかしくて、すぐにでも停めてほしいと思っていた。しかし、子どもたちが真剣に見ているので、

それも言い出せない感じだった。

いや、もう一方では、昭雄自身が、十三年ぶりに見た「あの時の自分」の姿に目が離せなくなっていた。

そんな不鮮明な画像の中でも、「亜希穂」は、愛らしく、美しく、初々しく輝いていた。

「パパとママ、昔から仲好しだったんだね」

喫茶店で話すシーンを見ながら、麻由がうれしそうに言った。



「そうだよ。すごく仲好しだったんだよ」

啓介は、またそう答えた。

亜希穂も、それにうれしそうにうなずいている。

そのあと二人は、「啓太と亜希穂」が悪者たちに追われたり、怖いお兄さんに脅されたりするシーンでは顔を曇らせ、二人が仲よさそうに話したり歩いたりするシーンでは、笑顔になった。

当初の動揺がいくぶんか鎮まり、やっと、そんな子

どもたちの表情に気がまわるようになったところで、  
昭雄はあることに気がついた。

：：：：：！

そして次の瞬間には、また、さらなる動揺の中に巻き込まれていた。

このままいけば、あのシーンが出てくる！

あの：：林田が書いたシナリオにはなかった：：あの、啓介がふいにしてきた：：あの、昭雄自身も驚き

ながらそれに応えていた……、あの……キスシーンが！

あんなシーンを見て、子どもたちはいったいなんと  
思うのか？

その動揺は、困惑というより、恐怖に近いものだった。

しかし、そんな昭雄の動揺をよそに場面は進み、ついに噴水前のシーンが来てしまった。

画面の中で交わされているセリフの意味がどこまで理解できているかはわからないが、主人公二人の表情から、それが悲しいシーンだということは認識しているようだ。麻由も亜希穂も、眉をひそめた悲しげな顔で見つめていた。

そして……。

立ち去ろうとする「亜希穂」を「啓太」が引き止め、抱きしめ、キスするシーンが映し出されると、麻由と

亜希穂は、パツと顔を輝かせた。それは、うれしそう  
な、幸せそうな表情だった。

……えっ？

昭雄は、そんな二人の横顔を、あ然として見つめた。

そうこうするうちに、画面には「数カ月後」の文字  
が出て、ラストシーンに移った。例の「啓太」と「亜  
希穂」が横断歩道ですれちがうシーンだ。

ところが、このシーンの意味は、麻由と亜希穂には

よくわからなかったらしく、二人とも首を傾げただけだった。林田監督の意図は、少なくとも四歳児には伝わらなかったようだ。

麻由と亜希穂にとっては、どうやら、その前のキスシーンの方が印象が強かったらしく、エンドマークが出て、テレビの画面が「砂あらし」のように乱れると同時に、にっこりと笑って啓介と昭雄の方を見た。

「よかった。パパとママが、ずーっと仲好しで」

麻由が、さつきと同じことを繰り返した。

と、亜希穂も、確認するというように言った。

「パパもママも、二人とも、大好きなんだよね」

昭雄が、それにどう反応したらいいか困惑して啓介を見ると、啓介も、今度は返事に困っているようだった。

と、麻由が別のことを言った。

「ママ、すごくかわいかったよ。麻由も、ママみたい

にかわいくなりたい」

「亜希穂もー」

二人はそこで、ソファを降り、昭雄の膝元に飛び込むように甘えてきた。

昭雄は、まだ困惑の表情のまま、膝の上にあずけてきた二人の頭を撫でた。

と、リモコンでビデオを止め、巻き戻ししていた啓介が、昭雄の顔を見てきた。



啓介にいったいなにを言ったらいいいのか、昭雄は、そのことにも困惑した。

啓介の方も、目は合わせたものの、言葉に困ったようだ。まったく本質的ではないことを口にした。

「それにしても、ひどい映像だよな。被写体が遠くなると、何が映ってるのか、ほとんどわからない」

「テープが、古いから？」

昭雄も、それに合わせて、聞き返した。

「いや、そういうことじゃないよ。もともとひどかっただろ。これは、林田にもらったコピーだからなおさらってことはあるけど、学院祭で上映したオリジナル版だって、正直言って、まともに見られるようなものじゃなかった」

その言葉に、昭雄は、高二的の学院祭のことを思い出した。視聴覚教室のプロジェクターでスクリーンに大写しされたその映像は、粒子が荒く、ノイズが多く、

やはり遠景はぼやけていた。林田の意に反して、とても「映画」と呼べるような代物ではなかったのだ。

「今だったらデジタルだから、パソコンで簡単に編集できるし、いくら編集しても画像が劣化するようなこととはないんだろうけど……」

啓介は、テーブルの上の自分のビデオカメラに目をやり、そう言ってから、つぶけた。

「当時はアナログだからな。あの時使ってたのは、8

ミリビデオカメラってやつだった。林田は、その8ミリビデオの生テープをVHSにダビングして、それをさらに編集したらしい。もちろんビデオ編集機なんて高級なものを持ってないから、二台のビデオデッキを直結して、こまめにダビングを繰り返しながらカットをつないだっていうんだ。上から音楽とかを重ねるよ  
うな時も、映像をダビングしながら、音声のケーブル  
だけラジカセにつないで、それで入れたっていうから、

そのたびに画質が悪くなったはずだ。その結果、あんな無惨な『映画』になっちゃったわけだ」

啓介は、まるで、他に話がおよぶのを避けるだけでも、  
いうように、そんな説明をつづけていた。

「林田は、その作業のために、学院祭までの一週間、  
ほとんど徹夜したって話だから、まあ、あれが、当時  
の高校生にできる限界だったってことなんだろうけど  
な」

：：：そういえばたしかに、学院祭の朝、出来上がったテープを持ってきた林田は、青白い顔でふらふらして、今にも倒れそうだったな。

昭雄の方も、そんな、ある意味どうでもいいことを考えていた。まるで今の映像のように、輪郭のはっきりしない世界に居つづけようとしているのだ。

と、そこで、膝に、さっきまでとはちがう重みを感じた。

「……あれ？　この子たち、寝ちやつたみたい」

啓介が話している間、二人でこちよこちよとじやれ合っていた麻由と亜希穂が、昭雄のスカートに頭にをあずけたまま、ほぼ同時に眠りに落ちたようだ。

「ふふ、今日は、発表会とかで疲れたんだろ。保育園みたいにお昼寝もなかったし」

啓介が、昭雄に甘えた形のまま眠っている二人を見ながら言った。

「困ったな。もう、おいとましなきゃいけないと思っ  
てたのに」

昭雄がそう言うと、啓介は、「ま、いいじゃないか」  
と言ったあと、こうつぶけた。

「今夜は泊まってけば」

「……えっ？」

「だって、今さら起こすのもかわいそうだろ」

「でも……」



「どつちにしても、こんなふうには寝かせとくわけには  
いかないし、亜希穂の部屋のベッドまで運ぼう」

啓介はそう言って立ち上がると、すぐに亜希穂を抱  
き上げた。

昭雄は、そのなりゆきにちよつとの間戸惑っていた  
が、結局、自らも麻由の体を引っ張り上げるようにし  
て抱き、ソファを立った。

啓介の言うとおりに、麻由も亜希穂も疲れていたよう

で、そんなふうには抱かれても、ちよつとむずかっただけで目を覚ますことはなかった。

啓介に従って、子ども部屋に入り、二人並べてベッドの上に寝かせた。

そこで啓介が亜希穂のナイトガウンを脱がせているのを見て、昭雄は、もしかしたら啓介は、そもそも最初から昭雄と麻由を泊めるつもりだったのではないかと思つた。

もし、ビデオを見たあと、昭雄たちを送っていくつもりがあつたのなら——四歳の亜希穂をひとり残して行くわけにはいかないのだから——、亜希穂にも外出できる服を着せただろう。パジャマを着せることはなかつたはずだ。

子どもがいなくなった部屋は、妙に静まりかえつて  
いる気がした。

リビングに戻り、さつきまでと同じ場所に座ったのだが、昭雄はなんだか落ち着かなかつた。

いや、以前のように、啓介と二人きりなのが気づまりというのとはちよつとちがう。

夜、こんな部屋で、女装した自分が、啓介と二人きりでいることに緊張を感じるのだ。

黙っているのがなんとなく不安で、何か話さなければいけないと思うのだが、何を話したらいいかわから

ず、話すきっかけもつかめない。

と、いったんソファに座った啓介が、思いついたように立ち上がってビデオデッキのところまで行った。

先刻巻き戻したままにしていたビデオカセットを、取り出したらしい。

ソファに戻り、それをもとのケースに戻すのを見ながら、やっときっかけを見つけ、昭雄は言った。

「それ、まだ持ってたんだね」

「ああ」

かつて、啓介が林田からそのビデオを受け取るところを、昭雄はすぐそばで見っていた。先刻、ケースを見た瞬間、見覚えがあると感じたのは、その時の記憶があつたからだろう。

昭雄がそう思っていると、手にしたビデオを見つめていた啓介が「じつはさ……」と口を開いた。

「俺の離婚の、もともとの原因は、このビデオだった

りするんだ」

「……えっ？」

啓介の口から出た意外な言葉に、昭雄は、驚いて見返した。

「あれは、亜希穂が一歳になったばかりの夏だから、今から三年ちよつと前。結婚して二年つて頃だった」

啓介は、ビデオを見つめたまま、ぼそぼそと語り始めた。

「俺は、アメリカの本社に呼ばれて、一週間ほど出張に出たんだ。その間に、女房は、俺の書斎を掃除かなにかしていて、机の引き出しの奥にあったこのビデオを見つけた。それで、再生してみたってわけだ。最初は、エロビデオのコピーかなんかだろうと思ったよ。うだ。帰ってきたらとっちめてやろうってぐらいの気持ちでな。でも、中身を見て、女房は俺に不信を抱いた」



「ひよっとして……やきもちをやいた……ってこと？」  
昭雄は、啓介の前妻が、さっきのキスシーンとかに  
動揺したのかと思い、おずおずときいてみた。

「まあ、ひとことで言えば、そういうことになるのか  
な」

「でも、あれは、どう見ても高校生のお遊びにしか見え  
ないじゃない。変な設定やおかしなキャラクターだ  
って出てくるんだし……」

「ああ、もちろん、女房にだってそのくらいのはわかったと思うよ。でも、ヒロインと俺との関係には、疑いを持った。この子とあなたの関係は、とてもお芝居には見えないとか言い出して……」

「それは、まあ……、新婚時代にはよくある、奥さんが妬いてみせたっただけの話じゃないの？」

「いや、そういうのともちがうんだ。もつと決定的な不信感を持たれた。あなたは、今でもきつと、この子

のことが好きなんでしょう……とか」

「それは、いくらなんでも、やきもちが過ぎるんじゃない？ どっちにしても、結婚するずっと前のことなんだし……」

昭雄が言うのと、啓介は、ちよつと自嘲気味に笑った。

「ああ、俺だって、そう言ったさ。でも、不信感の根本的な理由は、あの『映画』そのものにあつたわけじゃない。俺が、初めてできた娘の名に、あの『映画』

のヒロインの名をつけてたつてことさ。女房の反対を押し切つてな」

「……！」

「あなたは、この子にまだ未練があるから、娘の名を亜希穂にした。私とあなたとの間にできた子に、昔の女の名をつけるなんて、ひどすぎる……つてわけだ」

「で、でも、亜希穂っていうのは役名に過ぎなかつたわけだし、それに、なにより、あたしは……僕は、女

じゃないんだし……」

「ああ、それも言ったさ。でも、女房は、それを、俺が追い込まれた末に口走ったへたな言い訳だとしてた。あなたは、どうしてそんな見え透いたことしか言えないの。この子の、どこが男の子だって言うのよ……」

「……」

「……な、笑えるだろ。とんだ笑い話だ」

「……」

昭雄は、さらに自嘲気味に言った啓介の言葉に、複雑な思いで黙り込んだ。

自分が、啓介の離婚に、原因として関わっていたこと。しかも女として……女にしか見えない存在として関わっていたこと。自分のまったく知らないところで起こっていたそんな事態を、いったいどうとらえたらいいのか？

それに、啓介はなぜ今、こんな話をしだしたのか？  
返すべき言葉が見つからず、昭雄はしばらく口をと  
がらすようにして考えていた。

しかし、そんなことで啓介夫婦が別れなければなら  
なかったということには、もうひとつ納得いかない気  
もした。それで、きいてみた。

「でも、それで離婚って……？」

「いや、もちろん、そのことが直接の原因じゃないさ。

その後も、半年くらいは、普通に夫婦をやってたんだからな。でも、その間、女房の心の中で、俺に対する不信感はふくらみつづけていたようだ。ちようどその頃、俺の会社と日本のメーカーの間で、特許侵害をめぐる訴訟があつてな。俺は、それで忙殺されてた。家庭を顧みない俺に、女房は、ますます不信感を募らせたってわけだ。そのうちそれが、とんでもない形で現れだした」



「とんでもない形？」

「ああ、亜希穂に対する虐待という形でな」

「えっ……虐待!？」

昭雄が驚いてきくと、啓介はつらそうな顔でうなずいた。

「女房にしてみれば、俺の昔の女の名前がついた娘を愛せなくなった。それどころか、憎しみの対象として見るようになったということだ。まだ二歳になる前の

亜希穂が、ちよつと粗相をしたと言つては、ひどい仕打ちをするようになった。殴つたり、飯を食わさなかつたり……」

「……」

「亜希穂の体にアザができていたことに不審を持った俺は、女房を問いつめた。それでやつと、女房の心が病んでいることに気がついた。その原因が、何ヵ月前のビデオをめぐる言い争いにあつたことにもな。そ

ここで俺は、女房がそんなことにこだわるのは、家の中に閉じこもっているのが悪いんだと考えた。だから、外に出ることをすすめた。なにか習い事でも、ボランテニアでも、なんでもいいからやれと言った。それを女房は、俺のお墨付きが出たとでもとったんだらう。亜希穂を、さっきの横山さんにあずけて、昼夜問わず、ひんぱんに外出するようになった。いや、俺はべつに、それ以前から縛ってたつもりはなかったんだ。でも、

実質的には、家事から亜希穂の世話まで、すべてを女房に押しつけてたのは事実だからな。だから、そんな女房になにも言えなかった」

「それで……、奥さんは、外に好きな人ができて：  
：？」

「ああ、そういうことだ。あいつが三歳の亜希穂をおいて出て行ったのも、そんな事情からだ。結局、亜希穂の母親ではいられなかったんだろう。『もう愛せな

い』と、出て行くとき、はっきり言ったよ」

啓介の話したことに、自分の立場としてどうコメントしたらいいのか、昭雄はまだ混乱していた。しかし、ひとつだけ、確かなことがあった。

……この話のいちばんの被害者は、まちがいなく亜希穂だ。

昭雄は、そう思った。

自分のまったく関わらない父と母の勝手な思いこみ

から、理不尽な目にあい、そして……母に捨てられた。その心の傷は、大きかったにちがいない。

それなのに、あの子ったら、いつもあんなに明るく、元気そうに振る舞って……。

亜希穂に対する同情は、すぐに愛おしさに変わり、その愛おしさが思わぬ方向に変化した。

亜希穂は、いわば、かつての僕の……あたしの名を持つ少女。……あたしを起源とする少女。……あたし

から：：生まれられた少女。

昭雄は、亜希穂のことを、そんなふうにとらえ始めていた。

そんな亜希穂のことを、守ってやりたいと思った。

それで、そんな自分の気持ちを確認かなものにするためにも、啓介にきいておかなければならないことがあると感じた。先刻の啓介の話に、どこかごまかしがあるような気がしたのだ。

「今、外出がちになった奥さんに何も言わなかったのは、家庭を顧みなかった自分への反省からみたいなこと、言ったよね。でも、それって、ほんと？」

「……えっ？」

啓介は、昭雄の言葉に、どこかぎくりとしたような顔をした。

「それに、出て行くという奥さんを、とめなかったのはなぜ？」



「それは……」

啓介は、やはり言い淀んだ。

「本当は、自分に、その資格がないことに気づいたからじゃない？」

「……」

「じつは、奥さんの言ったことの方が正しかったからじゃない？」

「……」

それでも啓介は、なにか迷っているような表情を  
していた。

それで昭雄は、こう言った。

「今夜、あたしたちに泊まるように仕向けて、あんな  
ビデオを見せて、そんな告白までしておいて……、も  
つと言えば、麻由がバレエ教室で口走ったことをうま  
く利用して、今日、あたしが女装するように仕向けて  
おいて……、その上、最後の答えまであたしに言わせ

ようっていうの？　それは、ちよつとずるいんじゃない？」

その昭雄の言葉に、啓介はふつと笑った。

「……そうだな」

そして、こう言った。

「そういうことは、やっぱり、男の方から言わなきゃな」

さらに、昭雄の顔を真正面から見て、つづけた。

「俺は、十七の時、ひとりの少女に恋をした。そして、その頃から今までずっと、その少女のことが忘れられずにいる。自分の娘に、その少女の名をつけるほどに」

啓介は正直に言ったのだろうが、それをすんなり認めてしまうのはまだ早すぎる気がした。それで、昭雄は、もう一度念を押すように言った。

「でも、その結果として、あなたは、奥さんと、そしてなにより亜希穂ちゃんを傷つけた」

と、啓介は、痛みをともなった顔で、また目をそらせた。

「ああ、そのとおりさ。だからこそ、俺は、ずっと、亜希穂のことを守っていかなきゃいけないと思った。

これからは、亜希穂のためだけに生きていこう、亜希穂のことだけを愛していこうと。だって、俺が本当に愛した女は、幻でしかないんだからな。それを隠して、他の女に心を寄せても、結局は失敗するだけだ。それ

がよくわかったから」

啓介は、そこで、大きくひとつため息をついた。

「ところが、そこに君が現れたんだ。俺は、恐れたよ。

君に幻を重ねようとする自分に、心の中で必死にブレ  
ーキをかけていた。現実を見つめろ……とな。それな  
のに、次に君は、まさにその、幻の姿で俺の前に現れ  
たんだ。あの時の少女のまままで。いや、もつと、女に  
なつて……」

そして、ふたたび昭雄の顔を見つめた。

「俺はもう、自分の気持ちを伝えずにはいられなくなつた。たとえ君が、迷惑だと思つたとしても。どんなことをしてでも、俺の気持ちだけはわかってもらおうと思つたんだ。だから今日……」

「……」

昭雄は、どう答えたらいいのか迷つた。どう答えたいのか、自分でもよくわからなかつた。

それで、まず、先刻からずっと考えつづけていたことを口にしてみた。

「そうね。あなたは、まちがいなく、亜希穂ちゃんに責任があるわ」

そして、啓介がうなずくのを見ながら立ち上がった。啓介の近くまで歩き、その隣にふたたび腰を下ろし、つづけた。

「で、あたしは今、その責任の半分を受け持ってもい



いと思ってる」

「……えっ？」

啓介は、昭雄を見つめて驚いた顔をした。

「たぶん、あたしも、自分をごまかそうとしてたんだと思う。あたしがまた、こんな格好をしたのは、麻由のためだって思おうとしてたけど、そうじゃないわね。それはたぶん、あなたに会ったから。あなたに、また、こんなあたしを見てもらいたかったんだと思う」

「……亜希穂」

啓介が言った。それは、実際の亜希穂のことではなく、昭雄のことだろう。

昭雄は、自分がそう呼ばれたことに、喜びを感じているのに気がついた。そのことが、昭雄をさらに正直にさせた。

「また、あの時みたいにも、してほしかったんだと思う」  
そんな昭雄の言葉にも、啓介はまだ、なにかを迷っ

ているように見えた。

それで、昭雄は言った。

「さつき、子どもたちは許してくれたわ。あなたは、そのために、子どもたちにあんなビデオを見せたんじゃないの？」

啓介は、それに対して、また、ふっと笑った。

そして、次の瞬間には、その手を昭雄の背中にまわしてきた。

抱きしめられ、唇が重ねられた。

あの時の臭いだった。あの時の感触だった。

昭雄は、それを、はっきりと覚えていた。

なんと言っても、あれは、昭雄にとってのファース

トキスだったのだから……。

それで、昭雄自身も、あの時と同じように啓介の背中に手を這わせていた。

二人は、また、長い時間そうしていた。

そして、その唇が離れた時、啓介は言った。

「初めてのキスというのは、忘れないものだな」

昭雄は、啓介が同じことを感じてくれていたことがうれしかった。でも一方で、今日の自分が、結局は啓介の企んだままに行動していることに、ちよつと悔しいような思いも抱いていた。

それで、こう言った。

「でも、今日は、たこ焼きの味はしなかったわ」

それに啓介は、一瞬きよとんとしたあと、吹き出した。

そして、笑いながら立ち上がった。

次の瞬間、昭雄は、自分の体が宙に浮くのを感じた。

：：えっ？

気がつくと、啓介に横抱きされていた。

そんなふうには抱かれたことは：：いや、人に抱き上げられるということ自体、幼児の頃を除けば、初めて

の体験だった。

それで、昭雄は、驚いたように啓介の顔を見た。

すると、啓介は言った。

「最後まで、男らしくキメさせてくれよ」

その言葉に、昭雄は、自分が人に抱き上げられたことが、けっして初めてではないことに気がついた。あの、ブーツでつまずいた時——少し形はちがったが——、啓介は昭雄を抱きとめてくれた。……男らしく。

それでも、昭雄がまだ戸惑った顔をしていると、啓介はこうつぶけた。

「いいだろ。二人とも、もう子どもじゃないんだし」  
昭雄は、まだしばらく、恥ずかしそうに目を泳がせていたが、やがて、あの時と同じように——しかし今回は、承諾のしるしとして——、啓介の首に両腕をまわした。



10 積み木の家族

「お疲れさん」

パソコンの電源を切り、書類をかたづけしていると、後ろから肩を叩かれた。

「……あ……」

昭雄はそれに、びくりと体を震わせた。

そして、そのあと、今の自分の仕草や表情がまるで女のようにだったことに気づき、どぎまぎした。この頃、ふいに体を触られたりすると、ついそんな反応が出てしまう。

気取られたのではないかとひやひやししながら振り向くと、課長だった。

「……あつ、す、すみません。今日もまた、お先に失礼させていただきます」

昭雄が今の失敗を取り繕うように立ち上がると、課長は「いや、気にしなくていいよ」と言った。どうやら、不審を抱いた様子はない。

「そんなことより……」

それどころか、どこか媚びるような笑顔さえ浮かべ、つづけた。

「来週的环境マネジメント会議も、また、よろしく頼むよ」

昭雄が帰る前に、それだけ言っておきたかったらしい。

「は、はい」

昭雄がうなずくと、課長も満足そうにうなずき返し、席へ戻っていった。

それを見送り、ため息をついた後、昭雄は高橋智美

の方に向き直った。

「……じゃ、悪いけど、お先」

「お疲れさま」

智美も笑顔で応えてくれた。

出口に向かう途中、他の連中も「お疲れ〜」と口々に声をかけてくれる。こんな時、以前なら感じた冷たい眼差しも、影をひそめている。

この一カ月ほどで、職場の雰囲気は大きく変わって  
いた。

以前、苦勞してまとめた環境報告書に関する資料を、  
重役も出席する会議で報告する段になり、課長は、そ  
の役をも昭雄に押しつけてきた。自分では説明する自  
信がなかったようだ。

課長とともにその会議に出て報告すると、担当重役  
がいたく感心し、昭雄のことを評価してくれた。

「君は、これを一人でまとめたのか？」

結果、昭雄は、その重役から会社一の「環境通」だと見なされ、今後もその会議に出席してくれと言われた。

それで課長は、昭雄をないがしろにはできなくなつた。さらにその席で自分自身も「指導力」をほめられ、気分をよくしたこともあり、昭雄に対する態度を一変させたのだ。

すると——現金なもので——、課長の顔色を読んだ課員たちの接し方も変わった。どうやら昭雄は、やつと総務課の一員として受け入れられたらしい。

おかげで最近では、理不尽な仕事を押しつけられることもなくなっていた。業務に慣れ効率がよくなったこととも相まって、たいていの仕事は定時までにかたづいた。

この週末も、持ち帰らなければならぬ仕事はない。



つまり、今夜から月曜の朝まで、会社のことはすべて忘れてしまっていていいわけだ。

昭雄は、弾んだ気分で社を出た。

しかし、それにもかかわらず、駅まで向かう道すがら、携帯を取り出した昭雄はこんな電話を入れた。

「……もしもし、きりん組の藤沢です。じつは今日、どうしても仕事の都合がつかなくて……。ええ、金曜

はいつも残業になるものですから……。それで、今週も、麻由のお迎えを亜希穂ちゃんのお父さんをお願いしようと思ひまして。……はい、谷原さんには連絡済みです。さゆり先生に、よろしくお伝え下さい」

最寄り駅で電車を降りた昭雄は、いつものバスでなくタクシーに乗り——電話で告げたとおり、保育園には寄らず——、マンションへと急いだ。

部屋に着くと、そそくさと背広を脱ぎ、バスルームに駆け込む。

脱毛ムースで脚や腋、腕などを脱毛し、シャワーで流す。そのあと、全身にたっぷり乳液をすり込む。

少なくともこの三日間は「きれいな体」でいたい。

素肌にはバスローブを羽織り、洗面台の前で丹念に顔を剃る。

もともとヒゲが薄い体質である上に、この頃では毎

晩、眉といっしよに抜いている。だから、うぶ毛程度しか生えていない。それでも顔を剃るのは、月曜の朝まで、自分自身その存在を忘れていたいからだ。

寝室の鏡台の前に座り、化粧水とクリームで整えたあと、メイクにかかる。

これも、毎晩のスキンケアが功を奏し、このところファンデののりがよい。あの十代の頃に戻るのは無理にしても、肌の張りや肌理きめがよみがえってきているの

はたしかだ。それに浮き浮きしながら化粧筆を走らせている自分に、昭雄はちよつと肩をすくめた。

：：ふふ、僕って：：あたしって、結局、お化粧とか、好きみたい。

かつて恭子先生にからかわれたことが、今になって納得できた。

とはいえ、つい凝ったアイメイクをしたくなる気持ち、昭雄は自制した。度を超さない上品さが大切だ。

この三日間は、母親らしく、そして……主婦らしく見  
せたいのだから。

ウィッグをかぶる。

じつは最近、内勤部門をいいことに自毛を伸ばし始  
めている。でも、まだ二カ月足らずでは、ウィッグに  
頼らざるを得ない。もう少し伸びたら、美容院に行っ  
て、セット次第で男でも女でも通るヘアスタイルにカ  
ットしてもらおうつもりだ。キスされる時、啓介の手が

うなじあたりをかき上げる日が待ち遠しい。

下着を着け、服を着る。

今日のトップは、ベージュのノースリーブのニットだ。もう冬だから、肩を出すのは日常着としては季節はずれかもしれない。でも、ある思惑があって、今日はどうしても、体の線にぴったりしたこのニットを着たかった。

花柄のフレアスカートを履き、ニットとアンサンブル

ルになったカーディガンを羽織る。外出用に、襟にフ  
アの着いたコートも用意した。

このコートは友紀枝のものだが、ニットやスカート  
は、じつは昭雄自身が新たに買い足したものだ。最近  
では、友紀枝が持っていた服だけでは足りない気がし  
て——というより、女としての自分にはもっと似合う  
服がある気がして——インターネットの通販サイトで  
注文したりもしているのだ。



そのスタイルを姿見で確かめたあと、昭雄はボストンバッグを用意した。それに、自分と麻由の土日分の服や下着をつめ、さらに、月曜の朝着て出るために、さつき脱いだ背広をガーマントケースに入れた。

ちようどそこで、電話が鳴った。

「……うん、今準備終わったとこ。すぐ降りるわね」  
保育園に寄って亜希穂と麻由を拾った啓介の車が、マンションの下に到着したのだ。

あのバレエの発表会の翌週から、昭雄と麻由は、週末を啓介の家で過ごすようになっていた。しかも、その間、昭雄はずっと女装し、女としてふるまっていた。こんな週末を送るようになったのには、もちろん、あれこれ理由がある。

まずは、土曜のバレエ教室。

家での仕事がなくなった昭雄も付き添うことにした

のだが、発表会に「母親」として出かけた以上、男姿で行けば、さすがに同一人物だとバレるだろう。それに、この前、啓介が他の母親たちの前で「母子家庭」などと口走ってもいる。バレエ教室では、そもそも「麻由ちゃんのパパ」は存在しないことになっているのだ。

それで、啓介と相談した結果——「子どもたちの着替えとかも、その方が好都合だしな」と啓介は言った——、また女装して出かけた。

そしてその帰りには、前週同様、啓介の家に寄った。麻由と亜希穂が「まだいっしょに遊びたい」と言ったからだった。

啓介の家で二人を遊ばせているうちに夕方になり、夕食もいっしょにとろうという話になった。そこで出前を頼もうとする啓介を、昭雄はとめた。

「そんなことばっかりしてるから、亜希穂ちゃんが偏食になるんでしょ」

そして、自らキッチンに立った。

「じゃ、その間に、また俺が子どもたちを風呂に入れとくよ」

啓介も、そう応じた。

夕食ができ、四人でダイニングテーブルを囲むと、

亜希穂は、昭雄の作った料理を「おいしい、おいしい」と食べた。昭雄はそれがうれしくて、「じゃあ、明日の日曜もママが作ってあげようか？」と言った。と、

啓介が「そのためだけに迎えに行くのも面倒だしな」と言い、その夜もまた、啓介の家に泊まることになった。麻由は亜希穂のベッドで寝、昭雄も、啓介とベッドをともした。

その週は日曜の夕方までだったのだが、次の週は夜になって「今から帰るのもなんだし」などと、どちらからともなく言い出し、日曜の夜も泊まってしまった。さらに三週目になると、「どうせ、あしたの朝、バレ

エ教室にいつしよに行くんだしね」と、前日の金曜から啓介の家に行くことになった。「君は着替えとかあるだろ。保育園のお迎えは、俺がするよ」と提案したのは、啓介の方だった。

そんなふうには、ひとつひとつのことには理由……と  
いうか、言い訳があった。

とはいえ、実際のところ、言い訳しなければならぬ  
い相手がいたわけではないし、他人が聞いて納得でき

るような言い訳でもないだろう。結局、昭雄と啓介は、自分たちの中に未だ残っている「良識」に対して言い訳しているのかもしれない。

いずれにせよ、そんな言い訳を重ねた結果として、今、昭雄は、週七日のうち三晩を啓介の腕の中で眠っていた。

「今夜は、どうやら肉づめピーマンだな」



スーパーの冷蔵棚からひき肉のパックを取った昭雄を見て、カートを押していた啓介が言った。

「ピン・ポーン！」

昭雄はそれに笑い返してから、その笑顔を、麻由と手をつないでついてくる亜希穂に向けた。

「亜希穂も、ピーマン食べられるようになったんだもんね」

「うん！ ママのお料理、おいしいもん」

亜希穂は、そう言いながら、ちよつと得意げに昭雄を見上げた。

最近では、昭雄も亜希穂のことを「ちゃん」づけでなく「亜希穂」と呼んでいる。啓介の方も麻由のことを「麻由」と呼ぶ。啓介も昭雄も、二人の娘を、平等に自分たちの子どもとして扱っていた。

「アキ、今夜はビールじゃなく、ワインにしないか？」  
そして啓介は、昭雄のことを「アキ」と呼ぶ。二人

の関係は、もう当然、「谷原」と「藤沢」ではないし、かといって、「亜希穂」と呼べば実際の亜希穂が混乱する。それで「アキ」というわけだ。

「いいわね。あなた、選んでよ」

昭雄の方は、それに対して、ごく自然に「あなた」と応じていた。

そんなふう呼び合いながらスーパーの通路を行く四人は、家族以外の何者にも見えない。美男美女の理

想的な夫婦が子ども連れで仲よく買い物する姿を、うらやましそうに見やる主婦たちはいたが、いぶかしげな視線を向ける者などいなかった。

いや、一人だけ、どこか冷ややかな視線を向ける人物がいた。

「あ、あの人……」

レジに並んだところで、昭雄は、隣の列からこちらに向けられるその視線に気づいた。

「あつ、こんばんは」

啓介があいさつし、昭雄も会釈した。

啓介と同じマンションに住む、例の横山というおばさんだった。

横山も、いちおう微笑を浮かべ会釈を返してきたが、また昭雄の方を探るような目で見てきた。

彼女は離婚前から啓介の家の事情を知っているわけ  
で、そこに現れた新たな「女」の存在が気になるのだ

ろう。それはわからなくはないが、昭雄は、彼女の眼差しが、どうしても好きにはなれなかった。

緑、赤、黄のピーマンのヘタを取って種を掻き出し、内側に片栗粉をまぶす。そこに、先にこねておいたひき肉とタマネギのみじん切りを詰める。

圧力鍋の中ではすでにシチューができあがっているし、サラダも盛りつけを終えテーブルに並べてある。

あとは、このピーマンを焼くだけだ。

ここでの食事作りも、週を追うごとに手際よくなっている。キッチンの構造に慣れたこともあるが、それ以上に、調理器具などの配置を、昭雄自身が使いやすいうように替えてしまったからだ。

以前このキッチンを使っていた女たち——啓介の前妻、それに横山も子守の時はここで料理していたようだ——の匂いが消え、次第に「自分のキッチン」にな

っていくのが、昭雄にはうれしいことのように思えた。肉づめを終え手を洗ったところで、昭雄はふと、なにか思いついたようないたずらっぽい顔をした。そして、背中に手をまわすと、エプロンはずした。料理を始める前にカーディガンも脱いでいたから、例のノースリーブのニット姿だ。

その姿で、いったんリビングに出る。

啓介はずてに娘たちを風呂に入れ終わり、ソファで



テレビニュースを見ていた。

しかし昭雄は、啓介にでなく、子どもたちに声をかけた。

「もうすぐできるから、待っててね」

「うん」

子ども部屋から積み木を持ち出し、リビングのじゅうたんの上で遊んでいた亜希穂と麻由がうなずいた。

啓介がテレビから目を離しこちらを向いたところ

で、昭雄は、亜希穂たちの脇にすんとかがみ込んだ。

「おうち、作ってるの？」

「うん、みんなのおうち。お庭もあるんだよ」

「ほら、亜希穂も麻由ちゃんも、パパもママもいるでしよ」

亜希穂と麻由は、積み木を家のように積んで、そのまわりにやはり積み木で囲いを作り、そこに四体の人形を並べていた。

「もしかして、このリカちゃんが、ママなの？」

「うん、そうだよ。だって、いちばんかわいいもん」

「ふふ、ありがとう」

昭雄は、笑いながら二人の頭をなで、ふたたび弾みをつけるように立ち上がった。

と、こちらを見ていた啓介の目が、ちよつと驚いたように見開かれた。それを視野の端にとらえながらも、昭雄は気づかないそぶりでキッチンに戻った。

ふたたび調理台の前に立った昭雄は、フライパンにバターをひき、ピーマンを並べた。

油が音を立て始めたところで、案の定、誰かが入ってくる気配を感じた。そのスリッパの足音は子どもではないから、まちがいなく啓介だ。

昭雄はそれにほくそ笑みながら、まだ気づかないふうを装っていた。

と、予想どおり、背後に近づいた啓介が両手で抱き

すくめるようにしてきた。

「……んん、なに？」

さも今気がついたように、昭雄は肩をすくめてみせた。

と、啓介の手がニツトの上を滑り、胸に近づいた。

その手が、片方のふくらみに達したところで、そこを確かめるように動いた。

啓介がちよつと息を呑むようにしたのがわかり、昭

雄はがまんできず、「んふ」と笑っていた。

と、耳もとで、啓介がきいた。

「どうしたの、これ？」

「ふふ：：本物：：みたいでしょ」

「ああ」

「ブレストフォームっていうの。ネットで見つけて買った。高かったのよ」

先刻、リビングでしゃがんだり立ち上がったたりした

時、その「乳房」が揺れたのに、啓介はやはり気をひかれたらしい。いつものパットではないその動きに、確かめずにいられなくなったというわけだ。

昭雄は、思惑どおり、啓介が誘いにつてきたことがうれしかった。今日、この体にぴったりとしたニットを選んだのも、カップの薄いブラをつけたのも、それに気づいてほしかったからなのだ。

「うむ、いいおっぱいだ」

啓介は冗談めかした口調でそう言いながら、さらにその手を揉むように動かした。

「……あん」

昭雄は思わず体をよじっていた。

「……えっ？　感じるの？」

啓介が笑いながら、でも、またちよつと驚いたようにきいてきた。

「ふふ、その気になれば、ね」



昭雄もまた、首をひねっていたはずらっぽい笑顔を見た。

「じゃあ、その気になってよ」

啓介はそう言うと、昭雄にキスしながら、さらにそこを揉んできた。

「うんくん」

昭雄は、ちよつとの間、それを楽しみ、鼻声を漏らしていたが、やがて体を揺するようにしてキスから逃

れた。

「だめよ。ピーマン、焦げちやうわ。それに、子どもたちに見られるでしょ」

そして、まだ名残惜しそうにしている啓介に、男の時にはぜったいにしない、甘えるような誘うような表情を向けた。

「あ・と・で、ね」

「あゝん」

深夜のベッドルームに、昭雄の声が甲高く響いた。

ブラのレースに口を寄せ、その「乳房」をこねるようにしてきた啓介に、昭雄はベッドのスプリングがきしむほどのけぞっていた。

けっして芝居などではなく、本気で感じていた。

シリコーン製のブレストフォームなのだから、皮膚感覚があるわけではない。でも、啓介の唇によって起

こされた揺れは、シリコーンの微妙な震えをともなつて実際の肌にも伝わってくる。その震えが、啓介から女として扱われているのだという思いに増幅され、悦びとなって全身の神経を駆けめぐる。

愛する人から愛され、かわいがられる女の幸せ。そんな思いに浸ることが、今の昭雄にとって、無上の喜びになっていた。

極言すれば、こんな瞬間のために、一週間を送って

いるとさえ言えた。ウィークデイの仕事でさえ、油断すると、こんな瞬間を思い出す。そして、自分が女の顔になっていることに気づき——今日の帰りがけのように——あわてるのだ。あの時、課長に対しあんな反応をしてしまったのも、帰ったあとの啓介とのことを考えていたからに他ならなかった。

「……ん、ううくん」

ブラのストラップをたどった啓介の唇が、腋の下か

ら、肩、首筋へと移動してきて、昭雄はさらに甘えた鼻声を漏らした。

「あゝ：：好き」

「愛してるよ、亜希穂」

「あたしも」

その唇を自分の方から迎えに行き、昭雄は、啓介と濃厚なキスを交わした。

夜、ベッドの中では、啓介は昭雄のことを――「ア

キ」でなく——「亜希穂」と呼ぶ。

昭雄は、そう呼ばれることがうれしかった。あの、高二の秋に置き忘れてきた、本当の自分を取り戻せた気がするからだ。

そう。今の昭雄は、こんな瞬間をこそ「本当の自分」だと感じるようになっていた。毎日、背広を着て会社に通う方が、むしろ、仮の姿だという気がする。月曜の朝、「男装」する時が、一週間のうち、最もつらい

と感じるのだ。

気がつくのと、さっきまでは胸元がはだけていただけだったネグリジエの、前のボタンがすべてはずされていた。それだけでなく、啓介もパジャマを脱いでいた。

自分の上に覆いかぶさった啓介の裸の背中に両腕をまわし、昭雄は、こんな時間がいつまでもつづけばいいと思った。

と、昭雄の体をまさぐっていた啓介の手が下半身に



伸び、両腿の間に割って入った。そして、探るように合わせ目を這い、そこに近づく。

「……ううん」

昭雄は体をよじり、腿を閉じたが、その声音には、むしろねだるような響きが混じった。

じつは、お互いそんなことは初めてだったこともあり、最初の時、つまりあの発表会の夜、体の結合自体はうまくいかなかった。しかしその後、啓介は——お

そらくネットかなにかで——「勉強」してくれたらしい。昭雄の体の閉ざされた部分を柔らかげるため、さまざまな前戯をしてくれるようになった。昭雄の体からは分泌できないものを補うために、潤滑剤も手に入れてくれた。

そのおかげで、この頃では、自分の中に啓介が入ってきた時、最初の頃感じたような痛みは感じなくなっていた。いや、そのことに、大きな快感を覚えるよう

になっていた。

そして先週、啓介が果てた瞬間、ついに、男の時には一度も感じたことのなかった体全体が震えるような、大きな悦びに包まれた。あれは、女としての絶頂だったのだと思う。

今夜、昭雄は、もう一度それを確かめたいと思っていた。

だから、啓介が前戯を終える頃には、自ら脚を開き、

啓介の両肩にかけるような体勢をとっていた。

啓介は、その脚を両腕で抱え、その間に向かって倒れ込むように腰を突き出してきた。

「あーっ」

そこに、啓介の“剛さ”を感じ、昭雄はまたのけぞった。

入ってきた啓介は、ゆっくりと腰を前後し、それを抜き差しし始める。

折り曲げられた体に断続的に加わる啓介の重みがちよつと苦しいのだけれど、その苦しきさえ、啓介の思を受け入れているのだという悦びに変わっていく。

啓介の動きが、次第にスピードを増す。

「あ、あ、あつ、：：：」

激しくなった啓介の息づかいに合わせるようにあえぎながら、昭雄は両手を差し上げ、その太い首筋をつかまえようとした。

自分に向かって一心に突き進んでくる啓介のことが、愛おしかった。

啓介が、この体に欲情してくれているのが、うれしかった。

だから昭雄は、もっともっと、女になりたいと思っ  
た。

「……あー、亜希穂……」

やっと啓介の首をつかまえ、その後ろで両手の指を

からめたところで、啓介が、耐えられないという感じの声をあげた。

「あゝ、あなた、来て……」

自分の中で、啓介の“剛さ”がぐんと張りつめたのを感じ、昭雄も言っていた。

次の瞬間、つづけざまになにかが爆発するような感覚があり、昭雄の体の奥深くが満たされていった。

「あゝゝゝっ」

ベッドに押しつけられた両肩が、自然に、くねるよ  
うに動いた。

最後に、まるでぶつけるとでもいうように腰を突き  
出したあと、啓介の体が、どさりと被さってきた。

汗がにじんだその背中に手を這わせながら、昭雄は  
未だ夢の中にいた。

啓介はすでに疲労の内に果てていたが、昭雄の体の  
中では、まだその余韻がつづいている。いや、という



より、そこから始まった波動がゆっくりと広がり、さらに体全体を満たしつづけていた。

：：もしかしたら、僕は：：あたしは、あの高二の時からずっと、これを待ちつづけていたのかもしれない。

そんな気がした。

そして、そんな満たされた思いの中で、啓介はもちろん、子どもたちをも、この部屋での暮らしをも、さ

らにいえば、この世の中のすべてのことをも、受け入れ、愛している自分を実感していた。

幸せだった。

しかし、そんな幸せは、世の中の側からはけっして受け入れられるものではなかった。

愛し合う二人がいて、子どもたちがいる。

一見、なんの過不足もないこの「家族」も、現実の

前では、いびつでもろい積み木の家でしかない。

やがて昭雄は、それを思い知ることになる。

あの時と、同じように。

*memory 5*

「さて、最後の一文…… Thus, she met her better  
half. ……これは、文法的にはなんの問題もない文

章だが、単語の表現としては覚えておいた方がいい。誰か、訳してくれるか？」

英語の教師は、そう言って教室内を見渡した。

「じゃあ：：藤沢」

「はい。：：『こうして、彼女ははんりよ伴侶に会った』」

答えながら、昭雄は、なんだかいやな予感がした。

「うむ、better half を『伴侶』としたのは、辞書を調べてきた証拠だな。ただ、『伴侶』というだけなら、

companion とか partner とかいう単語だってある。Better half というのは、文学的というか、ちよつとオーバーな表現だ。なにしろ、自分の存在の半分を占めるような、いわば運命的な人だと言ってるわけだからな。だからこの場合、小説の章末としては、『かくして、彼女は生涯の伴侶と出逢った』とでも訳す方がニュアンスは伝わるだろうな」

教師はそうまとめたと、昭雄にきいた。

「で、藤沢はもう、ベター・ハーフと呼べるような人に出逢えたか？」

教師としては、単元が終わったところで言った軽口だったのだろうが、案の定、その言葉にクラスメイトたちが反応した。

誰かが「ヒュー」と口笛を吹き、ざわめきが起こったのだ。

「You met your better half. . . . な、亜希穂ちゃ

ん」

昭雄は、恥ずかしさと、腹立ちとで、赤い顔を伏せた。

学院祭で上映された林田祥一脚本監督の「映画」、『あかね色の記憶』は、その不鮮明でノイズだらけの映像にもかかわらず、そして、ところどころ間のびした稚拙な演技や演出にもかかわらず、全クラスの企画



中、いちばんの評判をとった。学院祭一日で計六回上映されたのだが、一回目を除き、視聴覚教室には入りきれないほどの観客が押しかけた。最初の回を見た生徒が他の生徒たちに話し、その噂が瞬く間に学校中に広まったからだ。

噂の中身はふたつあった。ひとつは「ものすごくかわいい女の子が出ている」というもの。そしてもうひとつは「キスシーンがある」ということだった。ふだ

ん、どこか殺伐とした雰囲気が漂う男子校で、その噂には、じゅうぶんなニュースバリユーがあつた。それで、中学部を含め、ほぼ全校生徒が見に来た。中には二回三回と見た生徒もいたようだ。

当然すぐに、「あの女の子は何者なんだ」という詮索が始まった。そして、その日のうちに、第三の噂が広まっていた。

「あれは、じつはうちの生徒らしい」

「えっ、うそ!? 男なのかよ」

「なんでも、二Bの藤沢ってやつだとか」

そんな会話が、あちこちで交わされた。

「作品」として見てほしい林田や飯田は、むしろそれを隠したがっていたから、他のクラスメイト、もしかすると福田や山波あたりが、得意げに言いふらしたのかもしれない。

いずれにしても、学院祭が終わる頃には、「ヒロイ

ンのかわいい女の子」の正体が昭雄であることは、学校中に知れ渡っていたのだ。

指数関数の例題の解法を説明したあと、数学教師が言った。

「それじゃあ、次の二問は、誰か前に出てやってもらおうか」

もちろん、自らすすんで手をあげる生徒はいなかつ

だが、自信があるかどうかは、顔を見ればわかるのだらう。

「じゃあ、問1は谷原」

教師は、すぐに啓介を指名した。

昭雄もいちおう予習してきていたから、そこまでは顔を上げていたのだが、あわてて目を伏せた。ここであてられたくはない。

しかし、そんなふうにしたことが、逆に教師の目を

ひいてしまったようだ。

「問2は、そうだな：：藤沢、やってみろ」

また悪い予感に駆られながら、昭雄はしぶしぶ椅子を引いた。

と、やはり、昭雄が立ち上がるより前に教室全体がざわつきはじめた。

それを気にしないふうを装い、何気ない顔で前に出たのだが、啓介と並んで板書しはじめると、ざわめき

は明確な冷やかしに代わった。

「よっ！　後ろ姿もお似合いだぜ」

「なんでそんなに離れてんだよ。もつとくつつけよ」  
からかうような笑い声が背後で波打った。さらに：

。。。

「冷たいんだな。キスした仲だろ」

そんな声も聞こえた。

しかも、今のはどうやら、福田らしい。

他のクラスメイトばかりか、例の「映画」をいっしよに撮ったメンバーまでがそんなふうにしてくることに、昭雄はいらついた。

と、そんな昭雄の横からも、ぶつけるように書くチヨークの音が聞こえてきた。啓介もまた、級友たちの冷やかに腹を立てながら、それを無視しようとしているにちがいがなかった。

しかし昭雄は、その横顔を確かめることさえできな



い。もし、すこしでも啓介の方に顔を向ければ、やはりここぞとばかりはやし立てられるに決まっていた。

学院祭が終わり期末テストが近づいても、その噂は絶えなかった。それどころか、尾ひれがついて増幅していった。昭雄は、いつしか、女装趣味のホモということにされていた。そして、昭雄と啓介は本当にデキているらしいという話が、もつともらしくささやかれている

た。

「あのキスシーン、もともとのシナリオにはなかったっていうぜ」

そんなウラ情報が、噂の根拠になった。メンバーの中に、やはり、それをリークしたやつがいたのだ。

「じゃあ、マジで？」

「ああ、あの目つき、二人とも、ふつうじゃなかったろ」

「藤沢なんて、本気で泣いてたもんな」

その結果、昭雄と啓介は、全校の注目の的になった……というより「さらし者」になった。

特に昭雄はひどかった。

休み時間には、他のクラスや学年の生徒が——校舎が別の中学部の生徒さえ——珍しい動物でも見るように、わざわざ教室までやって来た。廊下を歩いていても、にやにや見られ、冷やかしの声をかけられた。

「あれ？　亜希穂ちゃん、今日はセーラー服じゃないんだ」

「で、谷原とは、もうやったのか？」

一度など、下駄箱の中に、三年生からの——からかいなのか本気なのかよくわからない——こんな手紙が入っていたこともある。

「好きです。毎日、君のことばかり思っています。君が谷原といっしよの教室にいるかと思うと、受験勉強

も手が着きません。どうか、こんな僕を救ってください  
「

救われたいのは、昭雄の方だった。

いずれにせよ、そんな嘲ちやうろう弄ろうにさらされ、今、昭雄

は、啓介との会話はもちろん、視線を交わすことさえ  
避けていた。それはまた、啓介も同様だった。

「そろそろチャイムが鳴るから、レポートまとめた班

からかたづけにかかって」

理科室の実験机をまわっていた恭子先生が、時計を見ながら言った。

「ガスバーナーの元栓は、しっかり閉めること。使用済みの溶液は、流しに流さず処理層に捨ててね。それから、ビーカーやメスシリンダーを洗う時は、ゴム手袋使うのよ。男の子でも、お肌が荒れるの、いやでしょ」

ほとんどの生徒が、手っ取り早く受験ノウハウを身につけたいと思っている学校だ。普通なら、実験授業などふてくされ気味にやっている者が多い。でも、恭子先生の授業だけは、いちおう真面目に取り組んでいる。

昭雄の班でも、林田に「お前、書け」と押しつけられた飯田が、実験レポートをまとめていた。

「あとは……、『今日の実験の感想』だつてさ。なん

かあるか？」

「そうだな：：、白衣の襟元からのぞくピンクのセーターがすてきでした：：とか、書いとけ」

林田がそう言い、飯田があきれ顔をしながらもそれに従っているのを見て、昭雄はどこか救われる思いがした。この二人だけは、以前と変わらない。

と、そこで、やはり同じ班の山波が、実験机の上のビーカーなどを指さし言った。



「藤沢、お前、洗ってこいよ」

「いいけど……」

なぜか山波がニタついているのが気になりながらも、昭雄は、実験器具を持ち席を立った。

壁際に造られた流しに向かうと、いくつか並ぶ水道の蛇口は、すでに他の班の生徒でふさがり、空いているのはひとつだけだった。

そこに入ろうとして、昭雄は足を止めた。

隣の水道を、啓介が使っていたのだ。

おそらく山波はそれに気づき、わざわざ昭雄に行けと言ったのだ。

そう思いながらも、昭雄は、しかたなく啓介の横に並んだ。

蛇口にかかったゴム手袋を取ると、隣で、啓介の学生服の肩がぴくりと震えたのがわかった。こちらに気がついたのでろう。

しかし昭雄は、やはり、その顔を確かめることはできなかつた。啓介もまた、何も言わず、ビーカーを洗っている。

と、まずいことに、すぐそばに座っていた福田が、それを目ざとく見つけた。

「おっ、やっぱり啓太と亜希穂ちゃんは、運命の糸で結ばれてるみたいだ」

大声で言った福田の声に、またクラス中の注目が集

り、口笛や冷やかしが始まった。

昭雄も啓介も、それを無視した。

無視しながら、昭雄はいらついていた。福田に対してはもちろんだが、そのいらだちは啓介にも向いていた。

じつは内心、啓介が福田に言い返すことに期待していた。ふと、あの撮影中、チンピラにからまれた時のことを思い出したのだ。

しかし啓介は、黙々と実験器具を洗いつづけている。と、誰かが肩をとんとんと叩いた。

「代わるよ」

振り向くと、飯田だった。

どうやら、昭雄のことを気づかかって、来てくれたらしい。もしかすると、林田に「行け」と言われたのかもしれない。そう思い自分の班の方を見やると、やはり林田が、どこか申し訳なさそうな視線を送ってきた。

「おい、飯田、そりやないだろ。せつかく二人になれたのに、じやましてやるなよ」

福田はさらにそんなふうに言ったが、飯田は、なかば強引に昭雄の手からゴム手袋を取り上げた。

福田に同調して飯田を非難する声があがり、周囲にちよつと険悪な空気さえ漂った。そんな中、昭雄が立ちつくしていると、今度は恭子先生が声をかけてきた。

「藤沢君、各班から試薬の瓶を集めて準備室まで運ん

でくれる？」

恭子先生も、この状況に気づき、昭雄を助け出そうとしてくれたようだ。

「はい」

そう返事しながら、昭雄は、視野の端で啓介の背中を見た。

啓介はやはり、振り向きもせず、自分の作業をつづけていた。

冷やかされ、からかわれるということでは、もちろん啓介も同じような目にあっている。しかし、その度合いは、「女」として扱われるぶん、昭雄の方が強いように思えた。それに、啓介には、そんなからかいを断固として無視しきるだけの精神力があるようだ。

そう思うと、昭雄は、啓介のことをも恨めしく感じるようになっていた。



もともと、こんな目にあうのは、あの「映画」の中で、啓介があんなことをしたからだ。あのキスシーンさえなければ、ここまで噂になることも、や揶ゆされることもなかったはずだ。

それなのに、なんで僕の方が、こんな思いをしなければならないのか？

林田や飯田は責任を感じているらしいのに、谷原は、そのことをなんとも思っていないんだらうか？

昭雄は、自分の方から避けておきながら、啓介が何も言っただけで、こんなことにはいらだっていた。

そして、そんな思いは、啓介の存在自体をうとまし  
いと感ずるまでにふくらんでいた。

：：谷原さえいなければ、こんな思いをすることも  
ないんだ。

昭雄は、啓介が目の前から消えてくれることさえ願  
った。

「なんか、いやな目にあってるみたいね」

理科準備室の薬品棚に試薬の瓶を戻しながら、恭子先生が言った。

進学率向上に血道を上げる他の教師たちは、生徒たちのそんな動向に無頓着だが、恭子先生だけは、やはり心配してくれているようだ。

それに救われた思いを抱きながらも、恭子先生の前

で素直に認めてしまうのも格好がつかない気がして、昭雄は曖昧な顔をした。

と、恭子先生がつづけた。

「結局、みんな、うらやましがってるのよ」

「うらやま：：しい？」

「うん、谷原君がね。それに、じつは、藤沢君のことも。でも、みんな正直じゃないから：：」

昭雄は、恭子先生の真意がわからず、浮かない顔を

つづけるしかなかった。

「みんな、あんなかわいい女の子と恋愛したいんだろ  
うし、それに、あんなかわいい女の子になってみたい  
って感じた子だって、けっこういたんじゃないかな。

だけど、そんな気持ちを正直に表せなくて、やきもち  
やいて、イジメみたいなこととしてくる。そういうこと  
なんだと思うよ」

言いながら薬品棚のガラス戸に鍵をかけると、恭子

先生は、深刻さを振り払うとでもいうように、いたずらっぽい顔を向けてきた。

「あの『映画』の中の藤沢君って、ほんとにかわいかったもん。あたしだって、妬けてきちやったわ」

：：そんなこと言われても、なんの救いにもならない。

昭雄がそう思ってぶすつとしていると、恭子先生は、さらに冗談めかしてつづけた。

「まあ、私の経験から言っても、美人はねたみやそねみを集めるものよ。今は、そう思って、平気な顔で無視するしかないのかもね。嫉妬って、押さえつけたり反発したりすると、よけいに陰湿になるから」

これも、救いにならない言葉だった。そうするしかないことは、昭雄にだってよくわかっている。

昭雄がさらに浮かない顔を見ると、恭子先生はやつと、今のなぐさめが、けっして「男の子向け」でなか

ったことに気づいたようだ。ちよつと取り繕うように、  
こうつけ加えた。

「で、でも、それもすぐに終わるわよ。年が明けて、  
谷原君がいなくなれば、噂も自然に消えるんだろうし」

「……？」

恭子先生がなにを言っているのか、またわからなくなり、  
昭雄は不可解な顔で首を傾げた。

と、それを見た恭子先生の方も、意外そうな顔で聞



き返した。

「あれ？　谷原君から聞いてないの？」

「……なんの……ことですか？」

「そうか……。てっきり、藤沢君には話してるのかと  
思った」

「……？」

「どうせすぐわかるんだから、言ってもいいわよね。

谷原君ね、今学期いっぱい転校するんだって」

「……えっ!？」

昭雄は、思わず声をあげていた。

「お父さんのお仕事の都合でアメリカに行くっていう話よ。年末には、ご家族と一緒に発つらしいわ」

「……」

突然の話に、昭雄は、ただ呆然としていた。

啓介がいなくなる。

それは、ある意味、昭雄が願っていたとおりのことだ。

それなのに、気持ち晴れるということはなく、逆に、なんだか中途半端なところに放り出されたような気分だった。

そんな気分の中、相変わらずつづく他の生徒からのからかいに耐える毎日を送り、やがて学期末が近づくと、恭子先生の言葉どおり、担任から啓介の転校が告

げられた。

そのあとも、昭雄と啓介は、いつさい会話を交わすことがなかった。

今度は、その啓介の転校が格好のネタとなり、「運命に引き裂かれる悲劇の恋人たち」というストーリーがつくられ、その路線にのっとって、からかわれ、はやし立てられたからだ。

終業式の日、啓介があいさつに立った時も、福田た

ちは「お別れのキスはしなくていいの、亜希穂ちゃん」  
などとからかってきた。そのせいで昭雄は、別れを告  
げる啓介の顔さえ一度も見ることがなかった。

じつは昭雄は、心のどこかで、アメリカに発つまで  
に啓介からなんらかのアクションがあるのではないか  
とも思っていた。たとえば、自宅に電話してくるとか  
なら、できるはずだ。

しかし、そんなこともないまま、冬休みに入り数日

がたった。

いよいよ年の瀬というある日、家の電話が鳴った。

母に「学校のお友だちからよ」と告げられ、どぎまぎしながら出てみると、しかしそれは、啓介ではなかった。

「谷原のやつ、明日、発つんだそうだ」

いきなりそう言った相手の声に、昭雄は一瞬、林田

までがからかおうとしてきたのかと警戒した。それで、感情を表さない声で「ああ」とだけ返事した。

すると、林田はこうつぶけた。

「じつは俺、谷原に頼まれたものを届けに、空港まで行くことになったんだ。よかったらお前も来ないか？」

その声音から、からかっているのではないことはわかったが、それでも昭雄は「どうして僕が？」とぶつきらぼうに聞き返していた。電話してきたのが、啓介で

なく林田だったことに、どこか気持ちが悪じれていた。  
「……えっ、ああ、まあな。谷原と二人きりで『空港  
の別れ』なんてシーン、照れるだろ。それで、お前を  
巻き添えにしようと考えたわけだ」

その林田の言い方に、ちよつと心が和むような気は  
したが、昭雄は、返事を曖昧にしたまま、黙っていた。

と、林田は——いかにも林田らしく——、一方的に  
待ち合わせ場所と時間を告げて電話を切った。



翌日、昭雄は、昼近くまでは行かないつもりでいた。

啓介自身に誘われたわけでもないのに、のこのこ見送りに行くなど、格好がつかないと思ったからだ。いや、とういうより、啓介に対して腹立たしい思いもあり、意地でも行きたくないと思っていた。

しかし、待ち合わせの時間が近づくにつれ、なにかに突き動かされるような気持ちになった。

今のもやもやした気分を決着をつけなければいけない。じゃないと、前に進めない。

そんな気がしたのだ。

そして、間に合うぎりぎりのところで、家を飛び出していた。

林田と落ち合い、空港に到着すると、ロビーは、年末始を海外で過ごすらしい観光客でごった返している。

た。

そのせいで、林田が事前に約束していたという場所まで行っても、啓介の姿はなかなか見つからなかった。

「……あつ、あそこだ」

やっこのことで見つけ、駆け寄る林田に従いながら見やると、やはり林田を探していたらしい啓介も気づき、こちらを向いた。そして、次の瞬間、驚いたような緊張したような顔をした。

おそらく、昭雄まで来るとは思っていなかったからだろう。

一瞬、そんな啓介と目が合い、昭雄は——この間の習慣もあって——あわてて視線をそらした。

うつむいたまま、林田の後ろに立つと、林田と啓介は「すごい混みようだな」などと、世間話のような会話をふたことみこと交わした。

しかし、すぐに林田が、シヨルダーバッグの中から

なにかを取り出した。

「ダビング、してきたぜ」

昭雄がちょっと目を上げると、林田が啓介に手渡ししたのはVHSのビデオカセットだった。

他に思い当たるものもないから、それはおそらく、あの「映画」のコピーなのだろう。林田は昨日の電話で「谷原に頼まれた」と言っていたはずだ。ということとは、啓介自身がダビングを頼み、アメリカへ持って

いこうとしているわけだ。

昭雄は、それが意外な感じもして、思わずさらに目を上げていた。

と、受け取ったビデオを胸のあたりに抱くように持った啓介が見返してきた。

昭雄はまた目をそらそうとしたが、啓介の視線の強さにそれができず、見つめ合うような形になった。

そんなふうにするのは、あの「映画」の撮影以来だ

った。

啓介は何も言わなかったが、まるでなにかを訴える  
とでもいうように、昭雄の顔を見てきた。

その視線の前で、昭雄の方も、とらえどころのない  
感情がこみ上げてくるのを感じた。

それは、やるせなさ……というか、どうしようもな  
いほどの悲しみ……というものだった。

……なんで、こんなに悲しいんだろう？

昭雄は、その自分自身の感情に戸惑った。

：：谷原と別れるのが、悲しいんだろうか？

それはあるかもしれない、という気はした。

：：でも、それだけじゃない。

この感情は、もっと直感的なものだ。別れとかいう以前に、啓介からこんなふうに見つめられていること自体が悲しい：：そんな感じなのだ。

ふと気がつくと、その啓介自身の眼差しの中にも、



昭雄と共通するものがあつた。強く見つめながらも、その見つめていること自体が、つらく悲しいとでもいうような感情がにじんでいるのだ。

：：谷原は、いったい、なにがそんなに悲しいんだらう？

そう考えたところで、ふいに昭雄は、この悲しみの理由が、自分が今着ている服のせいなのかもしれないと感じた。

昭雄は今日、ジーンズに厚手のトレーナー、その上にこげ茶のダツフルコートという格好をしていた。冬休み中の男子高校生としては、いわばあたりまえの姿だ。でも……。

……たぶん、谷原は、僕のこんな姿を見るのがつらいのだ。そして僕は、谷原にこんな姿を見られるのが悲しいのだ。

そう思った。すると、その考えはさらに発展した。

：：もしかすると、この間、僕たちが避け合っていたのは、みんなからはやされるせいなんかじゃなかったのかもしれない。

じつは自分たち自身の中に別の理由があったのではないかと、昭雄は思った。

：：僕は、学生服を着た僕を、谷原に見てほしくなかった。谷原だって、そんな僕を見たくはなかった。そういうことだったのかもしれない。

そして昭雄は、あの「映画」の撮影の時のことを思い出していた。

もし、今、僕が、あの時みたいな格好をしていたなら……。

オフタイトルの白いセーターに赤いチェツクのミニスカート……昭雄は、そんな姿でこの場に立っていた。かっつた。ストレートロングの髪にカールしたまっげ、そしてピンクの唇……旅立っていく啓介に、そんな顔

を見ていてほしかった。

：：そしたら僕は、きつと、もつと素直になれるの  
だろう。谷原だってそうにちがいない。

人が行き交う空港のロビーで、別れを前に見つめ合  
う少年と少女：：少女なら、泣くこともできる。少年  
の胸に飛び込み、すぎることでだってできる。

：：でも、現実の僕は：：、そうじゃない。

そう思うと、悲しみはさらに募った。

しかし、その悲しいという感情すら素直には表せな  
いまま、昭雄は、啓介を見つめていた。

と、すぐ近くで声が聞こえた。

「啓介、そろそろ搭乗時間よ」

四十年配のスーツ姿の女性だった。整った顔立ちと、  
前髪がウェーブを打つようなくせつ毛は、おそらく啓  
介の母親なのだろう。

啓介は、母の方に目でうなづくようにしたあと、も

う一度昭雄の方を見つめてきた。

そして、立ち去る前にまた、なにかを訴えるような表情でひとつうなずいた。

でも、昭雄は、それにうなずき返すこともできず、父母とともに搭乗ゲートへと向かう啓介の後ろ姿を見送っているしかなかった。

「……展望デッキへ行かないか？」

突然、脇から声をかけられ、昭雄が——その存在を

すっかり忘れていたこともあり——ぎくりとして見やると、林田は、シヨルダーバッグの中からビデオカメラを取り出した。

「せっかく空港へ来たんだから、飛行機でも撮つところうと思つてさ」

年末ともなると、吹きっさらしのデッキはさすがに寒い。見送りに出ている人影もまばらだった。



頬に突き刺さるような冷たい風の中、離発着を繰り返すジェット機を見ながら、昭雄はまだ、先刻の悲しみを引きずっていた。

しかし一方で、その寒風に、夢から醒まされるような気分も味わっていた。

：：そう、あれは、夢だったんだ。

昭雄はそう思った。

たとえば昭雄がどんな気持ちをかかえていようが、今、

目の前にある現実は、まるでこの風のように悪意に満ちた学校生活なのだ。

その風はまあ、恭子先生の言うように、いずれ吹き止むのかもしれない。でも、そのあとには、受験が待っている。そしてさらに、一人前の男として、社会に出て闘っていかねければならない。そこでは、今よりもっとひどい悪意にさらされることだつてあるだろう。これから先は、もう、子どもっぽい感傷が入り込

むゆとりなどないのだ。

：：いつまでもおかしな悲しみに浸ってちやいけない。この風に、立ち向かっていくしかないんだ。

昭雄がそう思っていると、先刻から金網のそばに立ち、飛び立つジェット機にカメラを向けていた林田が近づいてきた。

「谷原が乗ったの、たぶんあれだぜ」

林田が指さす方を見やると、ジャンボジェットが一

機、滑走路の端に移動し終わったところだった。

昭雄は、無言でうなずき、そのジェット機を見つめた。

啓介の父は、ロスで始めていた事業が軌道に乗り、それで一家そろっての渡米を考えたのだという。だから、この移住は、半永久的なものになるだろうという話だ。

……たぶん、もう、谷原と会うことはないんだ。

そう思っていると、ジェット機がゆつくりと動き始めた。

そのとたんだった。

なにかが急激にこみ上げ、昭雄の目からあふれ出した。

風のせいで冷たくなった頬に、熱い液体が、次々に伝って落ちるのがわかった。

先刻、ロビーにいる時こらえていたものが、一挙に

吹き出てきた感じだった。

昭雄の隣に立っていた林田も、それに気づいたらしい。昭雄の方をちらりと見て、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに、まるでそれを見なかったとでもいうように、ビデオカメラのファインダーを目に当て離れている。その背中は、昭雄に、思う存分泣けと言っているようだった。

加速度を増し滑走路を滑ったジェット機は、あつと

いう間に離陸した。

その視覚より遅れてやって来た轟音の中で、次第に小さくなっていく機影を見つめながら、昭雄は、とどまるところなく泣いていた。

そして、こう思っていた。

……忘れよう。

この秋からの奇妙な出来事のすべてを、あの谷原が持っていたビデオの中に封じ込めてしまおう。

自分の思いは、この涙とともに、すべて洗い流してしまおう。

もう、一生、思い出すのはよそう。

谷原のことも、そして……、「亜希穂」のことも……。



11 不定型な悪意

最初の予兆は、保育園で現れた。

「あの：：藤沢さん、ちよつと」

ある日のお迎えの時だった。啓介がまだ来ていなか

だったので保育室で待っていると、廊下からさゆり先生に呼ばれた。

延長保育は他の保育士がみていたから、彼女はもう勤務時間外のはずだ。

：：もしかしたら、僕に用があって残っていたんだろうか？

首を傾げながら廊下に出ると、さゆり先生は、ついて来いという眼差しとともに、突き当たりの、今は灯

りも消えている給食室の前まで歩いていった。

こんなところに来るのは、やはり、他の人間に聞か  
れたくない話があるからにちがいなかった。

「……あの、なんででしょう？」

ちよつと不安な思いに駆られながらきくと、さゆり  
先生は、言い惑うという顔をしたあと、まず、こう切  
りだした。

「麻由ちゃんのお母さんは、事故でお亡くなりになっ

たんですよね？」

「……え、ええ、そうですが」

「その……もしかして、再婚のご予定がおりになる  
……とか？」

「えっ？ いや、そんなことは、ありませんけど……」  
昭雄が——不安が募ったこともあり——いぶかしげ  
な顔をしたせいだろう。

「……あつ、もちろん立ち入ったことをお聞きするつ

もりはないんですよ」

さゆり先生はひとことことわった。そして、次にはなんと、こうつづけた。

「じゃあ、やっぱり、麻由ちゃんが『ママ』と呼んでるような人は、いないですよねえ」

「……えっ！」

その言葉に、昭雄はあせった。

「……え、ええ」

とりあえずうなずいたが、頭の中では、猛烈な勢いで考えをめぐらせていた。

：：もしかして、麻由が——それとも亜希穂が——  
なにか口走ったのかもしれない。「保育園ではママの  
話はしちやだめよ」と、二人にはつねづね言い聞かせ  
ていたが、やはり四歳児には無理な注文だったのだろ  
うか？ それにしても、もしそうだとしたら、どうご  
まかせばいいのか：：？ いや、それどころか、僕た

ちの関係が知られたとなると、もうこの保育園にいら  
れなくなるかもしれない。いや、しかし……。

パニックに陥りながらも、まず、さゆり先生がどこ  
まで知っているのか探る方が先決だと考え、昭雄はや  
つとのこととで口を開いた。

「……あ、あの……、麻由が、なにかそんなことを……」

と、やはり浮かかない顔で考え込んでいたさゆり先生

が、「あ、いえ、そういうことじゃなくて……」とつづけた。

「じつは、今朝、出勤してくる時に変なことがありますして」

「……変な……こと？」

「ええ、保育園に入ろうとしたところで、女の人に呼び止められたんです」

「……はあ、……？」



「で、私がここの保育士だとわかると、さかんに『麻由ちゃんのママ』のことをきいてくるんです。どこに住んでるどんな人だ……とか」

「……？」

どうやら麻由や亜希穂の口から秘密が漏れたのではないらしいことに、昭雄はちよつとほつとしたが、話の意外な展開に首を傾げた。

「園児の家の事情を外部に漏らさないのは、こういう

仕事の基本だと思いますから、ずっと口をつぐんでたんです。でも、その人、なんだか妙にしつこくて、ちよつと気味も悪かったし……、それで私、つい、『麻由ちゃんのところは、ママはいませんよ』って言っちゃったんです。で、あとから考えると、それもまずかったなって……。本当に申しわけありませんでした」

さゆり先生は、そう言っただけで頭を下げた。

「なにかの信用調査とか、もしかしたら、もっと悪い

ことに関わることもかもしれないのに……」

「どうやら、それを気にして、昭雄を待っていたらしい。」

「……い、いえ。べつに、いいですよ。ほんとのこと  
ですし、役所とかへ行けばすぐわかる話ですから」

「さゆり先生があまりにしよげ返っているので、昭雄  
は、とりあえず、なぐさめるように言った。」

「……それにしても、いったい、どういふことだろう？」

昭雄が考え込んでいると、さゆり先生は、さらに頭を下げた。

「ほんとにうかつでした。申しわけありません。誘拐だとか、最悪のことだって考えられるわけですし……」  
まさかそんなことはないと思ったが、そこで昭雄は、ある人物の顔が頭に浮かび、きいてみた。

「その人って、もしかしたら、年配の……？」

あの横山というおばさんを思い出したのだ。バレエ

教室の先生や母親を除けば、「麻由ちゃんのママ」を知っているのは、彼女しかいない。

しかし、さゆり先生はその言葉に首を振った。

「いえ、私が会ったのは、若い人でした。たぶん、まだ二十代の」

昭雄はさらに首を傾げた。

次の予兆は、その二日後、今度は職場でだった。

昼休み、社員食堂で食事を済ませ席に戻ると、同僚のOLといっしよにコンビニのおにぎりかなにかを食べていた高橋智美が立って来た。

「藤沢さん、じつはさつき、変なことがあって……」  
その口から、二日前のさゆり先生と同じ言葉が出たのが気になり、「えっ？」と聞き返すと、智美は、さらにさゆり先生と同じようなことを言った。

「コンビニに行こうと思って会社を出たところで、女

の人に呼び止められたんです。それで、藤沢さんのこと、あれこれ聞かれています。奥さんはいるのか……とか」

「……!?!」

昭雄がさらに驚いた顔で見やると、しかし智美は、さゆり先生とはまったくちがった解釈をしていた。

「あの人、保険の外交かもしれません。父子家庭をねらって、高額の生命保険に入れとか……。気をつけてくださいね」

その週起こったのは、それだけだった。

どうやら自分が誰かから探られているらしいことに不気味な感じは抱いたが、そのとらえどころがない話には、対処のしようもなかった。

いちおう啓介にも報告し、金曜の夜、子どもたちが寝たあと、二人でじっくり考えてみた。しかし、やはり啓介にも思い当たるふしはないらしく、二人揃って



首を傾げただけだった。

その週末は、これまでとはまたひと味ちがったものになった。

土曜日はいつものようにバレエ教室に行き、午後は家で過ごしたのだが、翌日曜、子どもたちと前から約束していたデイズニーランドに出かけたのだ。

アニメで知っているさまざまなキャラクターやアトラクションに、亜希穂と麻由はすっかり夢中になって

はしやぎまわり、昭雄や啓介も、秋晴れのテーマパークを存分に楽しんだ。

啓介との週末を送るようになって以来、奥様風ファッションばかりしていて、それにちよつと飽きていた昭雄は、こういう日くらいは冒険してもいいだろうと、若やいだ格好で出かけていた。ピンクのモヘアのセーターに白いブルゾンとミニスカート、やはり白のロングブーツという出で立ちだ。

そんな格好で、しかも、子どもたちにねだられて買った――でも、亜希穂はすぐじやまそうにはずしてしまった――ミニ・マウスのカチューシャを自分でつけ、園内を歩いていると、本当に若い娘になったような気がした。

昭雄は、まるで、女としては空白だったこの十三年間を取り戻すともいうように、アトラクションに黄色い歓声を上げ、啓介の腕に甘えた。

エレクトリカルパレードを見ている時には、なんだからロマンチックな気分になり——その上、啓介が耳もとで「かわいいよ」などと言ってくれたので——、光のフロートに見入っている子どもたちの背後で、堂々とキスしたりもした。

そんなこともあり、昭雄は、さゆり先生と智美からもたらされた奇妙な情報を、翌週にはすっかり忘れていた。

カレンダーが十二月に入った、その週の火曜の朝だった。

「おはよう」

総務課のフロアに入っていくと、なんだか奇妙な空気を感じた。

盗み見るといふ感じの視線が、さまざまな方向から注がれたのだ。以前の冷たい眼差しとはまたちよつと

ちがう、でも、やはり昭雄のことをどこか白い目で見るといふ視線だ。そのくせ、昭雄がそちらに目をやると、みんな、あわてて目をそらしてしまふ。

：：：そういえば、ここまで来る廊下でも、すれちがう社員の何人かがこんな目で見てきた気がする。

昭雄は、まずそう思った。そして――

こんな感じって、前にもあったな……。

次に、そう感じた。

：：いや、ここじゃなく、ずっと昔：：そう、高校の教室や廊下で：：え？

自分の中によみがえってきた恐怖にも似た不安に、思わず身震いするような感覚を抱きながら、とりあえずデスクに着いた。

そして、いつものようにパソコンの電源を入れた。

それが立ち上がる間も、周囲からはこちらをうかがうような視線を感じた。

やがて、ウインドウズが起動し、昭雄の会社が使っているグループウェアも自動的に立ち上がった。

と、そのメーカーが十数本のメールの着信を知らせてきた。見ると、いかにもスパムメールらしい、やたら「！」を使ったタイトルが並んでいる。

昭雄の会社では、これまでもこういうことがよくあった。社員用メールアドレスは、アットマークの前に単にローマ字の姓がつくだけ。同姓の社員でもない



かぎりは「fujisawa@～」というようになる。会社のドメイン名——それは、ウェブなどからでも容易にわかる——の前に、思いつく姓を手当たり次第につけて一括送信すれば、社員の多くに無差別メールを送ることもできた。

：：誰か、会社に悪意を抱いているやつでもいるんだらう。

先刻から感じている不安のせいで、本能的に目をそ

らそうとしていたのかも知れない。昭雄はそんなどうでもいいことを考えながら、いつもの習慣どおりシフトキーを使ってそれらのメールをまとめ、「ゴミ箱」に捨てようとした。

と、そこで、マウスを持つ手が止まった。

タイトルに書かれていた内容に、やっと気づいたのだ。

……！

いきなり、呼吸が止まりそうな衝撃を受けた。

そこには、こんなタイトルが並んでいた。

「キモっ！ オカマ社員Ⅱ藤沢昭雄Ⅱ」

「オカマ社員Ⅱ藤沢昭雄Ⅱ」 その正体を暴く！」

「光洋商事はいつまでこんなオカマ社員を雇っているのか!？」

∴∴

あわてて、そのうちの一つをクリックした。

と、こんな文面が表れた。

「御社、総務課、藤沢昭雄ほどキモいやつはいない。

30まぢかの子持ち男のくせに、週末になるといそいそ女装し、オトコの家に通っている。(笑) おまけに、

自分の娘とオトコの娘の母親気取り。娘たちに『ママ』と呼ばせて悦に入っている。時には、まるで十代の小娘のようなハデな服を着て、人前でもイチヤイチャ、キスし放題。(笑) こんなキモい男を社員として雇っ

ている御社も、きつとキモい会社にちがいない。(爆)」  
そこにはさらに、二つの画像データらしいファイル  
が添付されていた。

恐る恐るダブルクリックすると、ディスプレイ上に  
は、まさに恐れたとおりの写真が表れた。

一枚目は、大きな耳とリボンのミニ・マウスのカ  
チューシヤを着け、啓介と腕を組むミニスカートの昭  
雄。そして二枚目は、宵闇の中でキスする——エレク

トリカルパレードの光が、まるでスポットライトのように顔を照らしている——昭雄と啓介のアップだった。

なにも知らない人が見たら、単なる恋人どうしの写真にしか見えないかもしれない。しかし、昭雄の顔をよく知っている人間が見れば——ことに、今のメールといっしょに見れば——その「女」の正体が昭雄であることはわかるだろう。

昭雄はあわててその画像を閉じ、周囲に目を走らせた。

と、やはり、こちらをうかがい見ていたらしい多くの視線が、昭雄の視線を避けるように動いた。

見られていたことより、目をそらされたことにひりひりするような痛みを感じた。

先刻想像したとおり、これらのメールは、社員たちに無差別に送られているにちがいなかった。

呆然としたまま、ふたたびディスプレイに目をやると、最後に一つだけ、他とはちよつとちがうタイトルのメールがあつた。

「藤沢昭雄に告ぐ」

たぶんスパムではなく、昭雄自身に宛てたものだろう。

見たくはなかったが、こんなことをしてきた人間に  
関する手がかりでもあるかと思ひ、クリックした。



と、こんな文面がディスプレイ上に並んだ。

「オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄  
に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオン  
ナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オ  
トコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮  
ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、  
地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコ  
オンナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ

オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄  
に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　オトコオン  
ナ、地獄に墮ちろ　オトコオンナ、地獄に墮ちろ　  
：  
：  
：  
：  
」

その文字列は、どこまでスクロールしてもつづいて  
いた。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

## 完全版を入手する

# ベター・ハーフ・メモリーズ

Better Half Memories

<公開版>

CopyRight 2005 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500